

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料		基本参考文献							種類	所在	
								一 次 考 査	複 数 考 査	軍 機 文 書	機 械 各 種	山 城	全 集	探 訪	教 科 書	大 系 統 編	廣 義 部	城 郭	そ の 他
筑後 208	飯江城	はえ	舞鶴城	山門郡	みやま市高田町舞鶴	城道		○	○	○	○	○	○	○	○	○	14,15,22, 27,111	山城	◎
筑後 209	北関城	きたのせき		山門郡	みやま市山川町北関	城山		○		○	○	○	○	○	○	○	14,22,27		△
筑後 210	久末城	ひさすえ	上久末城	山門郡	柳川市三橋町久末			○		○	○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 211	白島城	しらじり		山門郡	柳川市三橋町白島	北星敷				○	○	○	○	○	○	○		平地城館	◎
筑後 212	垂見城	たるみ		山門郡	柳川市三橋町垂見	堀の内		○	○	○	○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 213	津留城	つる		山門郡	柳川市大和町六合			○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	平地城館	◎
筑後 214	蘆船津城	かまふなつ		山門郡	柳川市三橋町蘆船津			○	○	○	○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 215	今古賀城	いまこが		山門郡	柳川市三橋町今古賀			○	○		○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 216	江崎城	えざき		山門郡	柳川市三橋町垂見					○	○	○	○	○	○	○	109	平地城館	○
筑後 217	鷹取城	たかとり		山門郡	柳川市上宮永町		中小路・西 小路・北小 路・馬場小 路・オンド城		○		○	○	○	○	○	○	22	平地城館	○
筑後 218	塙塚城	しおつか		山門郡	柳川市大和町塙塚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 219	佐留垣城	さるがき		山門郡	柳川市大和町榮			○	○	○	○	○	○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後 220	今福城	いまぶく	豊福城	二池郡	みやま市高田町今福	城山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	15,22,23,	丘城	◎
筑後 221	飛塚城	とびづか	田尻城	三池郡	みやま市高田町田尻	陣内		○	○	○	○	○	○	○	○	○	111	山城	◎
筑後 222	茶臼城	ちゃうす	茶臼山城	三池郡	大牟田市倉永				○		○	○	○	○	○	○	97	山城か	○
筑後 223	内山城	うちやま	吉野内山城	三池郡	大牟田市吉野				○	○	○	○	○	○	○	○	15,22,98	丘城	●
筑後 224	大奥城	おおおく		三池郡	大牟田市宮崎									○		○	22	丘城か	○
筑後 225	西の原城	にしのはる		三池郡	大牟田市白銀									○		○	22	不明	○
筑後 226	下内城	しもうち		三池郡	大牟田市岩本	中門・門口											15,22	不明	△
筑後 227	原内山城	はらうちやま		三池郡	大牟田市									○		○	22	不明	△
筑後 228	甘木城	あまぎ		三池郡	大牟田市甘木	城		○	○	○	○	○	○	○	○	○	15,22, 100	丘城か	●
筑後 229	大間城	だいま	大間館・三浦氏 館・平野城	三池郡	大牟田市三池	古城		○	○	○	○	○	○	○	○	○	15,19,22, 103	平地城館	◎
筑後 230	三池山城	みいけやま	舞鶴城・今山岳 城・今山城	三池郡	大牟田市三池・ 熊本県玉名郡南陽町久重			○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城	◎

<近世城館>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料		基本参考文献							種類	所在	
								一 次 考 査	複 数 考 査	軍 機 文 書	機 械 各 種	山 城	全 集	探 訪	教 科 書	大 系 統 編	廣 義 部	城 郭	そ の 他
筑後 K1	松崎陣屋	まつざき	松崎館・松崎城	御原郡	小郡市松崎			○	○	○	○	○	○	○	○	○	51,116	陣屋	●
筑後 K2	赤司城	あかじ		御井郡	久留米市北野町赤司	城小路		○	○	○	○	○	○	○	○	○	17,24, 87,127	平城	◎
筑後 K3	久留米城	くるめ	篠原城・筆原城、 久留米城、栗山城	御井郡	久留米市篠原町			○	○	○	○	○	○	○	○	○	16,65, 127	平山城	◎
筑後 K4	城島城	じょうじま	城島館	三瀬郡	久留米市城島町城島			○	○	○	○	○	○	○	○	○	20,41, 127	平城	◎
筑後 K5	櫻津城	えのきづ		三瀬郡	大川市櫻津			○				○		○	○	○	28,127	平城	●
筑後 K6	福島城	ふくしま		上妻郡	八女市本町			○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,34, 125,127	平城	◎

団編名	調査データ		包羅地番号		概要
	調査 年 度 別 見 図	現 地 見 図	県	市町村	
野町(西) ○	800086	0136	本文151頁を参照。		
野町(西) ○	770042		文献14には「久米の城跡」として「山川村北の園に在り、今之を城山と称す。享和五十丈、周回三十町。天文十三年小山田城守殿元、菊地義武に手にこの城に大友氏に付す。高橋義種大友氏の命を受けて改めに及ぼす所である。北側の奥落の町、南側に近い道43号線と九州自動車道との間に挟まれて独立丘陵があり、「山川本郷」であったので、城地の可能性が高いと想定して現地を踏査したが、明確な城館遺構はなく、所在を含む、詳説は不明と言わざるを得ない。		
羽衣塚(東) ○	780007		文献14には「久木村末之木の在り、地標を高し、往昔鳥島美濃守の御りし所なりと伝ふ。其地に小森あり、稻荷森と称す。之美濃の産神の事とも謂へば其臣諸外郡の郷かどり而ふとある。文献22には「久米城趾」の分布地図(文獻13)には「上久木城跡」とあるが、それぞれ「久木」、「上久木」の御と記される。黒の分布地図(文獻13)には明治院の南側(宇宮)に城跡が想定されており、周辺には削割で細く「方」字区画がされているもの。『稻荷森』の場所が現在分からなくなってしまっているため、詳細は不明と言わざるを得ない。		
柳川(東) ○	780019		本文152頁を参照。		
柳川(東) ○	780015		『下巣川』には「元龜正年間、衆見常陸介蘿池郷並ノ爲乎守之、直茂及云、蘿池岸跡」とある。文献14には「三種村見東の東北に在り、四方無地れど水田(化忙)として、大友年間に久美瀬守が筑城したこや、天正年間の衆見常陸守のこなどが記される。衆見集落の北東にある高良神社の東側に城跡が想定されているが、歴後の木案の軒窓瓦真を見ても、城跡とおほしき区画も見られないため、詳細は不明と言わざるを得ない。		
柳川(東) ○	760007		本文153頁を参照。柳川市指定史跡。		
柳川(西) ○	780018		本文155頁を参照。		
柳川(西) ○	780035		『東詔』には「正中至り年間五年立、立花右衛門大夫守之」とある。文献14には「三種村今古賀なれど所在不明、現在花右衛門町及び花右衛門町を以て通す者なしむ。慶長五年以後廃城となる」とある。また『別所源氏本草』(文政38年版)には「村ノ北源ニアラ木屋存子、通源澤城ヲ今水引トナム」と記す。文献22には上記の記載に加え、「古者の跡に曰く、本城は末松伊豆守之築くと、未松也」と何時代の人々が立ち加わったものである。黒の分布地図(文獻13)では、今古賀集落の東側の水田に想定されているが、東家の軒窓瓦真を見ても、城跡とおほしき区画は確認できない。今古賀集落の城の位置は確定付近を確認する。今古賀集落全体がタグA-10に範囲に記載され、見城館の作をなしているように見えるが、上記のようにも見えるが、上記のように城跡に関する伝承はないため、決めて手に取った際の詳細は不明である。		
柳川(西) ○	780024		県の分布地図(文獻13)には「江崎城跡、三種町大字見足飯森 町前町 間酒を腰かこんで」とある。『衆見小学校創立百周年記念誌』(文政10年)には「江崎の城は飯森の北東部に小さい城のあるところである。城とは縣のことで」とあり、飯森にあることがわかるものの、城ではない點を記載していることによる記憶が残る。これ以上の情報はない。『教委』では参考文献「東詔」を挙げているが、東詔に江崎城に関する記載を見つけることはできなかった。ただ、「小」飯森が現在もあり、およその場所を知ることはできるが、明確な城館遺跡はないが、詳説は不明と言わざるを得ない。		
柳川(西) ○	760013		本文156頁を参照。柳川市指定史跡。		
柳川(西) ○	760049		文献14には「佐原城城跡」として「大和町里坂にあり、天正九年六月蘿池絶春北城により肥前勢と戦ひ戦死して城遂に崩る」とある。現在、里坂小学校の東側付近に城跡が想定されるが明確な城館遺跡はなく、詳細は不明である。柳川市指定史跡。		
柳川(東) ○	800089	0125	本文158頁を参照。		
柳川(東) ○	800085	0130	本文159頁を参照。		
大牟田(東) ○			『種石』を初出。櫛水村吉水の項に「新田城址」と名を学びのみである。既に記して「白山城」と記されており、古くから「白山城」と呼ばれていた飯茶臼原の弓削の近辺が城址と想定される。ただし、明確な城館遺跡は確認されておらず、城の存否含め、詳説は不明と言わざるを得ない。		
大牟田(東) ○	040103	121	本文159頁を参照。		
大牟田(東) ○			文献14には「奥美の城跡」として「堅田にあり、大方屋敷と云ふ。何時の頃の人なるやすべて不詳。石垣の跡などあり。後ろの畠を仕といひ其後北の山と云ひ、丸と云ふ字もあり」と記す。現在大字堅田地区の堅田岡の丘陵上に「平」字があり、城地と想定されるが、明確な城館遺跡は確認されておらず、詳説は不明である。また、近隣には「城ノ平」という字もある。		
大牟田(東) ○			文献14には「西の原の城跡」として「春狩の北にそそぎ丁子の城敷地。周圍に城跡とて今も其の形あり。春狩と京守の御りし所など。民家二・六戸あり、往となどと云ふ字あり」と記す。現在、大字白鹿地内に「西ノ原」という地名があり、そこに城跡が想定されるが、現在は住宅地となっており、詳説は不明と言わざるを得ない。		
大牟田(東) ○			文献14には「鶴水村の草原に、下内城址」として「上内村岡本に在る。小城主年代記では、小城主年代記では、白口碑に残つて居るが、元和の頃である。城跡の跡がある」とあるが、白口碑に残つて居るが、元和の頃である。また文献22には「下内の城跡」として「下内の中程小高町所内にあり。三池部守蘿池絶春の御りし所なりと云ふ。今、城の丘質の田の字を中門と云ひ、成宮の田の字を中門と云ふ」とあるが、これらの地名の癒合が不明なため、詳説不明である。		
大牟田(東) ○			文献14には「原内山の城跡」として「三池玄蕃等の城跡なり。甲西の方小高町を守脇合と云ひ又城池御經辻大手町頭など皆田地の字に存せり。同地の系縁地は右城主の別荘地などと云ふ。田代料の記載地から見て大牟田市北部あたりにあらものと思われるが、地名の癒合が不明であるたが、詳説は不明と言わざるを得ない。		
大牟田(東) ○			文献14には「甘木山城址」として「建武間甘木紀伊守篠義良、菊池氏に立てられたと云つて居る。今に甘木山の南端敷地の所を城と云つて居る。附近町村の城の名がある」とあり、また文献22には、「今は鄰地ならち所々高く圓墳は低し。任他と云ふ字あり。又の前、門内、城の後などは「平」所あり、前の橋を「平」字と云ふ。左の橋の字は町跡の字も存在せり」とある。現在、甘木山の南、白鹿山に面した標高130mほどの低丘陵上に字地の字名がある、そこが城跡と想定され、近辺には「平」や「門前」の字もある。過去に行われた歴史調査でも鎌倉時代の遺物が多く出土しており、詳説は不明と言わざるを得ない。		
大牟田(東) ○	040239	301	本文160頁を参照。		
閑町(西) ○			本文161頁を参照。		

団編名	調査データ		包羅地番号		概要
	調査 年 度 別 見 図	現 地 見 図	県	市町村	
鳥栖(東) ○	○		本文163頁を参照。		
鳥栖(東) ○	○	41 (北野町)	本文164頁を参照。		
久留米(西) ○	○	030005	本文165頁を参照。福岡県指定史跡。		
久留米(西) ○	○	690006	本文168頁を参照。		
羽衣塚(東) /佐賀南部 (東)	○	120065	本文169頁を参照。		
八女(東・西)	○	110254	本文170頁を参照。		

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料								基本参考文献								種類	所在
								一 次 考 察	二 次 考 察	田 城	全 集	教 科	大 系	廣 編	城 郭	その 他									
筑後	K7	松延城	まつのぶ	吉井城	山門郡	みやま市灘高町松田・山門		○	○	○	○	○	○	○	○	14,22, 53, 127	94,95, 127	14,22,42, 127	42,127	14,22,44, 127	14,22,44, 127	15,111, 127	15,19,22	平城	◎
筑後	K8	鷹尾城	たかお	高尾城	山門郡	柳川市大和町鷹ノ尾		○	○	○	○	○	○	○	○									平城	●
筑後	K9	中島城	なかじま		山門郡	柳川市大和町中島		○																平城	●
筑後	K10	柳河城	やながわ	柳河城	山門郡	柳川市本城町		○	○	○	○	○	○	○	○									平城	◎
筑後	K11	江浦城	えのうら	江村之城	三池郡	みやま市高田町江浦		○	○	○	○	○	○	○	○									平城	◎
筑後	K12	三池陣屋	みいけ	今山陣屋・三池藩主居館・三池町館	三池郡	大牟田市新町		○	○	○	○	○	○	○	○									陣屋	◎

<城郭等伝承地>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料								基本参考文献								種類	所在	
								一 次 考 察	二 次 考 察	田 城	全 集	教 科	大 系	廣 編	城 郭	その 他	一 次 考 察	二 次 考 察	田 城	全 集	教 科	大 系	廣 編	城 郭	その 他	
筑後	D1	向葉地長者館	むかひぢちようじや	小郡館	御原郡	小郡市小郡	向葉地・東上郷地・西上郷地・下郷地	○	○			○	○	○	○										平地城館	●
筑後	D2	陣屋陣	じんや		御井郡	久留米市北野町陣屋	家屋屋敷・施設敷	○	○	○	○	○	○	○	○	26									陣	●
筑後	D3	宮ノ陣	みやの		御井郡	久留米市宮ノ陣	宮ノ陣																		陣	●
筑後	D4	春野屋敷	はるの		三瀬郡	久留米市原古賀町		○	○	○	○	○	○	○	○										屋敷	○
筑後	D5	石橋氏屋敷	いしばし		三瀬郡	久留米市三瀬町草場																			屋敷	○
筑後	D6	田中兵庫屋敷	たなかひょう		三瀬郡	久留米市三瀬町高三瀬																			屋敷	●
筑後	D7	曾潤館	さぶら		三瀬郡	三瀬郡大木町曾潤										113									館	△
筑後	D8	福間村番	ふくまむら		三瀬郡	三瀬郡大木町福土		○	○						○	20,113									△	△
筑後	D9	堀田屋敷	ほったやしき	横溝館	三瀬郡	三瀬郡大木町横溝	堀田																		屋敷	●
筑後	D10	柳坂陣	やなぎざか	耳納城	山本郡	久留米市山本町柳坂		○	○	○	○	○	○	○	○										陣	●
筑後	D11	峯切山陣	みねきりやま		上妻郡	八女市黒木町木屋										○	13,36								陣	●
筑後	D12	梨木山陣	なしのきやま		上妻郡	八女市黒木町木屋										○	13,22								陣	●
筑後	D13	道雪陣	どうせつ		上妻郡	八女市柳島			○				○	○	○	13									○	○
筑後	D14	足利尊氏陣	あしかがたかうじ		下妻郡	筑後市鶴田											13,105, 106								陣	●
筑後	D15	雑造寺陣	りゅうぞうじ		下妻郡	筑後市鶴田											13,106, 107								△	△
筑後	D16	下妻村營	しもつまむら	下妻城	下妻郡	筑後市下妻		○	○	○	○	○	○	○	○										△	△
筑後	D17	陣屋敷	じんやしき		三池郡	大牟田市田隈										22									△	△

<城郭等遺跡>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料								基本参考文献								種類	所在
								一 次 考 察	二 次 考 察	田 城	全 集	教 科	大 系	廣 編	城 郭	その 他	一 次 考 察	二 次 考 察	田 城	全 集	教 科	大 系	廣 編	城 郭	その 他
筑後	R1	干潟中郷敷遺跡	ひかたちなかやしき	干潟館	御原郡	小郡市干潟	上屋敷・中屋敷・下屋敷・堀之内・町屋敷								○	43								居館遺跡	◎
筑後	R2	三沢寺小路遺跡	みづさわでらじゆ		御原郡	小郡市三沢	寺小路									55~58, 60								居館遺跡	◎
筑後	R3	大保横塚遺跡	おほよこまつ		御原郡	小郡市大保	弓場									59								居館遺跡	◎
筑後	R4	賴吉元矢次遺跡	いなとよじ		御原郡	小郡市稻吉										54								居館遺跡	◎
筑後	R5	西森田遺跡	にもりた		御原郡	三井郡大刀洗町本郷										61								居館遺跡	◎
筑後	R6	下見遺跡	したみ		御井郡	久留米市東合川町5丁目										37,68								居館遺跡	◎
筑後	R7	筑後國府跡	ちくごくふか		御井郡	久留米市合川町		○	○							67,78								居館遺跡	◎
筑後	R8	東光寺遺跡	とうこうじ		御井郡	久留米市山川町										66								居館遺跡	◎

区画名	測量データ			位置地番号	概要
	測量 年月日	測量 登録番 号	測量 登録番 号		
	県	市町村			
柳川(東)	○	○	790301	0058	本文173頁を参照。
柳川(東)	○		766010		本文174頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(東)					本文175頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(西)			080114		本文177頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(東)	○		800087	0120	本文180頁を参照。
大牟田(東)				306	本文181頁を参照。

図幅名	測量データ		包囲地番号		概要
	測量図	空撮図	県	市町村	
二日市(東)	<input checked="" type="radio"/>				本文181頁参照。
鳥栖(西)	<input checked="" type="radio"/>				本文184頁参照。
鳥栖(東)	<input checked="" type="radio"/>				本文185頁参照。
鳥栖(東)	<input checked="" type="radio"/>				本文185頁参照。
鳥栖(東)	<input checked="" type="radio"/>				本文186頁参照。
久留米(西)	<input checked="" type="radio"/>				本文186頁参照。
久留米(西)	<input checked="" type="radio"/>				本文187頁参照。
久留米(西)	<input checked="" type="radio"/>	030294			本文188頁参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	開通地名	史料								基本参考文献								種類	所在
								一 般 考 古	史 蹟 観 察	種 々	田 城	全 集	探 査	教 委	大 高	貴 賤	城 郭	その 他							
筑後	R9	神道遺跡	じんどう		御井郡	久留米市御井旗崎1丁目													68,79,80, 82,83,86	居館遺跡	◎				
筑後	R10	日出原南塙跡	ひいでばる	みなみ	御井郡	久留米市御井町													84	居館遺跡	◎				
筑後	R11	古賀前遺跡	こがまえ		御井郡	久留米市木本1丁目	松本屋敷												69,71,73, 76,77	居館遺跡	◎				
筑後	R12	二子塚遺跡	ふたごづか		三渡郡	久留米市芦本町芦本													85	居館遺跡	◎				
筑後	R13	城崎遺跡	じょうさき		三渡郡	久留米市安武町安武本	城崎・星敷												70,75	居館遺跡	◎				
筑後	R14	道麻遺跡	どうま		三渡郡	久留米市大善寺町中津													74	居館遺跡	◎				
筑後	R15	北ノ川敷遺跡	きたのやしき		三渡郡	久留米市成島町江上本	北ノ川敷												88	居館遺跡	◎				
筑後	R16	仁右衛門塙遺跡	じんざいもん	ほんばんたけ	生葉郡	うきは市吉井町新治													52	居館遺跡	◎				
筑後	R17	東船屋遺跡	ひがしふなや		上妻郡	八女市山内	東船・西船	○											89,129	居館遺跡	◎				
筑後	R18	熊野屋敷遺跡	くまのやしき		上妻郡	筑後市熊野	屋敷												93	土呂遺構	◎				
筑後	R19	長崎坊田遺跡	ながさきぼう	た	上妻郡	筑後市長崎													92	居館遺跡	◎				
筑後	R20	飯岸田遺跡	ひがし	かだ	下妻郡	筑後市島田	外屋敷												130	居館遺跡	◎				
筑後	R21	庵内遺跡	あんない		三池郡	みやま市高田町上幡田	庵内												96	溝状遺構	◎				
筑後	R22	城前遺跡	じょうまえ		三池郡	みやま市高田町上幡田	城前												96	丘城か	◎				
筑後	R23	上内高頭遺跡	かみうちだか	か	三池郡	大牟田市上内	城林												101	居館遺跡	◎				
筑後	R24	白川遺跡	しらかわ		三池郡	大牟田市上白川町2丁目													102	居館遺跡	◎				
筑後	R25	上白川遺跡	かみしらかわ		三池郡	大牟田市上白川町2丁目													99	居館遺跡	◎				
<所在不明>																									

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	開通地名	史料								基本参考文献								種類	所在
								一 般 考 古	史 蹟 観 察	種 々	田 城	全 集	探 査	教 委	大 高	貴 賤	城 郭	その 他							
筑後	F1	妙福寺ノ城	みょうふくじの		上妻郡	不明		○																不明	不明
筑後	F2	紅桃林城	こっぽやし		竹野郡	久留米市草野町紅桃林か		○																不明	不明
筑後	F3	石井要害	いしい		生葉郡	うきは市か		○																不明	不明
筑後	F4	中尾畠城	なかおばた		山門郡	みやま市か		○																不明	不明
筑後	F5	戸原城	とはら		不明	不明		○																不明	不明
筑後	F6	権現岳城	ごんげんだけ	か	上妻郡	八女市か		○																不明	不明
筑後	F7	堀口城	ほりぐち		三池郡	大牟田		○																不明	不明
<削除対象>																									

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	開通地名	史料								基本参考文献								種類	所在
								一 般 考 古	史 蹟 観 察	種 々	田 城	全 集	探 査	教 委	大 高	貴 賤	城 郭	その 他							
筑後	-	宗崎館	むねさき	宗崎遺跡	御井郡	久留米市御井町										○	○○	49-50						◎	
筑後	-	五郎丸城	ごろうまる	古賀館	御井郡	久留米市北野町五郎丸										○									
筑後	-	内野城	うちの		三渡郡	久留米市大善寺町										○	○○○							不明	
筑後	-	江島城	えじま		三渡郡	久留米市江島										○								不明	
筑後	-	隈城	くま		竹野郡	久留米市主丸町竹野										○○○○	○	119							
筑後	-	富本城	とみもと		竹野郡	久留米市主丸町竹野										○○○○	○	119							
筑後	-	上佐尾城	かみさおだけ	兼尾城	竹野郡	久留米市主丸町竹野										○○○○	○	119							
筑後	-	中佐尾城	なかさおだけ	兼尾城	竹野郡	久留米市主丸町竹野										○○○○	○	119							
筑後	-	觀音寺山城	かんのんじやま		竹野郡	久留米市主丸町石垣										○○○○	○	119							
筑後	-	権現岳城	ごんげんだけ		竹野郡	久留米市主丸町石垣										○○○○	○	119							
筑後	-	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町鷹取													136						
筑後	-	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町富永													136						
筑後	-	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町富永													136						
筑後	-	今山城	いまやま		三池郡	みやま市高田町											○○○○	○							
筑後	-	大狩跡	たいしょくじ		三池郡	大牟田市天道町										○									

調査名	調査データ		包囲地番号	概要
	調査 用 意 識 度	発 現 場 所		
久留米(西)	○			本文189頁参照。
久留米(西)	○			本文189頁参照。
久留米(西)	○			本文190頁参照。
久留米(西)	○			本文190頁参照。
久留米(西)	○			本文191頁参照。
久留米(西)	○			本文191頁参照。
羽犬塚(西)	○			本文192頁参照。
吉井(西)	○	630095		本文192頁参照。
八女(東)	○			本文193頁参照。
羽犬塚(東)	○	1304		本文194頁参照。
羽犬塚(東)	○	1336-1		本文194頁参照。
羽犬塚(東)	○	1329		本文195頁参照。近年度中に、九州歴史資料館が心正式報告書を刊行する予定。
柳川(東)	○	0158		本文195頁参照。
柳川(東)	○	0155		本文196頁参照。
閑町(西)	○			本文196頁参照。
大牟田(東)	○			本文197頁参照。
大牟田(東)	○			本文198頁参照。

調査名	調査データ		包囲地番号	概要
	調査 用 意 識 度	発 現 場 所		
不明				康永4年(1345)の荒木近藤文書に、「筑後国上妻郡妙福寺ノ城」の警固について御下せ下される文書が残されているが、詳細な場所はつかず不明である。
不明				応永安年(1375)の門司文書にて門司司職が差しした文書に、石垣、耳納山、生麦、発所町などならぬ佐竹林の記載がみられる。久留米市草野町虹ヶ林にあった城跡の可能性が高く、城跡では発心塔城の「中・下・城」がそれにあるのではないかとしているものの、確認はなく、所在不明とした。
不明				天文19年(1581)に久保宗良親と肥前守氏に石舟要害に兵力を入れておきことを諭するよう申し付ける文書があり、小鹿尾河内に開することからうきは市小鹿尾近辺が想察されるもの、所在不明である。
不明				建武元年(1338)あたりは唐原と元年(1342)の文書が確認される。瀬高や清水などの地名が出てくることからみやま市瀬高町近辺が想察されるもの、所在不明である。
不明				天文12年(1543)に佐々木義高が立花守長に兵を送り、立花守長が立花城を改めたとみられるが、自然地形が複雑で、立花守長の城跡ではないかと想察される。
不明				天文12年(1543)に立花守長、香椎原源が唐辛城を夜討した後に桜庭岳から川崎(八女市山内か)に陣移えた記載がみられる。高半礼城か大野城の間に想定されるのが、所在不明である。
不明				建武元年(1338)に細田宗義が唐辛の門司氏と共に建武寺城に反乱を起こした際に立てこもった城である。所在は不明である。

調査名	調査データ		包囲地番号	概要
	調査 用 意 識 度	発 現 場 所		
久留米(西)	○	03707		「探訪日本ノ城」に「岩崎城」として岩崎の居城とするものを初出とする。「天正六年筑後領主所」の書上げの「岩崎」からの引用、あるいは九州自動車道建設に伴う掘削調査された城跡遺構のことを指しているものと思われるが、調査では明瞭な中世居城は検出されていないため、城館としての明瞭な根拠なし、削除対象とした。
				「城跡」に唯一記載される城として、別称古御殿、久留米市名古屋・神町古賀又は久留米城上井原城跡に亘る城跡を指すものとある。久留米市名古屋・神町八丁目所在の古御殿(既往11)と似似する城跡であり、それの周囲が考証されるため、削除対象とした。
				「探訪日本ノ城」に「城跡」にとて天正六年筑後守の城とみ記載するものが唯一の記載であり、天正六年筑後領主所の書上げからの引用とみられる。城跡では久留米市名古屋・神町八丁目所在する古御殿とみられるが、城跡の遺構や伝承は一切見られず、また、この書上げ自体が、領主の一覧であり城跡の一覧ではないため、確実な城跡があるとする根拠がないため、削除対象とした。
草野(西)	640011	13・14		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「浮羽郡山城 海抜五二(メ)メ」として、「真鏡記」の「浮羽郡首」を引き、右山城浮羽郡に城があったとするが、現地には奥の山の平坦面が確認されるばかりで、また「寛延記」の「浮羽郡首」の記載にも、城の記述は一切見られないところ、城としての根拠が乏しく、削除対象とした。
草野(西)	640012	21		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「浮羽郡山城 海抜五二(メ)メ」として、但記にはないしつつも、左山城、第三の城舎、左の前城、本城、があるとしているが、いずれも現地踏査をした結果、自然地形であり、城跡遺構は全く認められなかった。そのため城としての根拠は皆無となったため、削除対象とした。
草野(西)	640038	40・41		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「浮羽郡山城 竹野村三明寺」として、三ヶ所あり、便宜上、上中下の三つに分けたとしたものの、全ての地点において城跡遺構が確認されなかった。下伏山城については、竹野村の天満宮の縄起の記載から、城としての根拠が皆無となり、削除対象とした。
草野(西)	640039	39		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「上伏山城 仁住尾山城」として名が争がるが初出である。現地踏査したが、自然地形がみられるばかりであり、城地とする明確な根拠は不明であるため削除対象とした。
草野(東)	640334	406		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「穂波寺山城 海抜五二(メ)メ」として、「真鏡記」の「穂波寺首」を引き、右山城穂波寺に城があつたとするが、現地には奥の山の平坦面が確認されるばかりで、また「寛延記」の「穂波寺首」の記載にも、城の記述は一切見られないところ、城としての根拠が乏しく、削除対象とした。
草野(東)	640336	408		「浮羽郡古城址」(文獻119)には「岩見城の跡」海抜五二(メ)メとして、「真鏡記」の「岩見城」を引き、そこには城があつたとする。現地には確かに人工的に削られた平坦面が確認され、また中世の土器群の散在が確認された。しかし新たな明確な城跡遺構は見当たらず、山岳環境などの信頼的根拠はあとからみられ、よって、城としての根拠が非常に乏しいため、削除対象とした。
	630088	047		県の分布地図(文獻136)に「妙見山城跡」として名が争がるが初出である。現地踏査したが、自然地形がみられるばかりであり、城地とする明確な根拠は全く認められなかったため、削除対象とした。
	630087	050		県の分布地図(文獻136)に「妙見山城跡」として名が争がるが初出である。現地踏査したが、自然地形がみられるばかりであり、城地とする明確な根拠は不明であるため削除対象とした。
	630086	051		「秋委」を初出しし、参考文献に「筑後封締跡」を挙げる。同書を見ると、「三池郡今山原城三池舞正少師二百五十丁ヲ領ス」とあり、大牟田市の三池山城(今山城)を指しており、重複していることが判明したため、削除対象とした。
				「全集」に「大牟田市大通町」に所在するものとされているが、記載内容を見ると、熊本市大通町と轟町桂川町との境に所在する「大将陣」(筑後D14)であることが判明したため、削除対象とした。

参考文献一覧表

<基本参考文献>

No.	著者名	発行年	著書名	発行
1	矢野一貞	1853	『筑後將士軍談(筑後国史)』	
2	福岡県	1916	『旧城跡等ノ歌詞』(福岡県社第1956号 大正5年10月2日施行)	
3	和田宗八	1936	『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』	金文堂
4	鳥羽正雄ほか編	1967	『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡	人物往来社
5	西谷正ほか	1977	『探訪日本の城』10 西海道	小学校
6	副島邦弘・近沢康治編	1979	『九州縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録 福岡県中世山城跡	福岡県教育委員会
7	磯村幸男編	1979	『福岡県』『日本城郭大系』第18巻	新入門往来社
8	廣崎篤夫	1995	『福岡の城』	海島社
9	福岡県の城郭刊行会	1997	『福岡古城探訪』	海島社
		2009	『福岡県の城郭 戦国城郭を行く』	銀山書房

<市町村誌等>

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
10	貝原篤信	1629	『筑前国続風土記』	
11	加藤一純・鷹取周成	1798	『筑前国続風土記附録』	
12	青柳種信	文政～天保	『筑前国続風土記拾遺』	
13	福岡縣八女郡役所	1917	『續本八女郡史』	福岡縣八女郡役所
14	山門郡教育会	1926	『山門郡誌』	山門郡教育会
15	三池郡教育会	1926	『三池郡誌』	三池郡教育会
16	久留米市役所	1933	『久留米市誌 別冊』	久留米市役所
17	三井郡教育会	1935	『三井郡読本』	三井郡教育会
18	浮羽郡御幸村役場	1935	『浮羽郡御幸村郷土誌』	浮羽郡御幸村役場
19	大牟田市役所	1944	『大牟田市史』	大牟田市役所
20	福岡縣三瀬郡小学校教育振興会	1953	『新考三瀬郡誌』	福岡縣三瀬郡小学校教育振興会
21	井上農夫	1956	『下広川郷土史』	下広川小学校PTA会
22	渡辺村男	1957	『旧柳川藩志』(上・中・下)	福岡県柳川・山門・三池教育会
23	高田町	1958	『高田町誌』	高田町
24	三井郡社会科同好会	1958	『郷土資料集』	三井郡社会科同好会
25	善導寺町史編纂委員会	1959	『善導寺町誌』	三井郡善導寺町役場
26	三井郡北野町教育委員会	1969	『北野町史誌』	三井郡北野町教育委員会
27	瀬高町教育委員会	1974	『瀬高町誌』	瀬高町
28	大川市誌編集委員会	1977	『大川市誌』	大川市役所
29	大刀洗町郷土誌編纂委員会	1981	『大刀洗町史』	大刀洗町
30	上陽町郷土史研究会	1983	『上陽町文化財調査』『郷土の文化と歴跡』	上陽町教育委員会
31	三瀬町史編さん委員会	1985	『三瀬町史』	三瀬町史刊行委員会
32	浮羽町史編集委員会	1988	『浮羽町史』上巻	浮羽町
33	立花町史編さん委員会	1990	『立花町史』上巻	立花町史編さん委員会
34	八女市史編さん専門委員会	1992	『八女市史』上巻	八女市
35	ひらゆくふるさと矢部編さん委員会	1992	『矢部村誌 ひらゆくふるさと矢部』	矢部村
36	黒木町史編さん実務委員会	1993	『黒木町史』	黒木町
37	久留米市史編さん委員会	1994	『久留米市史 第12巻 資料編(考古)』	久留米市
38	柳川市史編集委員会	1995	『柳川市史 史料編 I 地誌』	柳川市
39	田主丸町誌編纂委員会	1996	『田主丸町誌』第二巻 フラミング(上)	田主丸町
40	星野村史編さん委員会	1997	『星野村史 文化財民俗編』	星野村
41	城島町誌編纂委員会	1998	『城島町誌』	城島町
42	大和町史編さん実務委員会	1999	『大和町史 資料編』	大和町
43	小郡市史編集委員会	1999	『小郡市史 第五巻 資料編 中世・近世・近代』	小郡市
44	柳川市史編集委員会	1999	『地図のなかの柳川-柳川市史 地図編-』	柳川市
45	小郡市史編集委員会	2003	『小郡市史 第二巻 通史編 中世・近世・近代』	小郡市
46	城島町誌編纂委員会	2004	『城島町誌補訂』	城島町
47	広川町史編さん委員会	2005	『広川町史』上巻	広川町
48	筑前町史編さん委員会	2016	『筑前町史』上巻 自然環境・原始・古代・中世・近世	筑前町

<発掘等調査報告書>

No.	編著者名	発行年	報告書名
49		1970	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告1』
50		1977	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X V』
51	福岡県教育委員会	1998	『松崎城跡』(福岡県文化財調査報告書第135集)
52		2000	『仁右衛門城遺跡1』(浮羽ババス関係埋蔵文化財調査報告書第12集)
53		2006	『山門前田遺跡』(九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第3集)
54		1988	『稻吉元矢次遺跡』(小都市文化財調査報告書第45集)
55		1997	『三沢寺小路遺跡』(小都市文化財調査報告書第17集)
56		2001	『三沢寺小路遺跡2』(小都市文化財調査報告書第158集)
57	小郡市教育委員会	2007	『三沢寺小路遺跡3・5』(小都市文化財調査報告書第222集)
58		2007	『三沢寺小路遺跡4』(小都市文化財調査報告書第229集)
59		2012	『大保横柱遺跡2』(小都市文化財調査報告書第260集)
60		2012	『三沢寺小路遺跡6』(小都市文化財調査報告書第263集)
61		1993	『大刀洗町内遺跡群』(大刀洗町文化財調査報告書第3集)
62	大刀洗町教育委員会	2003	『高橋城跡1』(大刀洗町文化財調査報告書第24集)
63		2003	『高橋城跡2』(大刀洗町文化財調査報告書第25集)
64		2006	『三原城跡』(大刀洗町文化財調査報告書第35集)
65	久留米市教育委員会	1974	『篠山城跡石組暗渠遺構』(久留米市文化財調査報告書第7集)
66		1974	『荒白山・東光寺遺跡』(久留米市文化財調査報告書第9集)
67		1980	『筑後国府跡 昭和54年度発掘調査概報』(久留米市文化財調査報告書第23集)
68		1982	『昭和56年度 東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』(久留米市文化財調査報告書第32集)
69		1993	『上津・藤光遺跡群1』(久留米市文化財調査報告書第80集)
70		1993	『安武地区遺跡群Ⅵ』(久留米市文化財調査報告書第82集)
71		1994	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第86集)
72		1994	『安武地区遺跡群Ⅴ』(久留米市文化財調査報告書第87集)
73		1996	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第111集)
74		1996	『大善寺北部地区遺跡群V』(久留米市文化財調査報告書第112集)
75		1996	『城崎遺跡 第2次調査』(久留米市文化財調査報告書第116集)
76		1997	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第130集)
77		1998	『上津・藤光遺跡群II』(久留米市文化財調査報告書第145集)
78		1999	『筑後国府跡 第162-164次調査報告』(久留米市文化財調査報告書第156集)
79		2004	『二本木遺跡群I』(久留米市文化財調査報告書第197集)
80		2005	『二本木遺跡群II』(久留米市文化財調査報告書第209集)
81		2005	『筑後国府跡 国分寺跡-平成16年度発掘調査報告-概要報告-』(久留米市文化財調査報告書第210集)
82		2006	『二本木遺跡群III』(久留米市文化財調査報告書第226集)
83		2008	『二本木遺跡群V』(久留米市文化財調査報告書第265集)
84		2009	『二本木遺跡群VI』(久留米市文化財調査報告書第280集)
85		2009	『久留米市埋蔵文化財調査集録XI』(久留米市文化財調査報告書第278集)
86		2010	『二本木遺跡群VII』(久留米市文化財調査報告書第291集)
87	北野町教育委員会	1997	『赤司城跡』(北野町文化財調査報告書第7集)
88	城島町教育委員会	1994	『北・風敷遺跡』(城島町文化財調査報告書第1集)
89	八女市教育委員会	1993	『東船遺跡』(八女市文化財調査報告書第25集)
90		1996	『大尾城跡』(八女市文化財調査報告書第47集)
91	黒木町教育委員会	1991	『猫尾城址』(黒木町文化財調査報告書第1集)
92	筑後市教育委員会	1999	『長崎坊田遺跡』(筑後市文化財調査報告書第23集)
93		2012	『熊野屋敷遺跡』(筑後市文化財調査報告書第101集)
94	みやま市教育委員会	2010	『松田掛川遺跡 I・II』(みやま市文化財調査報告書第1集)
95	瀬高町教育委員会	1998	『瀬高地区遺跡群II』(瀬高町文化財調査報告書第15集)
96	高田町教育委員会	1992	『陣内遺跡』(高田町文化財調査報告書第1集)
97		1981	『倉永茶臼塚』(大牟田市文化財調査報告書第15集)
98		1983	『内山城跡I』(大牟田市文化財調査報告書第18集)
99		1989	『上白川遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第34集)
100	大牟田市教育委員会	1990	『城遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第36集)
101		1991	『上内・高頭遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第38集)
102		1992	『白川遺跡 羽山遺跡II』(大牟田市文化財調査報告書第42集)
103		1999	『大間遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第51集)
104	大分県教育委員会	2004	『大分の中世城館』(第四集論編(大分県文化財調査報告書第170輯))

<その他の刊行物>

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
105		1969	『筑後市神社仏閣調査書 第二集(旧八女郡古川村篇)』	
106	筑後市教育委員会	1971	『古川むらの生いたちの記』	
107	筑後郷土史研究会	1972	『筑後市神社仏閣調査書 第三集』(西牟田篇)	筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会
108		1975	『筑後市神社仏閣第六集』	
109	垂見小学校創立百周年記念誌編集委員会	1976	『垂見小学校創立百周年記念誌』	垂見小学校創立百周年記念誌編集委員会

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
110	中ノ森 節夫	1986	『蛭池ものがたり』	
111	高田町教育委員会	1992	『高田町の文化財』	高田町教育委員会
112	三瀬町文化財探訪編集委員会	1993	『三瀬町文化財探訪』	三瀬町教育委員会 三瀬町文化財専門委員会
113	大木町教育委員会	2001	『大木町文化財・史蹟めぐり 2000年版』	大木町教育委員会
114	筑後市教育委員会	2005	『筑後市の文化財』平成16年度版	筑後市教育委員会

<論文等>

No.	編著者名	発行年	論文名	著書名	発行
115	橋本 泰	1935	『本郷城趾及其附近』	『郷土研究筑後』第六卷第三号	筑後郷土研究会
116	著者不明	1935	『往時の松崎』	『郷土研究筑後』第六卷第三号	筑後郷土研究会
117	古賀基二	1937	『水郷村城跡』	『郷土研究筑後』第五卷第九号	筑後郷土研究会
118	古賀基二	1938	『星野氏の諸城址踏査記』	『郷土研究筑後』第六卷第三号	筑後郷土研究会
119	古賀基司	1953	『浮羽郡古城址とその歴史』	『浮羽古文化財保存会誌』宇根波第2号	浮羽古文化保存会
120	三浦末雄	1966	『物語秋月史』		跡秋月郷土館
121	廣崎篤夫	1974	『福岡県内城誌』		私家版(久留米市立中央図書館に写し所蔵)
122	樋口一成	1983	『島橋・久留米地方の中世山城雑感』	『柄』第3号	島橋郷土研究会
123	佐々木高栄	1984	『鈴城城址考』	『少弐氏と宗氏』No.3	
124	村田修三編	1987	『図説中世城郭事典』第三巻		新人物往来社
125	九州芸術工科大学環境設計学科歴史環境研究室、都市環境研究室	1998	『八女福島 八女市福島伝統的建造物群保存対策調査報告』		八女市教育委員会
126	木島孝之・中西義昌	1998	『天正中・後期の北部九州における城郭の様相』	『戦国の城と城下町II』	島橋市教育委員会
127	木島孝之	2001	『城郭の構造と大名権力』		九州大学出版会
128	中西義昌・岡寺 良	2001	『歴史資料としての戦国城郭・北部九州における城郭遺構と地城権力』(地域資料叢書4)		九州大学服部英雄研究室
129	岡寺 良	2002	『福岡県八女市大字山内所在の戦国期城館(大尾城・鷹尾城・東館遺跡)の検討』	『九州歴史資料館研究論集』27	九州歴史資料館
130	小田和利	2003	『筑後市彼岸田遺跡出土の呂杵木簡』	『九州歴史資料館研究論集』28	九州歴史資料館
131	岡寺 良	2004	『谷川寺境内の「谷川城」について』	『筑後八女谷川寺』(九州の寺社シリーズ19)	九州歴史資料館
132	片山安夫	2004	『筑後黒木・高牟礼城』	『北部九州中近世城郭情報紙』7	北部九州中近世城郭研究会
133	宮武正登	2004	『高良山陣所群に見る大友氏黒連城郭の構造的特質』	『大分の中世城館』第四集総論編(大分県文化財調査報告書第170報)	大分県教育委員会
134	片山安夫	2004	『筑後星野氏と生糞妙見城について』	『北部九州中近世城郭情報紙』13	北部九州中近世城郭研究会
135	木原武雄	発行年不詳	『肥前戦国史 中世肥前(佐賀県) 北・中・東部編』	『「佐賀学」を考える』(佐賀大学・教育研究学内特別経費による研究報告書)	佐賀大学

<分布図等>

No.	編著者名	発行年	著書名
136	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』(浮羽郡編)
137	福岡県教育委員会	1978	『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
138	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』(久留米市・小郡市・三井郡編)
139	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』(大川市・筑後市・三瀬郡編)
140	福岡県教育委員会	1980	『福岡県遺跡等分布地図』(八女市・八女郡編)
141	吉井町教育委員会	1995	『吉井町遺跡等詳細分布調査報告書』(吉井町文化財調査報告書第7集)
142	北野町教育委員会	1997	『北野町遺跡等詳細分布調査報告書』(北野町文化財調査報告書第6集)
143	小郡市教育委員会	1999	『福岡県小郡市内遺跡等分布地図』
144	田主丸町教育委員会	1999	『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』(田主丸町文化財調査報告書第12集)
145	立花町教育委員会	2000	『福岡県立花町内遺跡等分布地図』
146	筑後市教育委員会	2004	『筑後市文化財分布地図』
147	広川町教育委員会	2005	『広川町文化財等分布地図』
148	久留米市教育委員会	2006	『久留米市三瀬町遺跡等詳細分布調査報告書』(久留米市文化財調査報告書第217集)
149	大牟田市教育委員会	2007	『大牟田市遺跡等分布地図』
150	久留米市教育委員会	2010	『久留米市島町遺跡等詳細分布調査報告書』(久留米市文化財調査報告書第292集)
151	うきは市教育委員会	2010	『うきは市内遺跡等詳細分布調査報告書』(うきは市文化財調査報告書第10集)
152	みやま市教育委員会	2015	『みやま市内遺跡等分布地図』(みやま市文化財調査報告書第10集)

IV 対象地域城館分布図

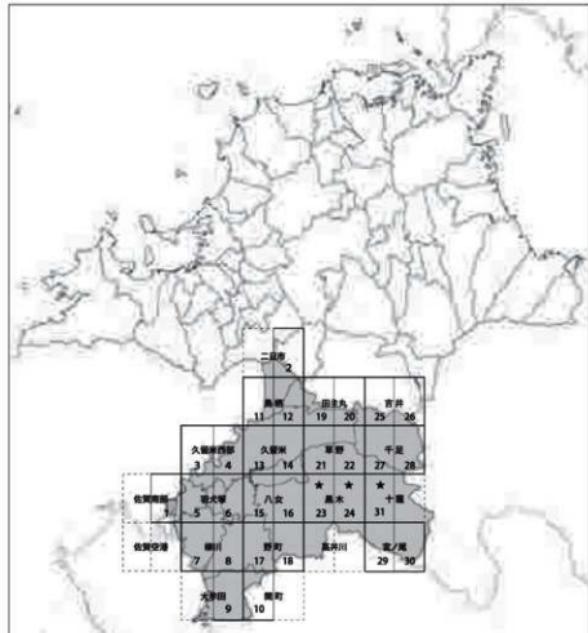
本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての位置図を示す。凡例および分布図対照図について以下のとおりである。

<凡例>

- 1 基本地図は、国土地理院長の承認を得て（承認番号 平28情複 第1345号）、同院発行の数値地図25000（地図画像）を複製したもので、下の対照図に★が付されている図幅については、1/37,500に、それ以外は全て1/35,000に縮小して掲載している。
- 2 本書の対象地域になっているが、城館が存在しない図幅については割愛した。
- 3 分布図の遺跡の表記と分布図対照図は以下のとおり。

<遺跡の表記>

	範囲が明確なもの	所在は明確であるが範囲が不明確なもの	所在はある程度は明確なもの（小字の範囲程度）	所在は明確でないもの（大字の範囲までの把握）
中近世城館	○	●	○	表記なし (地図の範囲外に名前のみ記載)
伝承地	なし	●	○	表記なし (地図の範囲外に名前のみ記載)
城館等関連遺跡	○	●	○	なし



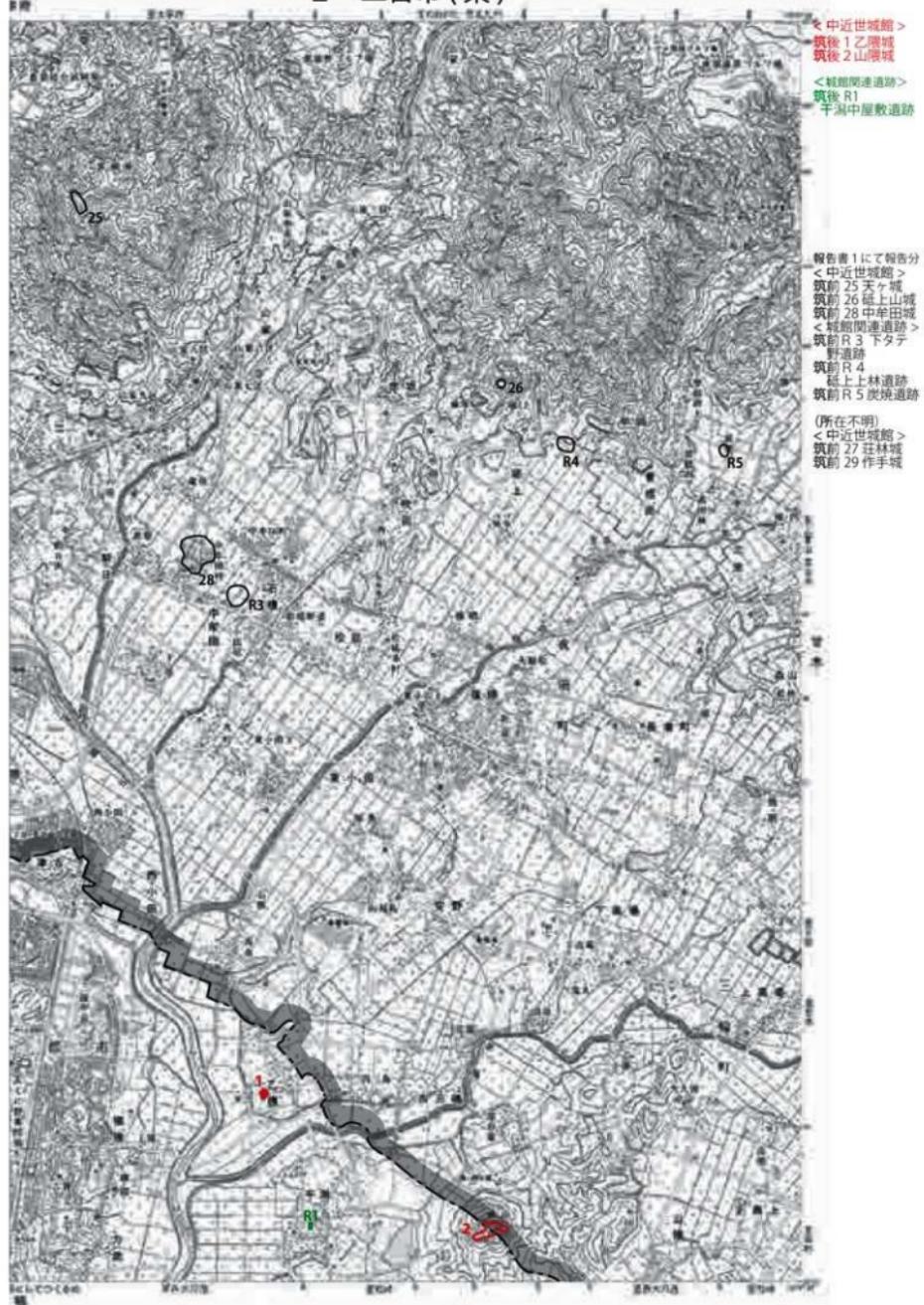
<分布図対照図>

1 佐賀南部（東）

北端
<中近世城館>
筑後 K5 橋津城



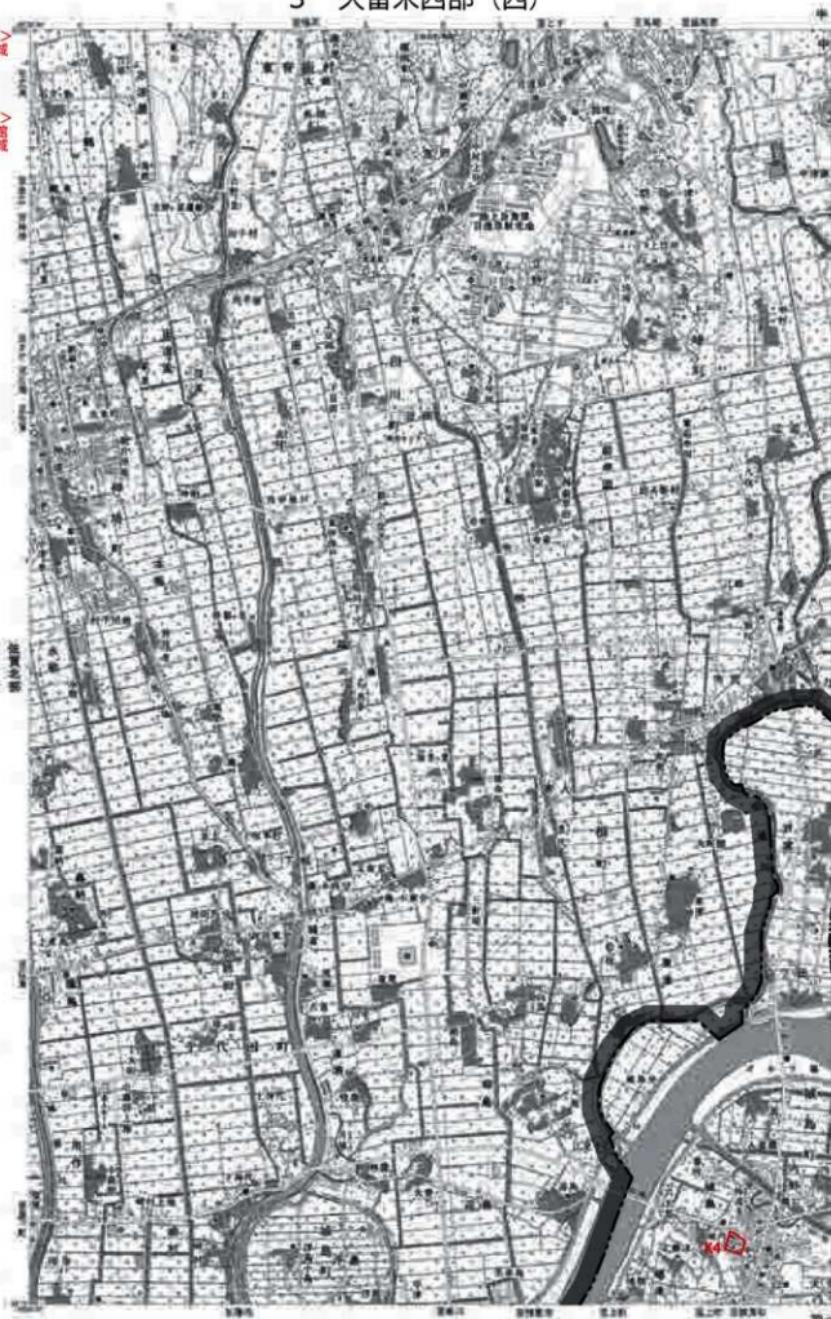
2 二日市(東)



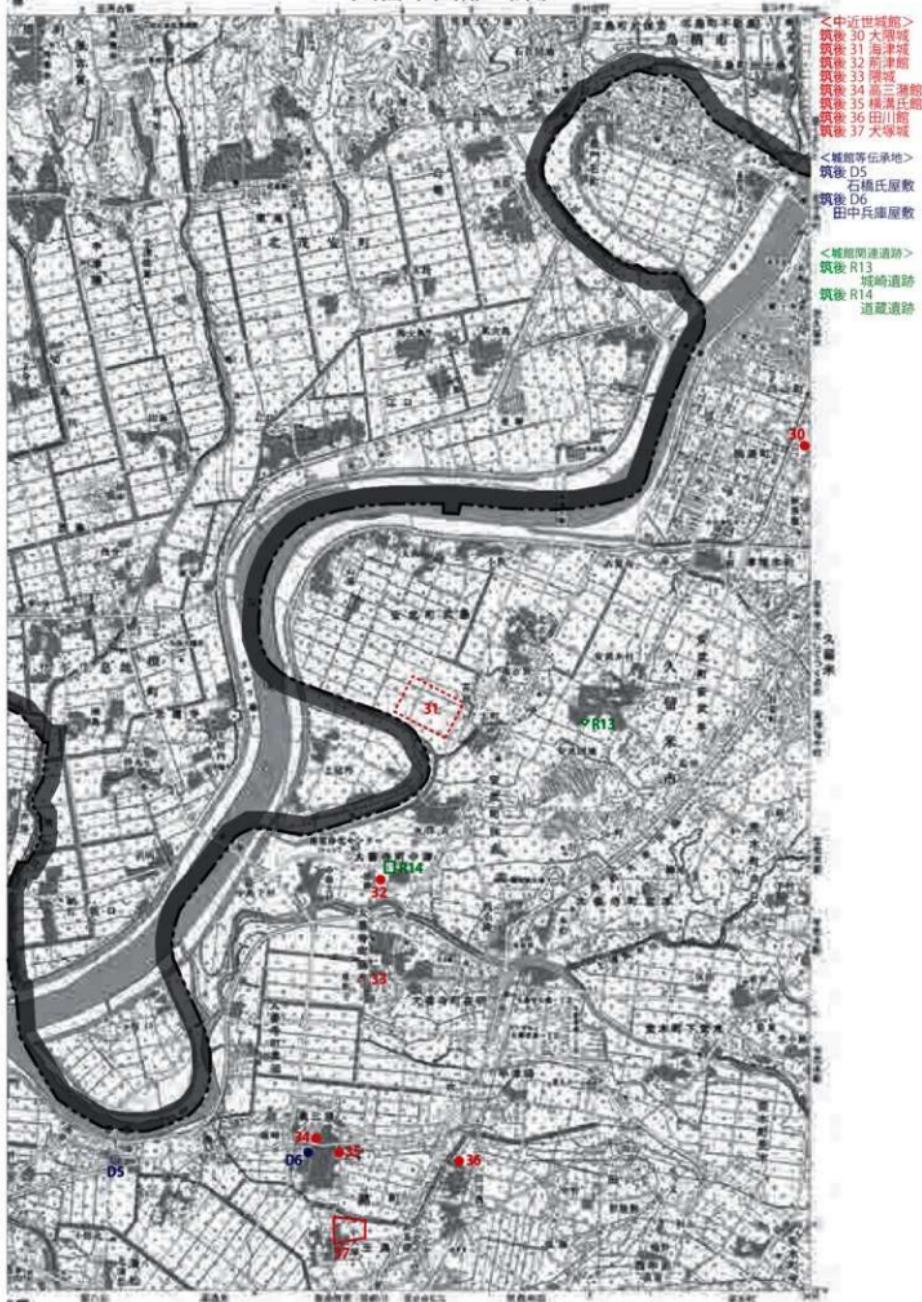
3 久留米西部（西）

<中近世城館>
筑後 K4 城島城

(所在不明)
<中近世城跡>
筑後 38 下田城
筑後 39 下田城



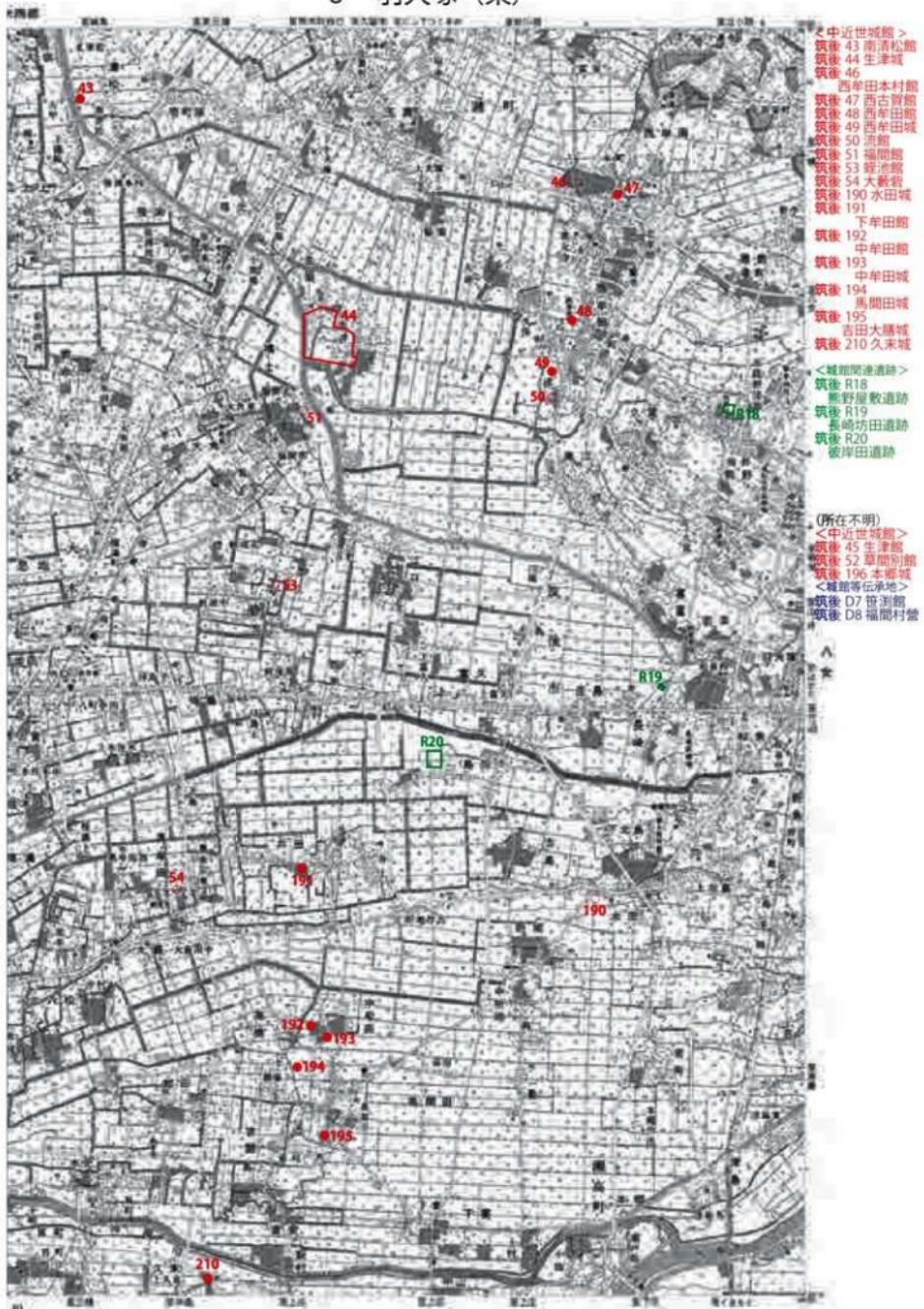
4 久留米西部（東）



5 羽犬塚（西）



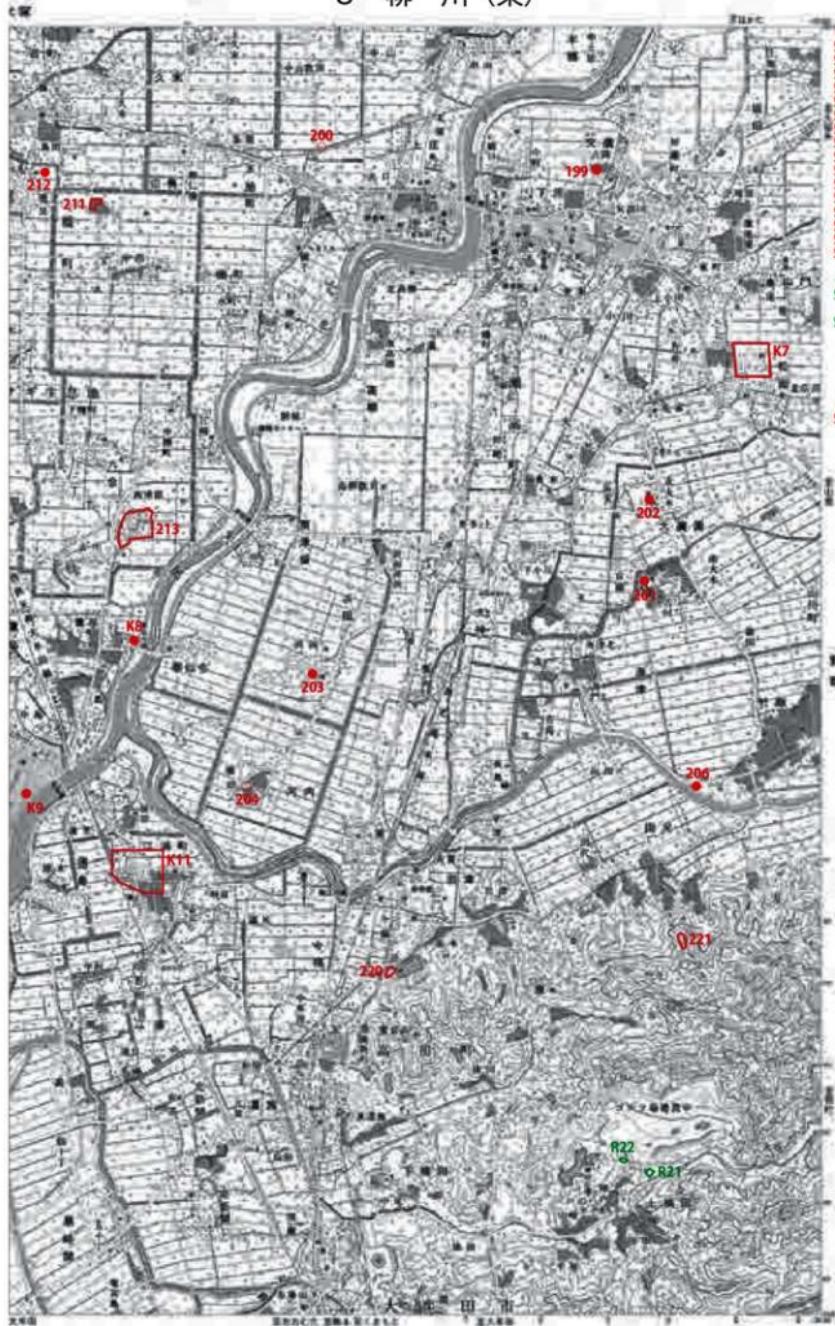
6 羽犬塚（東）



7 柳川(西)



8 柳川(東)



<中近世城館>
筑後 199 吉岡城
筑後 200 游晶城
筑後 201 園國城
筑後 202 大木城
筑後 203 游田城
筑後 204 堀切城
筑後 205 竹井城
筑後 211 白鳥城
筑後 212 垂見城
筑後 213 津留城
筑後 220 今福城
筑後 221 飛塚城
筑後 K7 松延城
筑後 K8 葛尾城
筑後 K9 中島城
筑後 K11 江浦城

<城跡関連道路>
筑後 R21
陣内道路
筑後 R22
城前道路

(所在不明)
<中近世城館>
筑後 205 菅津城

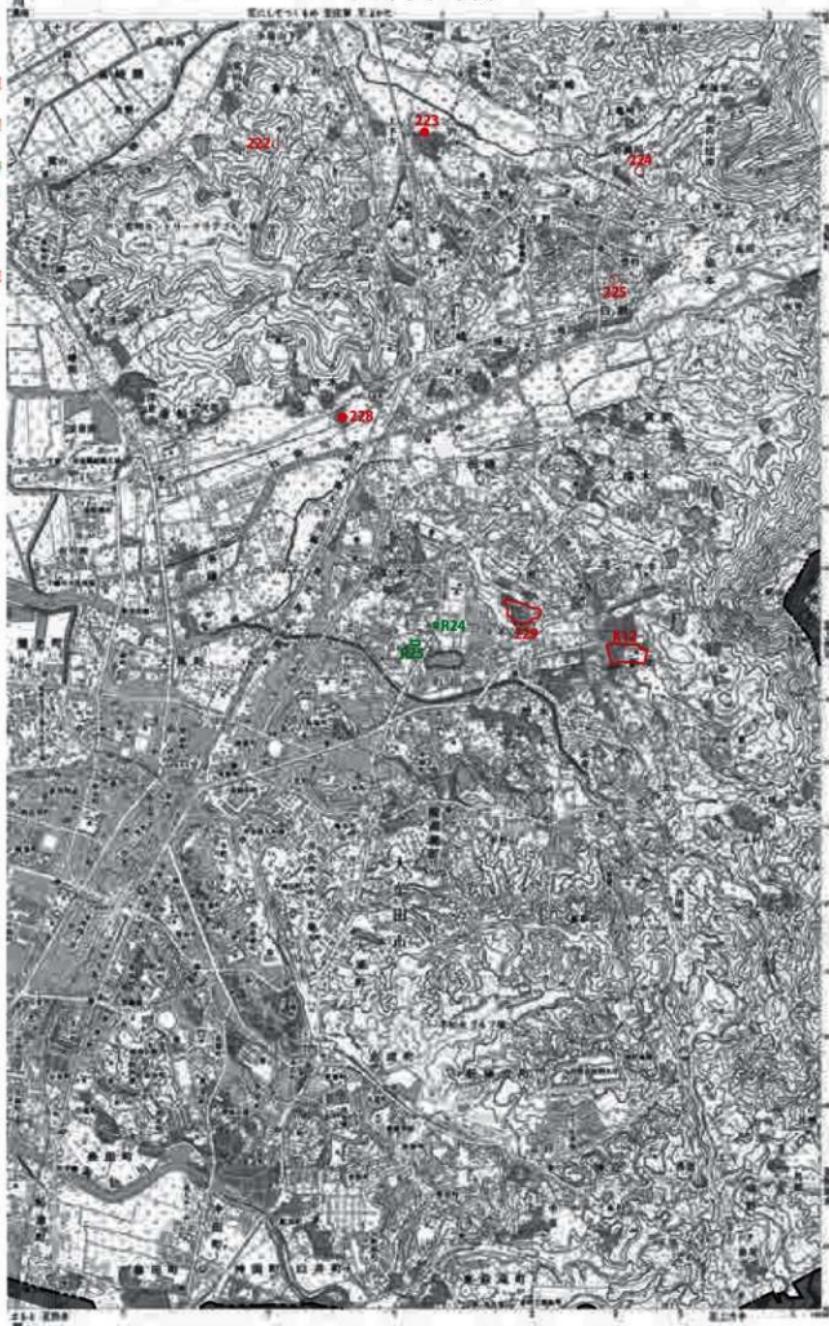
9 大牟田（東）

<中近世城館>
筑後 222 茶臼城
筑後 223 内山城
筑後 224 大奥城
筑後 225 西の原城
筑後 226 甘木城
筑後 229 大間城
筑後 K12 三池陣屋

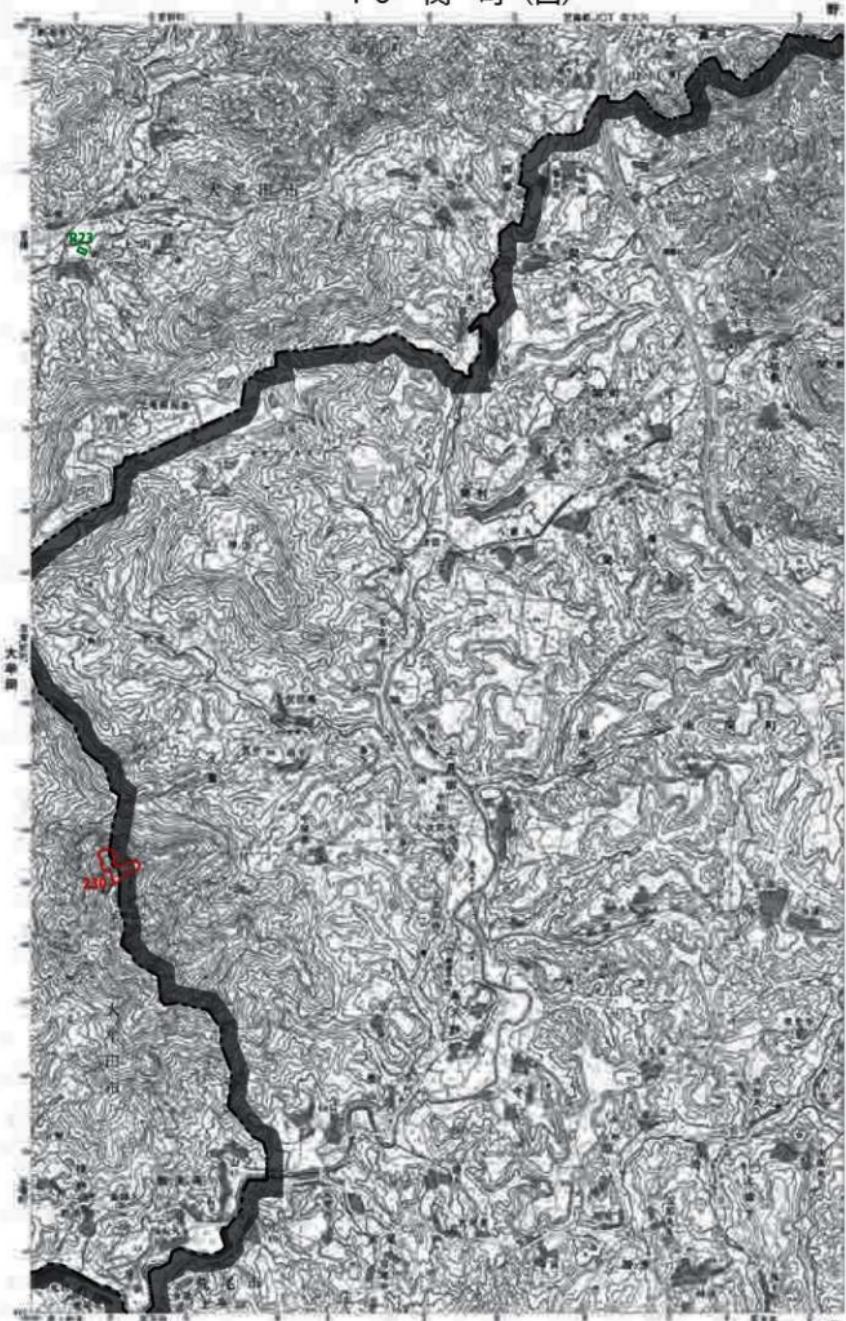
<城跡関連遺跡>
筑後 R24 白川消防
筑後 R25 上白川遺跡

(所在不明)

<中近世城館>
筑後 226 下内城
筑後 227 原内山城
<城跡等伝承地>
筑後 D17 阵屋敷



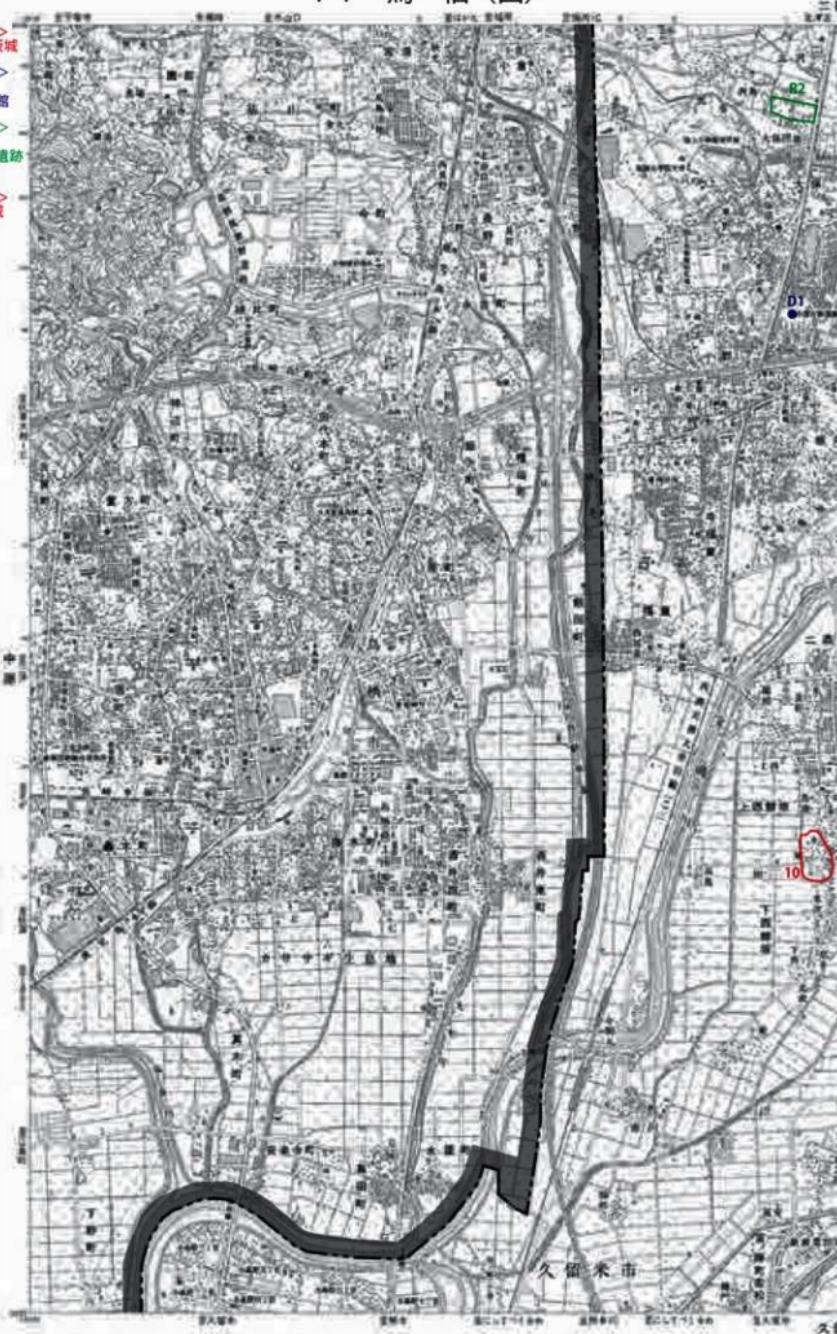
10 関町(西)



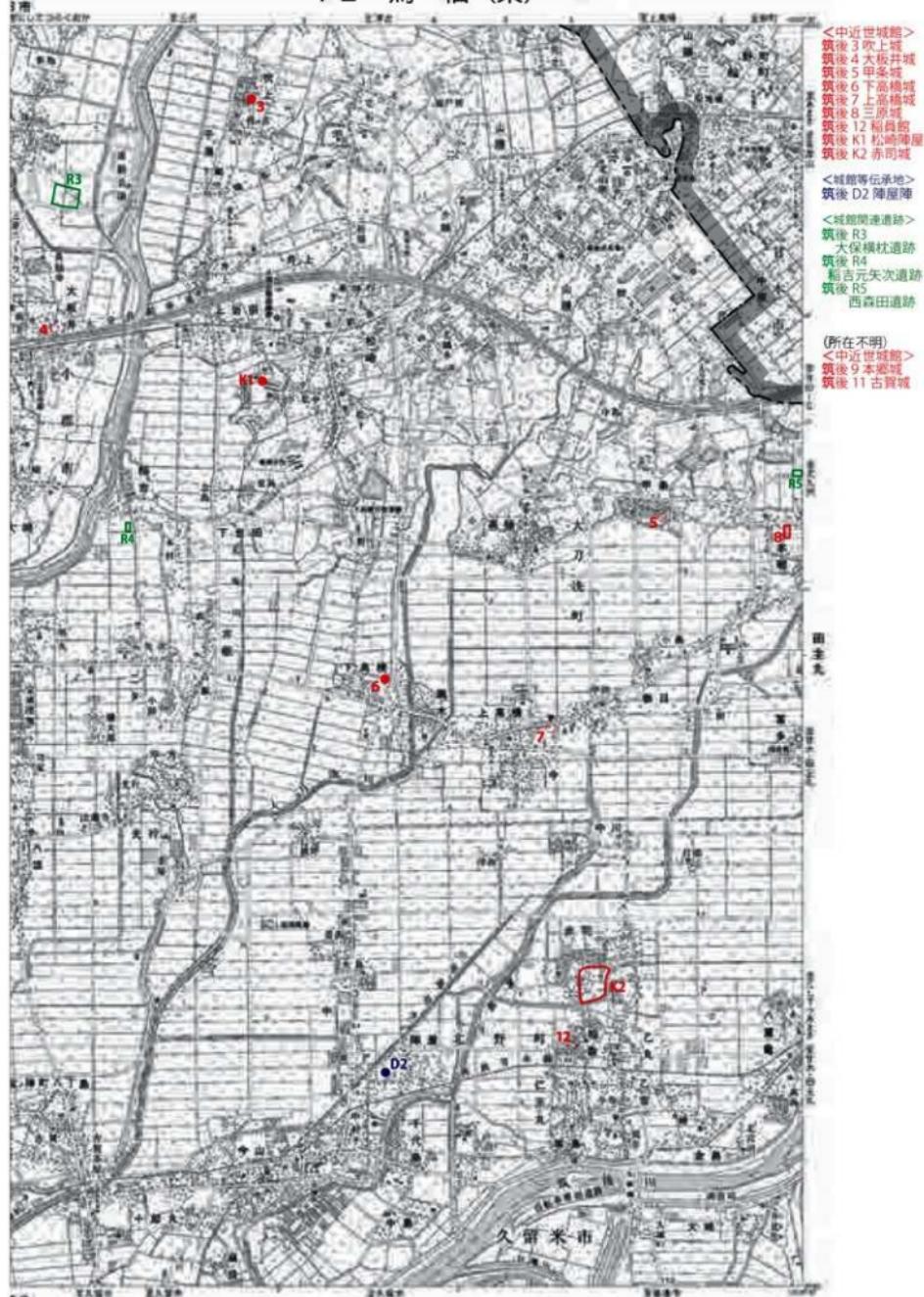
<中近世城館>
筑後 230 三池山城
<城館間連遺跡>
筑後 R23
上内高頭遺跡

11 鳥栖(西)

- <中近世城館>
筑後 10 西鰐坂城
- <城館等伝承地>
筑後 D1
向築地長者館
- <城館関連跡>
筑後 R2
三沢寺小路遺跡
- (所在不明)
<中近世城館>
筑後 23 若松城



12 鳥栖(東)



13 久留米（西）

<中世城館>
 築後 13 神代館
 築後 18 吉見岳城
 築後 21 東光寺城
 築後 22 鮎井城
 築後 24 草場路
 築後 25 五郎丸館
 築後 27 大石館
 築後 28

白口中村館
 築後 29 荒木館
 築後 178 稲田館
 築後 K3 久留米城

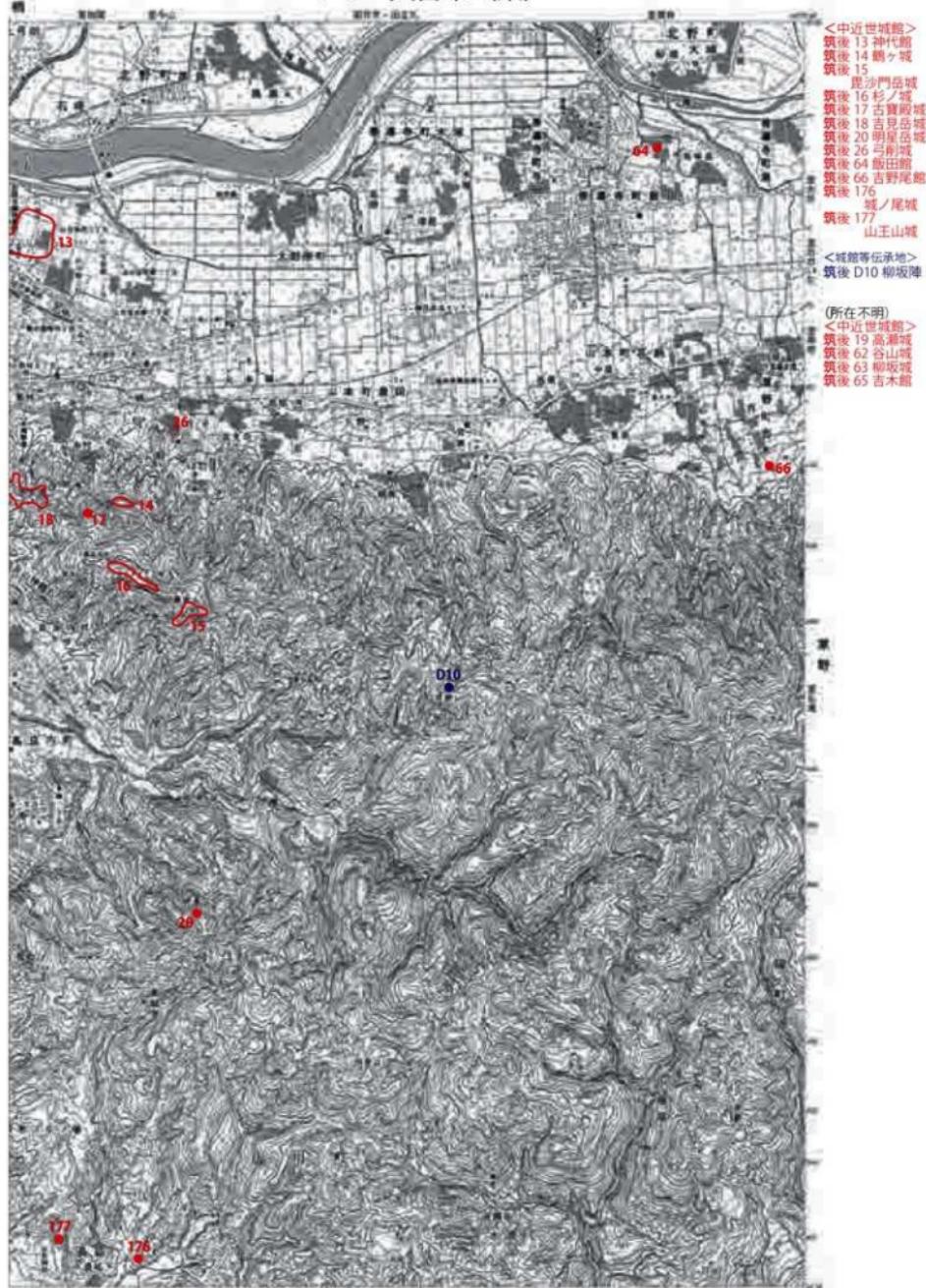
<城館等伝承地>
 築後 D3 宮 / 隆
 築後 D4 春野屋敷

<城館間通跡>
 築後 R6 下見道跡
 築後 R7 築後園内跡
 築後 R8 麦九守道跡
 築後 R9 神道道跡
 築後 R10
 日出原南道跡
 築後 R11
 古賀前道跡
 築後 R12 二子塚道跡

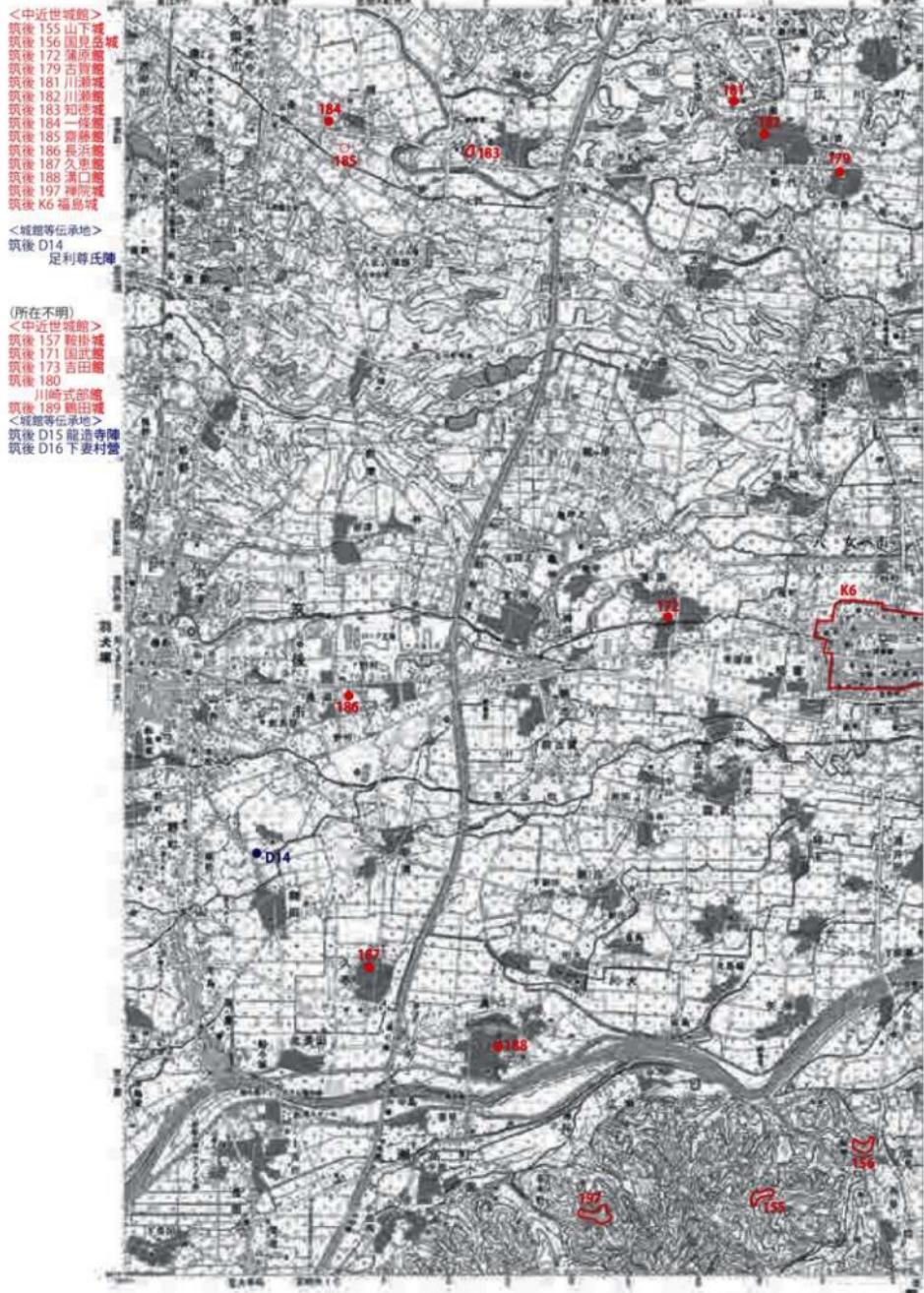
(所在不明)
 <中世城館>
 築後 23 若松城



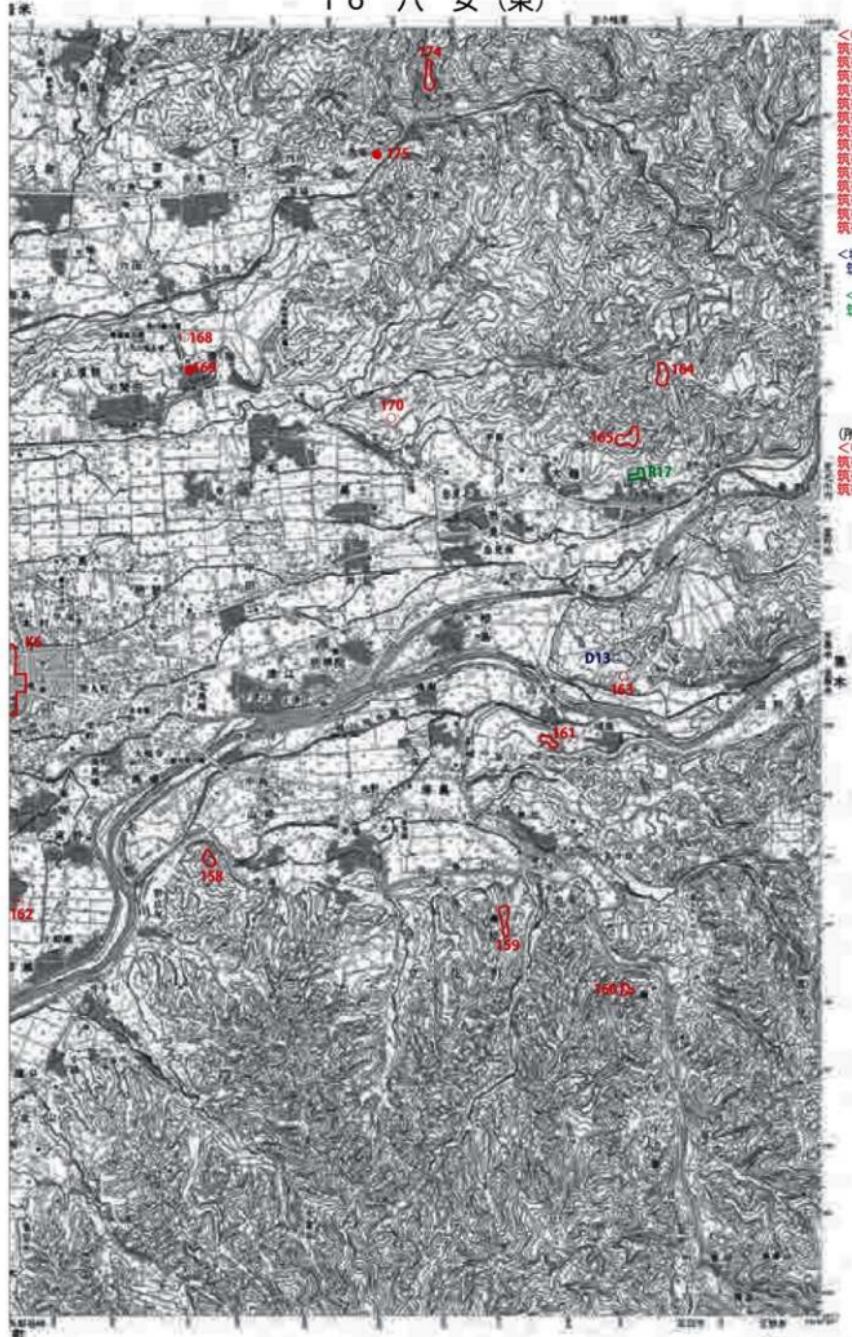
14 久留米（東）



15 八女(西)



16 八女(東)

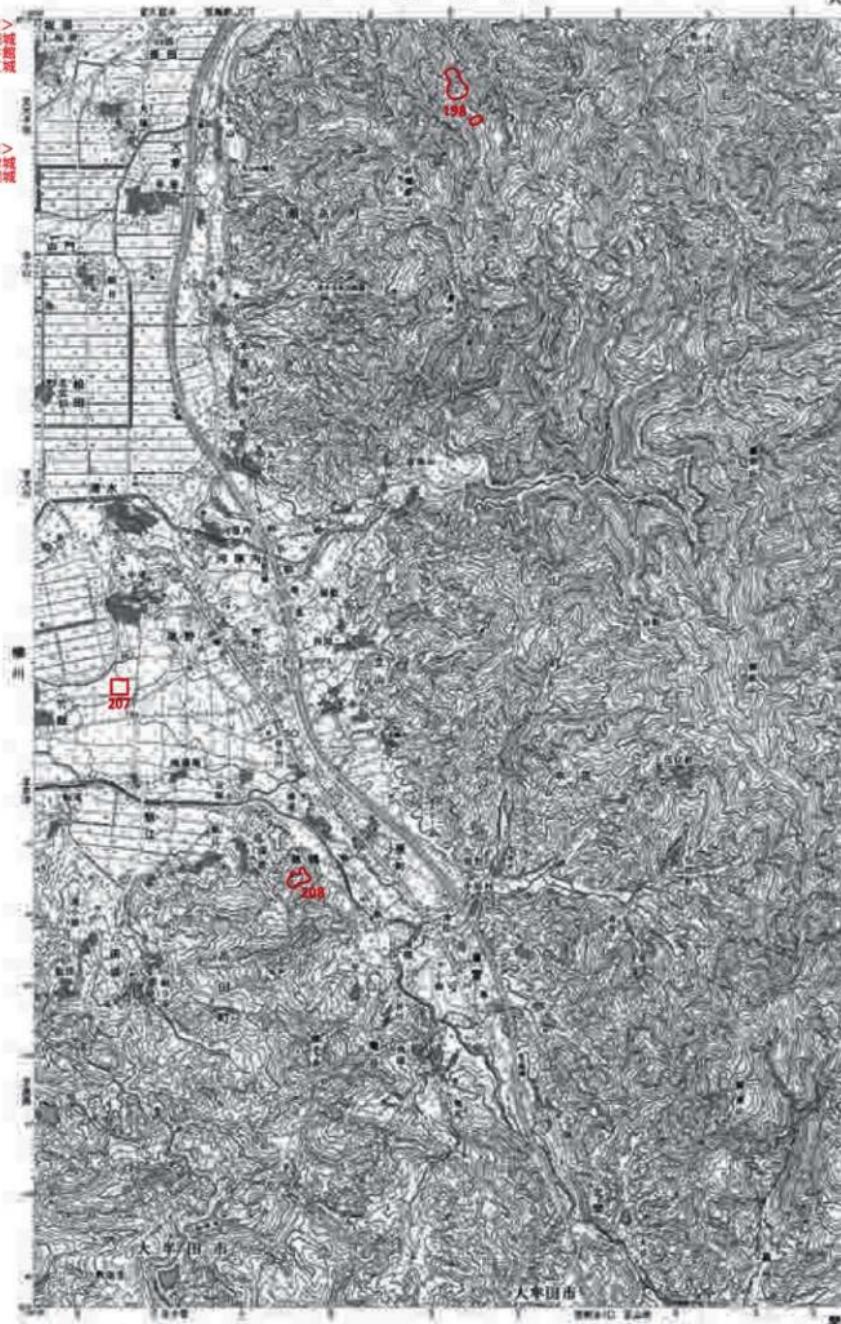


17 野町(西)

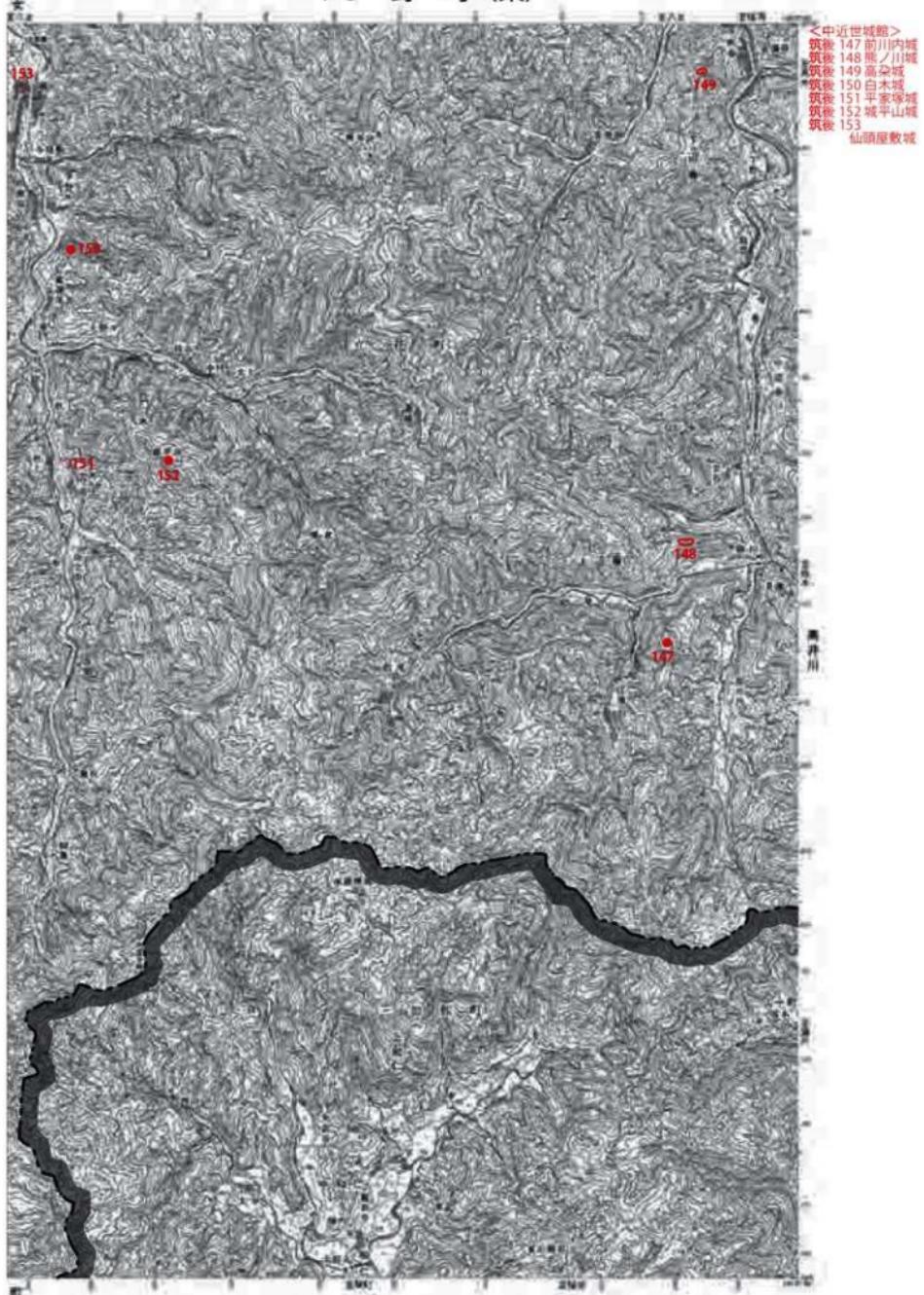
筑後 198 小田城
筑後 207 竹井城
筑後 208 飯江城

(所在不明)

中近世城館
築後 205 菅津城
築後 209 北關城



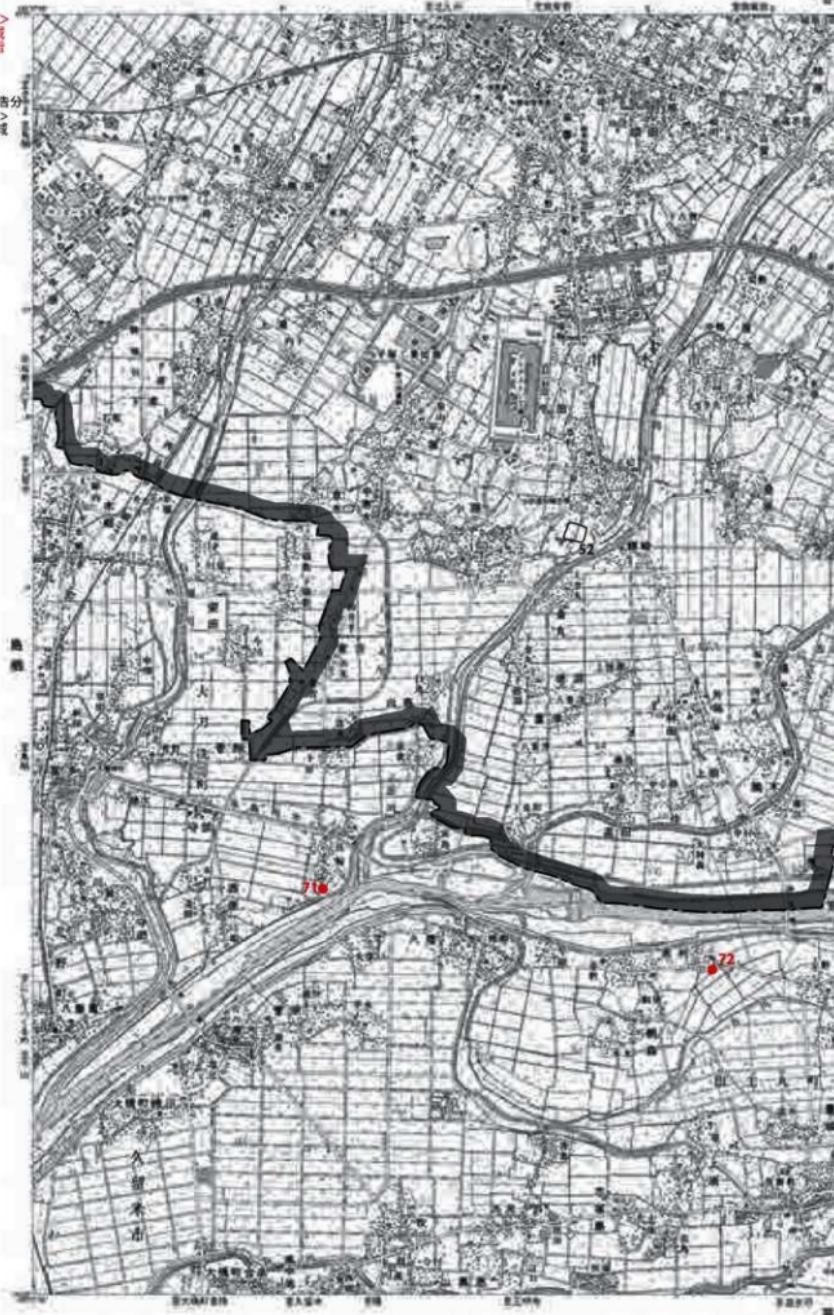
18 野町(東)



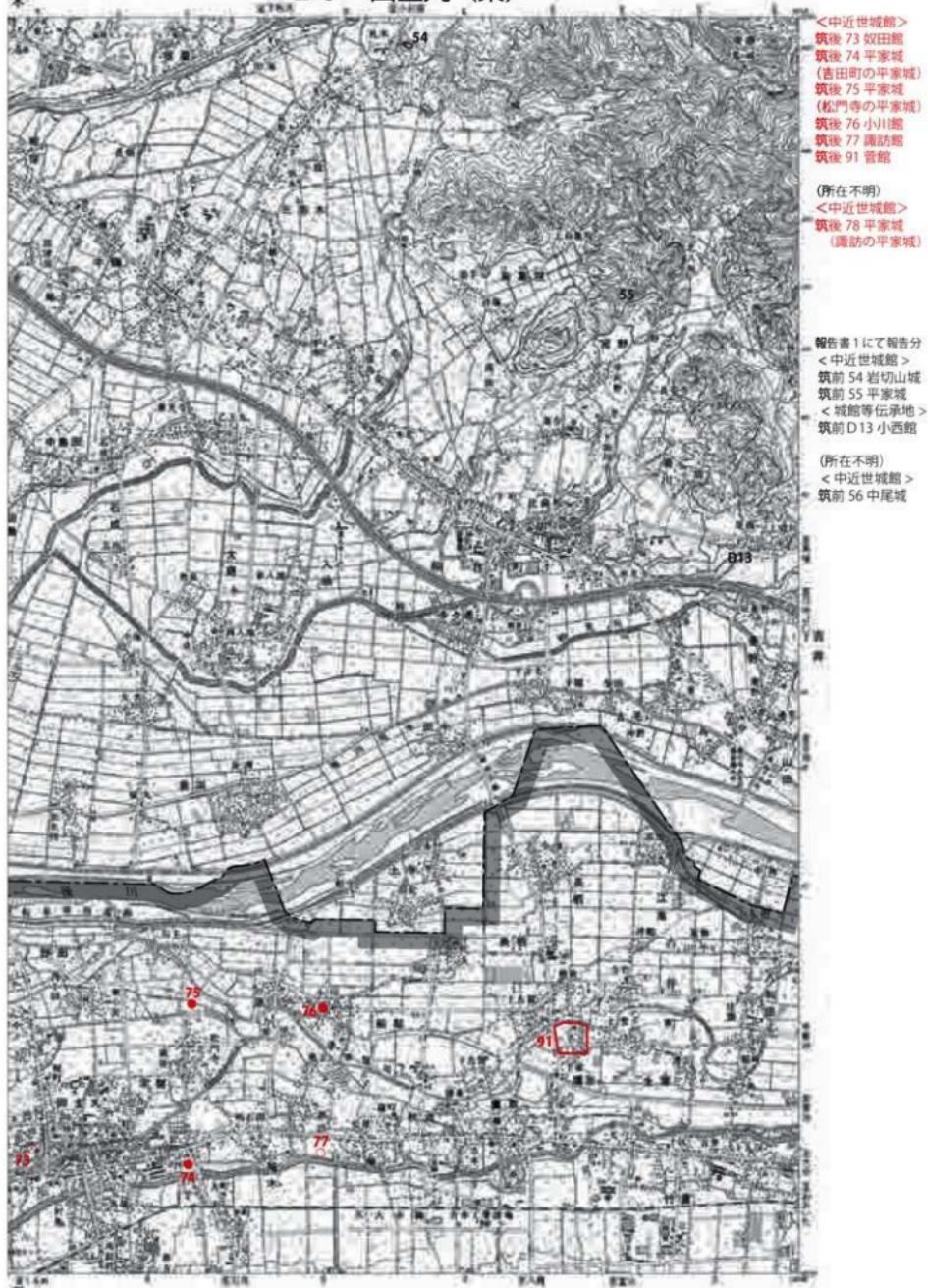
19 田主丸（西）

<中近世城館>
筑後 71 高鍋城
筑後 72 恵利村

報告書 1にて報告分
<中近世城館>
筑前 52 小田城



20 田主丸（東）



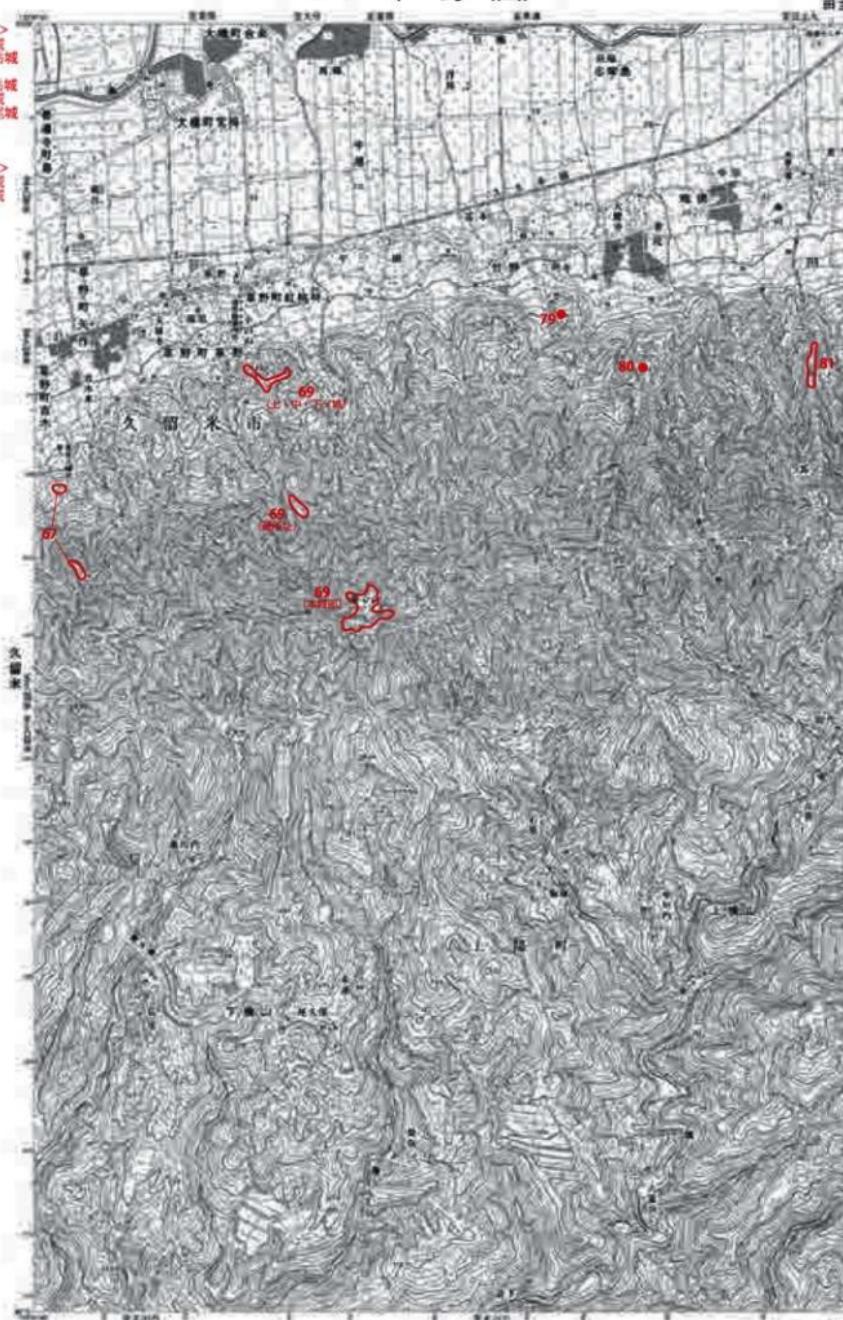
21 草野(西)

〈中近世城館〉
筑後 67 竹井城
筑後 69 殿心岳城
筑後 79 下菅尾岳城
筑後 80 姥ヶ城
筑後 81 西葛尾城

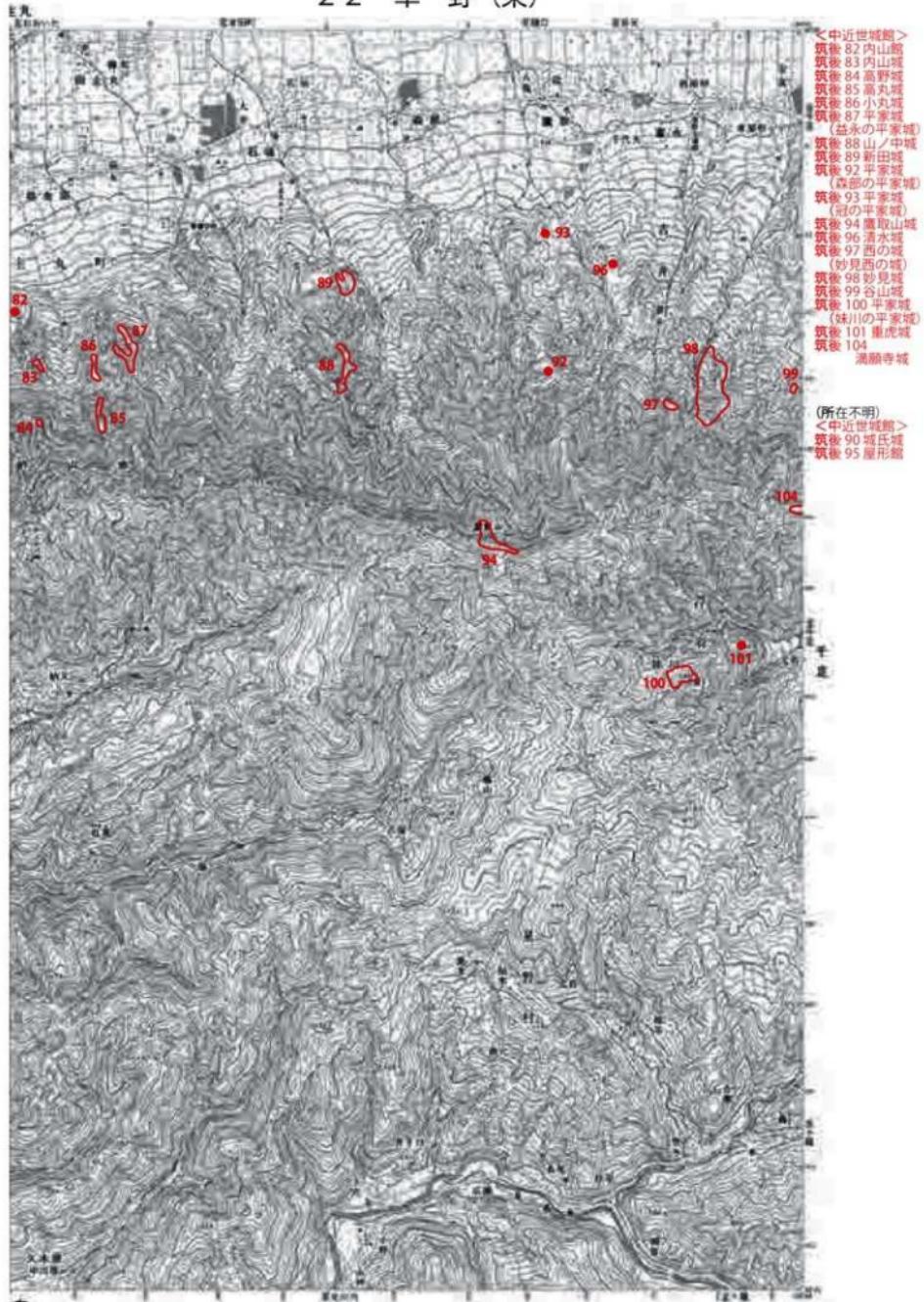
(所在不明)

八中近世場館

筑後68 釣井城
筑後78 開水橋



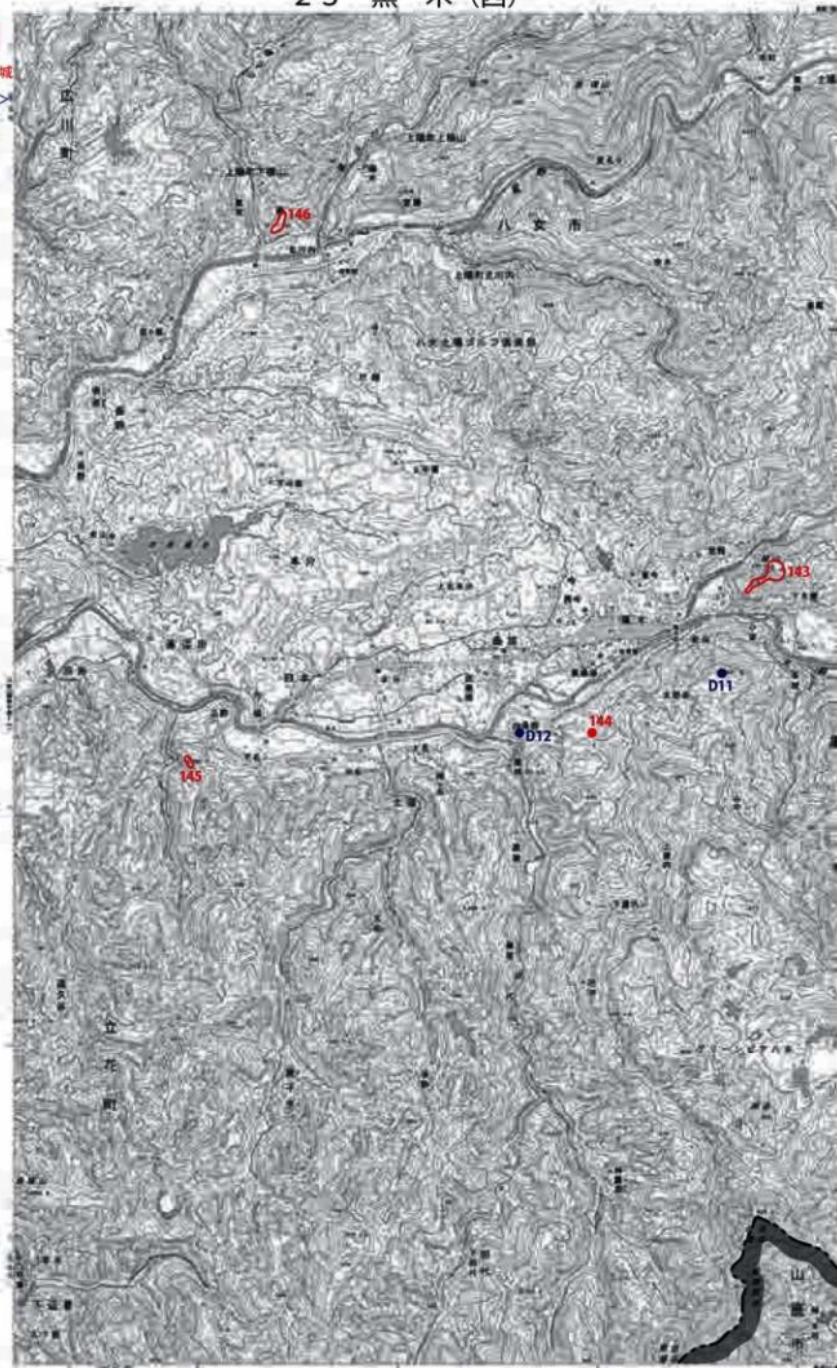
22 草野(東)



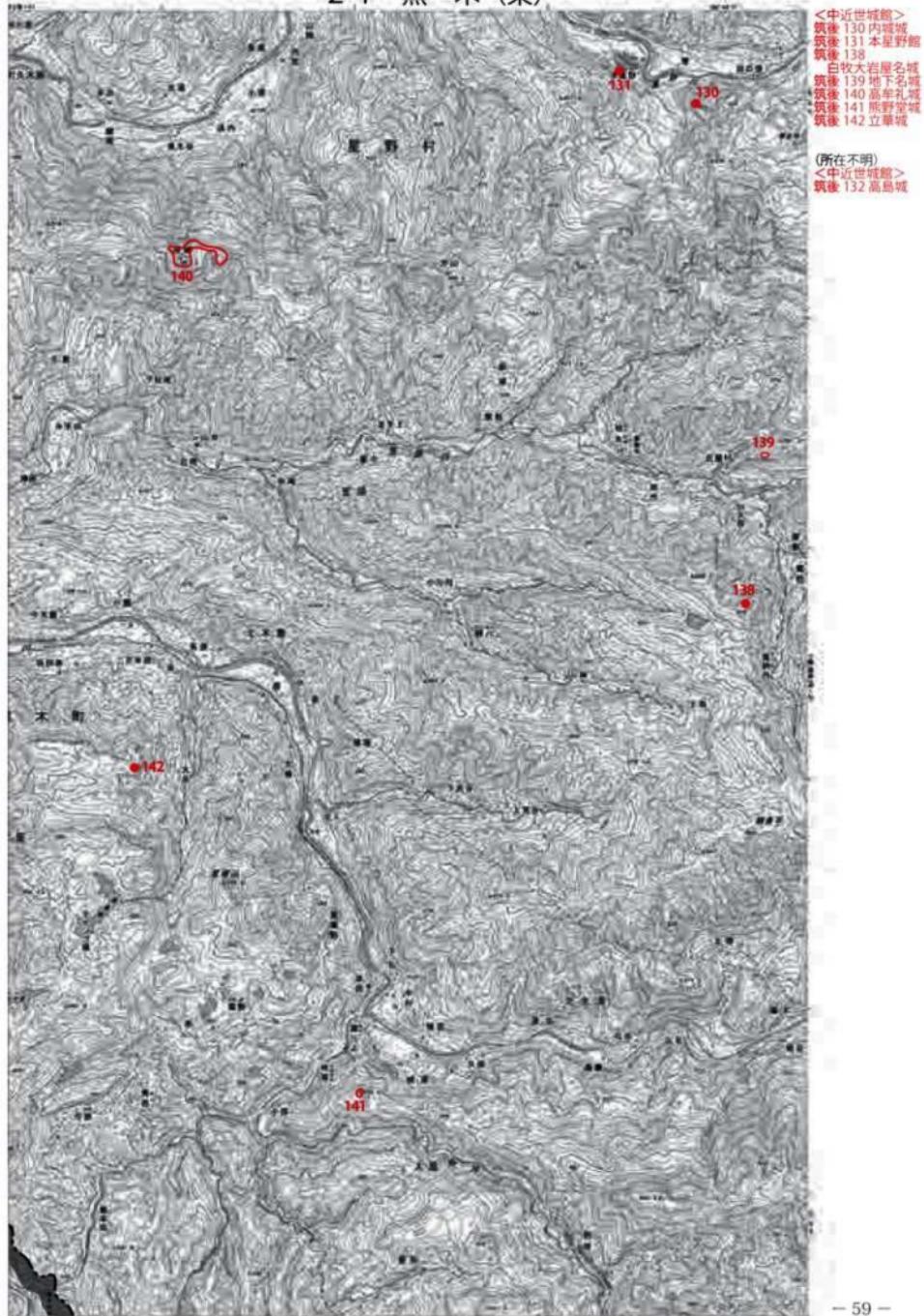
23 黒木(西)

<中世城館>
筑後 143 瑞星城
筑後 144 豪岳城
筑後 145 里城
筑後 146 生駒野城

<城館等伝承地>
筑後 D11
峯切山陣
筑後 D12
梨木山陣



24 黒木(東)



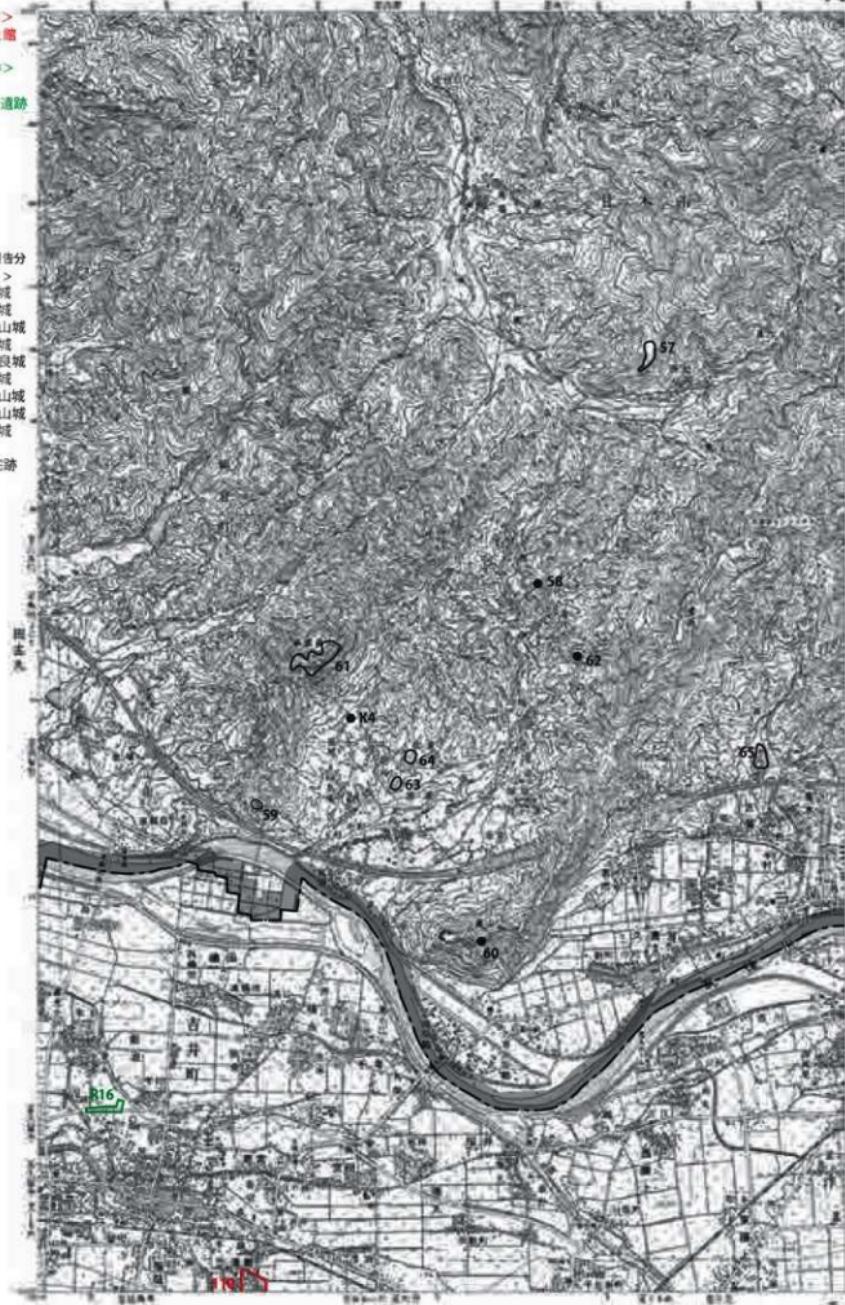
25 吉井(西)

小石

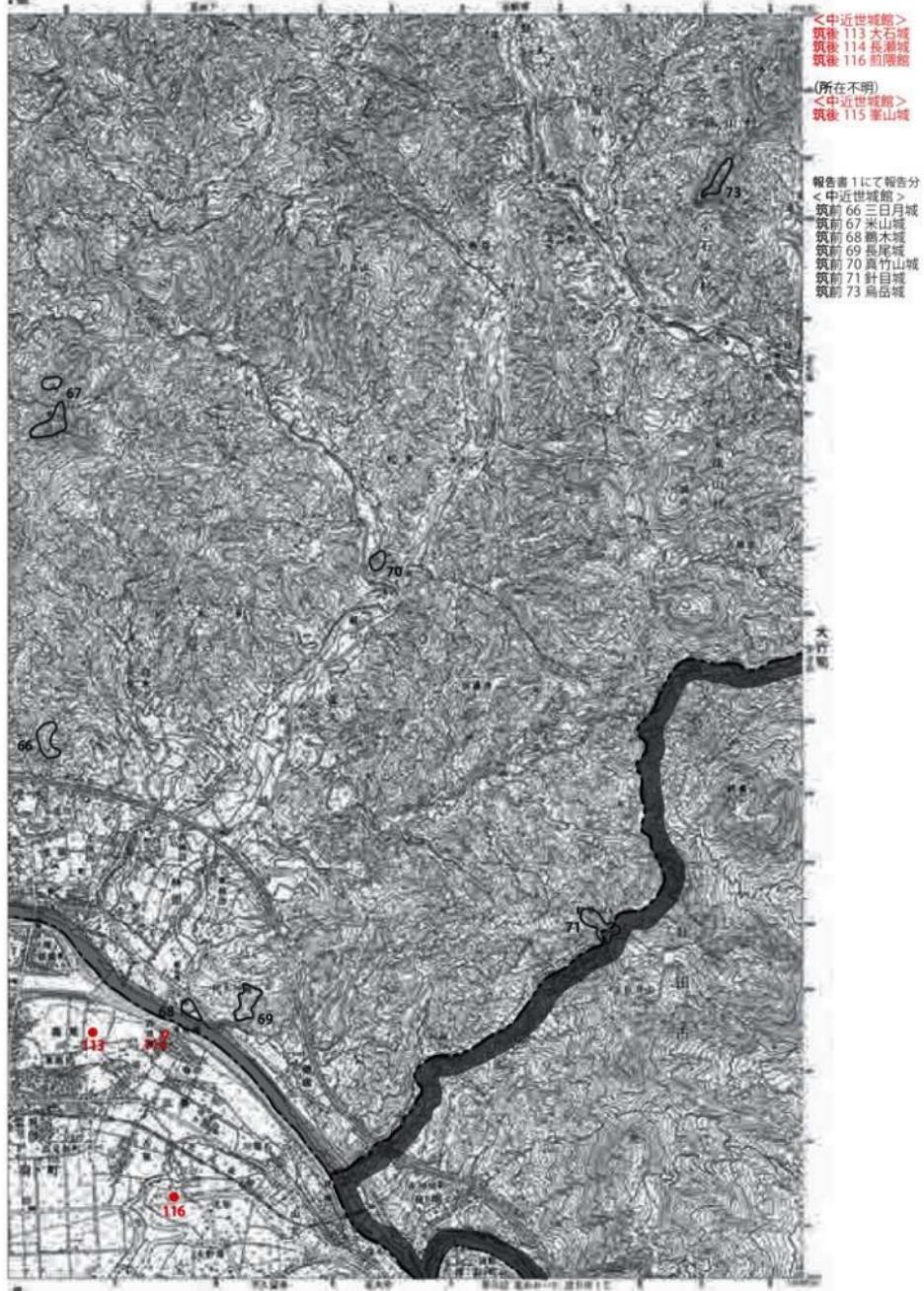
<中近世城館>
筑後 110 井上館

<城館関連遺跡>
筑後 R16
仁右衛門塙遺跡

報告書1にて報告分
<中近世城館>
筑前 57 村上城
筑前 58 志波城
筑前 59 本陣山城
筑前 60 高山城
筑前 61 麻底良城
筑前 62 烏山城
筑前 63 前隈山城
筑前 64 茶臼山城
筑前 65 夕月城
筑前 K 4
乘山備後宅跡



26 吉井(東)

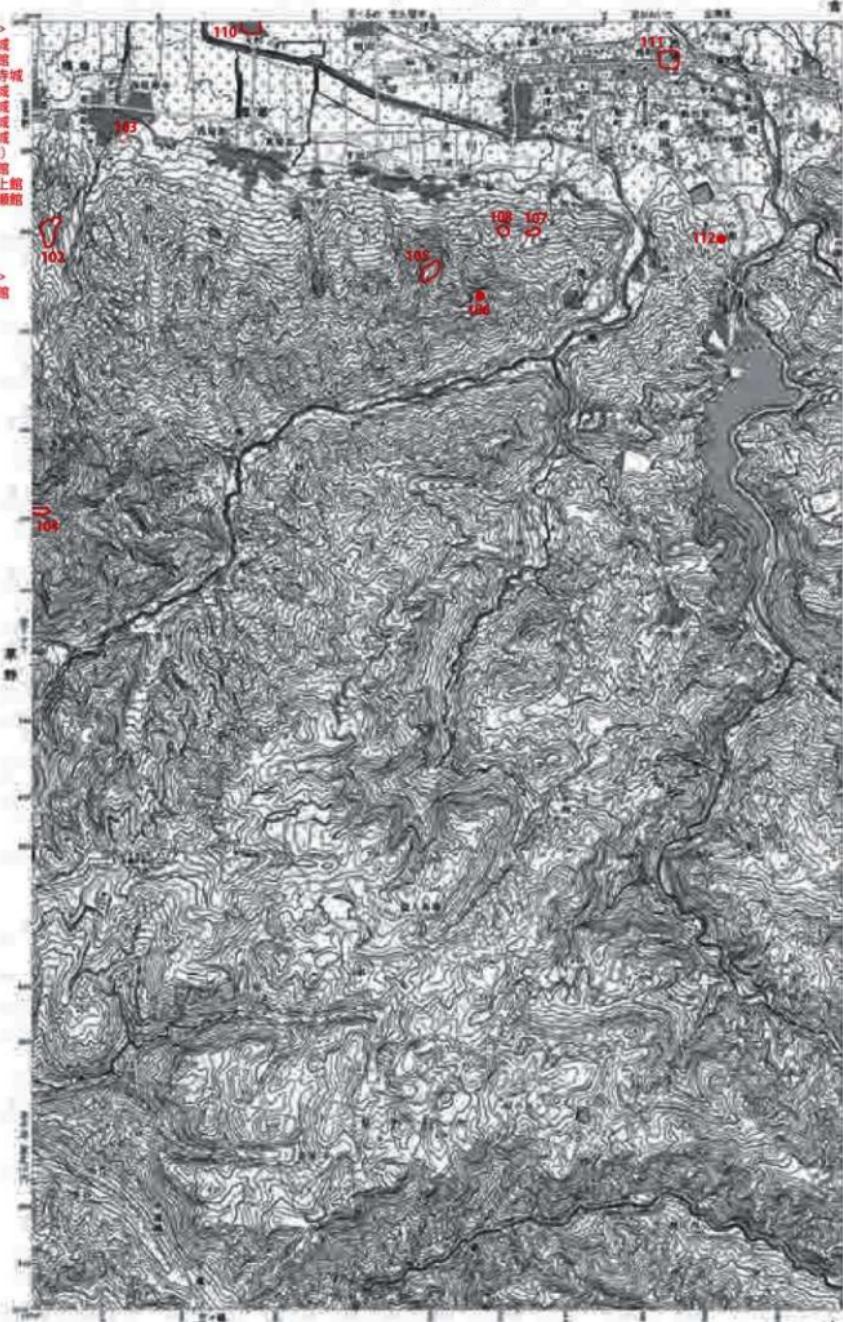


27 千足(西)

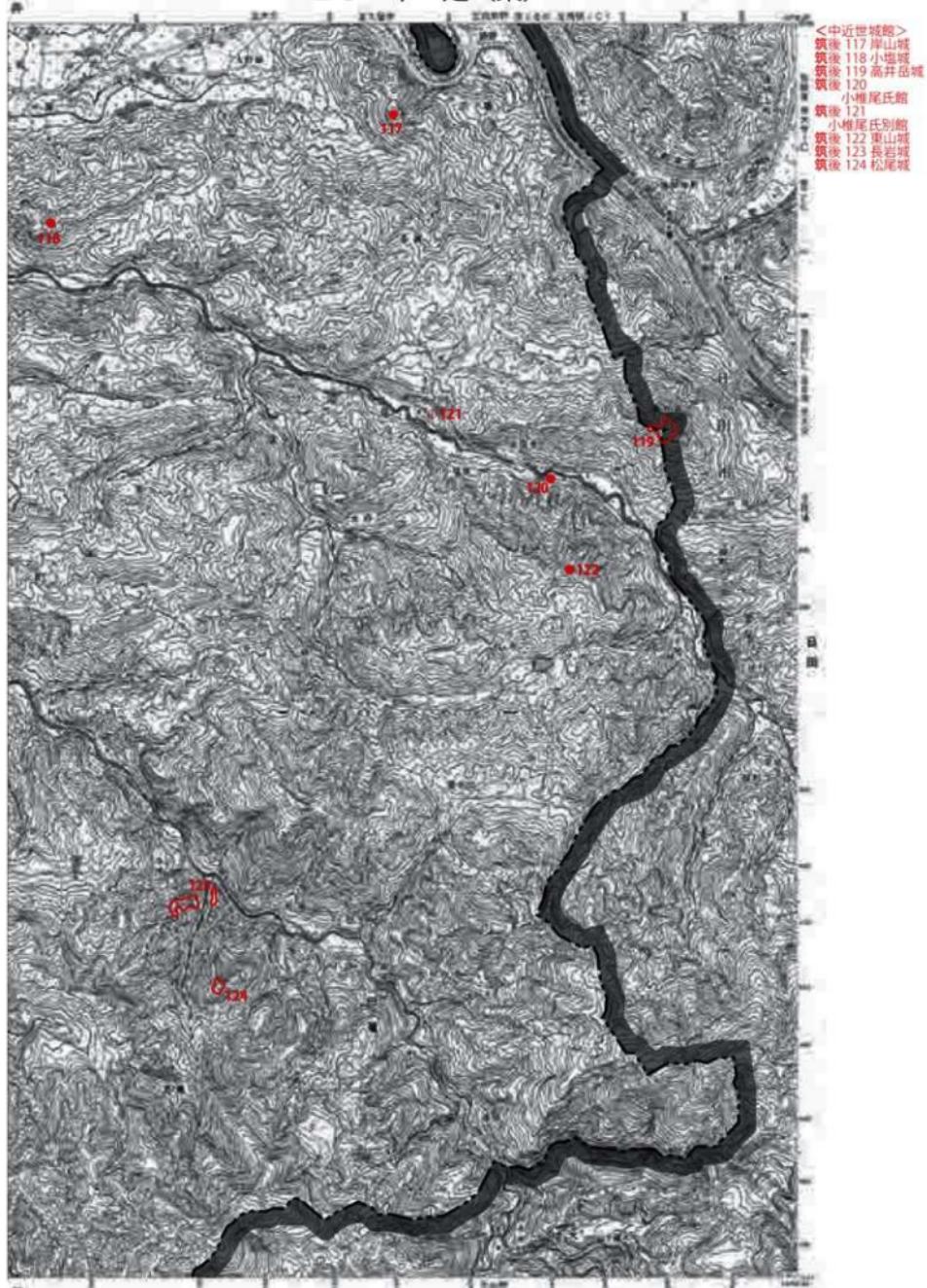
<中世城館>
筑後 102 福丸城
筑後 103 福丸城
筑後 104 潤願寺城
筑後 105 安山城
筑後 106 立石城
筑後 107 井上城
筑後 108 西ノ城
(井上西城)
筑後 110 井上城
筑後 111 隅ノ上館
筑後 112 一之瀬館

(所在不明)

<中近世城館>
筑後 109 小坂城



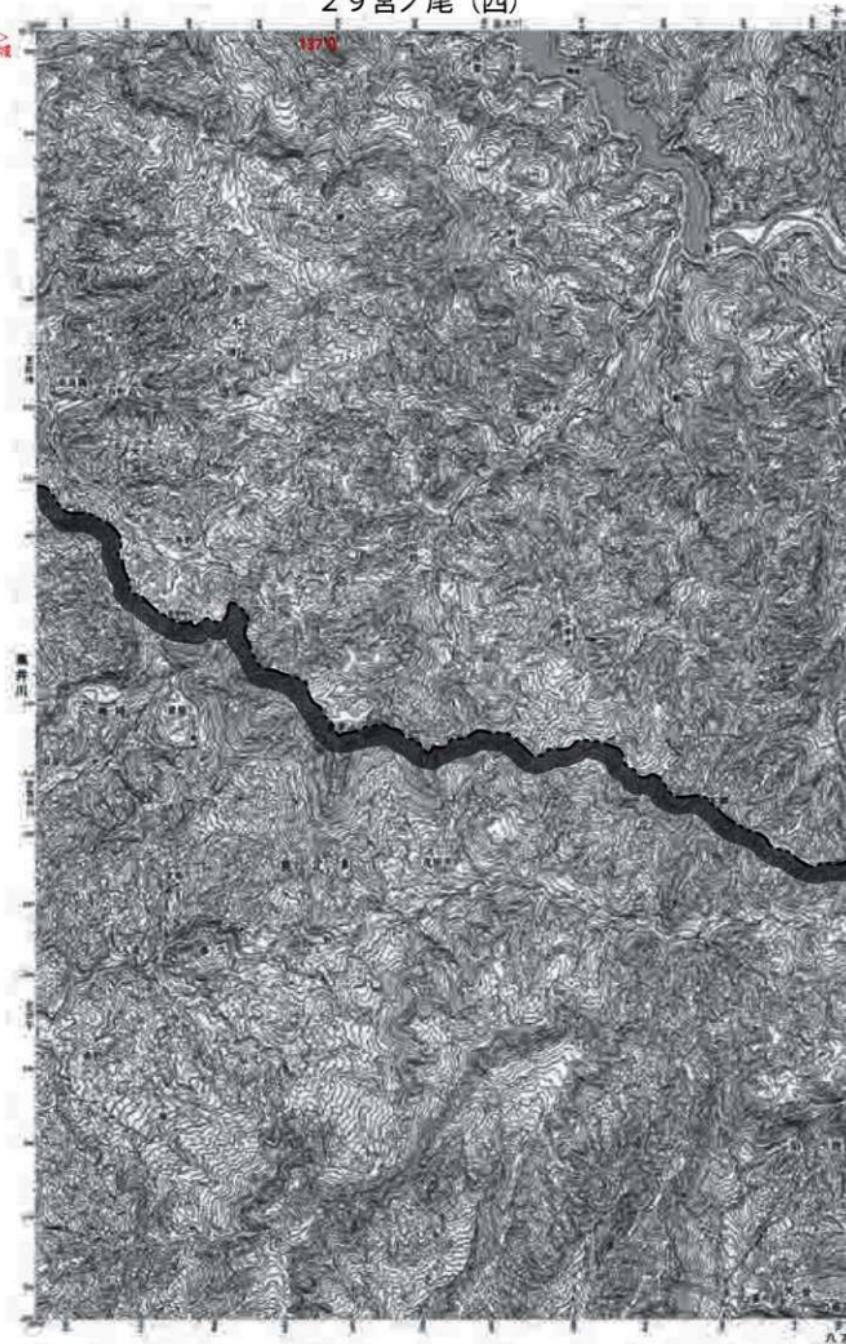
28 千足(東)



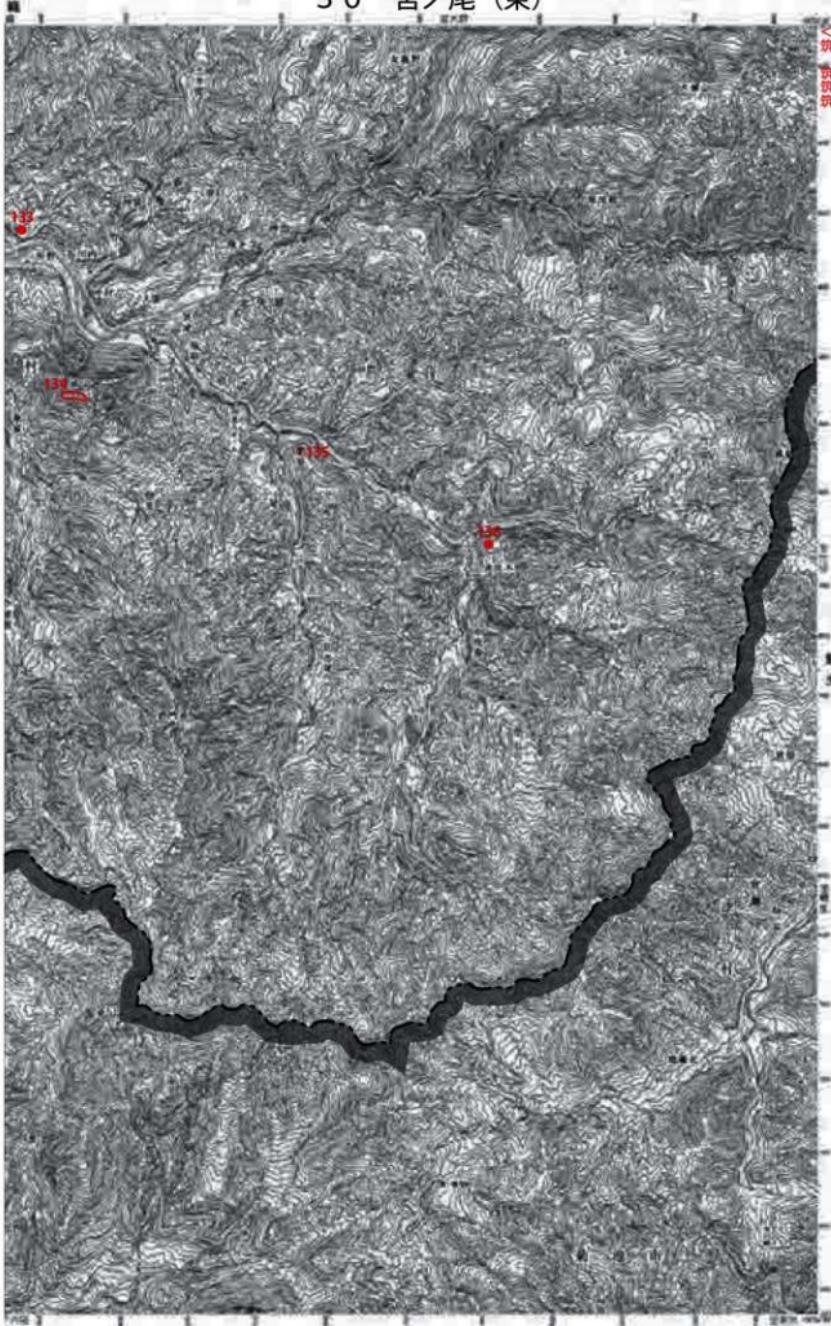
29 宮ノ尾（西）

1870

<中近世城郭>
筑後 137 葉足城



30 宮ノ尾(東)

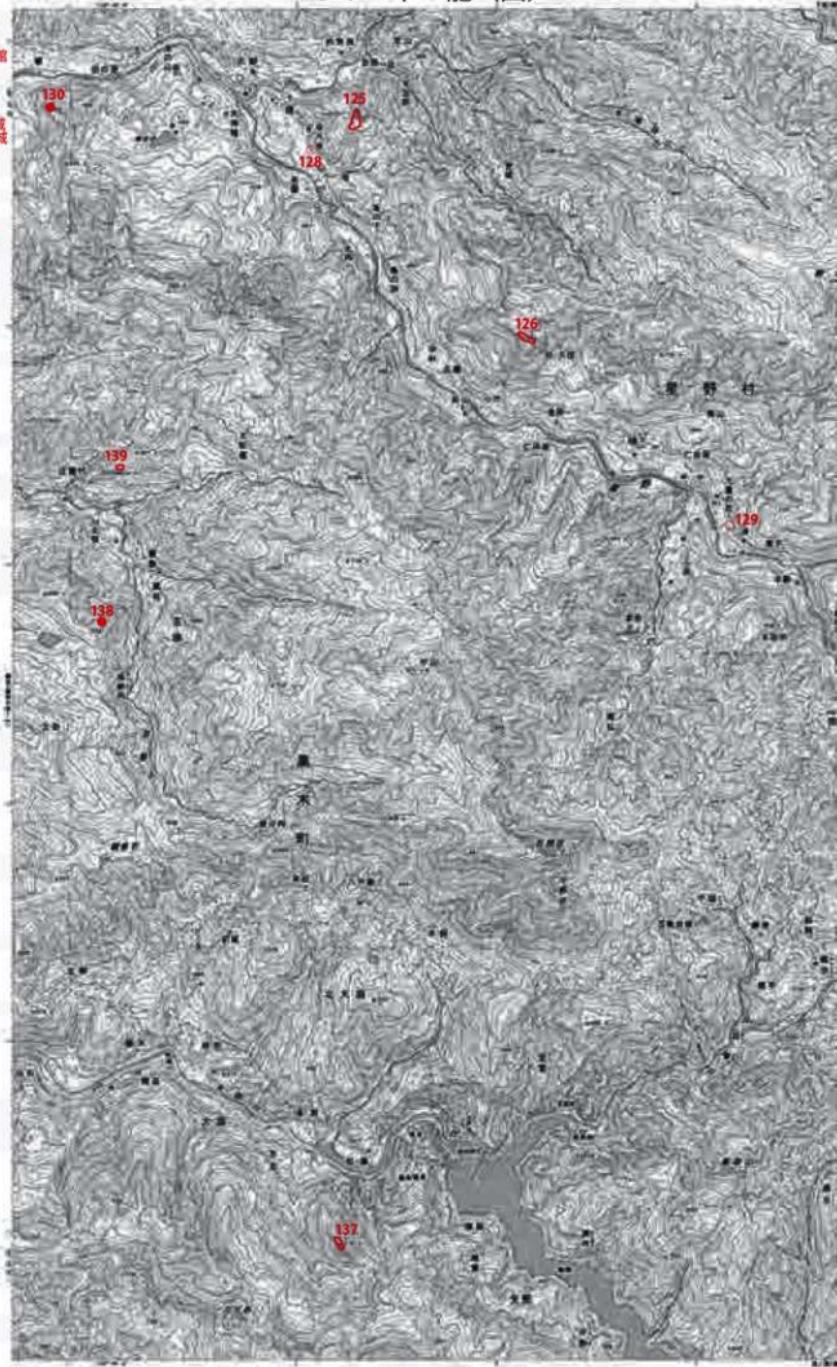


<中近世城館>
筑後 133
アイノツル城
筑後 134 高屋城
筑後 135 菓原城
筑後 136 虎伏木城

31 十籠(西)

<中近世城館>
筑後 125 高岩城
筑後 126 白石城
筑後 128 千々石館
筑後 129 満熊
筑後 130 内城城
筑後 137 塚足城
筑後 138
白牧大岩屋名城
筑後 139 地下名城

(所在不明)
<中近世城館>
筑後 127 十籠館
筑後 132 高島城



V 個別城館報告

<凡例>

- 1 本章では、対象地域に分布する個別城館遺跡等の記載を行っている。
- 2 城館跡は、遺跡の分類単位で、なおかつ旧郡単位で収録しており、市町村単位ではない。
- 3 個別城館のタイトルに示した内容は、IVの一覧に準じている。
- 4 文中にある文献番号は、参考文献一覧（32～34ページ）と対応している。また、基本参考文献等の略号は以下のとおりである。
 - ・「軍談」…『筑後將士軍談(筑後国史)』(矢野一貞著・1853年)
 - ・「旧城」…『旧城跡等ノ取調』(福岡県社第1956号 大正5年10月2日施行)
 - ・「種々」…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡県史、史蹟名勝口碑傳説所在地』(和田宗八・1936年)
 - ・「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡(人物往来社(鳥羽正雄他編・1967年))
 - ・「探訪」…『探訪日本の城』(小学館・1977年)
 - ・「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録 福岡県中世山城跡(福岡県教育委員会(副島邦弘・近沢康治編)・1979年)
 - ・「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島(新人物往来社(磯村幸男編・1979年))
 - ・「廣崎」…『福岡県の城』(廣崎篤夫・1995年) /『福岡県古城探訪』(廣崎篤夫・1997年)
 - ・「城郭」…『福岡県の城郭』(福岡県の城刊行会・2009年)
- 5 個別報告文章の項目および内容は以下のとおりである。
 - 【沿革】…城館の位置、および伝承等の来歴を記す。
 - 【概要】…城館の現地の状況及び構造等を記す。
 - 【史料】…文書調査における「一次史料」・「参考史料」の記載の有無を示す。
 - 【参考文献】…参考文献一覧に示した文献の有無を示すもので、文献番号を付した。番号がゴチック体となっているものについては、記載文献に縄張り図・測量図等の調査データが搭載されているものを示す。
- 6 掲載した縄張り図の内、事務局作成について、作成方法・表記方法等については、『発掘調査のてびき 各種遺跡編』(2014年・文化庁編)に準じている。また、遺構名称も上記文献に準じているが、曲輪への出入口を指す用語については「虎口」を用いた。

1 中世城館 ①御原郡

筑後2 山隈城

郡名 御原郡/筑前国夜須郡 別称 花立山城・千潟城 図幅名 二日市(東)
種別 山城 所在 小郡市山隈・朝倉郡筑前町四三島・山隈

【沿革】筑前と筑後の境、筑後平野の中に聳える独立峰、城山（花立山）の山頂に位置する。『筑前国続風土記』によると、当城は南北朝時代に北朝方の少弌氏によって築かれたとされ、また豊臣秀吉の九州平定後、小早川隆景の名島城の支城となったことが記される。また、『軍談』には「山隈城跡」として「山城也、縦十四間、横十四間、西二小堀五ツアリ、長十間、廣五尺、深三尺、南二小堀七ツアリ、長十間、廣五尺、深三尺、二ノ丸縦二十四間、横十六間、小堀八ツアリ、三ノ丸縦十八間、横八間、太宰少弌ノ支城也」とある。また文献120には秋月氏の端城ともされ、秋月氏の関与が窺われる。

【概要】標高130.9mの頂部には、南北約30m、東西約20mの主郭Ⅰを置き、その北東側、北西側、南西側に曲輪を配する。北東側はあまり標高が変わらない頂部に曲輪Ⅱを置き、その南東側に平面逆V字形の堀切3本を設ける。またⅠの北西側に曲輪Ⅲ、南東側には堀切3本を設けている。そして、Ⅰの南西側にはやや離れて曲輪Ⅳ、Ⅴを配するが、Ⅳの東側には堀切あるいは食い違いの形状の土塁を備えた堀が設けられる。城山は周囲からも非常に目立つ山であり、中世全般にかけて頻繁に使用された城郭であると考えられる。

【史料】あり

【参考文献】1～3.5～7.8.9.10～12.45.48.

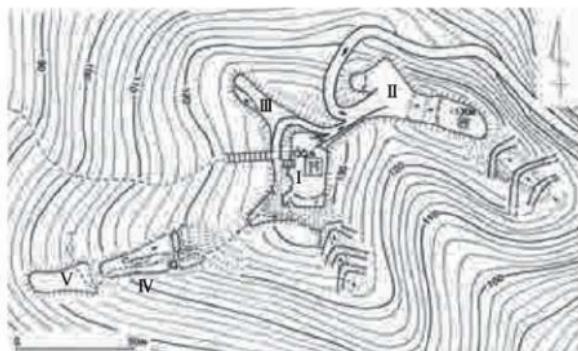
128



第2図 山隈城遠景



第3図 夜須郡四三島村山隈山古城図(『古戦古城図』のうち)(部分・国立公文書館蔵)



第4図 山隈城縄張り図(文献128・岡寺 良作成)

筑後8 三原城 みはらじょう

郡名 御原郡 別称 本郷館
種別 平地城館 所在 三井郡大刀洗町本郷

図幅名 鳥栖（東）

【沿革】筑後川の支流、陣屋川に面した本郷宿に隣接して位置する平地城館である。『軍談』には「同村（本郷村）館跡」として『寛延記』を引いて、「本郷新町にあり、長禄中三原種朝居館ノ跡ナリ、三万ノ領主ト云伝フ」とある。また、秋月氏の持ち城の一覧を記した『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』（文献120所収）には「三原 板浪左京」とあり、天正15年（1587）段階には秋月方の城となっていたことが推測される。

【概要】本郷宿の南、標高約17mの平地に、南北約150m、東西約80mの長方形の範囲に幅約5m、深さ約1mの空堀が、北側と東側の一部を除いて全周する。また、西側と北側には堀が二重に巡る構造となっている。南東隅については入闇のように内側に折れているが、その外側の発掘調査によって、元々は折れもなく直線的に巡らされていたものが、現在見られるような入闇状に改修されていることが判明している。現状ではこの方形区画が確認されるのみであるが、『大刀洗町史』（文献29）に掲載された『三原城図』や『三原城間どり図』（共に所在不明）には、複数区画が描かれているようであり、この絵図の真偽はともかく、今後の課題と言えよう。いずれにせよ筑後平野においては明瞭に堀で巡らされた方形区画が地表に残されてい

る貴重な事例と

言えよう。

【史料】あり

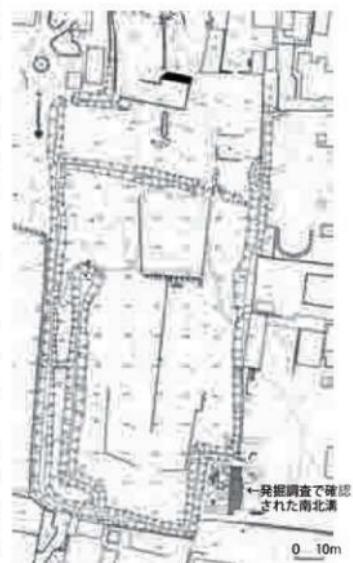
【参考文献】

1.5 ~ 9.29.

64,115



第6図 『大刀洗町史』に掲載された「三原城図」（左）と「三原城間どり図」（右）（文献29から転載）



第5図 三原城測量図（文献64）

②御井郡

筑後 10 西鰐坂城	にしあじかじょう	郡名 御井郡	別称 西鰐坂館・阿地坂城	図幅名 鳥栖（西）
		種別 平地城館	所在 小都市下西鰐坂	

【治革】宝満川東岸、味坂の集落の南端近く、味坂小学校西側の標高約9mの平地上に位置する。『軍談』には「西鰐坂村城跡」として「平城也、縱六十間、横二十間、伝云、筑紫上野守ノ臣、宗宗家居之」とし、土地の人は佐々木高綱の城跡と伝えると記す。また、『筑紫氏所領城數覚書』(福岡市博物館蔵)には筑紫氏の持ち城の一つ、「阿地坂之城」として城主を宗次郎左衛門尉として千栗城(佐賀県三養基郡みやき町)の城主と同一の名が挙がっている。

【概要】字城ノ内（現在は城地区）の集落一帯が城地と伝えられ、当時の地割が現在も残されている。佐々木高綱の後裔とする旧家・佐々木高栄所蔵の図面（第7図）や昭和初期の字図などを参考にすれば、中央部に逆L字形の水路が巡り、またその外側には北側を除いた三方に水路が巡っていたことがわかる。水路の内部、すなわち現在の集落域は現在でも約1～2m標高が高くなっている。また、区画の南東隅を「大三角（大御門）」、西側の出入口を「ウウキンド（大木戸）」と呼ばれていた。



第7図 鮫坂城内全略図（文献123）



第8図 西鰐坂城航空写真（昭和23年・
国土地理院撮影）

筑後 13	くましろやかた 神代館	郡名 御井郡	別称 なし	図幅名 久留米（東/西）
		種別 平地城館	所在 久留米市山川町神代	

【治革】筑後川南岸、山川町神代の安国寺のある標高約10mの平地上に位置する。『軍談』には「自

風年間神代良
續館ヲ構ヘテ
ヨリ、代々居
之。永正中対
馬守顯元去テ
肥前二行ク。
今ノ安國寺境
内其館蹟也」
とする。また、『寛延記』に
は「一神代村
昔は城有之候
由承伝候得共、今は城跡
相知不申候」
とある。

【概要】現在、
安国寺は現存
しているもの

の、周辺は宅地開発や区画整理によりほとんど往時の姿を
残していない。明治21年(1888)の西神代の地籍図(第9図)
により安国寺境内を囲む溝や水路があることがわかる。
また、大正末期の地図にも南側から西側にかけて、地
籍図と同じ形状の水路があることがわかる(第10図)。久
留米市教育委員会の遺構確認調査によって、溝や水路で囲
まれた内部は二分されていることが推測され、南側が安国
寺、北側が館跡と推定される。神代氏が檀那であった神代山万法寺が足利尊氏によって全国に建て
られた安国寺となっており、安国寺と中世領主とのつながりを示す重要な事例と考えられる。

【史料】なし 【参考文献】1,2,5,7~9



第9図 西神代字図
(久留米市蔵・文献9から転載)



第10図 地図に表れた神代館の堀(陸
地測量部発行 1/25,000地形図「久留
米」)(大正15年測量・福岡県立図書館
提供)



第11図 神代館航空写真
(昭和23年・国土地理院撮影)
※館を含む周辺部は圃場整備されているが、堀
の痕跡は明瞭に残されている。

筑後 14 つるがじょう
鶴ヶ城

郡名 御井郡
種別 山城

別称 舞鶴城
所在 久留米市山川町

図幅名 久留米(東)

【沿革】耳納山脈の西端に聳える高良山から北西へ延びる尾根の突端頂部に位置する。当城の西側には別の尾根になるが古宝殿城、吉見岳城などが位置する。『軍談』には「舞鶴城」と城名を掲げるのみであって、詳しい来歴等について地誌類には記載されていない。

【概要】標高159mの尾根の突端頂部に東西約30m×南北約15mの主郭を置き、その西側には同規模の曲輪をも



第12図 鶴ヶ城近くからの久留米市街の眺め

う一つ置いている。これらの曲輪群の東側から北側にかけて防御遺構が顕著にみられる。主郭の東側から南側の縁辺部には低土塁が巡っているように見受けられるが、曲輪面は近年まで人家があり、後世の改変の可能性も大きく、城館遺構とは断言できない。その一方で、主郭の東側の尾根続きの部分には、連続する5本の堀切が構築され、高良山側からの攻撃に厳重に備える。堀切の深さは概して4~5mほどだが、主郭に最も近い堀切は主郭曲輪面から約15mもの深さを呈する。その一方で、いくつかの堀切には岩盤を掘り残して土橋としている箇所が見受けられる。また、曲輪群の北側にはAとBの曲輪を設け、その外側には横堀を伴う敵状空堀群が構築されており、豊堀は20本近くにも上る。

特筆すべきは曲輪AとBとの間の谷状となる地形を反映し、横堀が横矢を効かせるように直角に折れをなしていることである。明らかに曲輪AとBから横堀の敵に対して側射できるような工夫と言えよう。

このように、鶴ヶ城は全長200mにも満たず、決して大きいとは言えない城ではあるが、連続する堀切群や横堀を伴う敵状空堀群を用いた厳重な防備をなしていたことがわかる。城主は伝わっていないが、高良山周辺の城館群と密接な関係にあったと思われ、高良山座主あるいは豊後大友氏の関与が想定される。

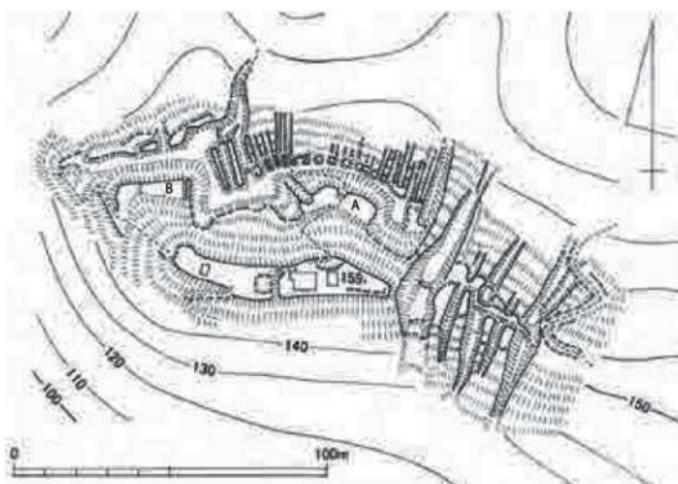
【史料】なし

【参考文献】

1.6.7.8.9.37



第13図 鶴ヶ城の堀切(上)と敵状空堀群(下)



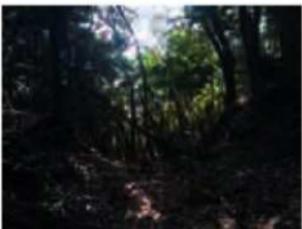
第14図 鶴ヶ城縄張り図(事務局作成)

筑後 15 比沙門岳城

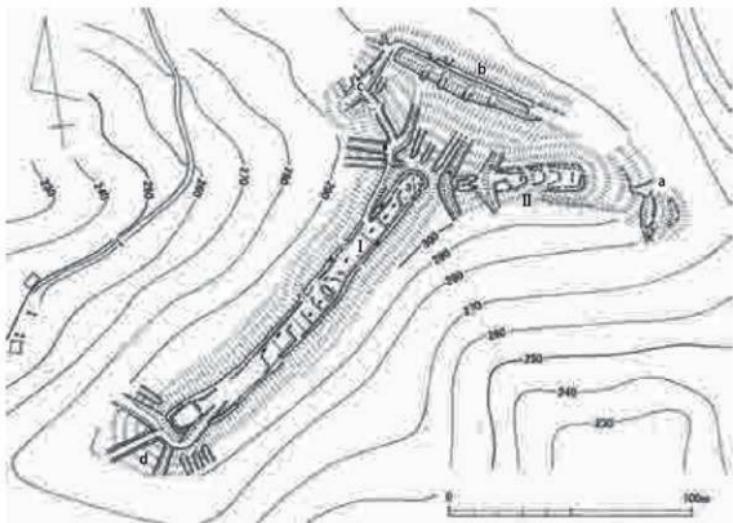
郡名	御井郡	別称	別所城	図幅名	久留米（東）
種別	山城	所在	久留米市御井町		

【沿革】高良大社の背後、高良山山頂（標高312m）に位置する。『軍談』には「別所城」として「其の跡、山上に在り」と記すのみで、城主などは地誌類には確認できない。

【概要】高良山山頂部を頂点に、そこから南西方向へ緩やかに傾斜する平坦地形が約150m続く。一見、曲輪とも思えないが、平坦面縁辺部には明瞭に低土塁が巡らされており、平坦面が不明瞭な曲輪面であることがわかる（図中I）。曲輪面の途中には、仕切りともつかないような土塁や、不明瞭に造成された階段状の平坦面なども確認でき、恒常的な使用というよりも、急ごしらえのような臨時の構築を思わせる。山頂の東側と北西側には堀切を設け、北側斜面には3本の豎堀群を構築、東側の尾根上には、堀切の前後に土塁を伴うが平坦面が非常に不明瞭な曲輪を伴っていることがわかる（図中II）。さらにその先にも堀切1本を設ける（図中a）。また、北側斜面には豎堀群のさらに下方に、長さ約50mにもわたって構築された直線的な横堀と土塁遺構が確認される（図中b）。さらに横堀はその西側の堀切cとも



第15図 比沙門岳城堀切（上）・横堀（下）



第16図 比沙門岳城縄張り図（事務局作成）

連動しているようにも見受けられ、斜面下方から攻め上がる敵を迎撃するための塹壕のような印象を受ける一方で、斜面上方の堅堀群や堀切などとは接続しない、これも急ごしらえで改修されたかのような印象を受ける。この横堀の斜面下は現在つじ公園となっており、城館遺構が既に消滅したかのような印象も受けるが、現状を見る限りでは旧地形をほぼ残しており、堀などの遺構はなかつたものと考えられる。

一方、曲輪Iの南西側にも堀切と堅堀群が構築され、斜面下からの攻撃に備える（図中d）。また曲輪Iの西側には自然の平坦地形が杉ノ城へ向かって続いており、文献133などでは曲輪として認識されている。しかしながら城郭構築としての造成が全くなされておらず、現状では城域に含めるのは困難であろう。城主等は伝わらないが、立地や防御遺構などから考えて、高良山座主あるいは天正12年（1584）に高良山に陣を敷いたという立花道雪の大友方の関与が想定できるのではないかろうか。



第17図 銀沙門岳城遠景

【史料】あり 【参考文献】1,6,7～9,37,126,133

筑後16 杉ノ城	郡名 御井郡 種別 山城	別称 住職城	図幅名 久留米（東） 所在 久留米市御井町
----------	-----------------	--------	--------------------------

【沿革】銀沙門岳城から北西方向の高良大社へ延びる尾根上に位置する。銀沙門岳城からは200～300mしか離れておらず近接している。『軍談』には「住職城」とのみ名を掲げるのみで、城主等の来歴は地誌類には見られない。

【概要】銀沙門岳城から北西へ延びる尾根の2ヶ所の頂部（標高304m・294m）を中心に縄張りは展開している。城内最高所であるIはあまり平坦ではないが人工的に段造成がなされた平坦面群が展開し、東側の尾根上aとbの2ヶ所に堀切を構築する。また、cには曲輪の縁辺部に土壘が部分的に巡り、bの堀切と共に東側からの攻撃に備える。cの土壘は北側が道路造成の際に消滅してしまっており、どのように延びていたかは不明である。Iの曲輪群の北側斜面は二段に渡って一部横堀状となった帶曲輪d・eが巡っており、堅堀により接続している。この帶曲輪のラインは城域全体にわたって延びており、城の全体を防衛するラインであることがわかる。



一方、西側の頂部II（標高294m）は現在「鳳山」と呼ばれているが、頂部はあまり平坦に造成がなされていない。しかしその東側の曲輪fは平坦面が非常に明瞭に造成されている。そしてその東側、gは不明瞭な平坦地形であるものの、北側には土壘と横堀が巡り、横堀のさらに北側には30本足らずの堅堀群で構成される畝状空堀群hが確認でき



第18図 杉ノ城堀切（上）・横堀（下）

る。この堅堀群は堀と堀との間隔が約2mと非常に狭いが、直線的で非常に整然と構築されており、北側斜面の防衛強化を見る事ができる。この空堀群の東側Ⅰには石垣がいくつか確認でき、土留めなどの役割を果たしていたものと考えられる。また、Ⅱの頂部の西側にもいくつか堅堀群を確認する事ができる、その西方にもいくつか平坦面群を確認する事ができるが、およそ城域はこのあたりで収束するものと考えられる。

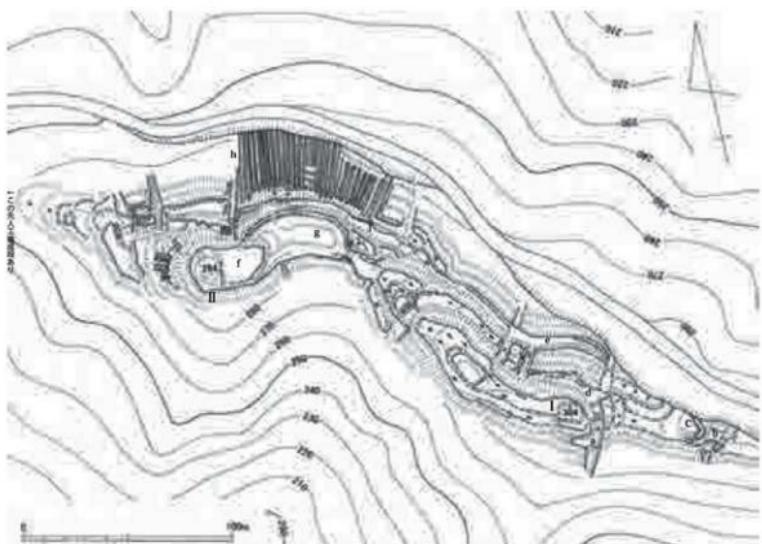
文献133では、ここから西側約200mにわたって展開する平坦地形をも曲輪とし、高良山神籠石に沿って堀が構築されているように理解されているが、Ⅰ・Ⅱを中心とする曲輪群とは全く様相を異にしており、城域と理解するのは困難であろう。一部に人工的な造成も確認できるがそれは後世の山仕事、あるいは高良大社に関わる造作であると思われる。

このように非常に高度に発達した縄張りを駆使して防御されている事がわかるが、毘沙門岳城同様、曲輪の平坦面は非常に不明瞭で臨時の構築的印象を強く受ける。城主は伝わらないが、高良山座主あるいは立花道雪ら大友方が筑後攻略のために高良山に敷いた陣に関わる可能性も考えられるが、詳細は今後の課題と言えよう。

【史料】なし 【参考文献】1,6,7,8,9,37,124,133



第19図 杉ノ城石垣



第20図 杉ノ城縄張り図(事務局作成)

筑後 18 吉見岳城

郡名 御井郡

別称 芳水嶽城

図幅名 久留米（東 / 西）

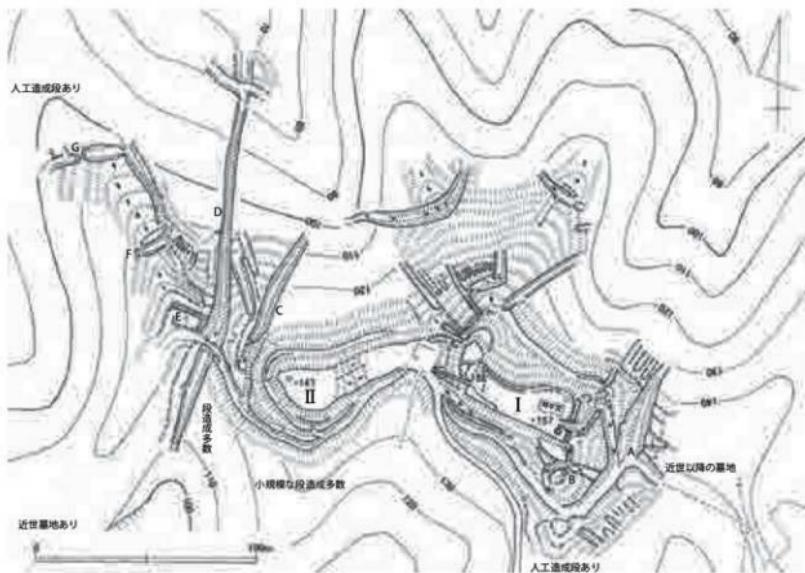
種別 山城

所在 久留米市御井町・山川町

【沿革】高良大社から北西側の尾根を下った標高 158 m の吉見岳山頂に位置する。『軍談』には「吉見嶽城跡」として「山城也、其始何人ノ築ク處ト云事ヲ知ズ、天文中八尋式部卿居之、天正十五年秀吉公此ニ陣ス、縦三十間、横六間、四方ニ高六尺、横六尺ノ土手アリ」として、さらに出丸、堀、二ノ丸などの存在を記す。『寛延記』にも「一古城跡 一ヶ処 吉見嶽」として上記とほぼ同様の記載がなされている。

【概要】吉見岳山頂には、現在琴平宮が祀られているが、それが吉見岳城の主郭 I である。東西約 50 m、南北約 20 m で、主郭の東側と北側には土塁が巡らされている。I の東側と南側には A と B の堀切が設けられるが、特に A は幅約 10 m、深さ約 10 m 近くもある大型のものである。また I の北側には一部は横堀ともなる帯曲輪が巡り、そこから竪堀が構築される。畠状空堀群ともみられる竪堀群の集中も見られるが、やや不明瞭であり、城郭遺構として断定できるかは微妙である。そのさらに北東側と北西側の尾根上に堀切 1 本を設けている。

I の西側にも東西約 70 m × 南北約 10 ~ 20 m の曲輪 II を構築するが、その西側にも長大な堀切 C・D、さらには土塁状の高まりに囲まれた平坦面 E なども見られる。そしてその北西側の尾根上に堀



第 21 図 吉見岳城縹張り図（事務局作成）

切F・Gを設け、城域を画す。

なお、文献133に掲載された図には、後世の高良大社に関わる寺院遺構を含みつつも、さらに城域が広がると認識して図化しているが、それらは全て近世墓や後世の山仕事によるものであり、現状で確認できる城域は上記の通りと考えられる。高良山周辺の山城の中では最もしっかりと構築された印象を受け、高良山座主にかかわる城、あるいは天正15年（1587）の豊臣秀吉の陣跡を反映している可能性も考えられよう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5～8,9,37,133



第22図 吉見岳城主郭の土塁（左）・堀切（右）

③三瀬郡

筑後 31 海津城 かいづじょう

郡名 三瀬郡 別称 安武古町城・古町城 図幅名 久留米西部（東）
種別 平地城館 所在 久留米市安武町大島

【沿革】筑後川の大きく蛇行する旧河道の左岸に面した字城山および字館の周辺に位置する。『軍談』には「安武古町海津城跡」として「本丸東西二十七間、南北二十六間」とあり、他に二ノ丸、三ノ丸の存在も示し、安武民部少輔重乗の築城で、その子安右衛門の代に龍造寺方の横岳頼次により落城させられたことや、立花氏家臣の立花三右衛門が居城し、慶長年間に廃城となつたことなどが記される。

【概要】現在、城跡は、大正 8 年（1919）の耕地整理や、さらには昭和の大耕地整理により、それ以前の地割がわからない一面の水田となつてしまつておらず、城跡の面影は現地に立てられた石碑による他はない。しかし圃場整備に伴う発掘調査が行われており、その調査によって、16 世紀初頭から中頃の中国製陶磁器をはじめとする遺物が出土する堀が各所で発掘され、そこから字「城山」や「館」さらには周辺の字ごとに、堀で囲まれた方形区画が並立する状況が復元されている。それは、耕地整理前の大正 6 年測量の陸地測量部の地図に示された地割とある程度整合が取れる複数の復元案であり、およそその城の姿を知ることができる。また、城の東側には安武古町が隣接し、字図などでは、地割が短冊形に区画されており、かつての城下集落とみられる。

【史料】あり

【参考文献】1,2,5 ~ 9,20,37,72



第 23 図 海津城縄張り復元図（文献 72）



第 24 図 耕地整理前（大正 6 年）の海津城付近地図
(赤い枠線が上図のおよその範囲。陸地測量部大正 6 年測量「久留米西部」(福岡県立図書館提供)を一部改変して作成)

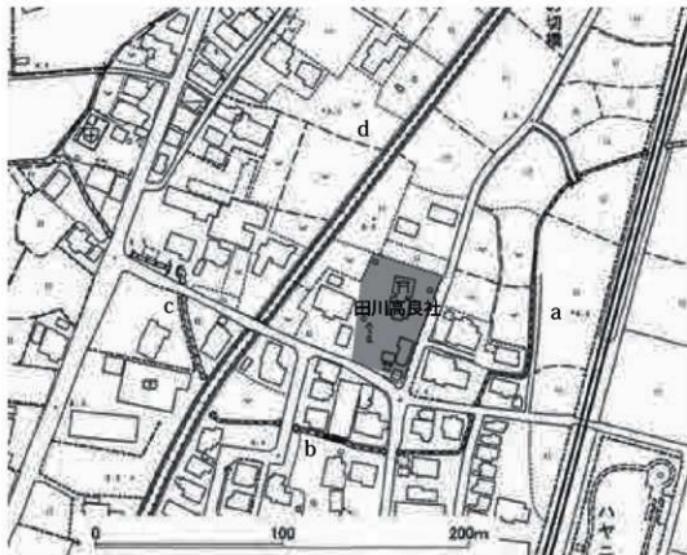
【沿革】高良玉垂宮で有名な大善寺町の南、三潴町田川の集落内に位置する。『軍談』には「田川村館跡」として「村中今ノ高良社ノ地則田川氏代々ノ館舍也」とある。また、『三潴町史』（文献 31）に、城域については東側と南側に溝が残り、神社の北側については、耕地整理の際の地下げの時に幅三間の東西方向に褐色土がみられ、田川城の堀跡だったのではないかという言い伝えが載せられている。

【概要】現在、城の中心は田川高良宮となっており、神社境内地の北、東、南は 2m ほど低くなっている。また、その外側にも、図中 a ~ c と、神社を矩形に迂回するように水路が巡っており、城の外郭の名残の可能性がある。城の北側については不分明な状況ではあるが、東西の幅から、外郭の一辺が約 150 ~ 200m となり、そうなると北側は図中 d 付近の東西方向の境界線が目安となるかもしれない。また、田川高良社部分が一辺約 50m 程度の城の中心区画になる可能性も考えられるが、確証はなく、今後の調査でより明らかにするほかないであろう。

【史料】なし 【参考文献】1,2,5 ~ 9,20,31



第 25 図 田川高良社
(周囲より一段高くなっている)



第 26 図 田川城周辺現況図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成）

筑後 37 犬塚城 いぬづかじょう

郡名 三潴郡	別称 なし	図幅名 久留米西部（東）
種別 平地城館	所在 久留米市三潴町玉満	

【沿革】田川館の西、玉満の小犬塚天満宮境内一帯に位置する。『軍談』などの近世の地誌類には記載されていない城だが、『新考三潴郡誌』(文献20)には「犬塚の城跡」として、原口天満宮(小犬塚天満宮)境内は犬塚氏の城跡で、神社の周囲に堀があり、これを「陣堀」といい、左右に高地があり、里人は橋の跡というと記している。また、『三潴町文化財探訪』(文献112)には享保13年(1728)に書かれた「小犬塚天満宮縁起」に「陣屋舗ト号ス。即チ古城境内」とあり、これが最古の記載の可能性がある。

【概要】現在、天満宮の東側には南北に直線的に延びる土壘状の高まりと溝状の窪みが見られ、この窪みが「陣堀」とされている。しかし土壘状の高まりの上には後世の水路土居があり、『三潴町文化財探訪』(文献112)には水路土居構築以前にも土壘状の高まりがあったとするが、大正6年の地図にも既に水路土居とその東側に「陣堀」を流れる水路の表記があり(第27図)、土居遺構が城に伴うものかは断定が難しい。それ以外にも殿山、人切などという地名が残る。また、橋跡については、社殿の北東側に高さ1mにも満たない低い高まりがあり、それを橋跡としているが、あまりに削平されすぎており、城郭遺構か否かの判断が



第27図 大正6年当時の犬塚城周辺地図(陸地測量部測量 1/25,000 地形図「久留米西部」(福岡県立図書館提供))



第28図 水路土居(左)と犬塚城「陣堀」



第29図 犬塚城周辺図(久留米市提供図を一部改変して事務局作成。図は現在の地割を示し、網掛部は推定城域を示す。)

つかない。現在の地籍を見ると、水路土居に沿った東側に陣堀の水路があり、それを辿ると一辺約150mの方形区画が想定できるが、確実な城域とするには判断材料が乏しい。城地として問題はないが、詳細な構造や範囲は現状では不明と言わざるを得ない。

なお、文献112には、犬塚城の絵図を佐賀県三養基郡三根町（現・みやき町）向島の犬塚氏が所蔵するとの記載があり、今回、その絵図の画像を確認したが、近世城館のような馬出などが描かれており、実際の城の姿とは異なっている可能性が高い。

【史料】あり 【参考文献】2.5～7.8.9.20.31.112

筑後 44	なまづじょう 生津城	郡名 三潴郡	別称 なし	図幅名 羽犬塚（東）
種別	平地城館	所在 久留米市三潴町生津		

【沿革】筑後川支流、山ノ井川の東岸に接する生津集落内の字城田を中心として位置する。『軍談』には「本丸東西七十三間、南北六十二間、西堀口廣三間、中ノ堀口廣二間、右堀及二三ノ丸、今ハ田畠民居トナル」とあり、西牟田城が堅固ではないので、天正7年（1579）に西牟田家周が新たに築城したが、同11年に落城したことを記す。また、『新考三潴郡誌』（文献20）には三谷有信氏の調査報告書を引用し、「堀切五重を廻らせ、五重目の堀の傍を築地とよび以前は土居があつた」とする。また外郭の外を大泥池（おおたんぼ）といい低湿の地であると記し、第30図の図を示す。

【概要】現在、城があった場所は耕地整理や圃場整備でかつての様相とは様変わりしているため、過去のデータを元に城の構造を推測する。第30図や戦後すぐの航空写真（第31図）を参考に考えると、字城田を中心に方形のクリークが二重ほど廻り、さらにその外周についても複雑にクリークが入り組んでいる様子がわかる。字城田の二重に巡る方形のクリークは南東隅が直角に屈曲しており、断定はできないが、城の水堀などの方形区画を反映している可能性も十分考えられる。そのように考えると、一辺約150m四方、その外側に一辺約

200～250mの方形区画を持つ平地城館であったことも推察できるが、いずれにせよ確実なことは今後の調査

に委ねざるを得ない。

【史料】なし

【参考文献】

1.2.5～9.20.31



第30図 生津城跡図（文献20）



第31図 昭和23年の生津城周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部変更して事務局作成)

筑後 58 酒見城

郡名 三瀬郡
種別 平地城館

別称 なし
所在 大川市酒見

図幅名 羽犬塚(西)

【沿革】筑後川支流の花宗川左岸、大川風浪宮の西側の平地上に位置する。『軍談』では『陰徳記』を引き、天正8年（1580）に龍造寺隆信が築城し、鍋島信生に守らせたことなどを記す。『旧柳川藩志』（文献22）には「天正15年（1587）立花家の老臣由布美作をして城番となし以て肥前の防城とす」とある。

【概要】『新考三瀬郡誌』（文献20）には大川町役場調査の所見として、「大川町大字酒見字上城内、下城内にあり、面積四町五反二畝六歩（上城内二町一反六畝一步、下城内二町三反六畝五歩）あり、城内三反歩の高地（水田より約五尺高い）より目下共同墓地となつてゐる。石垣、記念木などはない」として第32図を示している。それを見ると、上記にあるように上城内と下城内を途切れながらも、それぞれ一辺約100mの方形に巡る水路があり、それがかつての城の堀の名残である可能性も考えられる。また、米軍撮影の航空写真を見ても（第33図）、ほぼ同様の水路があることがわかる。現在も下城内の西側の水路など、一部水路がそ



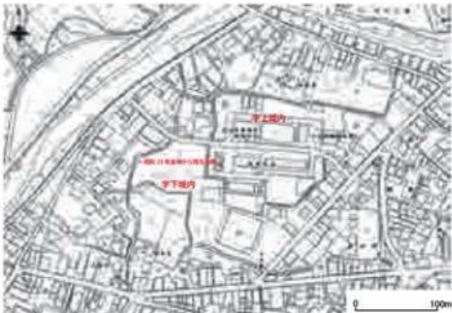
第32図 酒見城跡図（文献20）



第33図 昭和23年の酒見城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第34図 明治21年頃の酒見城周辺字図
（『筑後國三瀬郡酒見村ノ圖』（部分・大川市教育委員会蔵、柳川古文書館保管））



第35図 現在の酒見城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して作成）

のままに残存しており、そこから類推すると上城内の南半部が、現在の大川看護福祉専門学校の敷地に、北半部が墓地、下城内は水田であることがわかる。このように酒見城は水堀で囲まれた二つの方形区画を持つ縄張りが想定される一方で、明治 21 年頃と想定される酒見村の字図を見ると（第 34 図）、字の名称や範囲はもとより、詳細な図とはいえ昭和 20 年代の水路と照合することが困難なくらい異なっており、果たして昭和 20 年代の水路配置が酒見城の城館遺構を反映したものかどうかの確証は断言できない状況と言えよう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5 ~ 9,20,22,28

筑後 59	つむらじょう 津村城	郡名 三潴郡 種別 平地城館	別称 なし 所在 大川市津	図幅名 羽犬塚（西）
-------	---------------	-------------------	------------------	------------

【沿革】筑後川支流の花宗川に面した榎津町の東に位置する津村の集落に位置する平地城館である。『軍談』では「津村城跡」として天正年間に藤原秀郷の後裔・津村大輔が守り、子孫は北大野島の庄屋になったことなどが記され、さらに田中吉政の時代には榎津加賀右衛門が守備したとするが、これについて榎津城（筑後 K5）のことを指しているものと思われる。さらに『新考三瀬郡誌』（文献 20）では川口村字津村にあるとするが、城跡ははっきりしないとしている。『大川市誌』（文献 28）では川口地区字城跡にあったとして、城跡の区画を提示している。

【概要】文献 28 に従い、城跡の概要を記すと津村の集落の西側、八幡社の南東側に字城跡、さらにその南側に字二ノ丸が所在、字城跡は一辺約 100m、字二ノ丸は南北約 50m、東西約 150m の方形の水路に囲まれ、城の水堀の痕跡をとどめている可能性がある。その外側にも併行して水路が取り巻く。昭和 23 年（1948）の航空写真や現在の地形図にもそれらの水路の区画は明瞭に残されている（第 36・37 図）。もちろん断定はできないが、これらの水路が中世の城跡の区画を示すものであれば、現在もその区画が明瞭に残る貴重な事例と言えよう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,6 ~ 9,20,22,28



第 36 図 昭和 23 年当時の津村城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第 37 図 津村城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成。網掛部は水路）

④山本郡

筑後 64 いいだやかた
飯田館

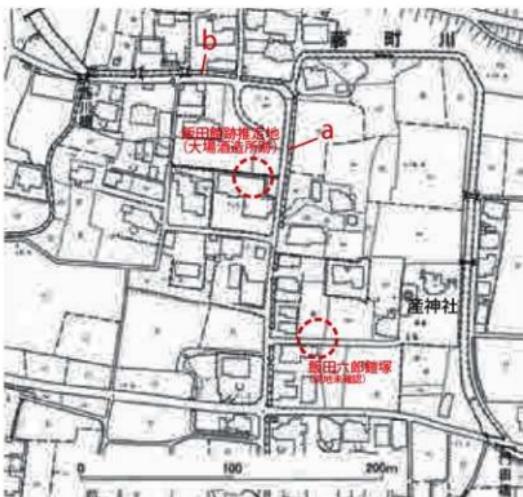
郡名 山本郡 別称 なし 図幅名 久留米(東)
種別 平地城館 所在 久留米市善導寺町飯田

【沿革】筑後川と支流の巨瀬川が合流する地点の南岸、善導寺町の飯田集落に位置する。『軍談』では「飯田村館跡」として『寛延記』を引き、「村中ニアリ、飯田六郎永信ノ館跡也」とする。『善導寺町誌』(文献 25)には「飯田館跡については史料がない為判然としないが地形や小字名等から推定して現大場酒造場一帯の地が想像される」とする。

【概要】上記記載の大場酒造場跡が館跡地として県の分布地図(文献 138)に示されており、飯田の産神社西側約 100m 地点とされている。また、その近くには館主・飯田六郎の墳塚も県の分布地図に掲載



第 38 図 飯田館推定地東側の水路 a と道路



第 39 図 飯田館周辺地形図 (久留米市提供図を一部改変して事務局作成)

角に屈曲しており、いくつかの方形区画が並列していた可能性も考えられるが、断定することはできない。ただ、いずれにせよ、伝承等からこの地に館が位置していたことは非常に可能性が高いであろう。

【史料】あり 【参考文献】2,5,7 ~ 9,25

筑後 67 竹井城

郡名 山本郡 別称 武井城・竹之城
種別 丘城・山城 所在 久留米市草野町吉木

図幅名 草野(西)

【沿革】草野町吉木の若宮八幡宮の背後の丘陵上に位置する。『寛延記』には「一武井城 右同断(申伝なし)」とするが、『軍談』には「竹之城跡」として「耳納山中ニアリ、東西也、東西四十間、南北五十間、草野氏代々ノ居城也」とする。昭和10年(1935)に発刊された『三井郡郷土読本』(文献17)には「竹井城址」として「草野町吉木八幡宮側の小路を辿ると竹井城址がある。西に突き出た山頂に物見櫓があつたといふ。草野氏の居城である」とある。また、後に草野氏は発心岳山頂に発心城を築き、そちらに移つたとされている。

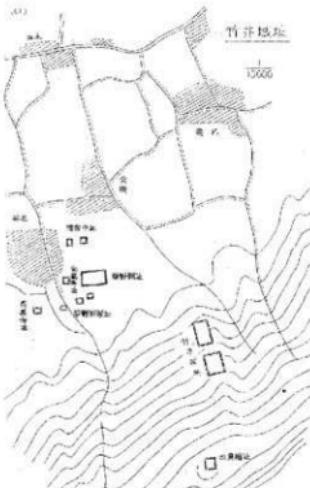
【概要】上記のように、竹井城には本城部の他に「物見櫓」とされる場所があることがわかるが、昭和33年に三井郡社会科同好会から発刊された『郷土資料集』(文献24)には竹井城と物見櫓の場所が記された地図が載せられている(第40図)。実際、この図の通り、それぞれに城跡が残されている。以下、本城部と物見櫓に分けて構造を説明する。

＜本城部＞尾根の頂部の標高171mに「竹井城址」の石碑が見られるが、そこに南北約30m×東西約15mの主郭を置く。主郭は東側に土塁を設け、南側に深さ約6mの堀切

1本を設け、尾根上側からの攻撃に備える。また、主郭の西側には腰曲輪を巡らせ、斜面下方向に堀切と並行して堅堀12本からなる畝状空堀群を構築する。堅堀は真ん中の一番大きな堅堀を挟んで大きさが変化している。そして主郭の北西側には階段状に曲輪が並び、その一番西側に深さ約8mの堀切1本を構築する。以上のように、竹井城の本城部は全長約100m程度の城域である。

＜物見櫓＞竹井城の本城部から尾根を南へ上った標高371mの頂部には、「物見櫓」と称する曲輪群が残されている。標高371mの尾根上頂部には、あまり広い曲輪面ではなく、盗掘坑のような窪みなども見られるが、

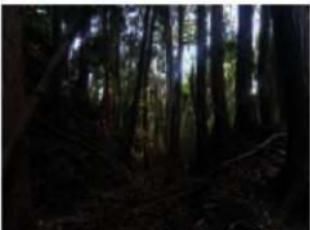
基本的には小曲輪群が階段状に展開する。そして、その北側のIがここ的主要な曲輪と見られ、南北約40m×東西約15mで、さらにその北側にも階段状に曲



第40図 文献24に書かれた竹井城と物見櫓



第41図 竹井城本城部主郭



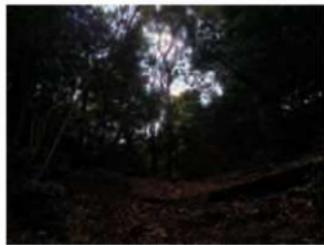
第42図 竹井城本城部堀切

輪群がいくつか展開している。一方、曲輪群の南側は、一部道路で破壊されているものの、堀切2本が構築される。幅約10m近くにもなる大型の堀切である。

このように物見櫓とは言われているもののそのような単純な構造ではなく、竹井城の本城部とほぼ同規模を呈しており、同程度の曲輪群が同一の尾根上に2ヶ所並立しているような構造と言えよう。

【史料】あり

【参考文献】1～7,8,9,17,24,37,122



第43図 竹井城「物見櫓」の堀切



第44図 竹井城縄張り図（事務局作成）



第45図 竹井城「物見櫓」縄張り図（事務局作成）

筑後 69	発心城	別称 発心岳城	郡名 山本郡 / 竹野郡 / 上妻郡	図幅名 草野(西)	種別 山城
			所在 久留米市草野町草野・田主丸町中尾、八女市上陽町上横山・上陽町下横山		

【沿革】耳納山系西側でひときわ高く聳える発心山山頂に位置する。『軍談』には「耳納山中ニアリ、東西百三十間、南北百間」とあり、大友宗麟が天正6年（1578）の日向遠征で敗北した後、草野右衛門督鎮永が大友方を離反し、龍造寺方に属した際、竹之城（竹井城）から新たに築城し、大友、秋月、高良山座主良寛らが攻めても落城しなかったことや、天正15年に草野鎮永が豊臣秀吉に謀殺されたことなどが記される。

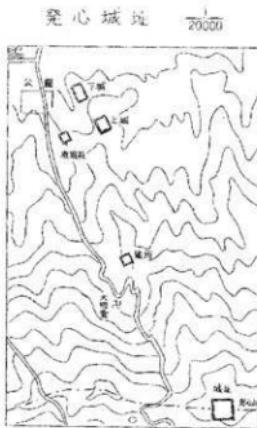
【概要】発心城は、山頂部に本城（いわゆる発心城）が



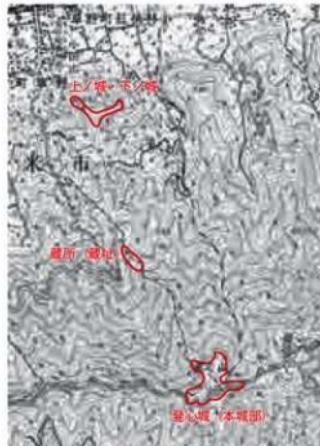
第46図 発心城遠景

あるが、昭和33年（1958）に発刊された『郷土資料集』（文献24）には発心岳山頂を「城址」とし、そこから草野町へ下りる尾根沿いに、「藏所」や「上城」「下城」の存在を記している（第47図）。また実際に現地にも城館遺構が残されている（第48図）。これらを別々の城と扱うことも可能ではあるが、発心城の出城として、一括してここで説明することとしたい。

＜本城部＞発心山山頂に位置するいわゆる発心城本体である。標高697mの山頂部に南北約50m、東西約10mの規模で周囲に低土塁を巡らす主郭部Iを置き、周囲に階段状に帶曲輪を巡らす。北側については、堀切状となっている（図中A）。主郭周囲は北側と西側にはほぼ同高度の尾根が続いており、一見自然地形のような平坦地形が続いているように見られるが、人工的な造成がなされており、一応曲輪とみなすことができる。Iの北側はIIの曲輪を中心に尾根上に曲輪が展開しているが、造成はあまり明瞭にはなされない。ただ、東側の谷に続く所には階段状に並列する小曲輪群Bが見られ、その先の自然湧水へとつながっている。水の手の確保のための造作とみられる。IIから北東側から延びる尾根先には堀切が1本設けられているが、IIの北西側の尾根は若干の平坦加工がなされた曲輪の先は自然地形の斜面となっている。こちらの尾根は草野町から「藏所」を通り、発心山山頂へとたどり着く主要登城路と考えられているために堀切などの防御遺構はないものと考えられる。一方、Iの西側は同高度の尾根先にある標高694m地点にやや広めの曲輪IIIを置き、周囲に放射状に小曲輪が展開する。そしてその南側斜面には、一部林道で切られているものの、堀切1本と竪堀約8本からなる畝状空堀群Cが構築されている。



第47図 文献24に描かれた発心城



第48図 発心城・周辺城館位置図
(国土地理院発行 1/25,000 地形図
「草野」を一部変更して事務局作成)



第49図 発心城（本城部）からの眺め
(上)・本城部曲輪I (下)

第50図 発心城（本城部）縄張り図（事務局作成）



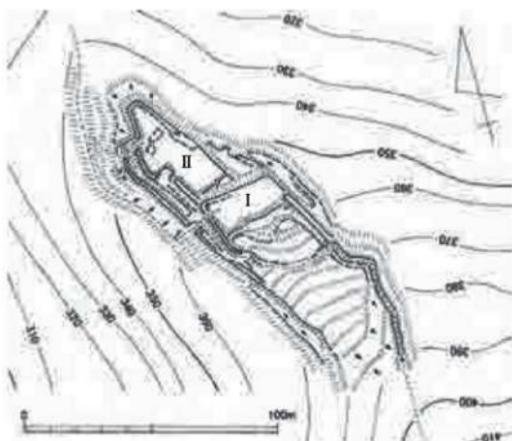
この空堀群は I の南西斜面に残された豊堀群 D と連動し、南側の谷からの侵入を厳重に防ぐ。III の西側は自然の尾根地形が続き、その先に堀切 E・F の 2 本を構築し、城域を画す。また、I の南側については、林道開削のため、縄張りを読み込むことが非常に困難になっているが、横堀 G が巡り、その南側にも豊堀群 H が確認できる。I の東側には林道で切られ、一段高くなった曲輪 IV があり、一部には土壘状の高まりも確認できるが、その東側は尾根の鞍部となる。ここにかつて堀切があつたか否かについては林道建設時の埋め立てによりよくわからない。しかし、その東側には曲輪 V があり、土壘状の高まりも確認でき、そのさらに東側 J には堀切 2 本、さらにやや離れた箇所 K に堀切 1 本を構築し、東側の城域を画している。以上のように、発心城本城部は南北約 250m、東西約 400m にも及ぶかなり規模の大きい城で、畠状空堀群など、厳重な防備を確認することができるものの、曲輪一つ一つの造作は荒く、急ごしらえのような印象を受ける縄張りでもあるが、筑後北部有数の国人領主・草野氏の本城として十分の規模を備えた城と言えよう。

＜藏所＞発心山頂の城跡から草野町へと降りる尾根道沿い、標高約 350 m 地点には藏所（現在は藏址と呼ばれる）という城館遺構が残されている。昭和 10 年（1935）に発刊された『三井郡郷土読本』（文献 17）の「発心城址」の一節には「地蔵鼻・藏所址等の地に立って、其の昔をしのぶと、感慨深いものがある」とあり、現在「藏址」と呼ばれる所がそれにあたる（地蔵鼻は場所不明）。縄

張り構造は、I・II の 2 面の曲輪が階段状に並列し、その東西の斜面側には土壘や横堀状の遺構が巡っている。曲輪の形状は直線的な矩形を呈し、II の曲輪の土壘の途切れ目には虎口と考えられる遺構や土壘で囲まれた横矢のような矩形の折れも存在する。南北尾根線方向は堀切など通行を遮断するような防御遺構は見られない。「藏」という機能は現状では断定するのは難しいが、明確な城館遺構であることは疑いなく、草野町の麓と山頂の発心城との繋ぎとなった機能を彷彿とさせる。



第 51 図 「藏所」の土壘遺構

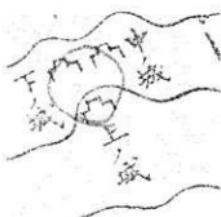


第 52 図 「藏所」縄張り図（事務局作成）

なお、文献 122 には、この「藏所」のさらに尾根を下った箇所に、「繋ぎの城」が想定されている。現地を確認したものの、自然地形があるのみで、明確な城館遺構は確認できず、不明と言わざるを得ない。

＜上・中・下ノ城＞発心公園近くの標高約 190m の尾根先端の頂部に曲輪群 I を置き、そこから北西方向にあたる尾根先端部の標高 149m 地点に曲輪群 II、I の北東側の標高約 160m 地点に曲輪群 III がある。これらの名称については、文献 24 では I を「上ノ城」、II を「下ノ城」として III は特に城跡の表記や名称などは示していない。また、文献 122 では III は II と同様に「下ノ城」とする。一方、昭和 28 年(1953)に発行された「浮羽の古城址」(文献 119)に付された「福岡県浮羽郡内古城分布図」(第 1 図)の中では、III を「中ノ城」と記している(第 53 図)。確かに III の方が II よりも標高が高い個所にあるため、仮称ではあるが、ここでは文献 119 の表記に従い「上・中・下ノ城」と呼称する。

曲輪群 I (上ノ城) は南北約 30m、東西約 15m の主郭ともよべる曲輪を置き、南側には土塁と深さ 10m にも及ぶ大きな堀切 1 本を設ける。曲輪の北側には北東側と北西側に二股に分かれるよう曲輪を配する。そして北東側斜面は堀切 2 本とそれに並行する 10 本の堅堀からなる畝状空堀群を構築している。I から北東へ 100m ほど尾根上を進むと、曲輪群 III (中ノ城) へたどり着く。一辺 10m 四方ほどの曲輪を最高所に置き、帯状に曲輪を巡らせる構造である。I への方向に当たる南西側には深さ 5 m の堀切 1 本、さらに北側の尾根上にも深さ 4 m の堀切 1 本を設けて備えとする。北東側斜面は後世の植林に伴う小規模な段造成が多数あり、往時の様子は知れない。



第 53 図 文献 119 に記された「上・中・下ノ城」



第 54 図 「上ノ城」・「中ノ城」・「下ノ城」縄張り図(事務局作成)

一方、曲輪群Ⅰの西側斜面には堀切2本と竪堀4本で嚴重に斜面を固める一方で、北西側には自然傾斜の尾根地形が続いており、約100m先には曲輪群Ⅱ（下ノ城）が置かれている。約50m×15mの曲輪を中心にその周囲には帶曲輪と所々に竪堀群を確認することができる。

また、特筆すべきは、ⅠとⅡとの間のAは一見自然地形に見えるが、その左右両側の斜面には、横堀、あるいは帶曲輪が構築され、さらにはⅠとⅡ、それぞれの曲輪群に近い所には竪堀群や堀切などが数多く構築されている。ⅠとⅡを密接につなぐために自然地形であるAの空間にこのような造作がなされたものと考えられる。

以上のように、この城郭群は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲそれぞれが独立した位置にありつつも、ⅠとⅡについては横堀などによって、密接につなごうという意識が働いた非常に高度な縛張り構造であり、発心城の麓側の拠点城郭としても十分想定できる構造であると言えよう。

以上のように、発心城は山頂の発心城（本城部）の他、山麓への尾根の途中には「藏所」、さらに麓には「上・中・下ノ城」を構築、さらに旧来より存在した竹井城（本城部・「物見櫓」）が西側の麓にあることから、城主の草野氏は、本拠の草野町から発心山山頂にかけ、城塞化することで本拠地を防衛していたことがわかる。

【史料】あり

【参考文献】1～6,7～9,17,24,30,37,119,122,124



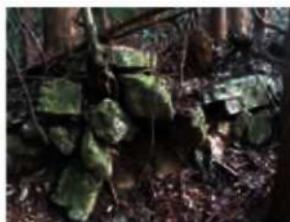
第55図 「上ノ城」曲輪面（上）・堀切（中）
と「下ノ城」堀切（下）

⑤竹野郡

筑後 81	にしかずらおじょう 西葛尾城	郡名 竹野郡	別称 西葛生城	図幅名 草野(西)
		種別 山城	所在 久留米市田主丸町益生田	

【沿革】田主丸から八女市上陽町へ抜ける神掛峠を通る県道 70 号線が通る谷筋の西側約 200 m の標高 301 m の尾根上に位置する。当城の初出は昭和 12 年（1937）に出された文献 117 であり、その時は「西葛生城」であったが、昭和 28 年の文献 119 では、「西葛生城」と「西葛尾城（仮称）」と併記され、現在は「西葛尾城」が一般的となっている。

【概要】曲輪構成は堀切を挟んで大きく I ~ III の 3 つに分かれる。標高 301m の尾根上に曲輪群 I が置かれる。I では一辺約 10 ~ 20m 規模の曲輪をおよそ 4 つ階段状に連ね、南側の尾根上には、幅約 7 m、深さ約 4 m の堀切 1 本を設ける。ここから南側には城郭遺構は確認できない。そして、西側の斜面には横堀から直角に折れた豊堀が構築される。I の北端部の曲輪から北へ 25m ほど離



第 56 図 西葛尾城堀切（上・中）・石垣状遺構（下）



第 57 図 西葛尾城縄張り図（事務局作成）

れた場所に深さ約2mの堀切1本を構築し、そこから北側に曲輪群Ⅱが展開する。Ⅱは尾根上に3面曲輪が展開し、その東側斜面上にも一ヶ所曲輪が見られ、そこには中世のものとみられる土師器片も散布している。Ⅱの各曲輪面はあまり明瞭に平坦化されていない。Ⅱの北側には幅約12m、深さ約8m、全長約60m近くもある堀切が掘られ、その北側に曲輪群Ⅲが展開する。Ⅲの中には長さ30mにも及ぶ規模の曲輪面もあるが、多くは小曲輪が階段状に展開している。中ほどには石垣とも見られる遺構（第56図下）も確認できる。

以上のように、西葛尾城は尾根上に全長約300mにも及ぶ城域を持ち、神掛峠を扼する城館の中ではひときわ大きく、重要拠点であったものとみられる。

【史料】なし 【参考文献】6～9.117～119

うちやまやかた 筑後 82 内山館	郡名 竹野郡 種別 山城か	別称 内山城・麦生館 所在 久留米市田主丸町益生田	図幅名 草野(東)
----------------------	------------------	------------------------------	-----------

【沿革】内山城（筑後83）の北方尾根上にあるとされる城館で、古賀基二（基司）の一連の記載がある。昭和12年（1937）に書かれた文献117には、「内山城二〇〇（m）麥生村 左右の河野、葛生の両城を詰城とす。武器の変遷を物語る参考的の城址で、土壘、空堀及び館城の跡歴然と残る、内山城は城とするよりも館城を見るが適當である」とある。さらに翌年出された文献118には、さらに詳説が加えられ、挿図（第58図）も掲載されている。文献119では「内山居館跡 海抜一六〇メートル」とし東葛生城としてきた城郭を「内山城」とした。地誌類の記載は内山城（筑後83）にまとめる。

【概要】文献119には、東西70m、南北35mの平地を主郭（原書では本丸）とし、前面（北側）にいくつか曲輪が展開する。主郭には背後に土壘と空堀が巡るという。館の背後は宮地嶽社と小鳥社があるとする。

現地を踏査したところ、内山城（筑後83）の北側に小鳥社と宮地嶽の社殿を確認することができたが、館の所在はよくわからなかった。しかし廣崎篤夫の『福岡県内城砦誌』（1974年・私家版（文献121））の「第二集浮羽の城」の「内山城」の項に館の図面に、周りの谷や農道が掲載されていたことから現地の場所を把握することができた。この図が書かれた当時（昭和40年代）までは土壘や空堀は残っていたが、現在、金毘羅社の社殿も跡形もなくなり、耕作地の造成が残るのみであるが、第58図の左に描かれた五面ほどの平坦面状地形は確認できた。しかしこの平坦面自体が城館に関連したものである可能性は低く、現状で当館に関連する遺構を見ることはできない。

【史料】あり 【参考文献】2,3,7,9.117～119,121



第58図 内山館見取り図
(原書では「内山城平面」・文献118)



第59図 内山城略図（文献121）

筑後 83 うちやまじょう
内山城

郡名 竹野郡
種別 山城

別称 東葛生城
所在 久留米市田主丸町益生田

図幅名 草野(東)

【沿革】神掛峠に通じる県道の西側丘陵頂部に位置する。『軍談』には「麥生村内山城跡」として「東西五十四間、南北二十五間」とあり、「星野右衛門大夫築之、落去ノ後城下町ヲ中道ニ移ス、是ヲ吉田町ト號ス」とある。また、『寛延記』の東西麦生村の項には「耳納山の内古城跡」として上記とほぼ同様の記載がなされる他、「大刀と申古城、麦生殿古城の由申伝候」ともある。さらに「内山の古城跡」として「豊後小丹中将殿の御内星野太郎家次」なる人物が取り立てたとある。このいずれかが当城に当たるものと考えられる。昭和12年(1937)に書かれた文献117では、当城は「東葛生城」とされたが、昭和28年の文献119において「内山城」とされたため、本書では「内山城」として報告する。

【概要】尾根上の標高282mの頂部に長さ50m近くにもわたって主郭と想定される平坦地形がみられる。平坦面はあまり明瞭ではないが、その北側には深さ約10mにも及ぶ堀切をはじめ堅堀群が確認できる。また、主郭の東側は県道からの進入路が造成されており、破壊されているものの、aには堅堀群の頂部がおよそ8ヶ所確認でき、畝状空堀群が構築されていたことが分かる。またその北側にも半壇状態ではあるが、堀切1本も確認できる。そして北西側の尾根上にも小曲輪群が雛壇状に展開する。当城は一部損壊がなされているものの、元は畝状空堀群を伴うような高度な防御遺構を備えた城館であり、妙見城の星野氏に深く関わり、神掛峠を押さえる役割を十二分に果たしていたものと考えられる。なお、文献119では麓側の小鳥社と宮地嶽社も城域とするが、明瞭な城館遺構は確認されないため、そこまで広がらないであろう。

【史料】あり

【参考文献】1~9,117~119



第60図 内山城付近からの眺め（上）・
内山城堀切（下）



第61図 内山城縄張り図（事務局作成）

筑後 84 高野城

こうのじょう

郡名 竹野郡

種別 山城

別称 河野城

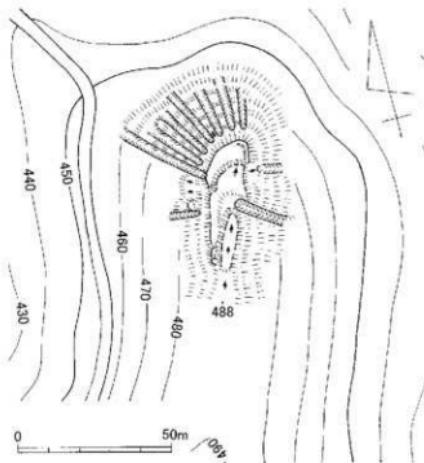
所在 久留米市田主丸町益生田

図幅名 草野(東)

【沿革】内山城のある尾根筋を南へ約400m登った標高488mの頂部に位置する。文献117・118では河野城としているが、後の文献119では高野城とされている。文献118の説明では、「河野城は奇岩峨々として峭壁をなす峻嶮の伽藍寺跡の直下にある。前、左右は土砂掻き、葉研式の堀を縦に数条掘削つて岨峨岩壁とした拳大の頂部がそれである」とあり、近世以前の地



第62図 高野城遠景



第63図 高野城縄張り図(事務局作成)

記載は確認できない。

【概要】標高488mの尾根上に幅約15mの小規模な曲輪を3面ほど展開する非常に小規模な城館である。小規模ながらも、曲輪北東部には低土塁や、北側斜面に7本の豊堀群からなる畠空堀群が構築されており、文献118の記載と正に合致する。城館という確実な伝承などもない場所だけに、平坦面のみだと一見城館であることに判断を躊躇するが、畠空堀群の存在から明確に中世山城の遺構であることが分かる。

【史料】なし 【参考文献】6～9, 117～119

筑後 85 高丸城

たかまるじょう

郡名 竹野郡

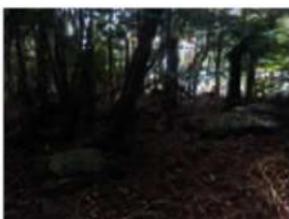
種別 山城

別称 麦生城

所在 久留米市田主丸町益生田

図幅名 草野(東)

【沿革】神掛峠へ上がる県道70号線の東側の尾根線上、標高462mの頂部に位置する。『軍談』には「益永村高丸城跡」として「本丸東西十五間、南北十九間、二ノ丸東西十四間、南北十七間、星野右衛門大夫所築也」とあり、『旧記寛文古城址書上』や『寛延記』にも同様の記載がなされる。文献117・118には麦生城(通称高丸城)とするが、後の文献119では高丸城とする。また地誌に記載された高丸城の二ノ丸が小丸城であるとしており、本書ではその説に従い報告する。



第64図 高丸城主郭

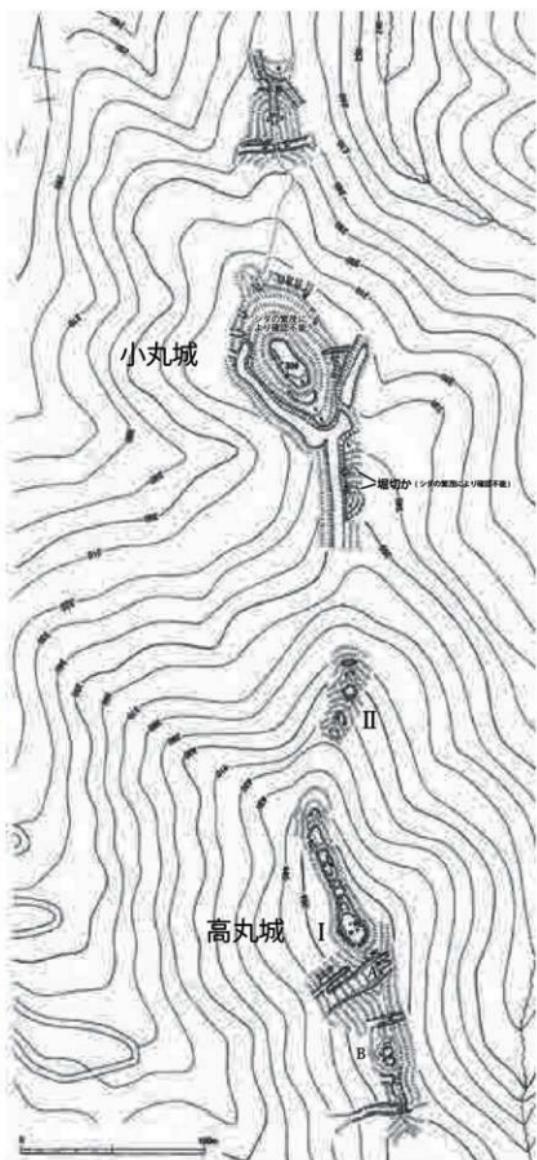
【概要】 標高 462m の頂部を中心に縄張りが展開している。頂部には全長 70m 余りにわたって曲輪群 I が尾根に沿って伸びている。頂部付近を中心に低土塁が曲輪面縁辺部を巡っている状況が確認できる。I の南側には約 10m の落差をもって幅広の堀切 A が構築され、その南側にも間隔をあけながら堀切が 2 本ほど構築される。その堀切と堀切との間には小高い自然の高まり B があり、岩の露頭が確認できる。文献 119 に記載のある「烏帽子岩」の可能性がある。曲輪群 I の北側は約 100m の間隔をあけて小曲輪群 II が確認できる。5 つほどの一辺約 5m 規模の小曲輪が並列している。曲輪群 II から尾根を北へ約 150m 下った個所が小丸城である。

【史料】 あり

【参考文献】 1 ~ 3.6 ~ 9, 117 ~ 119



第 65 図 高丸城堀切



第 66 図 高丸城・小丸城縄張り図（事務局作成）

【沿革】地誌等の記載については、高丸城（筑後 85）の項に記載したため、ここでは割愛する。

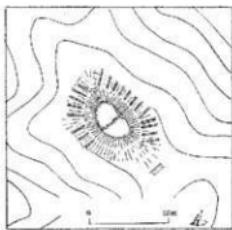
【概要】高丸城から尾根沿いに北へ約 250m 下った標高 336m の尾根の頂部に小丸城は位置する。主郭は南北約 30m × 東西約 10m の曲輪で、南側にもう一段曲輪面を設けている。現在の小丸城は、近年、植林していた杉の伐採が大々的に行われ、その際に山道造成が行われ、主郭南側の尾根鞍部は道路で削られるとともに伐木が相当数積み重ねられ、さらには伐採された範囲には背丈近くもあるシダが密生してしまい、現状では地表を詳細に観察することは難しくなってしまっている（第 69 図）。伐採以前に作成された図面（第 68 図）を見ると、曲輪の周囲にはかなりの本数の竪堀で構成される畝状空堀群が構築され、主郭の南側には堀切も見られたようであるが、現在、若干の竪堀と鞍部よりもさらに南側に堀切とみられる地形の窪みが 2ヶ所確認できるくらいである。大々的な除草作業か植生の変化が起こらない限りは、詳細をつかむことはなかなか難しい。また、主郭から北へ 50m ほど下ると、堀切 2 本は明瞭に確認することができる。以上のように、小丸城は高丸城と同一の尾根線上にあることから、高丸城と密接に関連し神掛峠を扼する役割を果たしていたことが想定されよう。

【史料】なし

【参考文献】

6 ~ 9,117 ~

119



第 68 図 伐採以前に作成された
小丸城縄張り図（中村
修身氏作成・提供）



第 67 図 小丸城遠景（上）・推定堀切断面（下）



第 69 図 伐採・シダ繁茂後の現状の小丸城縄張り図
(事務局作成)

筑後 87 平家城

郡名 竹野郡 別称 益永平家城・益永城 図幅名 草野(東)
種別 山城 所在 久留米市田主丸町益生田

【沿革】小丸城から谷を挟んで東側の尾根上、標高357m地点の頂部に位置する。『軍談』には「同村(益永村) 平家城跡」として「耳納山中、大谷山ニアリ、東西十五間、南北二十間、何人ノ所築ナル事ヲ知ズ」とあり、『寛延記』を引いて星野右衛門大夫の築城とする。

【概要】標高357mを頂点に、北側へ延びる尾根線上に階段状に曲輪群が伸びている。基本的には小曲輪群を一段ずつ階段状に展開させており、北西側と北東側の尾根上にそれぞれ展開しているが、その小曲輪の面数はそれぞれ25ずつほどを数える。最高所背後の尾根の鞍部を含め、明瞭に堀切などの遺構が構築された痕跡は確認できない。また、この曲輪群の各所では、陶器片などの中世遺物の散布を顕著に確認することができる。古いところは同安窯系青磁など、12世紀後半までさかのぼるものもあり、まさに平家の時代にあたり、あながち平家の城であった伝承も全く根も葉もないことではない可能性も考えられ

るが、その時期については城郭以外の別の機能を想定する必要もあるう。

また14～15世紀頃の陶器片なども確認できることから、中世後半期の使用も確認でき、城郭としての性格も十分考えられよう。

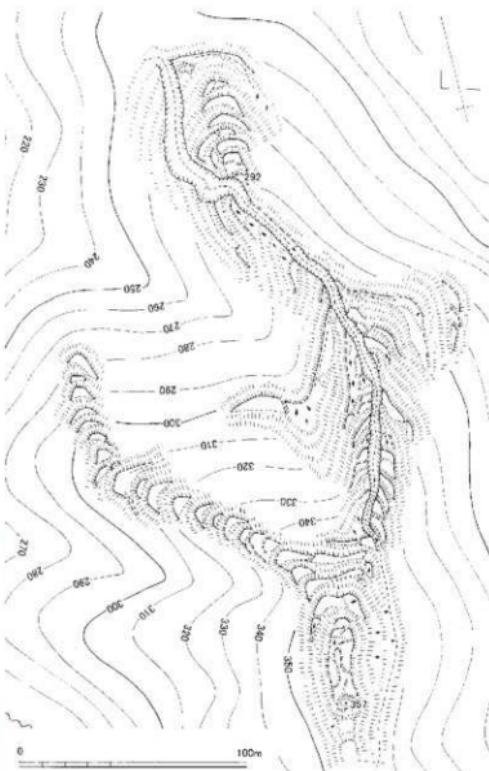
なお、文献119には、この平家城よりさらに尾根を上った標高560m地点にも益永城という城郭があり、平家城の本城であるとするもその個所は自然地形が見られるのみであり、明確な城館遺構を確認することはできない。

【史料】なし

【参考文献】1～4, 6～9, 117～119



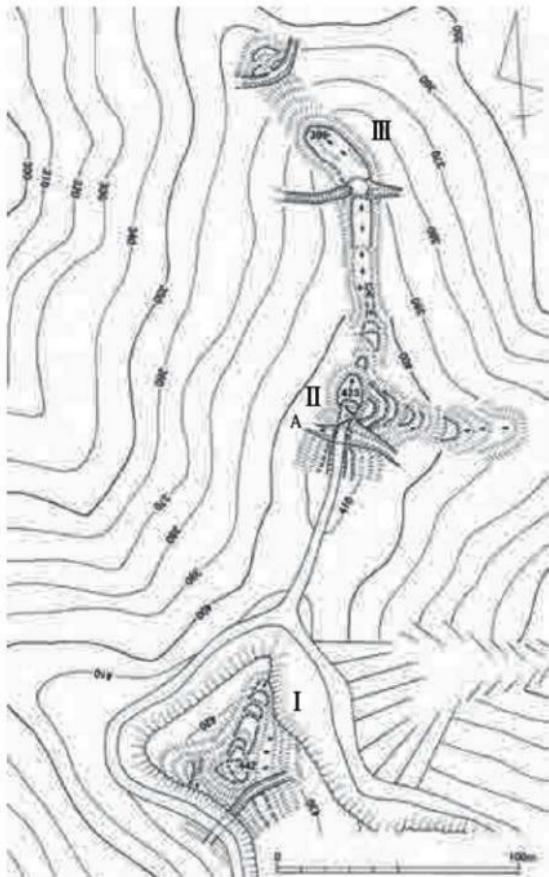
第70図 平家城曲輪



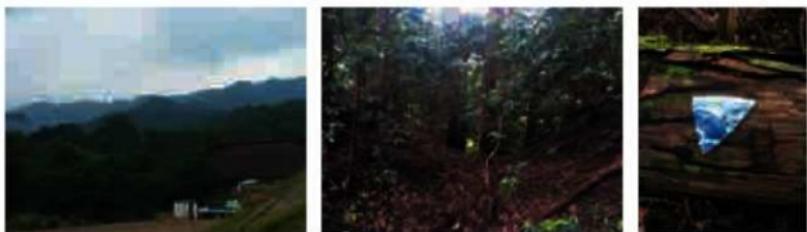
第71図 平家城縄張り図(事務局作成)

【沿革】田主丸の古刹・石垣観音寺の南方、平原公園から耳納山系稜線へ上の林道沿い、標高 442m 地点に位置する。『旧記寛文古城址書上』(文献 119 所収)には「耳納山 山ノ中ノ小城」とし、本丸が東西二十五間、南北十間、二ノ丸が東西三十三間、南北十三間で、星野重安の城であるとする。また、『軍談』では「同村(石垣村) 星野城跡」とし、上記とほぼ同様の記載がなされるため、同一の城を指していることがわかる。また、文献 117・118 では石垣城と称し、また三つの峰に曲輪があることから、通称「三ツタカ(ミツタカ)城」とも呼ぶとされる。さらに、文献 117 においては石垣城の他に別の峰に「山中城」「三原城」「俵城」の三城があるとしているが、後にこの一帯の城跡をまとめた文献 119 では、石垣城と山中城は同一とされ、三原城、俵城は掲載されていない。そのため、三原城と俵城については城の根拠なども記載されておらず、本書では割愛している。

【概要】同一の尾根線上の、標高 442m、423m、396m の頂部を中心にして 3 つの曲輪群が展開している。標高 442m 地点の I の曲輪群は、文献 119 では「一の城」と呼ぶ箇所で、一辺 10m にも満たない小曲輪が階段状に北西方向に向かって約 40m 展開する。曲輪は全部で 6~7 段ほどになる。その曲輪の南東側と西側に堀切を各 1 本設けている。特に南東側の堀切は斜面にも堀が長く伸びている。I の曲輪群から現在の林道をまたぎ、北方向へ尾根を約 100m 下ったところに II の曲輪群(文献 119 では二の城)がある。途中、自



第72図 山ノ中城縄張り図(事務局作成)



第73図 山ノ中城遠景（左）・堀切（中）・遺物散布状況（右）

然地形を挟みながら、曲輪群が約100mにわたって展開している。また東側の尾根にも小曲輪が伸びている。これらの曲輪群の南北両端には、それぞれ堀切が構築されているが、南側の堀切Aは深さ8m近くにも及ぶものである。IIの曲輪群から堀切を挟んだ北側にはIIIの曲輪（文献119では三の城）がある。南北約25m、東西約15mで、その北20m先には深さ2mの堀切1本を構築し、尾根下からの攻撃に備える。

また、IIの最北端の曲輪と、IIIの曲輪周辺には、15～16世紀代の明代の染付片が多く散布しており、当城にてそれらが使用されていたことが想定される。

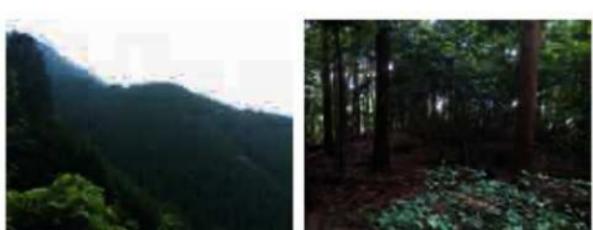
以上のように、山中城は連続する3つの曲輪群で構成され、それらの曲輪群どうしの間は、堀切で区画・防衛されていたことが分かる。

なお、文献117・118には、当城にはさらに詰城（拏先峠）や新田城の谷を挟んで西側の麓（標高約200m）に前城があるとしているが、現地には明確な城館遺構は残されておらず、現状では存在しなかったというのが妥当であろう。

【史料】あり 【参考文献】I～3.6～8,117～119

筑後 89	にったじょう 新田城	郡名 竹野郡 種別 山城	別称 なし 所在 久留米市田主丸町石垣	図幅名 草野（東）
-------	---------------	-----------------	------------------------	-----------

【沿革】山ノ中城から尾根上を北へ約500m下った尾根の先端頂部に位置する。『軍談』には「石垣村新田城跡」として「耳納山中ニアリ、本丸北面、東西二十五間、南北十五間、二ノ丸東西三十五間、



第74図 新田城遠景（左）・曲輪I（右）

南北十間、麓ニ廣野アリ、一ノ構ト云」とし、新田四郎の居城と伝え、新田善良の祖先の城ではないかとしている。文献119では『城館第宅』には、新田忠常の居城、あるいは新田義信の築城となるとする。また著者の古賀基司は星野氏が築城し、後に新田氏が豊前から来て居城としたため新田城の名が起きたものと思われるが、詳細な根拠は不明である。

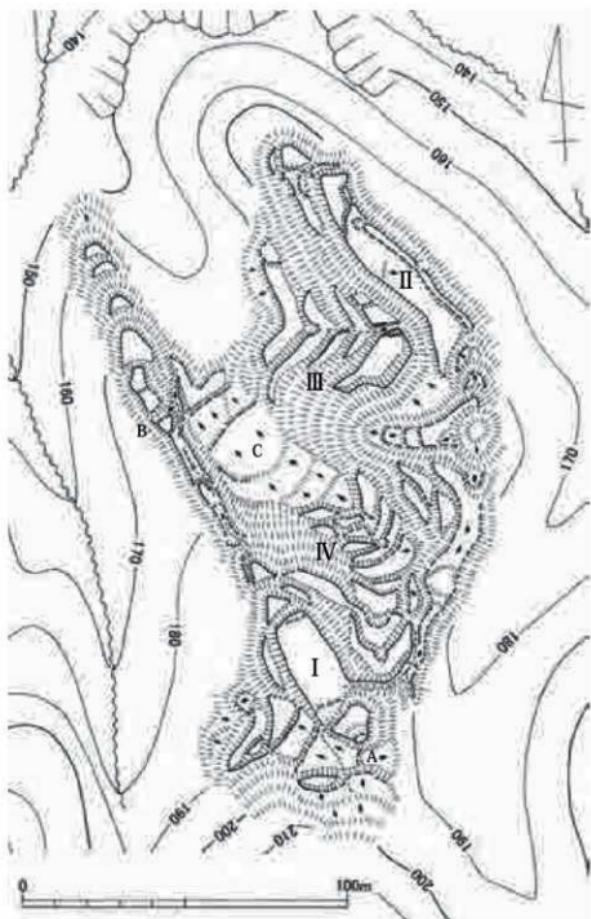
【概要】城は大きく、Iの曲輪を中心としたエリア（地誌に言う「本丸」か）とIIの曲輪を中心としたエリア（地誌に言う「二ノ丸」か）、それらに挟まれた谷部分の曲輪群III・IVのエリアに分かれる。城内最高所にある曲輪Iのエリアは、南北約35m×東西約20mの曲輪Iを中心として小規模な曲輪が無造作に展開する。Iは平坦面が非常に明瞭で、風炉など中世遺物の散布が顕著にみられる。Iの北側の尾根上には途中自然地形も含め、約150mにわたって小曲輪群が階段状に展開し、その途中には堀切遺構Bも確認できる。一方、Iの南側にも堀切遺構A（深さ約3m）が確認できるが、Iから北東側へ延びる尾根上にも無造作に平坦面が展開し、鞍部と頂部を経てIIの曲輪へ至る。IIは全長70mにもわたる長い曲輪面で、東側には低土壘状の高まりもある。IIの北側にも小曲輪群が階段状に展開する。そしてIIの南側、谷に面した斜面にはIIIの曲輪群があり、地形に即したいびつな形状の平坦面が5面ほど確認でき、中には石を積んだ痕跡もあるが、城があつた当時のものかは断定できない。また、IとII・IIIとの間に挟まれた尾根の鞍部の北西側にも小曲輪群IVが展開しており、その北西側には、やや広い谷の平坦地形Cが確認できるが、そこから北へ下るにしたがって、尾根が両側から迫ってきており、あたかも城戸口のような様相を呈している。

以上のように、新田城は二つの尾根上とその間に挟まれた谷部に曲輪群が展開する縄張り構造であり、周辺の中世城館とはやや縄張りの展開状況が異なる印象を受け、遺物の分布をみてもわかるように新田氏の伝承はともかく中世城館の遺構（山ノ中城に関連する城郭など）として考えておくのが妥当であろう。

【史料】なし

【参考文献】1～9,117～

119



第75図 新田城縄張り図（事務局作成）

【沿革】筑後川支流、巨瀬川と美津留川に挟まれた標高約20mの下菅集落に位置する。『軍談』には「菅村館跡」として、元応年間に菅氏が館を構え、代々菅氏の居館であったとする。また同書には、今の庄屋宅がその館跡であるとし、馬場、蔵増などの地名が残るとある。『旧記寛文城館書上』(文献119所収)には「今其囲堀の跡残れり、長サ百五十間、予嘗てその跡を間に今の庄屋が宅地即其館跡也其の宅地内竹林の内を馬場と云ふ、西北に門の跡あり、門出と云ふ。西に倉庫の跡あり蔵増と号す」とあり、文献119にはこの記述を受けて元庄屋権藤氏の居宅を中心にして菅集落全域を城地と想定している。

【概要】地誌に残された馬場、門出、蔵増などの地名は字としては残されておらず、その詳細な位置は知れない。ただ、元庄屋権藤氏の居宅は八幡宮の南東側に隣接した場所であり、ここが居館の跡と推測される。現在も八幡宮境内に中世と思われる石塔が残されており、居館と何らかの関係があるものと思われる。そして文献119の記載に従い城の四至を見てみると、北側は東西に流れる美津留川、西は南から北へ流れる水路、南は大楠(隼鷹神社・クスの大木は昭和26年(1951)頃に伐採されたという(場所不明))、東は竹野・生葉の郡境とされ、ほぼ下菅の集落全体、一辺約200mの方形の範囲が想定されるが、実際の地形に即した範囲が推定されよう。ただ、この範囲にしても考古学的に証明されたものではないため、詳細は不明と言わざるを得ない。

【史料】あり

【参考文献】1~3.6~9,119



第76図 菅館周辺図(うきは市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成。網掛部は水路を示す)



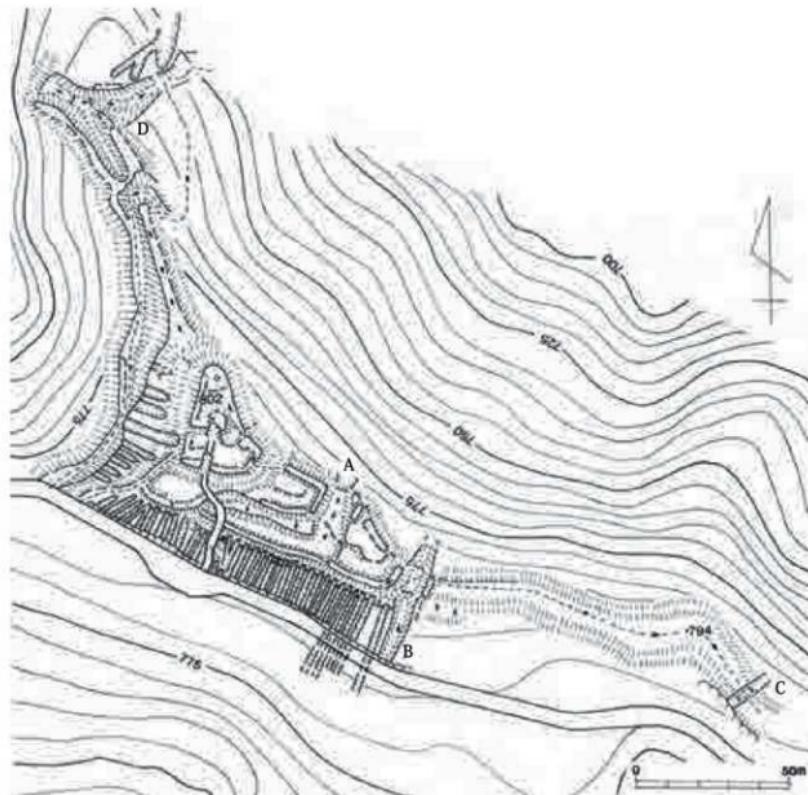
第77図 昭和23年当時の菅館周辺航空写真
(国土地理院撮影)

⑥生葉郡

筑後 94	たかとりやまじょう	郡名 生葉郡 / 竹野郡 別称 鷹取城	図幅名 草野(東)	種別 山城
		所在 八女市星野村星野・久留米市田主丸町森部・うきは市浮羽町妹川		

【沿革】耳納山系最高所、鷹取山山頂に位置する。『軍談』では「同村(星野村)鷹取城跡」として「東西四十二間、南北十間、重忠ノ曾孫、重種ノ居城也」とし、星野鎮胤の居城であることを記す。文献119には本丸、二の丸、三の丸があり、三の丸の東下に馬責場、射場と称する練武場の地名が残っていると記す。

【概要】標高802mの山頂部に主郭を置き、そこから南あるいは東側へ向かって階段状に曲輪を展開させている。ほぼすべての曲輪には土塁が巡り、途中A・Bには堀切が構築される。これらの曲輪の南側斜面には竪堀32本の敵空堀群、さらには西側斜面にも竪堀9本からなる敵空堀群が



第78図 鷹取山城縛張り図(岡寺 良作成)

構築されている。南側斜面の敵状空堀群が土塁直下に横堀あるいは犬走りを通し、整然と竪堀を並べるのに対し、西側斜面は竪堀の大きさもまちまちでやや雑然とした印象を受けるが、西側斜面の方が南側斜面よりも傾斜がきついという地形の影響によるものとみられる。主郭の北側には尾根が土塁状に延び、その先のDには大型の竪堀と堀切を構築し、城域を画す。また城の東側、Cにも堀切1本を設け、東側からの備えとしている。以上のように、当城は小型ながらも、土塁に囲まれた曲輪群や、膨大な数の敵状空堀群など、北部九州において高度に発達した繩張り技術を駆使しており、妙見城を本城とする国人領主・星野氏の重要な城郭の一つで、本城・妙見城の詰め城と想定できると共に、耳納山系南側からの攻撃に備えた峠の城という位置付けも可能であろう。

【史料】あり 【参考文献】1～7,8,9,13,40,119,128



第79図 鷹取山城からの眺め（左・筑後平野方面）・曲輪群（中・奥は八女方面）・敵状空堀群（右）

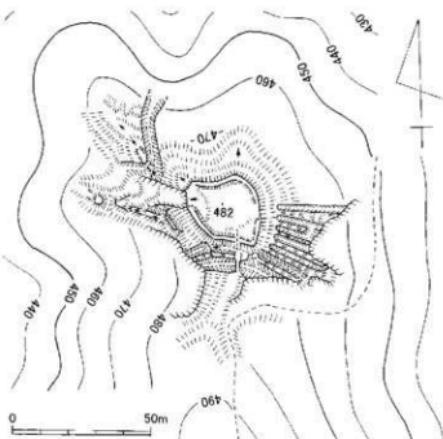
筑後 97	にし 西の城	郡名 生葉郡	別称 妙見西城	図幅名 草野(東)
		種別 山城	所在 うきは市吉井町富永	

【沿革】星野氏の本城、妙見城の谷を挟んで西側の尾根の頂部に位置する。『寛延記』には「一古城跡 壱ヶ廻 西城と申伝候。耳納筋二有之候。城主之時代不相知」とある。『軍談』には「同村（千代久村）西城跡」として星野伯耆守が築城した城だとする。

【概要】標高482mの尾根線上部に一辯約25mの曲輪を置く。曲輪の周囲には低土塁が巡り、南側には2本の堀切を施して尾根上からの備えとし、東側斜面には堀切と並行して5本の竪堀群からなる敵状空堀群を構築する。西側は自然崩落などもあり不明瞭な部分もあるが、横堀とその斜面下に堀切2本を構築して尾根下からの備えとしている。妙見城本体の西側尾根上を防備する位置にあり、妙見城を防衛するための出城と認識できよう。

【史料】なし

【参考文献】1～3,6～8,9,117～119



第80図 西の城繩張り図（事務局作成）

筑後 98 妙見城

みょうけんじょう

郡名 生葉郡

種別 山城

別称 明顯城・妙見山城

所在 うきは市吉井町富永

図幅名 草野(東)

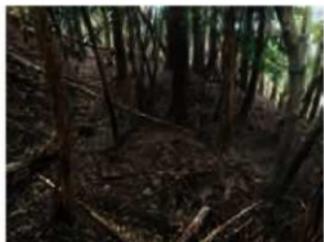
【沿革】屋永の吉井百年公園から農道を南へ上った先にある標高 488 m の頂部を頂点にそこから北側にかけて城館遺構が残る。『軍談』には「屋形村妙見城跡」として「山上ニアリ、星野伯耆守築之」とし、星野親忠も居城したとある。文献 117・118 では「明顯城」として上ノ城・中ノ城・下ノ城・馬刺場・妙見居館・下明顯を含んだ総称として報告している。

【概要】文献 118 に掲載された図には、城内各所の呼び名とその位置が鳥瞰図的に描かれている(第 81 図)。それらをすべて現地比定することは難しいが、いくつか可能なものもあるため、それらを踏まえつつ、以下、城の縄張り構造について説明する。

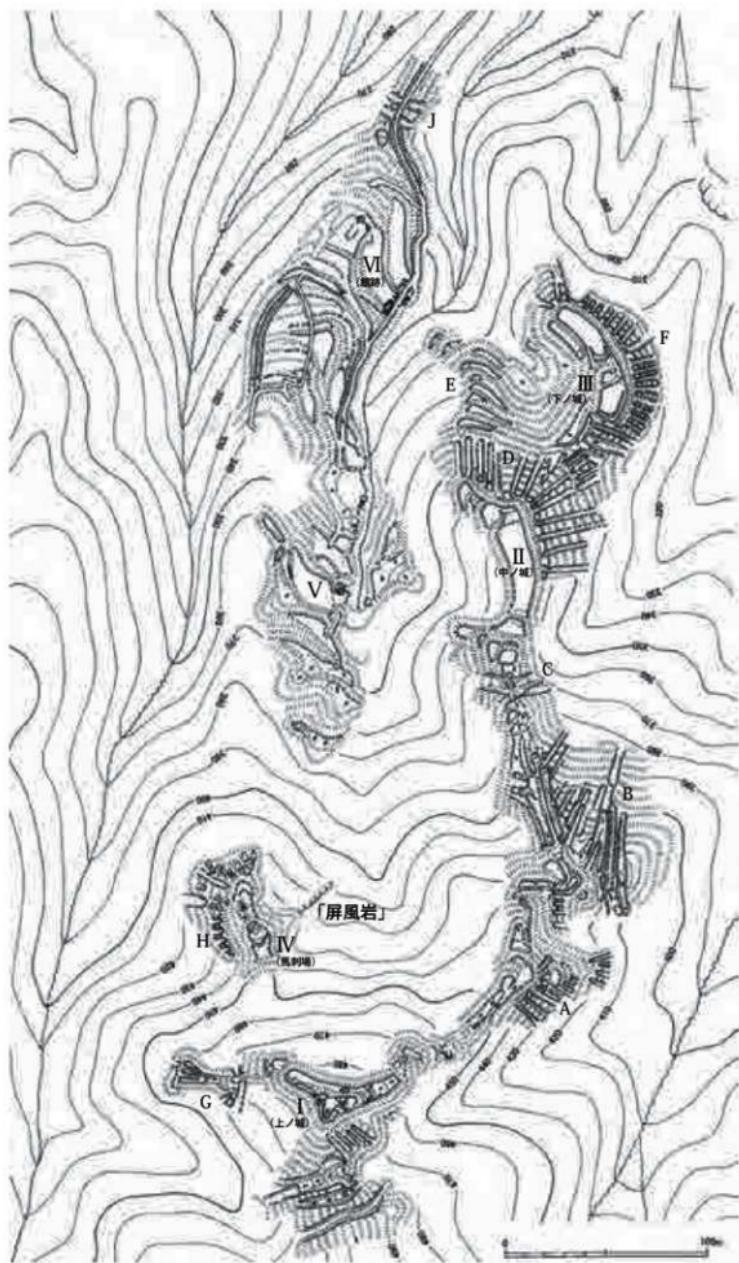
城の主郭は、南最奥部にして最高所の標高 488 m、耳納山系から北へ派生した尾根の頂部に当たり(図中 I)、ここが第 81 図の「上ノ城」に当たる。文献 119 では、ここから筑後の平野を一望することができたというが、現在は杉檜の植林により鬱蒼とした山林となっている。主郭 I は決して大きい曲輪とは言えないが、南側背後には土塁を巡らし、さらにその南側には 4 本の豊堀群と 3 本の堀切群により、山上からの攻撃に備えている。I から北東側に尾根が伸びており、その先には若干の曲輪面と東から北東側の斜面には敵状空堀群 A を確認することができる。そしてさらに北へ下ると曲輪はあまり顕著ではないが、東側斜面 B には堀切とそれに並行する形で敵状空堀群が掘られている。いわゆる「上ノ城(I)」と「中ノ城(II)」とをつないでいる尾根線を厳重に防備して通行を遮断されないようにした防御遺構と言えよう。さらに北側の C には大堀切を設け、そこから北側に階段状に曲輪群が展開する。II は南北約 50 m、東西約 15 m の城内最大規模の曲輪であり、第 81 図の「中ノ城」に当たるものと思われる。II の北側から東側にかけては横堀と接続した豊堀群約 15 本からなる敵状空堀群 D が構築されており、斜面下からの守りを固める一方で、豊堀のさらに下に当た



第 81 図 文献 118 に描かれた妙見(明顯)城配置図



第 82 図 妙見城敵状空堀群(上)・堀切(下)



第83図 妙見城縄張り図（事務局作成）

る E には階段状に小曲輪群を造成して、谷下からの攻撃に備えている。II の北東側の尾根を下り、土橋状の掘り残しを持つ豊堀を過ぎると土壘に囲まれた曲輪群 III となる。ここが「下ノ城」に当たるものと考えられ、II の曲輪群に次ぐ規模の曲輪が並立するが、その東側斜面にも、横堀と接続する形の 20 本足らずの豊堀群で構成される畠状空堀群 F が構築されている。III のさらに先にも尾根は伸びているが、城館遺構は確認できない。

一方、主郭 I の西側は、G にいくつかの豊堀群が確認できるが、その先に遺構はない。I から北西に延びる尾根の先は、「城郭」によると屏風岩と呼ばれる巨岩壁があり、その西側の頂部に若干の曲輪面 IV が形成されている。ここが「馬刺場」で、西側斜面には短いながらも 5 本の畠状空堀群 H が掘られており、曲輪面だけを見れば、ここが城館遺構であるか否か迷う所であるが、空堀群の存在によりここも城郭化されていることがわかる。ここから尾根を北へ下った東側、谷に面した傾斜地に曲輪群を設けている。曲輪群は大きく V・VI と二分され、これらが第 81 図の「館跡」であり、この近辺には中世遺物も散布している。特に VI の曲輪には、城道からの虎口を石垣で固め、谷部に位置しながらも防衛に配慮した構造といえよう。VI の北側先端部の J には堀切 2 本を設け、城への導入における守りの要としている。「館」という機能・性格は今後の課題とはいえ、妙見城の城館遺構であることは疑いない。

なお、第 81 図にある「下妙見」は、文献 118 にも「何等の設備の跡も見出し難い」とあり、また最高所とする「明顯」についても、ほぼ山系稜線上に近い標高 650 m にあるとするが、現地を踏査したところ、特に顯著な城館遺構を確認することはできず、これも存在は否定せざるを得ない。

いずれにせよ、妙見城は、南北約 600 m、東西約 250 m の規模を有する筑後国内最大の山城であり、なおかつ城内併せて 80 本近い豊堀による畠状空堀群が構築される高度に発達した縄張りを有した城である。地誌などでは星野氏に関連する城であることは確実であることから、まさに星野氏の本城と呼ぶにふさわしい山城と言えるのではなかろうか。

【史料】あり 【参考文献】1 ~ 4,6,7,8,9,117 ~ 119,134

筑後 99 谷山城	たにやまじょう	郡名 生葉郡 種別 山城	別称 山ノ上城・小城・古城 所在 うきは市吉井町福音	図幅名 草野(東)
-----------	---------	-----------------	-------------------------------	-----------

【沿革】妙見城の東側、標高 331m の尾根線の頂部に築かれている。『軍談』には「同村（延寿寺村）山上城跡」とあり、福丸城と共に星野高實が築城したとある。『旧記寛文古城跡書上』（文献 119 所収）には「一小城、古城 上ノ山也」とあり、文献 119 では地名から「谷山城」と仮称する。

【概要】約 30m × 約 10m の主郭の南側に小曲輪を設け、さらにその南側に深さ 4 m の堀切 2 本を構築し、尾根上からの攻撃に備えている。小曲輪の平坦面上には土師器片の散布も見られる。当城は、



第 84 図 妙見城曲輪群 VI の石垣

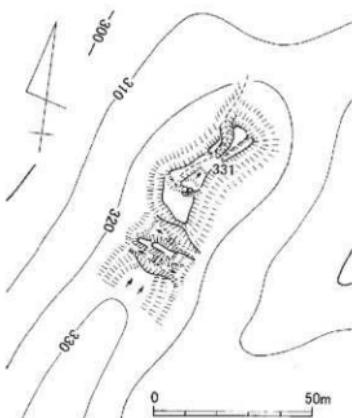
全長約50mの小規模な城域で、砦という印象を受ける。妙見城の東側を守る出城、あるいは福丸城と満願寺城との繋ぎの城としての役割が考えられよう。

【史料】なし

【参考文献】3.6～9.117～119



第85図 谷山城堀切



第86図 谷山城縄張り図（事務局作成）

筑後 100 平家城

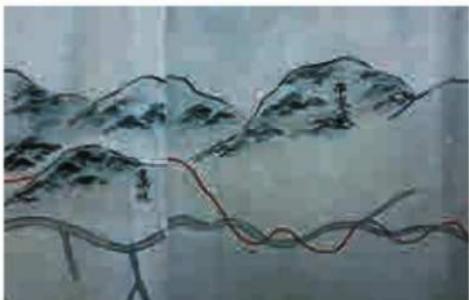
郡名 生葉郡
種別 山城

別称 妹川城・妹川平家城
所在 うきは市浮羽町妹川

図幅名 草野（東）

【沿革】筑後川支流の巨瀬川上流、耳納山系の南に聳える標高586mの頂部に位置する。『軍談』には「同村（妹川村）平家城跡」として「東西五十間、南北十二間、堀二重廻レリ、城主詳ナラス」とあり、『寛延記』にもほぼ同様の記載がなされる。『生葉郡内絵図』（個人蔵）には当城と共に、出城ともいわれる重虎城（絵図には重佛城）が記されている。

【概要】標高586mの頂部は、東西約100m、南北約50mの自然地形で、一見城館遺構は確認できないが、山頂から四方に派生する尾根上、標高560mの位置にはI～IVのテラス状の平坦面が確認できる。一見、城館遺構ではなく、後世の山仕事の造作とも考えられる。実際、山頂の北側には近現代の炭窯の跡があり、周囲には山道も確認できる。しかし、文献119には、「山頂の周囲には幅約2mの武者走りが東から北西に半円形に巡り、城跡は東西100m、南北25mで東に向かって緩斜面をなし、掘



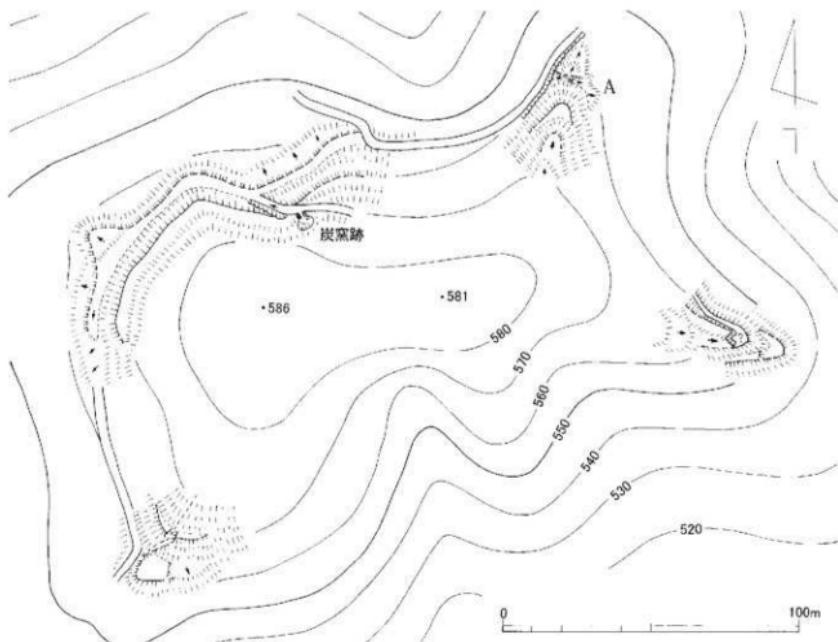
第87図 『生葉郡内絵図』（個人蔵）に記された「平家城」



第88図 平家城遠景

手口に当たる野首には野首ノ城を3ヶ所設け、そこに弓藏路（ゆみかくしみち）を設けて…」とあり、すべて現地に落とし込むことは不可能ではあるものの、武者走りや山頂の様子など、現状と同様の遺構状況の表記がなされており、昭和28年段階にはすでに現在の景観となっていたことが分かる。また、Aには堀切とも思える切通状の遺構も見られる。確実に城館遺構とは言えないが、今後の課題の意味合いも含め、現状の状態を報告しておくこととする。

【史料】なし 【参考文献】1～4.6～9.32,117～119



第89図 平家城跡現況図（事務局作成）

筑後 102	ふくまるじょう 福丸城	郡名 生葉郡	別称 福益城・福増城・延寿寺城	図幅名 千足(西)
		種別 山城	所在 うきは市吉井町福益	

【沿革】福益の西延寿寺の集落の背後に、耳納山系から伸びてくる尾根線上の頂部、標高190m地点に位置する。『軍談』には「延寿寺村福丸城」として「東西十二間、南北三十間」とあり、山上城（谷川城）と共に星野高實の築城によるものとする。『寛延記』には「一福增之城 山ノ上ニアリ 星野殿城跡と申候。于今城ノ跡御座候」と記す。

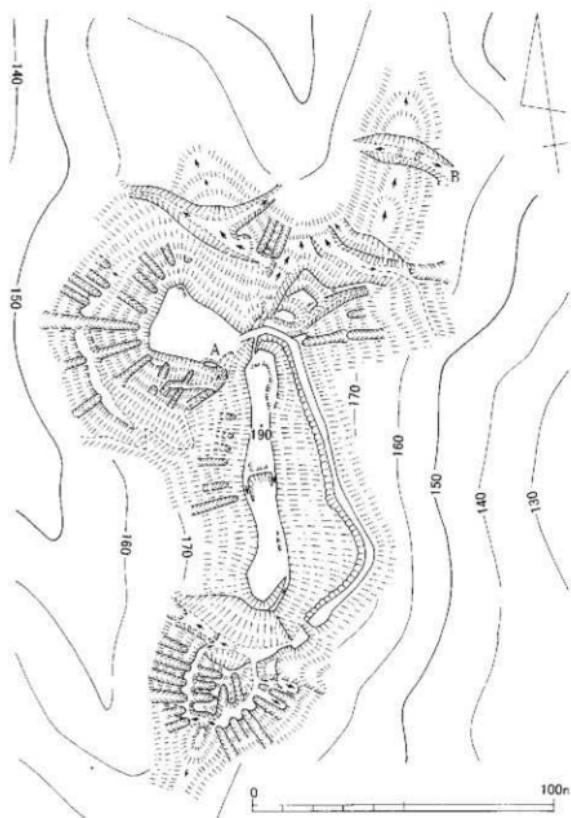
【概要】標高190mの頂部に南北長約80m、東西幅約15mの2段からなる曲輪を置く。曲輪の南側の尾根続きの部分には、深さ15m近くもある大堀切で尾根を分断し、さらにその南側に残された

自然丘陵頂部は、二段にわたって堅堀群を密集させ、完全に丘陵頂部を破壊し、使用を不可能として攻城の足場とさせないようにしていることが分かる。曲輪の西側斜面には不明瞭ながら6本ほどの堅堀群を設け、さらに北西側には南北約20m、東西約30mの城内最大の曲輪を構築する。その曲輪の南側には土塁を伴い、虎口らしき進入路Aを構築するも、周囲の斜面には約15本の堅堀からなる敵空堀群を構築する。一方、頂部の北東側の尾根上には堀切や階段状に構築した小曲輪群が複雑に配置され、構築される堀切はいずれも深さ5m以上もある規模の大きなものであると同時に堅堀群などとも組み合わせ、嚴重な防備の様子が窺われる。堀切Bのさらに北東側については、文献119では尾根上に「矢城」と呼ぶ曲輪が展開しているとしているが（第91図）、現地は自然の平坦地形の尾根であり、明確な城館遺構を確認することはできない。以上のように福益城は堀切5本に総計40本

前後もの堅堀群を構築する嚴重な防備がなされた城郭であることが分かり、星野氏の重要な城郭の一つであると考えられる。

【史料】あり

【参考文献】1～4.6.7.8.9.117～119



第90図 福丸城縄張り図（事務局作成）



第91図 文献118掲載の福丸城側面図
(実際に存在するのは真ん中の出丸から左部分のみ)



第92図 福丸城の曲輪

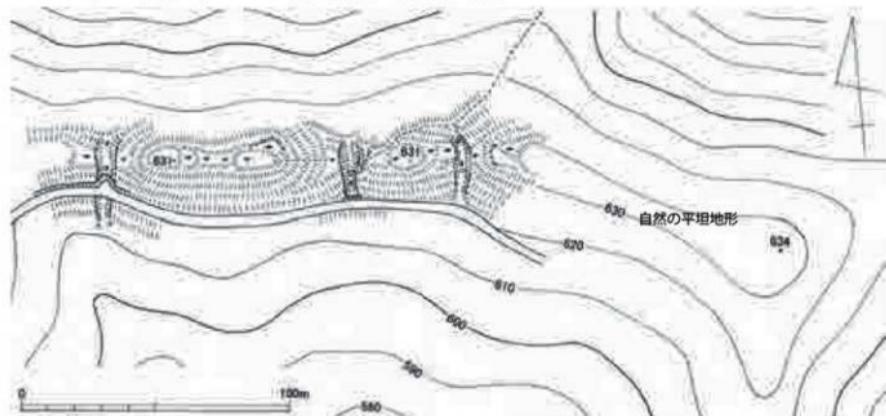
【沿革】耳納山系の東端、牛鳴峠から山系稜線へ上がった標高631mの稜線上に位置する。『旧記寛文古城跡書上』(文献119所収)には「古城まんぐわんじ城」として、「東西五十間、南北八間」とし、城主不詳とする。また『寛延記』にも「満願城」としてほぼ上記の通りの規模と城主不詳の記載に加え、「古城跡、立テ堀數ヶ所御座候」と記す。また、『軍談』では「妹川(村)万貫城跡」として上記とほぼ同様の記載がなされる。

【概要】牛鳴峠から耳納山系の主稜線へ取りつく尾根の結節部付近、標高630m前後の尾根上に位置する。深さ2~3mの堀切3本が確認できるのみで、堀切と堀切の間は東側で約30m、西側で約80mの間隔があるが、共に人工的な造成がほとんど加えられない自然地形に近い状況となつたまで、積極的に曲輪面を造作したような痕跡は確認できない。さらに東側は耳納山系の東端突端部(標高634m)の西側にあたり、従来そこに城が位置するものとされていたが、そこは自然の平坦地形が広がるのみで、人工的に造成された平坦面や堀などの防御構造は全く確認できないため、城域と断定できない。

おそらく牛鳴峠から耳納山系稜線上の弦懸峠に続く稜線上にあたる箇所で、ここから弦懸峠付近は妙見城の背後の



第93図 満願寺城遠景(上・妹川から)・堀切(下)



第94図 満願寺城縄張り図(事務局作成)

稜線上にあたる。敵方に牛鳴峠から妙見城の背後をとられないようにするため、そのルート上の防御しやすいこの場所に、敵の侵攻を防ぐために築かれた城館遺構と考えられる。曲輪面が積極的に構築されないところから考えても、稜線上の通行を妨げることを一番の目的として築かれたものと考えられる。

なお、文献 119 などには、当城の北面、牛鳴峠に至る尾根線の途中に、「前城」があるとされるが、現地を踏査したが、明確な城館遺構ではなく、現状では存在を認めることは難しい。また、文献 118 に牛鳴峠付近に牛鳴砦との地図表記もあり、「前城」と同一視したものと思われ、こちらも存在は認めがたい。

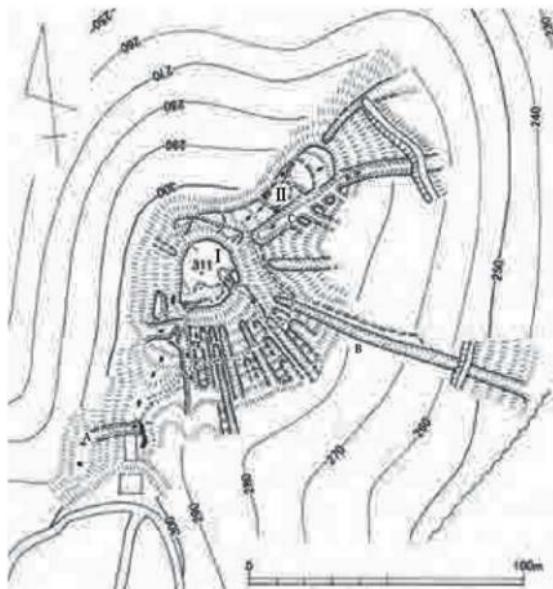
【史料】なし 【参考文献】1～3.5～9.32,117～119

筑後 105	やすやまじょう 安山城	郡名 生葉郡	別称 大聖寺山城	図幅名 千足（西）
		種別 山城	所在 うきは市浮羽町流川	

【沿革】流川集落の南背後、標高 311m の半独立丘陵頂部に位置する。文献 119 には「安山城（一名大聖寺山城）海拔三二〇米」とある。現状では、この記載をもって、安山城の城名や位置を把握しているが、『寛延記』の大生寺（大聖寺）の伝記には「寺山両峯御座候。高キヲ主山、低ヲ安山ト申候（中略）右安山ハ立ツ岩共申候」として問註所氏と秋月種座が合戦をした際に構えた城郭であると記していて、安山と立

ツ岩（立石）が同一であるかのような書き方をしている。文献 119 では安山城を西城、立石城を東城としてはいるが、実際立石城とされる場所には明確な城館遺構なく、『福岡県の城』でも当城を立石城としており（ただし一覧表には別に安山城も掲載されている）、この安山城とされる場所が立石城と呼ばれていた可能性も十分考えられるが、今後の課題としておきたい。

【概要】井上城の西、やや高くそびえる標高 311 m の頂部に南北約 25m、東西約 20m の主郭 I を置く。I の南辺部には低土壘が確認でき、南東隅には虎口とも見える進入口が見られるが、



第 95 図 安山城縄張り図（事務局作成）

後世の山道造成による可能性も考えられる。Iの南西側には、堀切Aを設け、尾根上側からの備えとする一方で、Iの南側斜面一帯には、堀切と並行する約10本の豊堀群で構成される畠状空堀群が構築されている。特にBの豊堀は100m前後もの長大なもので、斜面の横移動を遮断する機能が想定される。一方、Iの北東側の尾根上にも、4段くらいの小曲輪からなる曲輪群IIがあり、曲輪群の南側に大きな横堀Cと横堀から斜面側には4本の豊堀が派生しており、いわゆる畠状空堀群となっている。以上のように、安山城は主郭の南側から東側にかけての斜面上に畠状空堀群をはじめとする厳重な防備で固める繩張りを見て取ることができ、間註所氏と星野氏が争った抗争の激しさを物語る城といえよう。

【史料】なし 【参考文献】1.6～8.9.32.119

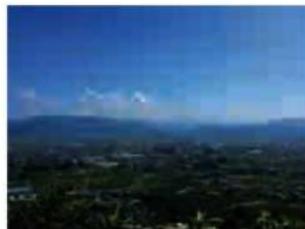
いのうえじょう 筑後 107 井上城	郡名 生葉郡	別称 なし	図幅名 千足（西）
種別 山城	所在 うきは市浮羽町流川		

【沿革】安山城から谷を挟んで東側、標高約170mの頂部に位置する。『軍談』には「小坂村井上城跡」として本丸、二ノ丸、三ノ丸の存在を記し、大永年間の間註所親照が築城し、その子加賀守重直の代に秋月氏が来襲し、重直の弟・町の源助（あるいは孫助）は長岩城へ移ったことが記されている。文献119などでは「井ノ上城」とするが、本書では「井上城」で統一する。

【概要】井上城は、本城部分と「西ノ城」と呼ばれる二箇所に分かれており（第98図）、一個の城郭のようであるが、実際にはそれぞれ別個の城郭の体をなしているため、本書では別の城として扱うこととする。井上城がある丘陵一帯は、現在果樹園となっており、城がある丘陵頂部も果樹栽培がなされており、若干の改変が見込まれるもの、主郭は一辺約20mの規模を有し、明瞭に平坦に造成される。主郭から北東側の尾根上に2～3段の曲輪と思われる平坦面が階段状に展開するが、斜面下方は果樹園造成が大々的になされており、城郭遺構かどうかの判断は非常に難しい。一方、主郭の南西側は現在、農道が切通し状に開削されているが、元来堀切があった可能性が十分考えられる。



第96図 安山城および周辺城館遠景



第97図 井上城からの眺め（上）・井上城及び西ノ城遠景（下）

なお、主郭から北側斜面にかけて土師器の散布が確認できたが、中には古墳時代の須恵器なども散見され、中世に属するものがあるかどうかは不明と言わざるを得ない。

【史料】あり 【参考文献】1～9,18,32,119

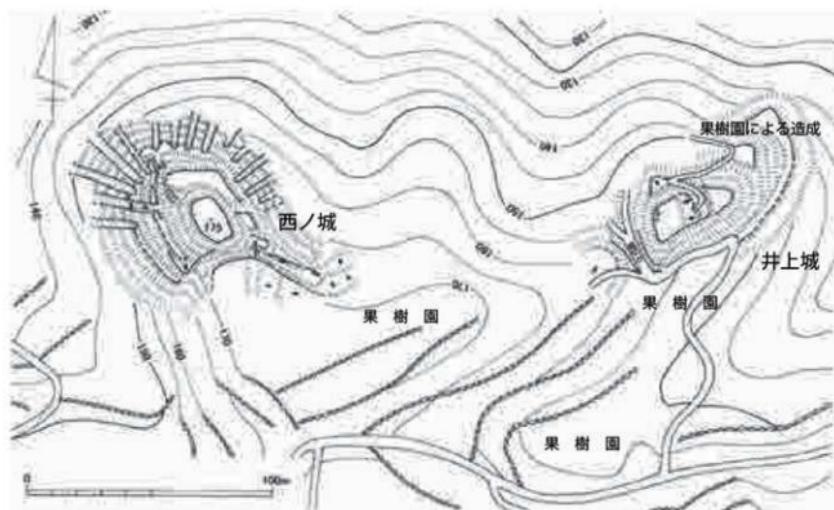
筑後 108	にし しろ 西ノ城	郡名 生葉郡	別称 井ノ上西城	図幅名 千足(西)
		種別 山城	所在 うきは市浮羽町流川	

【沿革】井上城から谷を挟んだ西側約200m地点の丘陵突端頂部に位置する。文献119には井上城の西方に「西ノ城」という出城を構えるとあり、『寛延記』の井上城の二の丸ないし三の丸ではないかとしている。

【概要】井上城の西側、標高175mの丘陵突端頂部に位置する。この一帯も井上城と同様、果樹園栽培が行われていた痕跡があるが、明瞭に城館遺構は残存している。主郭は約10m×約20mの規模で、主郭の南東側には深さ約4mの堀切1本を設ける。堀切内には果樹園造成等に伴う後世の石垣などが構築されているが、部分的にとどまり、堀切は城館遺構であるとみてよい。また、主郭の北側にも曲輪を1～2面設け、その北側斜面には、およそ14本の豊堀で構成される畝状空堀群が構築されている。特に北西側斜面には豊堀頂部は横堀とも接続している。

以上のように、井上城と西ノ城はそれぞれで完結した縄張りを持つ単独の城郭遺構ではあり、両城との間についても自然地形であったとみられるが、両者の間隔は約200mと近接しており、両者は密接な関係にあったものと考えられる。

【史料】なし 【参考文献】6,8,9,119



第98図 井上城・西ノ城縄張り図（事務局作成）

【沿革】巨瀬川右岸、標高約35mの清瀬の大村集落に位置する。『寛延記』生葉郡大村の項には「一館屋敷 一ヶ処井上と申屋敷ニアリ、小坂ノ城主間住(註)所館ノ由申伝候。屋敷続キ城内と申所有リ、此廻り堀跡御座候。今田方作所ニ罷成居申候」とある。また『浮羽の古城址』(文献119)には「大村居館跡」として、寛文の古城址書上を引き、大村集落の南東よりの一角に「井ノ上」という地域があり、そこを館跡とする。さらに同書では、「東西約五十間、南北約三十間、三方面(東南西)に堀をめぐらした跡と思われる用水路が現存している」とする。

【概要】大村の集落には館跡と推定される字「井ノ上」の地名の他、馬場、下屋敷、国光屋敷、屋敷田など、居館に関連するような地名が多く残される。ただし、『寛延記』にみえる「城内」の地名は残されていない。また現地には堀跡の名残とも思われるような水路が多く残されている。昭和23年の航空写真などからも、およそ150m~200m四方の範囲が館跡の範囲と推測されるものの、周辺は条里地割が残されていて、その名残の可能性を考えられ、明確な根拠に欠けるため、詳細については今後の調査に委ねるほかはない。

【史料】なし

【参考文献】1,3,7~9,18,32,119



第99図 井上館周辺図(うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成)



第100図 昭和23年当時の井上館周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)

筑後 111	くま うえじょう 隈ノ上城	郡名 生葉郡 種別 平地城館	別称 西隈上城・日田氏館 所在 うきは市浮羽町朝田	図幅名 千足(西)
--------	------------------	-------------------	------------------------------	-----------

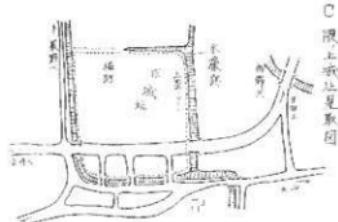
【沿革】浮羽町の市街地の東、標高約40mの隈上川左岸に位置する。『軍談』には「西隈上村城跡」として「東西十八間、南北十一間、周廻ノ土手高七尺、長南北十間、東方ニアリ、南七間、西方ニアリ、東西二十七間、北方ニアリ、南ハ土手ナシ、北方ニ堀アリ、東方三十間、西方又堀アリ、南北八間」とあり、その様子が『生竹巡覧』に「日田氏館跡図」として掲載されている。また文献118には「隈ノ上城址見取図」として昭和初期段階の城跡の様子を作図している。

『軍談』などの地誌では、日田三郎永隆が平家追討の軍功により建久元年（1190）に生葉郡隈上庄を給い、同7年に築城したことや、その後星野高實がこの城に出張して大友方の兵を防いだことなどが記される。

【概要】第102図を元に現在の地割に当てはめてみると、ほぼその状況を復元することができる。周囲を巡っていたという土塁は既になくなっているが、現在、道などになってその範囲を知ることができるし、昭和23年当時の航空写真を見てみると、館跡の北側に堀の痕跡が水路などの形で残されているのがわかる。南北約100m、東西約120mで南側を除く三方に堀と土塁が巡っていた姿を復元することができる。江戸時代以来、良好な資料が



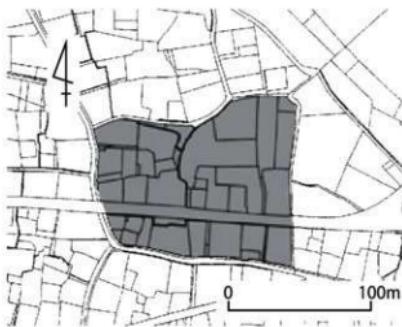
第101図 日田氏館跡図(『生竹巡覽』のうち・篠山神社蔵)



第102図 間ノ上城址見取図(文献118)



第103図 昭和23年当時の隈ノ上城周辺航空写真
(国土地理院撮影・北側の濠が明瞭に見える)



第104図 隈ノ上城地割図（うきは市教育委員会提供
図面を一部改変して事務局作成）

残されており、非常に明確に復元ができる重要な平地城館の事例と言えよう。

【史料】あり 【参考文献】1～9,18,32,118,119

筑後 114	ながせじょう 長瀬城	郡名 生葉郡	別称 原口城・西原口城	図幅名 吉井（東）
		種別 平地城館	所在 うきは市浮羽町高見	

【沿革】筑後川南岸、大石堰より少し上流の西長瀬にある標高約44mの城丸土神社の境内に位置する。『軍談』には「西原口村長瀬城跡」として「今庄屋宅ノ子丑ノ方ニアリ、天正中大友ノ臣、野村主殿居城也。又日田領主日田安芸守親永、日田ヲ逃出テ暫ク此城ニ居ル」とあり、『寛延記』もほぼ同様の記載がなされる。『浮羽の古城址』（文献119）には字城丸の城丸神丸土神社境内にあたるとする。また、『生駒雅楽守覚書』（文献120所収）には秋月氏の持ち城の一覧として「筑後国生葉郡 長瀬 日田近江預り」とあり、長瀬城が天正14年（1586）段階には秋月氏の持ち城と認識されていたことが想定される。

【概要】筑後川に面した城丸土神社は、一辺約20m弱の方形区画となっており、周囲よりも1mほど高くなっている、主郭のような城の中心的な場所であったと思われる。文献119にはその東側に二ノ丸、その下に三ノ丸を想定し、城の南側を大屋敷といい、小路、ハトバなどの地名が残るところが想定される。神社境内地周辺の正方形の地割などが、曲輪に当たる可能性も考えられるが、確実ではなく、神社があった場所以外の城館遺構については不明確である。

当城の川の対岸は筑前国で、真向かいに秋月方の城の一つ、鶴木城が所在する。『生駒雅楽守覚書』には鶴木城は日田近江が城主とされており、日田近江が鶴木城と長瀬城の両方を管轄していたことが想定される。このことから、長瀬城は大友方にあつた時には、筑前の秋月領との境目を防衛する橋頭堡として、さらに秋月方にあつた時には、筑後川を两岸でおさえ、河の往来をも監視することのできる重要な位置を占めていたことがわかる。

【史料】あり
【参考文献】
1,2,6～9,32,119



第106図 長瀬城・鶴木城周辺航空写真
(昭和38年・国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)



第105図 長瀬城主郭（城丸土神社）



第107図 長瀬城周辺地割図(網掛部が城跡。
うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成)

【沿革】筑後川南岸、筑後と豊後の境に聳える高井岳山頂に位置する。『軍談』には「山上豊筑ノ境ニアリ。大友家ヨリ輪番ノ城也、天正十四年秋月ノ兵攻テコレヲ抜ク」とある。『寛延記』など他の地誌についてもほぼ同様の記載がなされている。

【概要】現在、高井岳の山頂は、テレビ中継塔と車道、駐車場により、かなりの改変が加えられており、縄張りを読み込むことが困難となっている。山頂部の主郭も車道によって分断されており、一見、二分された曲輪であるかのように見受けられるが、元は一個のいびつな形状の曲輪であったと想定される。この曲輪は縁辺部は自然の傾斜を残しているようであり、平坦面が明瞭ではない箇所がいくつも見られる。この主郭の周囲に、非常に多くの防御遺構が構築されている。主郭の東側は、中継塔によりかなりの改変が加えられているものの、その東斜面には約10本の豊堀群によって構成される畝状空堀群Aがあって、東側からの敵の侵入に備えている。一方南側斜面は、



第108図 高井岳城遠景



第109図 高井岳城縄張り図（事務局作成）

矩形に屈曲する横堀Bとそこから4本の豊堀が派生しており、城内でも一番長大な豊堀が掘られている場所である。この横堀Bは東側で車道に切断されているが、さらに東側の歓状空堀群Aに接続していた可能性も考えられるが、後世の改変が激しく、はっきりとはわからない。一方主郭の北西側斜面は北端部に堀切Cを設け、そこから短小な豊堀群を巡らし、西側の尾根上に築かれた堀Dにまでくまなく構築されている。さらに西側尾根にはE地点にも半分は山道により埋没しているものの、堀切が設けられている様子を窺うことができる。

以上のように、高井岳城は、広い単独の曲輪の周間に約30本もの豊堀からなる歓状空堀群を巡らしており、相当厳重な防備を施しており、まさに大友方の筑前・筑後方面の境目の城として重要視されていたことがわかる。

【史料】あり 【参考文献】1～4.6～8.9.32.104.119

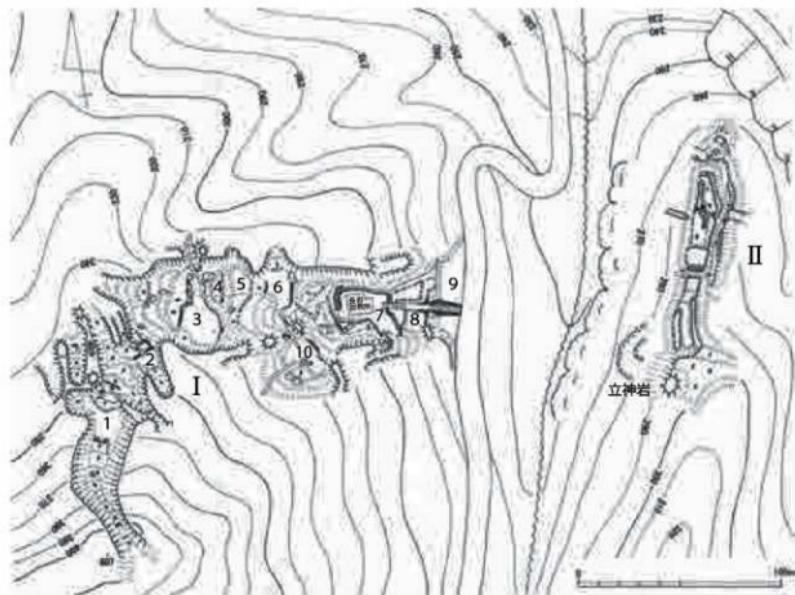
筑後 123	ながいわじょう 長岩城	郡名 生葉郡	別称 なし	図幅名 千足（東）
		種別 山城か	所在 うきは市浮羽町新川	

【沿革】筑後川支流・新川上流・三寺拂から葛籠の集落へ上る途中、奇勝七ツ岩で有名な長岩の谷に位置する。『軍談』には「新川村長岩城跡」として「山腹岩間ニアリ、本丸北面東西十間、南北十五間、二ノ丸東西十間、南北十五間」とあり、長谷部氏が築城した後、間詮所統景が居城し、天正年間には大友氏の配下であったことなどが記される。『寛延記』などの地誌類もほぼ同様の記載がなされている。

【概要】標高270m～350mの間の谷部に本城部Iが位置する。谷の両側は高さ10mを越える絶壁となっており、周囲からは隔離された空間となっている。その谷には石垣などを構築することで、何段かの曲輪が造成される。谷上部の1には一辺約10m四方の曲輪を置き、そこから谷の下方向に2～9の曲輪面が並ぶ。3・6・7は特に広い空間となっており、谷を隔てた10の曲輪面とあわせ、城内でも主要な場となっていたことが想定される。7は長岩説教場の建物が建てられ、かなり改変が加えられているが、城内の曲輪であったと想定される。9については道路と同一面となって、改変が加えられていて、曲輪面を反映したものかどうかは不明である。城内の各所には石垣が構築されており、一見、城域ではないようにも思われるAにも土留めの石垣が組まれており、谷の両側の隙間からの敵の進入に備えている。このようにIは、尾根上に曲輪群を展開する一般的な中世山城とは大きく異なった構造を呈しているが、見てきたような人工造成段が形成されていることや、さらには6の曲輪では平成10年（1998）に発掘調査が



第110図 長岩城石垣（上）・曲輪（中・長岩説教所）・長岩城II遠景（下・中央に立神岩）



第111図 長岩城縄張り図（事務局作成）

行われ、中世の遺物や遺構が確認されている（発掘調査の詳細については、227ページを参照）ことからも、中世城館とみて間違いないであろう。また、Iの川を挟んだ東側の丘陵、立神岩の尾根上IIには、土壁で囲まれた曲輪群が展開する。堀切や矩形に折れた土塁など、かなり手の込んだ縄張りである。確かに谷部Iは、IIからは丸見えの状態であり、ここを守城側が押さえておかないと、城の内部の動向がすべて見えてしまう弱点となる場所であり、ここを城郭化して押さえとしていたものと考えられる。『城郭』では「長岩切寄」として報告がなされているが、ここでは長岩城として一つにまとめて報告する。

このように、長岩城は一見、中世山城らしからぬ構造を呈しているが、発掘調査の成果や、川を挟んだIIの曲輪群とも併せ考えると、中世山城の遺構とみてよく、間註所氏の守りの要となった城であったといえよう。

【史料】あり 【参考文献】1～8,9,32,119

筑後 124 松尾城	郡名 生葉郡 種別 山城	別称 田籠城 所在 うきは市浮羽町田籠	図幅名 千足(東)
------------	-----------------	------------------------	-----------

【沿革】長岩城の川を挟んで東側の山塊の最頂部に位置する。長岩城からは南東側に当たる。『軍談』では「田籠村松尾城跡」として「東西十三間、南北五間、二ノ丸東西十六間、南北十間、大友氏出城也」

とあるが、『寛延記』には「古城 松尾 問住（註）所出城と申伝候」とあり、文献 119 でも問註所氏の長岩城の出城と推察している。

【概要】 標高 501 m の頂部には約 30 m × 約 10 m の長方形を呈する主郭を置き、その南西側にさらに広い曲輪 1 面を設ける。両者の曲輪の間には、堀状の窪みが見られ、一見後世の山道によるものかとも思うが、東側斜面にまで続いているため、堀などの城館遺構を反映したものと考えられる。また曲輪上には焼けた壁土のような遺物も散布している。

これらの曲輪から下方については、後世の山道造成が入っており、非常に地形を読み込むのが困難であるが、南西側斜面に明瞭に 4 本の堅堀群が残されており、その堅堀群と曲輪との間に小曲輪などの城館遺構も想定されるが、やはり山道造成が密に入っていて明確には判明しない。主郭の北側斜面は断崖があったり、斜面が急だったりして堀などの明確な城館遺構は確認されない。以上のように曲輪 2 面と堅堀群によって構成される簡素な縛張りであると言えよう。

また、当城の南側、田籠の集落へ下りる尾根上には、松尾城での戦いにおける供養塔「千人塚」も残されている。

【史料】 あり **【参考文献】** 1 ~ 9.32.119



第113図 松尾城遠景（上）・曲輪面（中）・堅堀群（下）



第112図 松尾城縛張り図（事務局作成）



第114図 松尾城近くの千人塚

筑後 125 高岩城

郡名 生葉郡
種別 山城
別称 寺ん城
所在 八女市星野村

図幅名 十籠(西)

【沿革】星野村十籠の集落の東側に聳える標高 420m の頂部に位置する。『軍談』には「星野村高岩城跡」として「東西二十間、南北十五間、星野重忠築之」とし、あるいは星野鎮実や樋口次郎太郎などが築いたともある。

【概要】標高 420 m の頂部に全長約 50 m の略三角形のやや広い主郭を置いている。北側斜面には堀切 1 本(図中 A)と、南西側斜面 B にも堀切 2 本を構築して尾根上の通行を妨げるとともに、南側斜面を除くすべての斜面には 30 本を越える竪堀群により敵状空堀群が構築されている。特に主郭の南東側斜面 C は単純に竪堀を並べるのではなく、尾根上に堀が集中するように密に構築している様子が見受けられ、堀切と敵状空堀群とによって防御を固めようとする意図を読み取ることができる。全長約 100 m の単郭構造の城郭ではあるが、他の生葉郡の城郭と同じように敵状空堀群を基調とする高度な防御技術により構築された城郭であることが分かる。

【史料】なし

【参考文献】1 ~ 4.6 ~ 8.9.13



第115図 高岩城遠景(上)・堀切(下)



第116図 高岩城縄張り図(事務局作成)

筑後 126 白石城

しらいじょう

郡名 生葉郡 別称 なし
種別 山城 所在 八女市星野村

図幅名 十籠(西)

【沿革】星野村杉ノ久保集落の西側に聳える城山（標高659m）の山頂に位置する。『軍談』には「同村（星野村）白石城跡」として「東西五間、南北十五間、（星野）重忠堀の正實居之」とあり、この二人が相争っていたことが記され、また星野胤実が築城したことなどが記される。

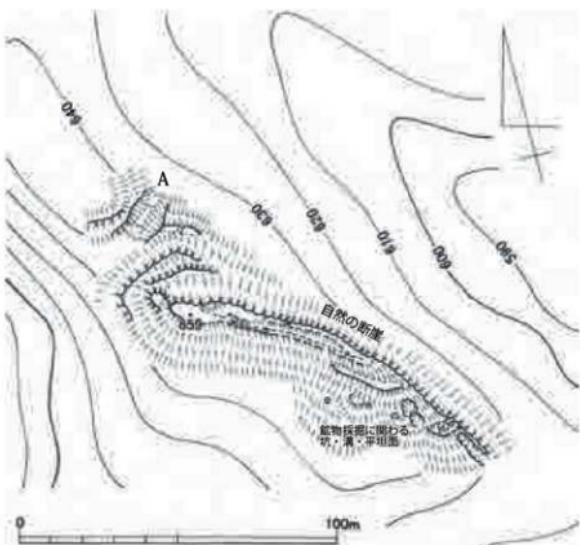
【概要】城山山頂が主郭とみられるが、非常に痩せ尾根であり、北側斜面は全体的に断崖絶壁となっており、城郭遺構を構築する状況でもない。尾根の頂部が若干人工的に平坦に造成されている以外は、北西側斜面の鞍部に堀切Aを設ける程度の縄張りである。主郭の南側には人工的な平坦面なども見られるが、こちらは近世以降に鉱産資源の採掘がなされており、採掘坑や採掘溝がいくつも残されている状況であり、城館遺構と判断することは難しい。以上のように、当城は堀切と主郭周辺を若干造成了した程度の非常に簡素なつくりの城であったと推察される。

【史料】あり

【参考文献】1～8,9,13



第117図 白石城曲輪（上）・堀切（下）



第118図 白石城縄張り図（事務局作成）

⑦上妻郡

筑後 133 アイノツル城

じょう	郡名 上妻郡	別称 なし	図幅名 宮ノ尾(東)
種別 丘城か	所在 八女市矢部村北矢部		

【沿革】矢部川流域の日向神ダム最上流の鬼塚集落の北側丘陵上に位置するとされる。江戸時代に著された『山土産』には「里人伝ふ、古ヘアイノツルなにがしといふ人の城跡なりといづれの時の人にや今苗字の文字さへ分明ならず」とあり、絶壁の丘陵上の城跡に「田畠アリ」との記載の入った絵を描いている。

【概要】現状は茶畑となっており、江戸時代の『山土産』に記されている通り、田畠の現状に変わりはなく、明確な城館遺構は確認できない。このように既に江戸時代には城跡自体が伝承地となってしまっていて、詳細な構造は不明となっており、現状もそれとは変わらず詳細は不明と言わざるを得ない。

【史料】なし

【参考文献】4.6～9.13.35



第119図 アイノツル城跡図(『山土産』のうち。久留米市立中央図書館蔵)



第120図 アイノツル城跡の現状(茶畑)

筑後 134 高屋城

たかやじょう	郡名 上妻郡	別称 矢部山城	図幅名 宮ノ尾(東)
種別 山城	所在 八女市矢部村矢部		

【沿革】矢部川上流の左岸、矢部の集落一帯を見渡せる城山（標高642m）山頂に位置する。『軍談』には「大淵村高屋城跡」として、応安年間に征西將軍懐良親王に隨行して九州へ下り、その子孫が築城した五條氏代々の居城で、天正年間は五條左馬頭が居城したと記す。

【概要】城山の山頂には現在、防災無線の基地局が建



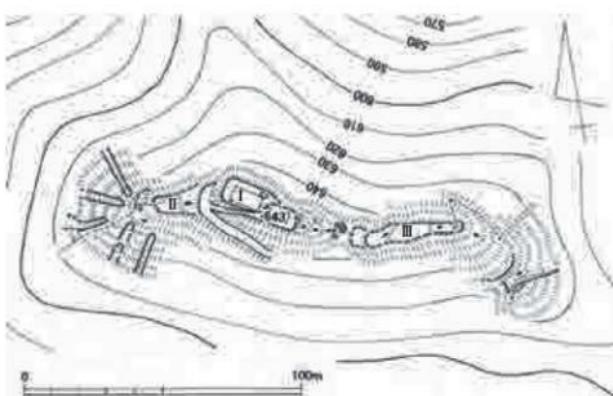
第121図 高屋城遠景

てられており、若干損なわれている部分もあるが、その周囲には明瞭に城郭遺構が残存している。現在、基地局が建てられている平坦面 I（約30m × 10m）を主郭とし、西側にIIの曲輪を置く。さらにその西側斜面には放射状に堅堀約5本が掘られている。一方、I

の東側は自然地形に近い平坦地形が連続し、IIIには若干造成が加えられた平坦面となっている。その南東側斜面には深さ約2m、幅約5mの堀切1本を設け、城域を画している。

【史料】あり

【参考文献】2～9,13,22,35



第122図 高屋城縛張り図（事務局作成）

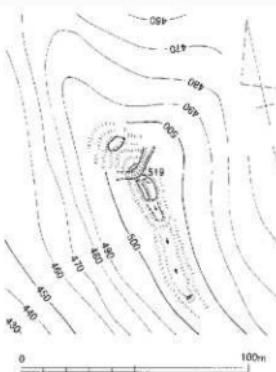


第123図 高屋城からの眺め

筑後 137	つきあじょう 築足城	郡名 上妻郡 種別 山城	別称 月足城 所在 八女市黒木町大淵	図幅名 十籠(西) / 宮ノ尾(西)
--------	---------------	-----------------	-----------------------	--------------------

【沿革】大淵の月足の集落の南、標高519mの山稜上に位置する。『軍談』には「五條左馬頭家臣築足彈正左衛門代々居城也」とあるが、文献13には『邪馬台国探見記』（文献22所収）を引き、五條頼元が前征西宮將軍・懷良親王を擁護して居城したことなどを記している。

【概要】三角点のある標高519mの頂部には、10m × 5mで西側に土壘状の高まりを持つ平坦面があり、その南側に自然の瘦せ尾根が続いている。一見それだけだと城館遺構であるか躊躇するが、曲輪の北側には曲輪側からの落差3.5m、その反対側の深さ約0.5mの堀切1本が確認でき、城館遺構であるとみられる。城域としては非常に狭く、物見くらいの役割しか果たせなさそうではあるが、明瞭な城館遺構があるため、ここが月足城ではないかと考えられる。



第124図 築足城縛張り図（事務局作成）

なお、県の分布地図（文献 140）にはここの他、麓の集落にも「月足城」の存在を示しているが、明確な城館遺構はなく詳細は不明である。

【史料】なし 【参考文献】1.2.4～9.13.22

筑後 139	じげなじょう 地下名城	郡名 上妻郡	別称 大岩空堀城	図幅名 十籠(西) / 黒木(東)
		種別 山城	所在 八女市黒木町笠原	

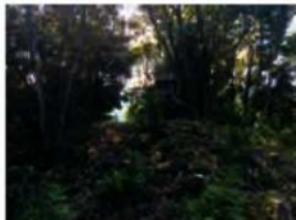
【沿革】矢部川支流・笠原川流域の笠原・庄屋村集落の北に聳える尾根上に位置する。『軍談』には「鹿子尾村地下名城跡」として「大岩空堀城ト號ス、跡主詳ナラス」とある。

【概要】尾根の先端、標高約 480m 地点には明治元年（1868）に建てられた石祠が立っており、そこが一辺約 5 m 四方の主郭となる。主郭の東西には若干の小曲輪も見られるが、規模の大きなものではない。主郭の北西側に深さ約 2 m の堀切 2 本を構築し、尾根上からの攻撃に備えている。西側の尾根下方向には何ら防御遺構はない。曲輪が極端に狭く、城館遺構であるか躊躇するところではあるが、2 本の堀切はしっかりと構

築しており、城館遺構であることを示している。

【史料】なし

【参考文献】1.2.5～9.13



第 125 図 地下名城主郭



第 126 図 地下名城縦張り図（事務局作成）

筑後 140	たかひれじょう 高牟礼城	郡名 上妻郡 / 生葉郡	別称 高群城	図幅名 黒木(東)
		種別 山城	所在 八女市黒木町笠原・星野村	

【沿革】八女市黒木町笠原と同市星野村との境に聳える高峰（標高 567m）の山頂部を中心に位置する。『軍談』には「椿原村高牟礼城跡」として「本丸縱十二間、横十間、二ノ丸縱百二十間、横二十六間、龍造寺ノ臣多久長門、成富十右衛門、大友ノ兵ヲ防カソニ來テ此城ヲ築テ以テ猫尾城の子城トシ、椿原式部ヲ以テ城代トス」とあり、猫尾城の出城であることを示す。『寛延記』にもほぼ同様の記載がなされる。また、『稿本八



第 127 図 高牟礼城遠景（奥側の山）

『女都史』(文献13)にはさらに天正12年(1584)の大友方による猫尾城攻めの際には、椿原式部は大友方に寝返ったために猫尾城は落城、猫尾城主・黒木氏の家臣らに式部は首をはねられ、高牟礼城は落城したことなどが記載される。

【概要】城域は大きく、高峰山頂部とその東、約350mの頂部の二箇所から構成される。高群山頂(標高567m)には南北約25m、東西約20mの主郭Ⅰを置くが、主郭の西側から南側にかけては山道造成によりかなり地形が改変されてしまっている。しかし、Ⅰの北西側には堀切Aがあり、そのまま北側に帯曲輪を巡らし、北側斜面には堅堀2本を構築し、北側からの備えとする(図中B)。また、主郭の東側も改変地形があり、かなり広い平坦地形が広がっているが、明瞭な平坦地形とは言えず、自然地形を残しているかのような印象を受ける。その西側Cには平面逆V字形の堀切2本を構築し、敵の進入を防ぐが、斜面下の堀切の片側の堀は50mほどの長さを持つ長大なものとなっ



第128図 高牟礼城縄張り図(事務局作成)

ている。また、山頂部一帯の曲輪群の東側斜面には、約 17 本の堅堀群 D が整然と並び、堅堀群の下部には横堀 E が巡っている。E のさらに東外側にも帶曲輪 F がテラス状に巡っており、東側斜面からの厳重な備えを物語っている。また、F の北端からは北東方向に向けて細い尾根が伸びているが、その尾根上の G は土塁で囲まれた細長い空間となっている。その土塁はさらに H で屈曲したのち、さらに 250m ほど、一部に石垣を伴って直線的に伸び、最終的には II の曲輪にたどり着く。II の曲輪は内部が自然地形を残すかのように不明瞭な平坦面だが、西側を除く曲輪縁辺部は土塁が巡る長方形を呈する曲輪となっている。さらに東側から南側にかけては土塁に併行して横堀 J が巡り、さらに K・L 地点では堅堀と接続し、防御を高めている。

以上のように当城は高群山頂の主郭 I を中心とした曲輪群と、そこから東約 350m 離れた尾根上頂部に設けられた曲輪 II に二分されるが、それらはそれぞれ敵空堀群や横堀で防御されつつも、I と II との連絡を保つために、長大な土塁ラインを構築している。八女地域においては高度に発達した縄張りを持つ規模も大きい城郭であり、奥八女地域有数の城郭であったことが分かる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6 ~ 8,9,13,91,132

筑後 141 熊野堂城

郡名 上妻郡

種別 山城

別称 大渕城

所在 八女市黒木町大淵

図幅名 黒木(東)

【沿革】矢部川上流左岸、大淵の大渕集落の背後に聳える標高 332m の山頂部に位置する。『軍談』には「同村（大渕村）熊野堂城跡」として「五條左馬頭家臣大淵三河守代々居城也」とある。

【概要】丘陵頂部に位置し、頂部には南北約 25m、東西約 15m の主郭を置く。主郭の南縁辺部には土塁も見られ、主郭の周囲には帶曲輪が巡り、南側は深さ 3~4m の堀切に、北東隅部は横堀状になる。全長約 50m の小規模城館といえよう。

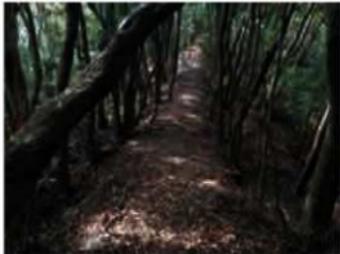
【史料】なし

【参考文献】

1,2,5 ~ 8,9,13,22



第 130 図 熊野堂城遠景



第 129 図 高牟礼城曲輪 I と II の間の土塁ライ
ン（上）・曲輪 II の横堀（下）



第 131 図 熊野堂城縄張り図（事務局作成）

筑後 143 猫尾城

ねこおじょう

郡名 上妻郡

種別 山城

別称 黒木城

所在 八女市黒木町木屋

図幅名 黒木(西)

【沿革】矢部川とその支流・笠原川が合流する付け根に当たる標高 240m の城山（猫山）山頂に位置する。『軍談』には「木屋村猫尾城跡」として「山城也、本丸西面南北三十間、東西十五間、二ノ丸ハ西ニアリ」とし、本丸と二ノ丸との間に五十間の馬場、本丸の東側に三ノ丸の存在などを記す。さらに当城が、薩摩根智目城城主の源助能が黒木の地を訪れ、猫尾城に居城して黒木姓を名乗り、以後黒木氏々の居城したこと、さらに天正 12 年（1584）には豊後勢が攻めたこと、さらには田中吉政の時代には辻勘兵衛を城代としたことなどが記される。なお、辻勘兵衛は当城に知行高 3,650 石、組下の書上げ 8 名 3,230 石をもって入城しており、元和の一国一城令により廃城となったとみられる。

【概要】黒木町の東側背後に聳える城山の山頂部には、東西約 50m、南北約 80m の主郭を築き、主郭周りには、虎口やそれに付随した櫓台、さらには横矢を効かせるための堀線の屈曲がみられ、周囲は石垣で固められている。

石垣の石材は近隣で採取できる板石状の結晶

片岩で、その石材を用いて垂直に積まれており、現在神社が建てられていることもあって、一見、城の石垣であるかどうか判断に躊躇するところであるが、北東部の入闇部 a などの積まれ方を見てみると、傾斜を持った算木積みであり、石垣の全てが城に伴うものかどうかは判断が難しいが、①の周囲には城の石垣があったと考えて問題はないだろう。また、

昭和 63 年度

から平成 2 年

度にかけて行

われた発掘調

査では、主郭

の曲輪面上で

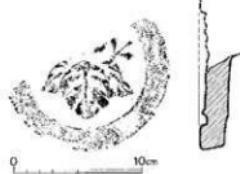
は礎石建物に

用いられたと

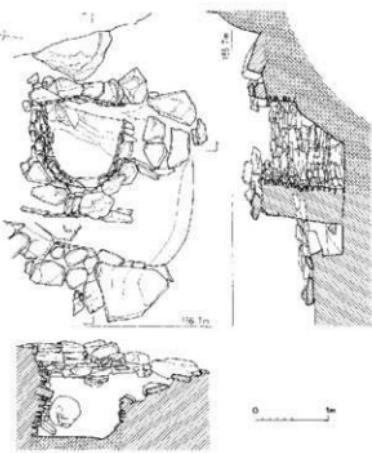
みられる礎石



第 132 図 猫尾城遠景（上）（左奥には高牟礼城）・石垣 a（下）



第 133 図 猫尾城出土桐文軒丸瓦
(文献 91)



第 134 図 猫尾城跡で検出された石組井戸（文献 91）

の他、虎口K1には門礎と見られる礎石も検出されており、礎石立ちの門や建物があったことが類推される。また、出土遺物では、①の南西隅の石垣上のトレンチから、小型だが桐文の軒丸瓦が出土している。報告書では神社に伴うものではないかとしているものの、城に伴う可能性もあるかもしない。これらの主郭①の石垣、礎石建物は田中吉政時代に構築されたものであろう。

主郭①の東側には大型の堀切H1、さらに南側斜面には4本の豊堀群がある。特に堀切H1は、『軍談』では天正12年の立花道雪を初めとする豊後勢の猫尾城攻略戦の際に掘られたものと記されている。おそらく戦国期のものとみてよいだろう。また、H1の東側は緩斜面となっており、石垣や土塁が構築されていて、『軍談』にて「三ノ丸」とされているものである。しかしながら、これらの遺構は後世の畑作業等によって生じたものであり、城館遺構ではないと判断される。

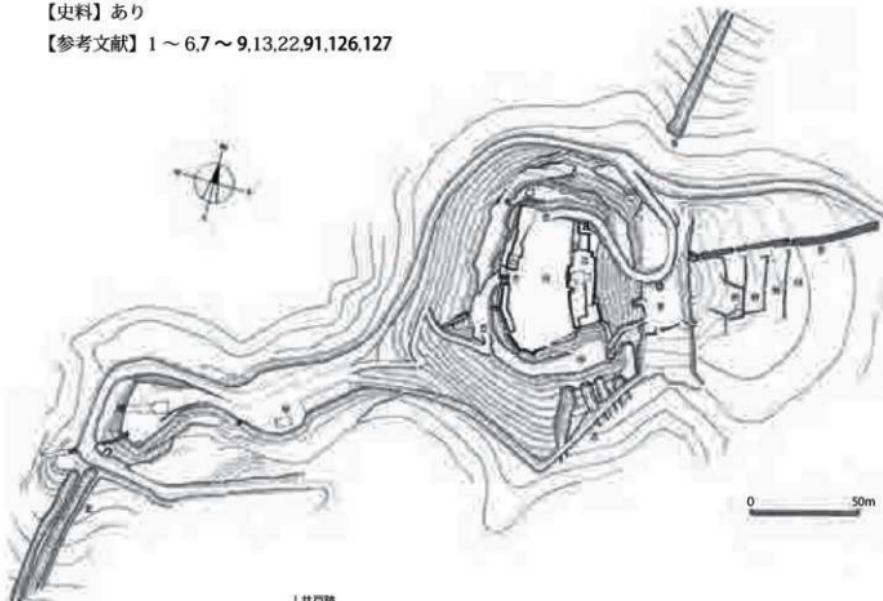
一方①の西側は、②の腰曲輪が取り巻き、西側に尾根が伸びている。①から西へ約150m先の尾根の頂部は薬師堂が建てられているが、これが二ノ丸であり、①との間の細長く伸びた③が、『軍談』のいう「馬場」と見られる。二ノ丸には豊堀2本（H4）が構築されるのみで、石垣などの遺構は確認されず、おそらく田中氏時代には使用されていない戦国時代の城の姿であると考えられる。

なお、これらの曲輪群の南側、標高160m付近の谷部には、地元の伝承で「殿様の井戸」があったが、農道を造った際に埋もれていた。発掘調査時に併せて調査が行われ、石段が設けられた井戸が検出されている。断定は難しいが、城に伴う水の手であったものと考えられる。

当城は中世段階では国人領主黒木氏の居城として、織豊期においては柳川藩32万石の支城の一つとして機能した当地域の城の中でも重要な存在であったと言えよう。

【史料】あり

【参考文献】1～6,7～9,13,22,91,126,127



第135図 猫尾城縄張り図（文献127・木島孝之作成）

筑後 145 うさぎじょう
兔城

郡名 上妻郡 別称 鬼城
種別 山城 所在 八女市黒木町土窪

図幅名 黒木(西)

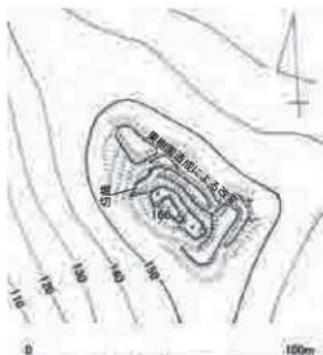
【沿革】矢部川を猫尾城からさらに下った南岸、土窪の下名集落の南東背後の丘陵突端頂部に位置する。『稿本八女郡史』(文献 13)には「兔城址」として「右城主年號詳ならず、込野を過ぎて右に在り」と『調氏記録』や『上妻名勝図絵』を引いて記す。県の分布地図(文献 140)では「鬼城跡」とし、その後の文献においても「鬼城」とされるが、「兔城」の誤字であるとみられる。

【概要】標高 166m の丘陵突端部に位置する。山頂一帯、主に山頂から東側にかけては果樹園による造成が見られ、後世の改変がかなり想定される場所である。山頂部には全長約 25m、幅約 10m 弱の主郭を置き、西側を除く三方に帯曲輪を巡らしている。東側から南側にかけては後世の段造成の影響が色濃く、城があった当時の状況からはかなり改変されているようであるが、主

郭の北側には堀切とみられる掘り込みがあり、城館遺構の名残とみられる。全長 40m ほどの小規模な城館であったとみられる。



第 136 図 兔城堀切



第 137 図 兔城縄張り図 (事務局作成)

【史料】なし

【参考文献】9.13.140

筑後 146 いこまのじょう
生駒野城

郡名 上妻郡 別称 犬城
種別 丘城 所在 八女市上陽町下横山

図幅名 黒木(西)

【沿革】矢部川支流の星野川北岸、八女市下横山の蘿集落の背後の丘陵上に位置する。『川談』の「川崎庄山内村犬尾城跡」の項の文中、犬尾城の東側の茶臼山、城跡山の両城の説明をした後に、「其東ニ生駒野名アリ、生駒山アリ、北河内村地下ノ内



第 138 図 生駒野城遠景 (左)・

A 地点武者溜まり状の窪み (写真左側に土塁が見える) (右)

也、此山ハ砦ノ跡ト見ユ」とあり、犬尾城の砦としている。『種々』の八女郡横山村轟の項に「轟城址」と名を掲げているが、場所から考えて生駒野城を指しているものとみられる。

【概要】城の位置は、下横山の轟集落に面した丘陵先端の頂部（標高145m）に想定されているが、現地は自然地形であり、西側斜面などには後世の畠地利用の際の段造成や石垣などが残るのみとなっている。しかし、頂部北側の尾根続きの鞍部Aには、深さ約5mの大堀切をはじめとする堀切2本とその南側に接して、土塁状の高まりに囲まれた、あたかも武者溜まり状の城館遺構が確認できる。おそらく城域としては堀切から南側の丘陵全体ということとなろうが、明確に城館遺構が確認できるのは、尾根の野首のようになった鞍部Aだけである。極力人為的な造作は避けて城とした結果であろうか。土塁に囲まれた空間についても現状では、堀切側に対する武者溜まりのような防御遺構の一つとみておくのが妥当かと思われる。いずれにせよ、これらの遺構が当城の遺構であることに疑いを挟む余地はなかろう。

【史料】あり

【参考文献】1,2,6～9,13



第139図 生駒野城縄張り図（事務局作成）

筑後 148	くま かわじょう 熊ノ川城	都名 上妻郡 種別 山城	別称 熊河城・辺春城	図幅名 野町(東)
			所在 八女市立花町上辺春	

【沿革】矢部川支流の辺春川上流域、松尾川の北岸の丘陵頂部に位置する。『軍談』には「同所（辺春村）熊河城跡」として「此城時代詳ナラス」とあるが、さらに『稿本八女郡史』（文献13）では「熊川山に在り」とし、城主、年代未詳として、さらには山頂に巡る濠の存在から城ではなく墳墓ではないかとする。ただ、上辺春の場所にあって、多くの古文書に「辺春城」が出てくることから、辺春氏の本城・辺春城ではないかと考えられており、『福岡県の城』では「辺春城」として紹介されている。

【概要】城がある尾根上部は、最近まで畠地となって

おり、かなりの改変が想定されるものの、明瞭に城館遺構を確認できる箇所は残されている。曲輪があつたとみられる丘陵頂部は、何段か平坦面が展開しているが、開墾等によりどれだけ城館遺構



第140図 熊ノ川城横堀

として形状を残しているのかは不明である。しかし、その東側から北側にかけての斜面下Aには明瞭に横堀遺構が巡っている。南側は山道造成により切られている。さらに西側に閑しても、畠地造成により大々的に掘削、埋め立てがなされており、地表観察では城館遺構は確認できなくなってしまうほどの変状況である。『邪馬台国探見記』(文献22所収)には堀が巡ることから城ではなく古墳だったのではないかと述べているが、明らかに城の横堀であり、またこの記載から大正6年頃にも横堀を見ることができたという積極的に城館遺構となる証拠記載になるともいえよう。

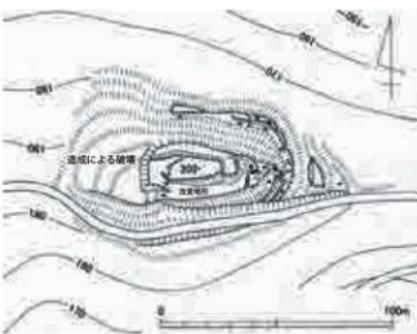
以上のように、城の西側半分は完全に破壊されているものの、東側は曲輪の周間に横堀を巡らして防衛していた様子を窺うことができる。

【史料】あり 【参考文献】1~3.5~7.8.9.13.22.33

筑後 149	たかすだじょう 高朵城	郡名 上妻郡	別称 施原城・施城・高須田城・高朵谷施城
		図幅名 野町(東)	種別 山城 所在 八女市立花町下辺春

【沿革】辺春川左岸から高須田の集落へ分岐する南側の丘陵上に位置する。『軍談』には「邊春村高朵施城跡」として「天正ノ初、邊春勘解由居之」とある。『稿本八女郡史』(文献13)には『調氏記録』を引いて、永禄7年(1564)頃に辺春に部春入道紹真が入り、天正の頃には黒木氏一族の辺春摩守鎮信(あるいは勘解由、式部少輔)が居城したことや、辺春城を巡る大友方と龍造寺方との争いの様子が記され、当城が辺春城であるとみているようである。

【概要】標高217mの山頂部には明治25年(1892)に建てられた「袖本陞山」の碑が建っているが、そこが主郭であり、一辺10m弱の曲輪で、その西側に帯曲輪を巡らせる。さらにその南西側の尾根上に深さ約2mの堀切2本が構築され、尾根伝いからの敵の攻撃に備えている。一方、主郭の東側には階段状に明瞭な平坦面が展開している。しかしながら、尾根を下ると非常



第141図 熊ノ川城縄張り図(事務局作成)



第142図 高朵城縄張り図(事務局作成)

に多くの段状造成を確認することができ、山仕事など、後世の改変が想定されるため、城館構造とは考えにくい。以上のように、小規模な主郭及びそれに付随する小曲輪、さらには尾根上に堀切2本を構築する非常に単純かつ小規模な山城であったことが分かる。

【史料】なし

【参考文献】1～9,13,22,33



第143図 高架城堀切

筑後 155 山下城

郡名	上妻郡	別称	人見城・笹城	図幅名	八女(西)
種別	山城	所在	八女市立花町北山		

【沿革】矢部川と支流の白木川の合流点の南の丘陵上に位置する。『軍談』には「山下國見嶽城跡」の名が挙がるが、これは国見岳城（筑後156）のことを指しているようである。一方、「邪馬台国探見記」（文献22所取）には「（白木）川の西方に城山あり。之を山下城と云ふ、柳河城主蒲池筑後守治久の2男蒲池和泉守親広及志摩守鑑広、兵庫頭鎮運3代の居城趾也。今尚礎石井戸等存す」とあり、上記『軍談』の記載と重複する箇



第144図 山下城縄張り図（事務局作成）

所が見受けられる。蒲池氏の居城としてはこの山下城か国見岳城のどちらかはよくわからない状況と言えよう。

【概要】現在、城山の山頂には、大正年間の山下城の石碑が建てられており、後世ここが山下城であった認識が確認できる。山頂部には東西約30m、南北約20mの平坦面があり、周囲には石垣も見られるが、明らかに後世の改変によるものである。また、山頂部の東側Aには、曲輪からの落差

10m、深さ2~3mの堀切2本が構築され、城館遺構であることが認識できるものの、堀切の北側には新しい時期の山道造成などもなされており、後世の改変がなされていることが分かる。さらに山頂部背後の尾根上及びその周囲は後世の果樹園、畑地の造成により、その段造成が延々と続いている、ここが本当に城館かどうか躊躇するような状態である。途中、標高144mの頂部に石垣も見られるが、明らかに新しく、平坦面の形状も明らかに城館としては似つかわしくない形状を呈している。しかし、尾根の先、B地点には堀切とみられる掘り込みなどもあり、いちおうここまで城域ではないかと想定ができる。また、北側斜面は近年の大規模開発により破壊されてしまっているが、『福岡県の城郭』に掲載された図面にはC地点付近に堀切の表記がなされている。しかし現地には堀切の痕跡は確認できず、もしその図面の通りに堀切が存在していたならば、既に破壊されてしまっているものの、城館遺構がそこに存在していたこととなろう。以上のように当城は大々的に改変が加えられてしまっており、城の詳細な構造を知ることはできないが、残された城館遺構から、東西約150m、南北約100m程度の規模を有していたことが想定される。

【史料】あり 【参考文献】2.3.5~7.8.9.13.22.33

くにみだけじょう 筑後 156 国見岳城	郡名 上妻郡	別称 山下国見岳城・国見城・舞鶴城	図幅名 八女(西)
種別 山城	所在 八女市立花町北山		

【沿革】矢部川と白木川に挟まれた独立丘陵上に位置する。山下城からは白木川を挟んで北側に当たる。『軍談』には「山下國見嶽城跡」として蒲池兵庫鑑廣が三潴郡の蒲池城から居城を移したことや、龍造寺方に攻められても落ちなかったこと、天正15年(1587)には豊臣秀吉が筑紫廣門に「山下ノ城」を与えたことなどが記されている。当城が字国見に当たることや、城の位置の記載などから、国見岳城と呼ぶことには問題はないが、蒲池氏や筑紫氏に関する記載が、当城か前述の山下城なのかは現状では区別がつかないと言わざるを得ない。

【概要】標高104mの頂部に東西約50m、南北約15m弱の曲輪を置き、その周囲に横堀を巡らしている。曲輪の東側には横堀の斜面下Aに敵空堀群の堅堀10本を確認できるが、北側斜面全体は果樹園造成により大々的に破壊されており、元はさらに堅堀があったものと考えられる。とはいっても、曲輪の北側には横堀と



第145図 山下城遠景（堀切B近くからA方向を望む）（上）・堀切A（下）

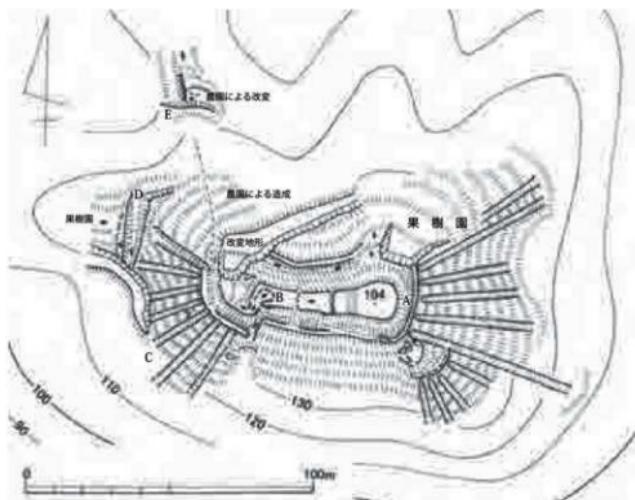


第146図 国見岳城遠景（上）・横堀（下）

土塁が確認でき、城館遺構の残存が確認できるものの、豊堀は確認できない。曲輪の最も西側は虎口状の導入路Bがあり、さらに西側に曲輪が続いている。その南西側から西側にかけての斜面Cにも東側斜面同様、畝状空堀群があり、7本の豊堀を確認できる。さらに西側尾根上Dには深さ約2mの堀切1本、北側尾

根上Eには果樹園造成により損壊しているものの、元来堀切であったとみられる落ちが確認できる。以上のように、当城は曲輪群を横堀で囲み、その周囲に畝状空堀群を配し、西側には堀切を設けた構造であり、豊堀も50mを越える長いものもあり、厳重な防御のあり方を窺うことができる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6～8,9,13,22,33



第147図 国見岳城縄張り図（事務局作成）

筑後 158 山崎城

郡名	上妻郡	別称	撃上城・平林城	図幅名	八女(東)
種別	山城	所在	八女市立花町山崎		

【沿革】矢部川とその支流・辺春川の合流点近くの辺春川南岸の城山山頂（標高103m）に位置する。『軍談』には「山崎村城跡」として「天正ノ始、上妻越前守居城也。同十二年道雪紹運、当郡平治ノ為メ暫當城ニ陣ス」とある。また、『邪馬台国探見記』（文献22所収）には山崎城とは別に平林城を挙げ、城主不詳としているものの、山崎にある字「平林（でえらばやし）」は山崎城から川を挟んだすぐの対岸であり、文献13などは同一の城としており、本書ではとりあえず同一のものとして扱うこととする。

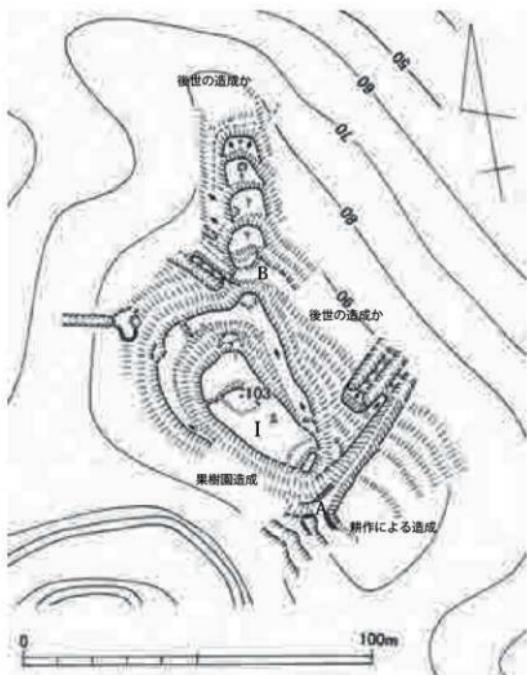
【概要】城山山頂の最高所Iは人工的に平坦に造成された



第148図 山崎城遠景（左）・堀切（右）

面で、主郭である。三角点の近くには猿田彦の石碑なども建っている。主郭の南側にはやや不整形ながら土壘状の高まりがあり、その南東側には深さ6~7mの堀切Aが確認できる。堀切の南西側半分は果樹園の造成が広く入っており、新しい石垣なども確認できるが、元あった堀切の形状を元に後世に造成を加えたものとみられる。主郭の東側斜面には堀切に併行して竪堀2本も確認できる。主郭の南側を除く三方には帯曲輪が螺旋状に巡る。さらに北側尾根上Bには、堀切とみられる掘り込みも確認することができる。Bの北側は階段状に平坦面が階段状に並ぶが、尾根の先端まで長く伸びており、削られた斜面も土が露出して新しい印象を受け、後世のものの可能性が高い。以上のように当城は後世の改変を受けてはいるものの、基本的に主郭とその周囲の尾根上に堀切を設けるという、比較的単純な構造の城であったとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1~3,5~9,13,22,23



第149図 山崎城縄張り図（事務局作成）

筑後 159 兼松城	郡名 上妻郡 種別 山城	別称 高山城	図幅名 八女（東）
---------------	-----------------	--------	-----------

【沿革】矢部川支流の辺春川南岸にある城山山頂（標高107m）に位置する。『軍談』には「天正ノ頃、豊饒美作守鎮連居城也」とし、また天文年間には豊饒美濃守鑑述が居城したとする。『旧柳川藩志』（文献22）には出典不明ながら天正9年（1581）6月22日に龍造寺方に攻められ、城主豊饒新介は殺害、城も落ちたとしている。

【概要】城山山頂の最高所には南北約50m、東西約10mの主郭Iが置かれる。周囲全体は果樹園等による後世の造成面が非常にたくさんあり、城館遺構との区別は非

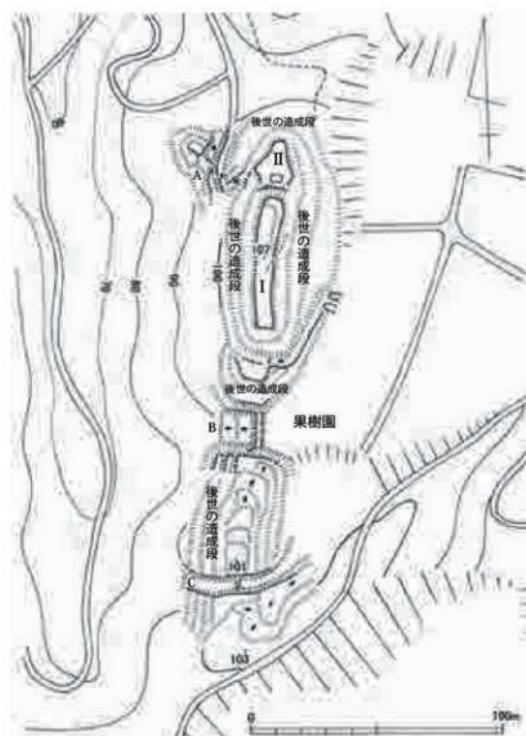


第150図 兼松城堀切

常に難しい。Iの四方は全て平坦面があるが、北側を除く三方の斜面には小段造成が無数にあり、後世の改変を思われる。北側IIには堂宇があるが、ここは一辻約20mの平坦面で後世の改変を受けていいるといえ、他の段よりも格段に広いことから、城の曲輪であった可能性が高い。IIの北西側Aには堀切と思われる掘り込みなども見られる。一方、主郭の南側は小段造成が続くが、その先は尾根の鞍部になっている。『福岡県の城』などでは大堀切となっているBは後世の段造成の結果生じたものと思われる。Bの南側は自然丘陵が残るが、その西側は後世の段造成が広がっている。Cは人工的に掘り込んだもので、堀切とみてよい。堀切の中央部には岩盤を削り残した箇所が連なっており、一見土橋にも見えるが、意図して生じたものかは不明である。

このように、当城は果樹園などの後世の造成が激しく全体像を復元するのは非常に困難ではあるが、全長約180mの曲輪と堀切からなる構造であることは言えそうだ。

【史料】あり 【参考文献】1～7,8,9,13,22,33



第151図 兼松城縄張り図(事務局作成)

筑後 160	さのせじょう 三ノ瀬城	郡名 上妻郡	別称 なし	図幅名 八女(東)
		種別 山城	所在 八女市立花町下辺春	

【沿革】矢部川支流の辺春川は上流から北流してくるが、その流れが西に変わる屈曲点近くの左岸の丘陵上に位置する。地誌類にはほとんど記載がみられないが、かろうじて『邪馬台国探見記』(文献22所収)には「下辺春のサノセ城は誰の城なりしを知らず」の記載がみられる程度である。『福岡県の城』では当城を「高榮城」として紹介している



第152図 三ノ瀬城遠景

が、城の位置が明らかに高須（高須田）ではなく、高須城の遺構は別に確認されているため、誤りとみられる。城主不詳ではあるものの、立地などから考えて、辺春氏に関連した城ではないかと考えられる。

【概要】標高125mの頂部の主郭Ⅰ（一边約10m）から南東方向に自然の平坦地形が続いており、その先端部Ⅱは人工的な造成がなされているが、周囲は畑地造成などの平坦面が多数あり、城館遺構か否かは不明である。Ⅰの西側Aには堀切1本を設けるとともに、南側へ続く尾根上Ⅲには平坦地形が続いているが、平坦面は不明瞭であるとともに、後世の畑地造成に伴う石垣遺構なども残されており、後世の改変が見受けられる。しかしながら、西側斜面Bには約6～7本の堅堀群からなる敵状空堀群が構築されており、Ⅲが城域であることが分かる。以上のように当城は後世の改変がかなりなされているものの、堀切や敵状空堀などの防御遺構が明確に残存し、かつての山城の姿が残されているのがわかる。

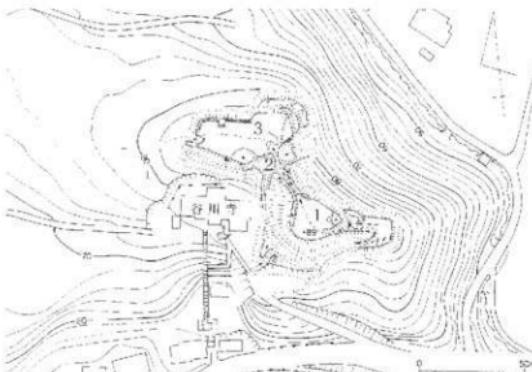
【史料】なし 【参考文献】8.9.22.33

筑後 161	たにがわじょう 谷川城	郡名 上妻郡	別称 なし	図幅名 八女(東)
	種別 丘城	所在 八女市立花町谷川		

【沿革】矢部川南岸の八女市谷川の谷川寺の裏山・辻の山の頂部に位置する。『軍談』には「天正ノ頃、黒木氏余流、谷河新三郎居城也」とある。また『旧柳川藩志』（文献22）には「谷川城趾」として、城主・谷川新三郎は龍造寺方により滅ぼされ、その子孫は高橋紹運、さらに立花家に仕えたことが記される。『稿本八女郡史』（文献13）には別名を臥牛城とす



第153図 三ノ瀬城縄張り図（事務局作成）



第154図 谷川城縄張り図（文献131・岡寺 良作成）

ることに加え、『鎮西要略』を引き、永禄年間に蒲池志摩守鑑廣は山下、谷川の二城に拠ったとする。さらに、同書には『柳河偉人奇士伝』を引き、谷川大膳鎮實は、元々谷川城主であったが、没落後は高橋紹運、さらには立花宗茂に仕えたことが詳細に記される。

【概要】谷川寺の東側背後の頂部、標高 89m 地点に主郭を配する。主郭には一部土塁が見られ、北西側に続く道が確認できる。その道は 2 の堀切を挟んで 3 の曲輪へと続いている。3 は城内でも最も広い平面空間で、江戸時代の石造物が多く並べられているが、曲輪と見てよいと思われる。1 の東側の平坦面は墓地となっており、曲輪であったか否かの判断は難しい。以上のように当城は 2 つの曲輪を配し、その間に堀切を設ける構造であったことが分かる。

【史料】あり 【参考文献】1 ~ 4.6 ~ 8.9,13,33,131



第 155 図 谷川城堀切

筑後 164	いわおじょう 犬尾城	郡名 上妻郡	別称 川崎城	図幅名 八女(東)
		種別 山城	所在 八女市山内	

【沿革】八女丘陵の東端、矢部川支流の星野川の北岸の丘陵上に位置する。『軍談』には「川崎庄内村犬尾城跡」として「本丸縱十八間、横五間、南面也、二ノ丸縱十二間、横二間、建久ノ頃黒木助能嫡男、川崎五郎築之、代々居之、常居ノ館ハ麓ニアリ」とし、豊臣秀吉の九州平定の際に落城したことが記される。『寛延記』では「黒木ノ嫡子川崎三郎定宗」の城であるとする。

【概要】標高 186 m の頂部には、南北約 100m、東西約 25m の主郭 I を置く。I の曲輪面縁辺部には、途切れながらも土塁が巡り、周囲斜面には数多くの防御遺構が確認できる。I の北側 A から東側 B にかけては横堀が巡り、C に至っては横堀は二重に構築されている。C のさらに南側 D になると竪堀 4 本と横堀が組み合わさって畝状空堀群が構築される。I の西側には大堀切 E を施し、I の北西側 F には竪堀 5 本からなる畝状空堀群が造られている。堀切 E の西側 G は、『軍談』のいう「二ノ丸」の場所と思われるが、自然の平坦地形となっており、城域ではないと思われる。そうなると G



第 156 図 犬尾城縄張り図 (文献 129・岡寺 良作成)

の南側Ⅳにある切通し状の掘り込みについても、城の堀切と考えるよりは山道造成によって生じたものと考えるのが妥当とみられる。また、主郭Ⅰおよびその周辺では発掘調査が行われており、Ⅰの平坦面上では、岩盤に掘り込まれた柱穴や、円碟の集石、さらにはⅠを南北に区画するような東西方向の石列なども確認されている。

以上のように当城はさほど大きい城とは言えないが、周囲は堀切や横堀、敵空堀群によって厳重に防備され、さらに中腹には支城の鷹尾城（築後165）、麓には東館遺跡（築後R16）も確認されることから、山内集落から犬尾城にかけて、川崎氏に関連する城館遺跡が連続し、それらが連携しながら本拠を防護していた様子が窺い知れよう。

【史料】あり 【参考文献】1～7.8.9.13.90.129

築後 165 鷹尾城	たかおじょう	郡名 上妻郡	別称 笹ノ城・舛形城	図幅名 八女（東）
		種別 山城	所在 八女市山内・大籠	

【沿革】犬尾城から南西方向に尾根上を下った標高139mの頂部に位置する。『軍談』には「同村（山内村）鷹尾城跡」として「犬尾ノ支城也」とあり、笹ノ城と別称することなどが記される。『稿本八女郡史』（文献13）には金毘羅山にあり、俗に舛形城ともいい、天正8年（1580）には龍造寺家晴、多久与兵衛が攻め、さらに同12年の猫尾城攻めの際に当城が焼かれたとしている。

【概要】城の曲輪群は、標高139mの最高所に主郭Ⅰを置き、その西側に曲輪Ⅱを挟んで、標高136m地点に曲輪Ⅲを置く。これらの曲輪群の北側に横堀Aを構築する。さらにⅠの東側に横堀と接続する形で大堀切Bをはじめ堀切や豎堀を設け、尾根上側からの攻撃に備える。またやや離れたCにも堀切1本を設ける。また曲輪Ⅲの北西側にも横堀に沿う形で堀切Dを設け、南西側には帶曲輪Eを巡らしている。曲輪群の南斜面には特に防御遺構は確認できない。以上のように当城は規模の同じ曲輪群が並列し、その周囲を横堀や豎堀群により厳重に防備する様子が窺われる。規模の大きさや防御遺構の手厚さから単に犬尾城の出城というのみならず、犬尾城と連携し川崎氏の拠点として重要な城であつただろう。

【史料】なし

【参考文献】1～8.9.13.129



第157図 鷹尾城縄張り図（文献129・岡寺 良作成）

筑後 174	おに くちじょう	郡名 上妻郡 別称 甘木城・甘木河内守城	図幅名 八女(東)
		種別 山城 所在 八女市広川町水原	

【沿革】広川上流の鬼之淵の集落の北背後にある丘陵上に位置する。『軍談』には「甘木村鬼口城跡」として「縦十四間、横五間、南面也、甘木家棟所築也」とあり、天正14年（1586）に麓の馬場館と共に薩摩島津の兵により落城したことを記す。さらに城地の名称が「香山」であり、時代不明ながら香山氏が居住したことでも記している。

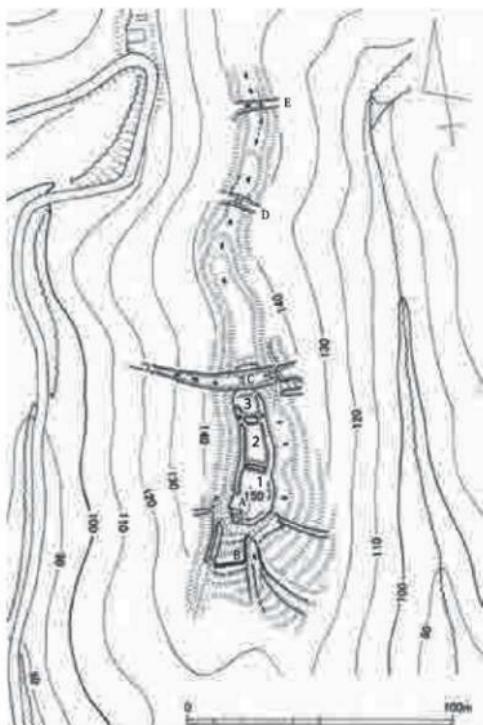
【概要】南に延びる標高150mの尾根の先端頂部に曲輪を置く。曲輪は全長約50mで、周囲を土塁で囲み、曲輪の空間を三分するように土塁で仕切られる（図中1～3）。その南側の区画1は最も広く、主郭と想定でき、南西角には虎口らしき土塁残片Aも確認できる。曲輪の南側には放射状に堅堀が3～4本掘られ、堅堀と堅堀の間に築かれた小曲輪Bには石垣遺構なども確認できる。曲輪3の北側には、曲輪に接して深さ約4mの堀切Cが掘られるが、西側斜面には長さ50m近くもある長大なものとなっている。Cの北側には自然の尾根の鞍部地形が続くが、その先にはDとEの堀切2本が構築され、尾根上からの敵の攻撃に備える。以上のように当城はやや小型ながらも曲輪を囲む土塁の他、石垣などもあり、かなり入念に構築された様子が窺われる。

【史料】なし

【参考文献】1～4.6～8.9.13.47



第158図 鬼ノ口城堀切（上）・石垣（下）



第159図 鬼ノ口城縄張り図（事務局作成）

筑後 183	ちとくじょう 知徳城	郡名 上妻郡 種別 丘城	別称 智徳城・知徳館 所在 八女郡広川町広川	図幅名 八女(西)
--------	---------------	-----------------	---------------------------	-----------

【沿革】広川右岸、当条と知徳の集落の間に独立丘陵上に位置する。『軍談』には「縦二十間、横十六間、西面也、城主詳ナラズ」とある。『稿本八女郡史』(文献 13)には天正 12 年(1584)に山下城の蒲池鎮連の家臣・一條和泉守が居城し、翌 13 年に龍造寺方の山下城攻めの際には横岳頼次が山下城を攻める前に当城を攻めようとしたため和泉守兄弟が出陣して戦死、山下籠城の際に当城も落城したとある。

【概要】標高 42m の独立丘陵頂部に当城があるとされるが、丘陵全体に畠や竹林、あるいは墓地などの後世の改変造作が確認でき、人工的に造成された地形全てが城館に関連したものではないことは明白な場所である。その一方で、丘陵の最高所は南北 40m、東西 20m の長方形を呈する平坦面 I となっており、東側から南側にかけては横堀状の掘り込みを伴う帶曲輪状の平坦面が巡っている。さらに I は草木が除伐されていて、近年まで何等か利用されていたような印象を受ける。しかしながら、周囲に巡る横堀状遺構など、城館遺構と考えるのが最も妥当ではないかと思える遺構もあり確実な判断は発掘調査に委ねざるを得ないが、まずは当城の現状として報告する。

なお、『福岡県の城』などには西側の小学校増築の際に丘陵の多くが削られてしまい、旧状をかなり損ねたという記載も見られるが、昭和 23 年(1948)の航空写真を見ると小学校増築前であるが、北西側の尾根は削られているものの、丘陵最高所については現在とあまり変わらないような状況であるため、城の位置としては現状の最高所で良いものと考えられる。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4,6 ~ 9,13,21,47



第 161 図 知徳城 I の東側の横堀状遺構



第 160 図 昭和 23 年当時の知徳城航空写真(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)



第 162 図 知徳城縛張り図(事務局作成)

⑧下妻郡

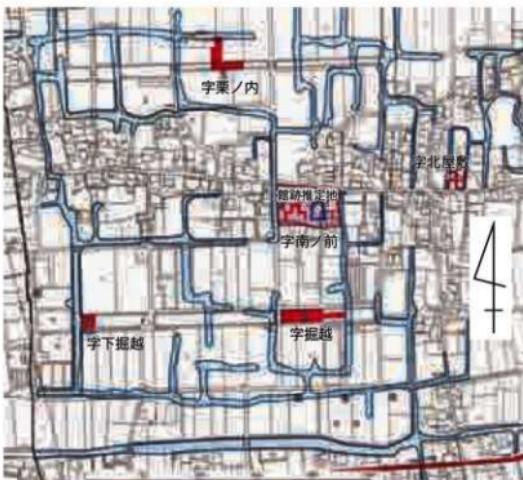
筑後 191	しもむなやかた 下牟田館	郡名 下妻郡	別称 なし	図幅名 羽犬塚(東)
		種別 平地城館	所在 筑後市井田	

【沿革】筑後市西部、井田の平地の集落内に位置する。『軍談』には「下牟田館跡」として「村中ニアリ、中富入道了三力館跡ナリ、今其七代ノ孫、農夫茂作ト云者居之」とあり、了三の妻の墓（慶安3年銘）がその宅地にあるとする。

【概要】『筑後の文化財』（文献 114）には、現在も屋敷跡には中富入道の子孫が住み、入道の墓と伝えられる板碑も屋敷地内に残されているとある。現在は周辺の地形も往時から様変わりして、かつての様子が非常にわかりにくくなっているが、昭和 23 年（1948）の航空写真等を見てみると、館跡推定地の周囲には方形の水路が数多く入れられており、周囲約 500 m四方には北屋敷や掘越などの館に間連しそうな地名も散見される。これらの水路の区画が城の範囲を示すものか否かは断定できないものの、往時の姿を示すものとして提示する。

【史料】なし

【参考文献】1,2,9,13,114



第 163 図 下牟田館周辺図（青は圃場整備前のクリーク・文献 146 掲載図を一部改変して事務局作成）



第 164 図 昭和 23 年当時の下牟田館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

筑後 197 禅院城

ぜんいんじょう

郡名 下妻郡

種別 山城

別称 なし

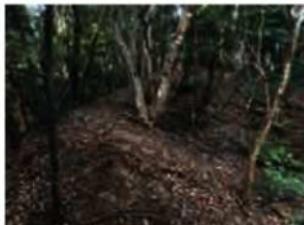
所在 みやま市瀬高町小田・廣瀬

図幅名 八女(西)

【沿革】矢部川南岸に面した標高 141 m の頂部に位置する。『旧柳川藩志』(文献 22) の「小田城趾」には明応・文亀年間の溝口常陸介と溝口帶刀、永正年間の溝口薩摩守の居城とし、「小田城趾 2 あり。一は小田の奥山にあり。一は禅院山の城趾なり。それ或は城代の城塙ならんと察す。果して溝口氏拠りしとせば旧趾を修築せしものならんか」とある。また『邪馬台国探見記』(文献 22 所収) には「禅院小田の 2 ケ所高山に山城あり。続らすに数層の濠を以てす」とある。現状ではこれ以外の地誌類に記載を確認することはできないが、入江文書の康永 2 年 (1343) には「溝口禅院城」を攻めたことが記載されており、その時代に使用されたことが推察される。

【概要】城のある山稜頂部は東西に長い緩やかな平坦地形であり、やや自然地形の形状を残すような不明瞭な平坦具合であり、その一方で、東側斜面を中心に関後世の山道等の造成の手があり、城の縄張りを読み込むことが困難であるが、城館に関連する造成の手が加えられた痕跡は如実に見ることができる。I は城内最高所の標高 141m で、東西約 30m、南北約 15m の範囲が平坦に造成されており、そこから西側へ平坦地形が続いている。I の西側 II は一見自然地形にも見えるが、南側に土壘状の高まりを持ち、北側は平坦面地形から一気に急傾斜に変化しており、人工的に造成された曲輪と見てよい。土壘には A などに小規模ながら石垣遺構も確認できる。II はそのような地形が東西約 70m 続き、その西側は一段高くなつて III の曲輪が構築される。

II から III へは土壘を利用したスロープ状の導入路がつけられている。III から西側は斜面となり、小規模な腰曲輪を設けたのち、B に堀切 1 本を設ける。また、I の北側 C にも半壊しつつも堀切 1 本が構築されている。I・II の南側斜面については、特に I の東側から南側斜面に大規模に後世の造成段が構築されており、非常にわかりづらいが、II の南側斜面にはやや間隔を置いた 4~5 本の堅堀群 D により構成される畝状空堀群が施され、さらに尾根の鞍部 E は、山道造成が激しく一見何も城郭遺構はないように見えるが、西側斜面に明瞭に 2 本の堀切とそれに併行する 1 本の堅堀が確認できる。2 本の堀切については、後世の段造成に切られながらも、東側斜面にも展開しており、総延長約 100m にも及ぶ長大なものとなっている。以上のように、当城は東西に細長く伸びた尾根の頂部に曲輪群を形成し、その周囲は土壘や堀切、堅堀群により防御を固めている。特に曲輪群南側斜面と尾根の鞍部は畝状空堀群と大規模な堀切群を構築しており、敵の攻撃に対して最大の備えを

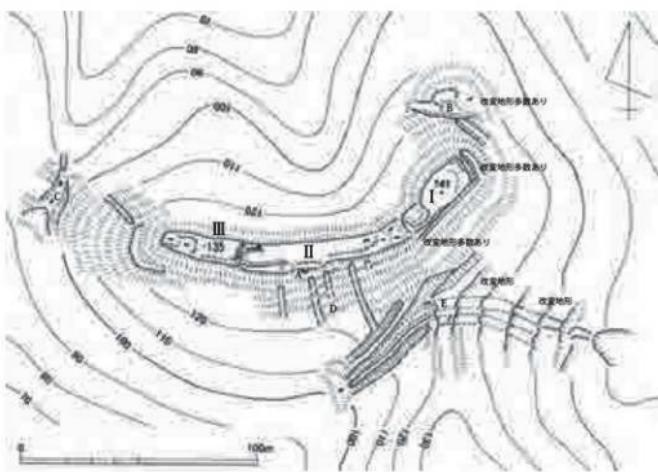


第 165 図 禅院城土壘（上）・石垣（中）・堀切（下）

行っている箇所といえよう。小田城の出城という記載がなされてはいるが、小田城よりも曲輪面積が広く、なおかつそれなりの防御構造も備えており、単なる出城という位置付けではない、つまりは小田城に代わり、溝

口城の詰城となっていた時期もあったのではないかとも考えられるが、詳細は今後の課題といえよう。

【史料】あり 【参考文献】22



第166図 禪院城縄張り図（事務局作成）

筑後 198	おだじょう 小田城	郡名 下妻郡	別称 なし	図幅名 野町(西)
種別 山城		所在 みやま市瀬高町小田		

【沿革】矢部川南岸、禅院城の南西側の山稜上に位置する。『軍談』には「小田村城跡」として「明応、文亀ノ頃、溝口常陸介、同帶刀守之」とある。『邪馬台国探見記』（文献22）には「続らすに数層の濠を以てす。或は削りて急坂となし或は大石を混じて土壁を築く如き」とあり、朝鮮式山城との類似性を指摘、溝口氏が古城を修築して拠ったものではないかとしているが、構造からみて純粹に中世山城と考え問題はない。

【概要】標高214mの頂部に、南北約50m、東西約20mの主郭Ⅰとその南に約30m×約10mの副郭Ⅱを置く。それらの周囲には低土塁が巡り、Ⅰには自然の削り残しと思われる塚状の高まりもある。曲輪はこの2面だけであるが、それらの周りには非常に厳重に堅堀と横堀が交錯するように何重にも巡る。特に最も内側の堀の土塁は石垣で固められ、A～Dに顕著に石垣が確認できる。横堀は特に南側に集中して見られ、最も多いところでは6重にもなり、



第167図 小田城石垣（上）・横堀（下）

Eには歓状空堀群のように横堀と竪堀が縦横に掘られている。大半の横堀については曲輪の南半部を取り巻くのみで、全周することはないが、最も外側の横堀はほぼ全周しており、防御遺構の薄い西側斜面にも犬走り状の遺構Fとして巡って外郭ラインを形成している。また、北側の尾根上Gには堀切が3本連続して掘られ、一番外側の堀切は武者溜まり状の掘り込みがなされたHに接続し、外郭ラインの一部を担っている。そして北側約50m地点Jには山道造成で一部削られてはいるものの、堀切1本が構築し、北側の城域を画している。一方、南側の尾根上K



第168図 小田城縄張り図（事務局作成）

にも幅10mにも及ぶ堀切1本が構築され、さらに約150m離れた丘陵上Lにも農園造成によりかなり改変が加えられているものの、堀切と思われる掘り込みが一ヶ所確認できる。

以上のように、当城は曲輪が2面のみの必ずしも広い面積の城とは言えないが、曲輪を取り巻く防御遺構は、最大6重にもわたる横堀など、異常ともいえる執拗な防御遺構の状況を見て取ることができる。このような厳重な防御遺構を備えた縄張りを持つということは、この城が地元の領主・溝口氏の単なる詰城としての性格だけではなく、築後を巡る天正年間の争乱の中で、龍造寺氏や大友氏の積極的な関与が介在したことを想定すべきかもしれない。

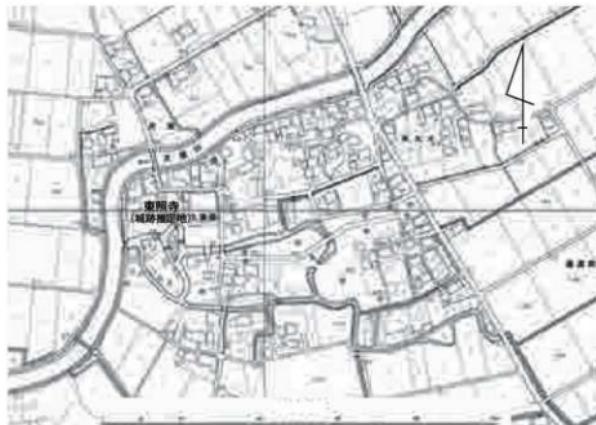
【史料】あり【参考文献】1,2,5～9,14,22

⑨山門郡

筑後 201	みやぞのじょう	郡名 山門郡	別称 なし	図幅名 柳川(東)
		種別 平地城館	所在 みやま市瀬高町大廣園	

【沿革】矢部川支流の大根川の南岸、標高4mほどの大廣園の東照寺近辺に位置する。『軍談』には「宮園村城跡」として「今村氏蒲池鑑廣ノ為ニ当城ニ住シテ敵兵ヲ防禦アリ」とある。『山門郡誌』(文献14)には「東山村大廣園字宮園在り、東西十間、部落の西南在り、天正十二年蒲池氏肥前軍を防ぐ為め今村某をして之に拠らしむ」とある。

【概要】『福岡県の城』には大根川に面した東照寺境内が城地とされているとあり、『城郭』には本丸、東二の丸、西二の丸といった地名が現地に付けられているとする。明治20年代初期頃の字図や、昭和23年の航空写真を確認すると、東照寺があった場所は南北に細長い楕円形で三分割された島状になっているのがわかる。ここが城の中心としても考えることができると一方で、やや東側には字「城畠」の他、「門田」や「射



第169図 宮園城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部変更して事務局作成）



第170図 昭和23年当時の宮園城周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部変更して事務局作成)



第171図 明治20年代初期頃の宮園城周辺字図（『筑後國山門郡大廣園村繪図』(部分)・柳川みやま土木組合蔵）

場ノ元」という城に関連する地名があるなど、城の広がりについては不明確な部分が多く、今後の調査に委ねるほかはない。

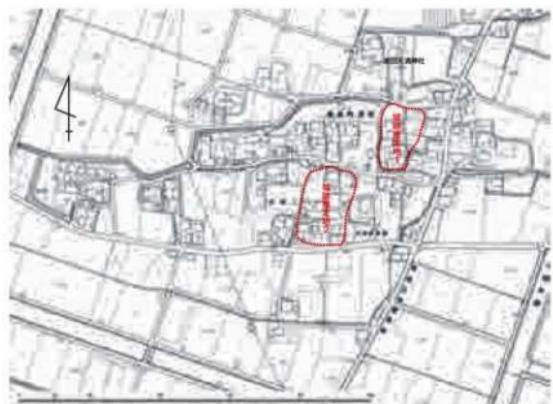
【史料】なし 【参考文献】1.2.5～8.9.14.22.27

筑後 203 濱田城	はまだじょう	郡名 山門郡	別称 なし	図幅名 柳川(東)
		種別 平地城館	所在 みやま市瀬高町濱田	

【沿革】矢部川と支流の飯江川との間の標高2～3mの浜田の集落に位置する。『軍談』には「濱田村城跡」として「同頃（天正ノ頃）田尻ノ家士田尻大蔵守之、同城（鷹尾城）ノ皆タリ」とある。「第八級所村誌」（文献38所収）には「平地ヨリ高サ二間余小丘陵ノ形ヲナス。南北掘廻リ竹叢是ニ沿フ、今此処ヲ古城ト唱へ農民ノ三家アリ」と記す。『山門郡誌』（文献14）には「大和村濱田の南にあり、東西約十間、南北二十一間、平地より一間半高し、現時竹叢にして其内に一古墳あり」とある。



第172図 明治20年代初期の濱田城周辺字図（『筑後国山門郡濱田村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）



第173図 濱田城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

跡と推定している（城跡推定地2）。ただ、地誌に竹林が堀に沿って巡っているという記載を重視すれば、明治時代の字図に、推定地2の東側の水路に沿って、竹藪の表記が確認され、また「濱田の南にあり」という記載とも合致、そこが地誌の言う城跡に当たる可能性もある。しかしながら、いずれも決め手に欠く。位置を含め詳細については今後の課題であろう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5～7,8,9,14,22,27,38

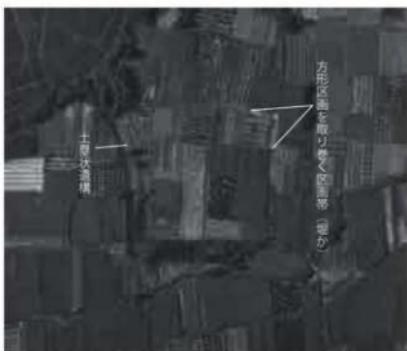
筑後 207 竹井館
たけいやかた

郡名 山門郡 別称 竹井牡丹長者館
種別 平地城館 所在 みやま市山川町尾野

図幅名 野町(西)

【沿革】矢部川支流の飯江川北岸、高田町竹飯から続く標高19mの低台地上に位置する。『軍談』には「竹井村館跡」として「牡丹長者第宅ノ跡アリ、今長者原ト號ス」とある。『城郭』では「所在地不明」とする。

【概要】竹井という地名は高田町竹飯であるが、その東隣に隣接する山川町尾野に字「長者原」があり、ここが館地と推測される。さらに現地には一辺約100mの正方形区画が実存し、方向軸は正南北に近いがやや東側に振れている。さらに地割を見ると北東隅部に幅約5mで区画を取り巻いているような状況も見受けられ、その上、昭和20～50年代の複数の航空写真では、より広い範囲を取り巻いている状況が確認でき、方形区画の外側は堀などで囲まれていた可能性を暗示している。さらに区画の西側には基底部幅約8m、高さ1～2mの土壘状遺構とその西側に堀状の窪みが確認されるが、方形区画からはやや離れ、さらに若干外側に屈曲している様子から、方形区画の時期よりも新しい段階の遺構である可能性も考えられる。みやま市の分布地図（文献152）ではここを「長者原遺跡」として周知の包蔵地となつており、「扇状地の中央部に所在、土壘が残存、土師器、須恵器が出土」とし、時期を「古代」としている。時期については明確なことは現状で



第174図 昭和37年当時の竹井館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第175図 竹井館周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

は不明ではあるが、中世ならば居館にならうし、また古代であれば、未発見の山門郡衙などの官衙遺跡の可能性も十分考えられる。いずれにせよ、これ以上の詳



第176図 竹井館土塁状遺構

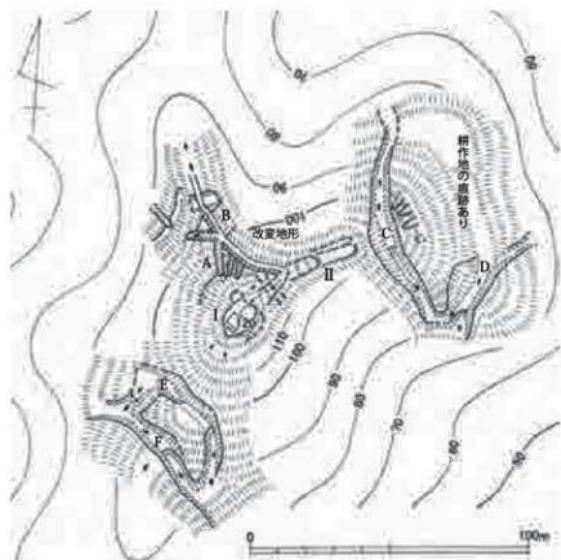
細については、さらなる調査を待たねばなるまい。

【史料】なし 【参考文献】1,2,9,22,27

筑後 208 飯江城	はえじょう	郡名 山門郡	別称 舞鶴城	図幅名 野町(西)
		種別 山城	所在 みやま市高田町舞鶴	

【沿革】飯江川が瀬高の平野へ注ぎ込む入口、川の西岸の丘陵上に位置する。『軍談』では「飯江村城跡」として花山天皇の代に武智源太春倫が居城し、後に田尻氏が肥後の攻撃に備えるために築いた砦であるとする。『旧柳川藩志』(文献22)では「舞鶴城趾」として名を挙げている。

【概要】城がある山頂には、金刀比羅宮の社殿が建つが、そこが一辺約10m四方の主郭Ⅰで、その他の曲輪といえど、北東尾根の細長い曲輪Ⅱくらいである。このように非常に小さな曲輪が2面ばかりある城であるが、その周囲には過剰なほどの



第177図 飯江城縄張り図(事務局作成)

防御遺構が確認できる。Ⅰの北側には、現状でAに堀切3本を構築し、さらに北側Bに堀切2本が山道造成で半ば損なわれながらも残されている。またⅡの東側には、全長80m、幅10m強、深さは15m近くもある巨大な堀切Cが構築され、さらにその東側に不明瞭ながらも堀切が3~4本、そして、これも大堀切Dの端部が堀切Cと接続する形で構築されている。Cの北東側には平坦地形が存在するものの、これは自然の平坦地形を後世に耕作のための造成が入れられたものであると思

われる。また I の南西側にも、堀切 E と F が端部を接続する形で構築される。E は中央部が窪んでおらず平坦になっているが、これは斜面上からの土砂の埋没によるものと考えられる。以上のように、当城は非常に小規模な曲輪面に対し、過剰なまでの防御構造が構築されており、城の防御面に非常に腐心していた様子が窺い知れ、地誌の記載にあるように、田尻氏が肥後方面からの攻撃に備えて防備を厳重にした様子を表しているのであろうか。

【史料】なし 【参考文献】1,2,4 ~ 8,9,14,15,22,27,111

筑後 211	白鳥城	しらとりじょう	郡名 山門郡	別称 なし	図幅名 柳川(東)
			種別 平地城館	所在 柳川市三橋町白鳥	

【沿革】矢部川右岸、標高約 3m の平地に位置する。近代以前の地誌には、白鳥に城館が存在するという記載は見られず、白鳥城の初出は『教委』である(『教委』で



第 179 図 白鳥之古戦場碑と水路（左）・水路に沿った土手状の高まり（右）

は『軍談』を白鳥城の参考文献として挙げているが、『軍談』には白鳥の城の記載は見られない。また、『福岡県の城』にも「白鳥城」の記載があり、白鳥城跡の石碑の存在を記しているが、これは城跡の石碑ではなく、後述する古戦場跡の石碑である。古戦場跡地が次に述べるように城跡の様相を呈しているために、古戦場跡を城跡と読み替えたのであろうか。そのためか『城郭』には「白鳥城」の名は挙がっていない。ちなみに、古戦場としての白鳥の記載としては、『山門郡誌』(文献 14) に「三椿村白鳥の東北の平野なり。天正七年五月龍造寺隆信一万余騎を率みて筑後山下城主浦池鑑廣と白鳥に戰ふ」とあり、龍造寺方と蒲池方との争いが白鳥をはじめ瀬高などであったことを記している。

【概要】白鳥の字北屋敷は、一辺約 80m の L 字形のクリークで囲まれた方形区画を呈しており、そ



第 180 図 明治 20 年代初期の白鳥古戦場周辺の字図 (『筑後国山門郡白鳥村絵図』(部分)・柳川みやま土木組合蔵)



第 178 図 姫江城遠景

の北端に白鳥之古戦場碑が建つ。『福岡県の城』では水路の周囲に土塁状の高まりが方形区画の周りを巡るように図示されているが、現状では、北西隅の觀音堂がある一角のみが残存する。明治時代の字図では墓地や藪、畠となっている。以上のように、字北屋敷の一角について、周囲に残るクリークや土手を城館の水堀や土塁として解釈するならば、城館遺構として認定することも可能であろう。しかしながら、この地に城としての伝承等はなく、確定要素にかける。この存在が城館遺構であるか否かも含め、今後の検討課題と言わざるを得ない。ただ、明治時代以降の土地利用が宅地ではなく耕地であり（集落域に設けたクリークではない）、区画の縁辺部が藪や墓地として利用されていることや（土塁などの痕跡の可能性）、また字が「北屋敷」であることなどから考えても、白鳥の合戦に直接関係するかはともかく、中世から近世期にかけてのどこかの段階で、当地が屋敷地となっていた可能性は考えられよう。

【史料】なし 【参考文献】6.7.8



第181図 白鳥城推定地周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

筑後 213	つるじょう	郡名 山門郡	別称 なし	図幅名 柳川(東)
		種別 平地城館	所在 柳川市大和町六合	

【沿革】矢部川に面した大和町六合の標高約3mの西津留の集落内に位置する。『軍談』には「同頃（天正の頃）田尻ノ家土津留因幡守、田尻石見守守之、同城（鷹尾城）ノ皆タリ」とある。『山門郡誌』（文献14）には「大和村西津留に在り、小溝廻れる水田之也。只老松一株を残すのみ」とある。

【概要】現在、津留城のある西津留集落は、矢部川の右岸（西岸）であるが、旧河道を見ると、江戸時代以前は大きく蛇行して北側から西、南へと津留城を大きく迂回



第182図 明治20年代初期の津留城周辺の字図（『筑後国山門郡六合村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

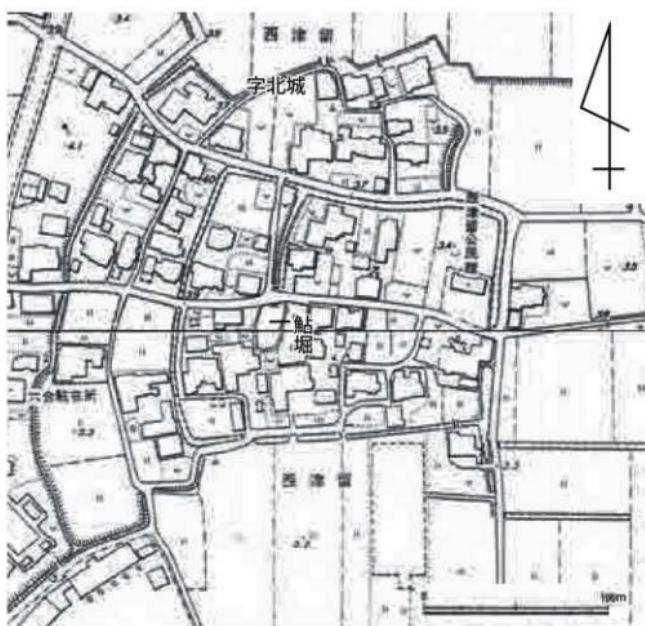


第183図 津留城の水堀と考えられる水路
回るように流れしており、現在とは逆の矢部川の左岸に位置し、矢部川に囲まれる要害の地であった。現在、西津留の集落には東西約150m、南北約100mの方形区画を取り囲むように水路が巡らされており、そこが城跡とされている。また地元では、その区画の中にも水路が分かれており、「鮎堀」と称する水路などもある。これらの水路や地割については、明治20年代初期頃の字図にも現在とほぼ同様に残されており、中世城館の水堀を踏襲している可能性が高い。
また、地元では「城内」という地名があつたり、さらに北側には字「北城」などもある。明確に断言するには難しいが、さあたっては、方形状区画を城の確定な範囲とし、字「北城」についても曲輪など城の一部であった可能性があることは指摘できるであろう。

【史料】あり
【参考文献】1.2.5
～8.9.14



第184図 昭和37年当時の津留城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第185図 津留城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

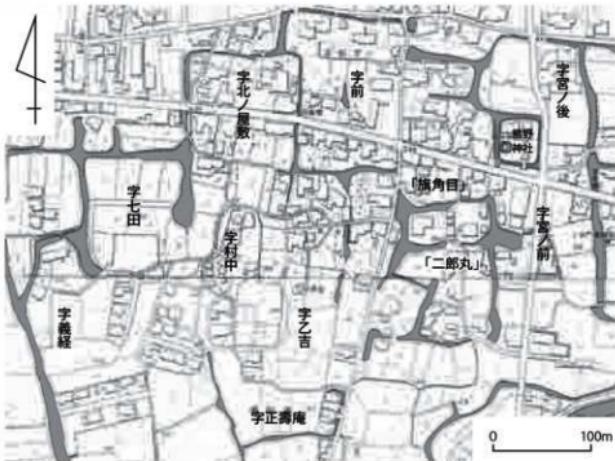
【沿革】塙塚川右岸、柳川城の東側にあたる三橋町蒲船津の標高3mほどの平地に位置する。『山門郡誌』(文献14)には「蒲池氏の支城三橋村蒲船津の東南方にあり、二郎丸といふ場所の本城二の丸趾と伝ふ。蒲池氏の臣蒲池益種城番たり。天正九年龍造寺氏の臣鍋嶋氏之を攻む。益種等奮戦及ばず戦死す。城の南方に戦死者の塚あり」とある。

【概要】蒲船津城の一角に当たるという「二郎丸」という地名は小字ではないが、地元では熊野神社の南西側にあてられている。また、周辺には「旗角目」などの関連地名もあるとする。それらの一帯

は水路が縦横に走ることで造られた方形の区画を多数確認することができ、特に「二郎丸」の位置は、水路に沿って藪が巡っており、土塁などの痕跡の可能性も考えられ、それらがかつての蒲船津城の水堀や土塁などを反映したものである可能性は考えられる。近くの字「北ノ屋敷」なども蒲船津城に関連し



第186図 明治20年代初期の蒲船津城周辺字図(『筑後国山門郡蒲船津城絵図』(部分)を一部改変して事務局作成)



第187図 蒲船津城周辺地形図(柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成)

た地名の可能性がある。さらに現状残された水路の多くも、少なくとも明治20年代からは、若干埋められたものを除いてはほとんど変わっておらず、中世まで遡る可能性を残している。しかしながら、城としての根拠が地名のみであり、およその位置以外の、明確な城の位置や範囲などの詳細情報は不明であり、現状の情報では知ることは難しい。

【史料】あり

【参考文献】2,6,8,9,14,22



第188図 昭和23年当時の蒲船津城周辺航空写真
(国土地理院撮影)

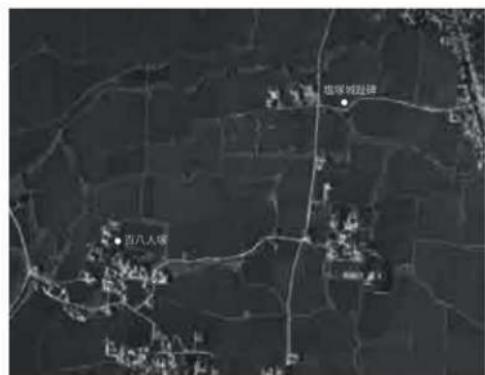
筑後 218	しづつじょう 塩塚城	郡名 山門郡	別称 なし	図幅名 柳川(西)
		種別 平地城館	所在 柳川市大和町塩塚	

【沿革】塩塚川左岸、塩塚の集落の西側の平地に位置する。『軍談』では「鹽塚村城跡（直茂譜云、佐留垣城）」として「同頃（元亀天正年間頃）塩塚石見守、鎮並ノ為ニ守之、今此處ヲ塚ト云」とあり、『山門郡誌』（文献14）には「大和村塩塚の西方に在り、本丸は東西十五間、南北十四間半」とある。

【概要】現在、塩塚集落の西方の水田中には「塩塚城趾」の碑が建っている。確かにクリークに囲まれた一角ではあるが、『城郭』では水田中にあることなどから、城跡としてはふさわしくなく、塩塚集落内かあるいは『軍談』の言うように佐留垣城のことを指しているのではないかとしている。しかしながら、明治20年代の字図を参考に字を落とし込んでみると、石碑がある場所は字「北城」となっており、塩塚城に関連するような地名の場所にある。また、石碑の南西に所在する宗樹寺には「蒲池氏百八人塚」（柳川市指定史跡）があり、伝承では天正9年（1581）5月28日、蒲池統安が



第189図 塩塚城跡碑（左）・百八人塚（右）



第190図 昭和37年当時の塩塚城周辺航空写真（国土地理院撮影
写真を一部改変して事務局作成）

守る柳川城が落城した際、蒲池鎮並夫人玉鶴姫ほか108人は統安の次男・鎮貞が守る塩塚城へ逃れたものの、6月1日、龍造寺隆信と田尻鑑種によって落城、その108人も殺され、宗樹寺の前に合葬されたのが「百八人塚」であるという。塩塚城はこの「百八人塚」の北東約200mの場所と推測されると現地の解説板には書かれている。その推測地は、百八人塚と塩塚城趾碑とのちょうど中間地点にあたる（字は北城）。そこに方形に巡るクリーク（現在は消滅）なども確認でき、城地として想定できる可能性は十分に考えられる。

以上のように、塩塚城の位置は、明確な場所までは不明ではあるが、推定地として塩塚集落の西方、字「塚屋敷」から「北城」の間のどこかにあったとしておくのが、現状では最も妥当な判断であると思われる。

【史料】なし

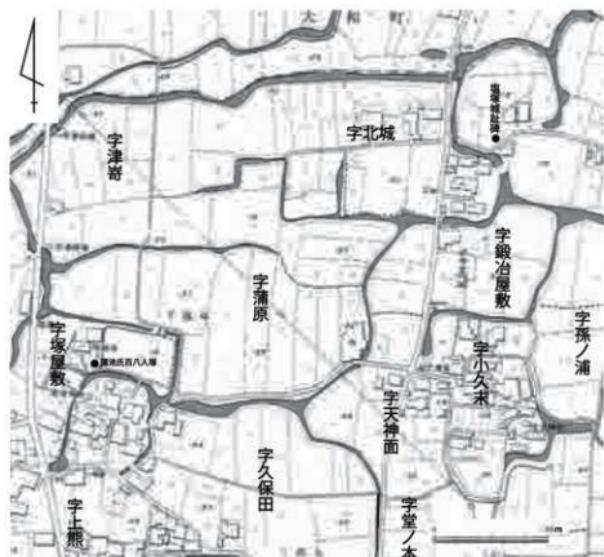
【参考文献】1.2.5～

7.8.

9.14.22



第191図 明治20年代初期の塩塚城周辺字図
〔筑後国山門郡塩塚村絵図〕(部分)・柳川みやま土木組合蔵)



第192図 塩塚城周辺地形図
(柳川市教育委員会提供図(平成5年測量)を一部改変して事務局作成)

⑩三池郡

筑後 220 いまどくじょう
今福城

郡名 三池郡
種別 丘城

別称 豊福城
所在 みやま市高田町今福

図幅名 柳川(東)

【沿革】矢部川支流、飯江川左岸にある今福池の西側の「城山」と呼ばれる小高い丘陵上に位置する。『軍談』には「今福村城跡」として正治元年(1199)に三毛損津守が築城、翌年大間城に移り、その代わりに家臣の小山左衛門尉に守らせたとする。また、『福岡県の城』には出典不明ながら、天文19年(1550)7月に蒲池武藏守鑑盛が田尻伯耆守親種と連合し、数千余騎で三池氏の家臣小山淨栄入道が守る当城を攻め、三池氏の本城、大間城ともども落城したとする。

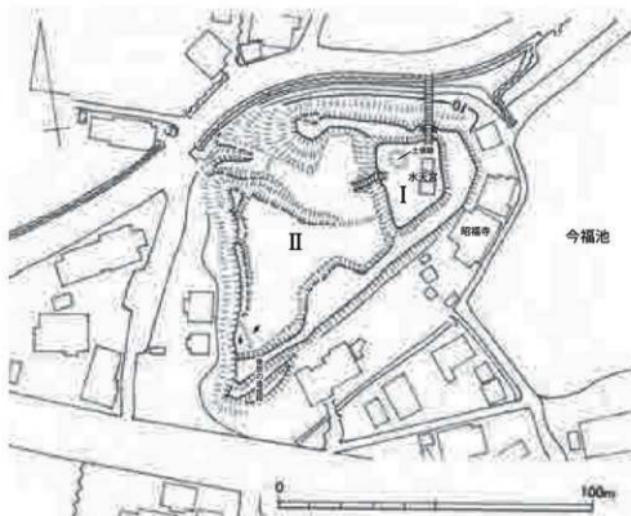
【概要】現在、城山の最高所Iには水天宮が祀られており、一辺約30m四方の平坦面となっている。また、標高が低いということもあって、後世の開墾などの造成が著しく、丘陵全体にわたって展開する平坦面の多くは、後世の造成に伴うものと考えられ、どれほど城の遺構が残っているのか判断するのは非常に難しい。南東側斜面も、寺院や住宅があり、かなり削られてしまっているようである。ただ、大々的に改変がなされていないものとすれば、最高所Iを主郭とし、その西側には広大なIIの曲輪が副郭として展開していた可能性も指摘できる。ただ、IIの西側にある土壙状の高まりや、IIの北側の虎口とも見られそうな出入口についても、城館遺構と断定することは困難であり、むしろ後世の改変によるものと見た方が良いかもしれない。詳細は今後の調査に委ねるほかはないだろう。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4 ~ 7,8,9,15,22,23,111



第193図 今福城遠景



第194図 今福城縄張り図(事務局作成)

筑後 221	飛塚城 とびづかじょう	郡名 三池郡	別称 田尻城・田尻飛塚城	図幅名 柳川(東)
		種別 山城	所在 みやま市高田町田尻	

【沿革】今福城の東側にある丘陵上に位置する。『軍談』には「田尻村飛塚城跡」として「田尻家代々ノ居城也、永禄中鷹尾城ニ移ル」とある。『旧柳川藩志』(文献22)には鷹尾城へ移った後は、田尻左京が城番として居城したとする。

【概要】森山宮背後の標高91mの頂部に城館遺構が確認される。城の北側には、大正13年(1924)および昭和2年(1927)の竹林新植の記念碑が建っており、この時期に城のある一帯が、大々的に改変されていることが想定され、城の内部も小規模な段造成が細かく無数に造られている。しかし、およその城の姿は残されている。

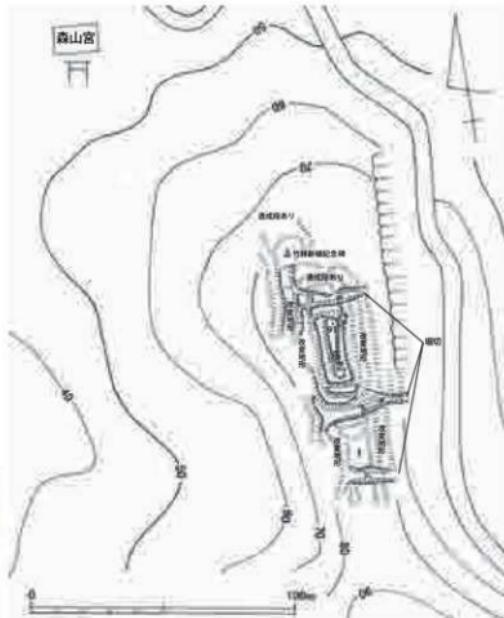
頂部には南北30m、東西10m弱の曲輪を置き、その北側には1本、南側には2本の堀切を構築する。曲輪や堀切の周りには小段が数多く造られているが、そのほとんどは竹林などに伴う後世のものであろう。以上のように、当城は田尻氏の一時的な居城であるとはいえ、必ずしも大きな城ではなかったものと想定される。

【史料】あり

【参考文献】1,2,5～7,8,9,15,22,
23,111



第195図 飛塚城遠景



第196図 飛塚城縄張り図(事務局作成)

筑後 223	内山城 うちやまじょう	郡名 三池郡	別称 吉野内山城	図幅名 大牟田(東)
		種別 丘城	所在 大牟田市吉野	

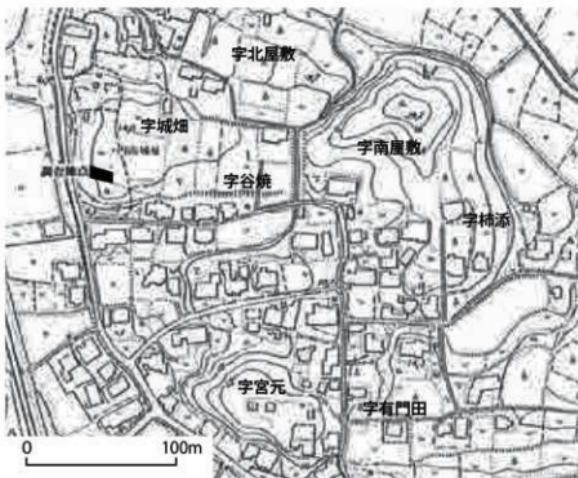
【沿革】有明海に注ぎ込む隈川の南岸、標高14mの低台地上に位置する。『軍談』には「豊永村内山城跡」として「天正中、豊持和泉守、三池上総守ニ属シテ守之」とある。また、『三池郡誌』(文献15)には「今城址と思はれし所畠地になつて居る」とある。なお、『全集』には大牟田市内

に内山城が2つ掲載されているが、同一の城を指していて、重複である。

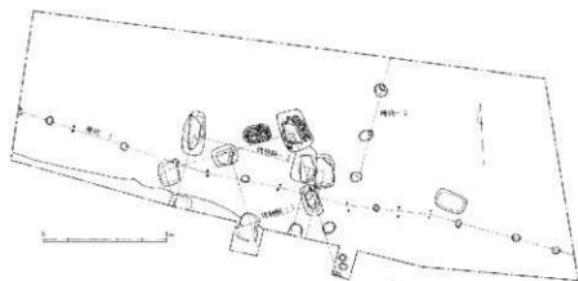
【概要】隈川とその支流が合流する両川に挟まれた標高14mの低台地上は、字「城畠」で、内山城があった所と推測されており、一辺50mほどの方形の平坦面が広がっている。その南西隅では昭和57年（1982）に発掘調査が行われており、小面積ではあるが礎石建物2棟、柵2列が検出されていて、内山城に関連する城館遺構とみなすことができる。このように確実に内山城の遺構が残存していることが判明しているものの、後世の改変が大きく入った耕作地などが周囲に広がっており、明確な城域は不明である。字城畠の東に南北に段丘を切り通す道路が堀切の痕跡の可能性が指摘されていたり

（『城郭』）、字南屋敷には竪堀と土塁が残されていることなども指摘されているもの（文献98）、いずれも明確な証拠を欠いており、断言することが難しい。地誌の記載にしても、現在は畠地となっているとしており、発掘調査が行われた「城畠」に城域を限定している可能性もある。いずれにせよ、詳細な発掘調査を待つよりほかないとえよう。

【史料】なし 【参考文献】1.4～8.9.15.22.98



第197図 内山城周辺地形図（文献98掲載図を一部改変して事務局作成）



第198図 内山城跡礎石建物・柵平面図（文献98）

筑後 229	だいまじょう 大間城	郡名 三池郡	別称 大間館・三池氏館・平野城	図幅名 大牟田(東)
	種別 平地城館	所在 大牟田市三池		

【沿革】大牟田市の東にある大間山（標高225m）の西に所在する大間神社周辺一帯に位置する。『軍談』には「大間村城跡」として「八幡社ノ東ニアリ、三池撰津守師貞此城ヲ築キ、今福城ヨリ移テ居之、子孫代々守之」とあり、さらに「此城四方共ニ地下リ、中央ニ五六十間四面耕ザル地ア

り、居間ノ跡也ト云、其南ニ又同シ高サナル所アリ、諸士第宅ノ跡ト云、東ノ下地ニ城地ノ跡アリ、御館掘ト云」とある。また『大牟田市史』（文献19）には「三池系図」を引き、城の三ノ丸に若宮八幡宮を建立したことが記される。『旧柳川藩志』（文献22）には「三池郡大字大間の西にあり」とし、「又館辻元小路など云ふ字あり」と記す。なお、『三池郡誌』（文献15）には三池師貞8代の孫の鑑速と紀伊守親久兄弟は、大友方に属したが、永禄10年（1567）9月に龍造寺方に攻められ、兄弟共に戦死したとする。

【概要】大間神社付近の字が古城であり、神社地が周囲よりも一段高くなっていて、『大系』や『城郭』では、そこに方形区画の城地が想定されている。神社周辺については、開発などが入り、かなり状況が様変わりしており、なただ、昭和23年（1948）の航空写真を見るような状況が読み取れ、城域を反映している可能。発掘調査した大間遺跡D地点では、調査区一帯も検出され、13世紀を中心とする大量の土師器が大間城に入ったのが正治2年（1200）とされ思われる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4～8,9,15,19,22,103



第199図 昭和23年当時の大間城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成。白破線は城の推定範囲を示す。）

筑後 230 みいけ やま じょう 郡名 三池郡 別称 舞鶴城・今山岳城・今山城 図幅名 間町(西)
種別 山城 所在 大牟田市今山・熊本県玉名郡南関町久重

【沿革】大牟田市街の東、熊本県との境に聳える三池山（標高388m）から県境の稜線上を北へ進んだ先にある三池神社境内周辺に位置する。『軍談』には「今山村三池山城跡」として「三池氏代々ノ詰ノ城ニシテ、要害堅固ノ山城也、今勢溜り馬場等存在セリ」とある。

【概要】三池神社境内一帯が城域で、神社社殿があるⅠが城内でも最高所で、主郭であったとみられる。Ⅰは一辺約30mの曲輪で、周囲に石垣が構築されるが、その多くが神社造成に伴うものであるが、Aには大型の石を並べた石列が見られ、城に伴う可能性の石垣かもしれない。そしてⅠの東側から北側にかけて曲輪が取り巻いている。北側のⅡには「三池」の名の由来となった三つの池があり、現在でも水が溜まっている。Ⅱの北東側にも同規模の曲輪Ⅲを置き、その北側斜面を中心に、10本を越える豊堀群が一部横堀と接続する形で敵空状堀群として構築される（図中B）。また、北西尾根上Cには堀切1本を構築し、北側の城域を画している。また、Ⅰの南東側にも不鮮明ながら堀切Dを設け、その先に不明瞭な平坦地形が続き、その先に東西に細長い曲輪IVを置く。IVの南西

側 E・F には大型の堀切 2 本を構築して三池山側からの攻撃に備えるとともに、南側の斜面に対しでは、G に 13 本前後の堅堀群を横堀と接続させ形で畝状空堀群を構築している。この畝状空堀



第 200 図 三池山城主郭 I の「三池」(左)・三池山城堀切(右)

に連動する形で曲輪 IV の南端部にも低土塁が確認され、小規模な石積みも見られるが、石積みについては曲輪 IV の中央部に近世末期の石切り痕跡があり、その石切りの際に生じた破石を積んでいるようであり、土塁については問題ないものの、石積みについては城との関係は微妙である。そして IV の北東側にも H に畝状空堀群、隣接して堀切 J を構築する。J の堀底部分は堀が二重になっている。J の東約 50m 地点 K にもさらに堀切 1 本を構築し、東側からの攻撃に備えている。以上のように当城は東西約 300m 弱、南北約 200m の規模であり、筑後南部の中世山城としては最大規模のものといえ、三池郡一帯を押さえていた三池氏の本城にふさわしい城といえるのではないだろうか。

なお、II の曲輪面において、12 世紀代の中国製陶磁器なども散布する状況が見受けられた。三池宮があることからもわかるように、城があった以前においても神社や山寺のような山岳宗教遺跡がこの地にあった可能性も指摘でき、そのような場所に戦国時代に山城が築城されたと言えよう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5 ~ 8,9



第 201 図 三池山城縄張り図(事務局作成)

2 近世城館

筑後 K1 松崎陣屋 まつざきじんや 郡名 御原郡 別称 松崎館・松崎城 図幅名 鳥栖(東)
種別 陣屋 所在 小郡市松崎

【治革】宝満川東岸の標高約16mの低段丘上に位置する。出石藩小出家出身で久留米藩二代藩主・有馬忠頼の養子となっていた有馬豊範が、寛文8年（1668）に御原郡松崎に一万石を分知、久留米有馬藩の支藩として、松崎の地に同11年頃に陣屋を構えたものである。その後、貞享元年（1684）に奥州久保田藩の家督相争いで巻き込まれ、豊範は領地没収、廢城となった。

【概要】近世秋月街道の宿の一つ、松崎宿は有馬豊範が松崎入部に際して、整備を行った宿場町であるが、その西側の字「城山」に陣屋があったとされ、現在は三井高校となっている。松崎宿から街道を西に分岐する道筋は、桜馬場と呼ばれ、豊範が山桜を植樹して整備をしたとされている。

このように松崎宿や桜馬場、そして陣屋のおよその場所については判明しているものの、陣屋の規模や構造、範囲などについては判然としない。『福岡県の城』などでは松崎宿の西側の字城山の台地一帯が陣屋で、台地の周囲には内堀、外堀、土塁などを完備した城郭であったとする。確かに台地の南西側の池は堀幅のように細長く蛇行し、「城近堀」と城に関係がありそうな名称まで付けられている。しかし、台地全体を陣屋とみた場合、一万石の陣屋としてはあまりに広く、その範囲に疑念を抱かざるを得ない。また、三井高校のグラウンドにおいて福岡県教育委員会により発掘調査が行われ、直線の素掘りの溝が検出されており、陣屋に関する遺構であるとされてはいるものの、溝がどのように配置されていたか全くわからないため、陣屋に関する遺構かどうかかも判断がつかない。以上のように、当陣屋はおよその場所については判明しているものの、現状においては規模、構造などはよくわかっておらず、詳細は今後の調査に委ねるほかはない。

【史料】あり 【参考文献】1～3,5,7,8,51,116



第202図 昭和23年当時の松崎陸屋周辺航空写真(国土地理院提供写真を一部改変して事務局作成)

筑後K2 赤司城
あかじょう

郡名 御井郡
種別 平城

別称 なし
所在 久留米市北野町赤司

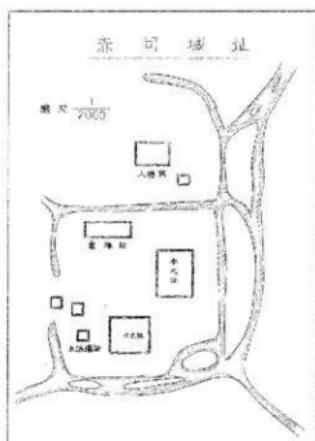
図幅名 鳥栖(東)

【沿革】筑後川支流の陣屋川と、陣屋川に合流する池田川にはさまれた場所に当たり、池田川の右岸に面した標高約10mの平地上に位置する。『軍談』には「赤司村城跡」として「平城也、縱廿間、横十七間、二ノ丸縱四十五間、横廿三間、東南ニ池アリ、西北ニ廣七間、深七尺ノ堀アリ」とし、『寛延記』を引き、草野太郎家清嫡男が在城し、その後大友方の上光駿河守、野上左京が守備したとする。さらに慶長5年（1600）の田中吉政の時代には、支城の一つとして田中左馬尉清政が知行高2,840石、城付知行1万石として入城したと記す。その後、元和の一国一城令にて廢城となったと考えられる。

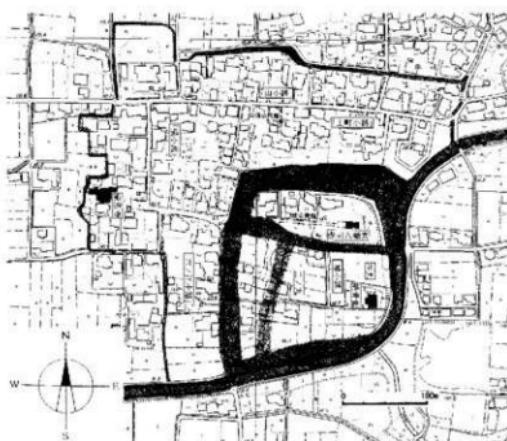
【概要】池田川が大きく蛇行する湾曲部の字「城」に城が構えられたようであるが、現在は水田や納骨堂となっており、繩張りの詳細を知るのは難しい。『郷土資料集』（文献24）には第203図のように、赤司八幡宮の南側の池田川にはさまれた空間に本丸、二ノ丸、倉庫、太鼓櫓などが想定されている。また、木島孝之の復



第203図 昭和23年当時の赤司城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第204図 赤司城址図（文献24）



第205図 赤司城復元図（文献127・木島孝之作成）

元案によれば（文献 127）、城の中心部は「本丸」「二ノ丸」と地元で呼ばれ、字「城小路」などの地名が残り、赤司八幡宮境内をも含めた一辺約 200m 四方が池田川と堀によって囲まれた空間を城域としている。さらにその北西側に、「城小路」「横小路」「六ノ江小路」などの地名があつて、横矢のような折れを持ちながら水路が周りを巡っており、その内部に家臣・与力の屋敷地を想定している。以上のように当城は赤司八幡宮およびその南側の一角を中心とし、池田川右岸一帯に広がりを見せていたことがわかる。

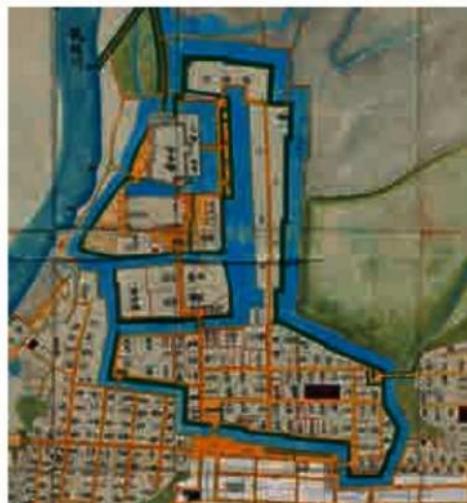
【史料】あり 【参考文献】1～3.5～9,17,24,87,127

筑後 K 3 久留米城	くるめじょう	郡名 御井郡 别称 篠原城・笠原城・久留目城・來自城・篠山城 図幅名 久留米(西) 種別 平山城 所在 久留米市篠山町
-------------	--------	--

【沿革】筑後川左岸の標高 23 m の丘陵上に位置する。『軍談』には永正年間に初めて築城したがほどなく落城、天文年間初頭に再び御井郡都司某が城を構え、天正年間初頭に高良山座主良寛が弟麟圭を城主にしたとある。天正 15 年（1587）には筑後北部 7 万 5 千石を与えられた小早川（毛利）秀包が当城に入城して居城としたが、慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦により改易、筑後柳川に入部した田中吉政の柳川城の支城となった。当城には吉政の嫡子・吉信が入り、同 11 年に吉信が死去した後は、坂本和泉さらには田中主水が入城している。その後、元和



第 206 図 明治初期の久留米城本丸
(写真提供: 久留米市)



第 207 図 天保年間の久留米城（『天保時代久留米城下地図』（部分）・久留米市蔵）



第 208 図 久留米城本丸南側石垣



第 209 図 久留米城本丸南虎口の石垣

の一国一城令にて破却されたと推測されるが、元和6年（1620）に田中家が無嗣につき除封、翌7年に有馬豊氏が21万6千石の領主として丹波福知山から久留米に入城、大改修の末、寛永8年（1631）に城堀が完成した。

久留米藩有馬家は幕末まで存続し、明治時代初頭までは城の構造物は残され古写真なども残存している。しかしながら、明治5年（1872）に二ノ丸、同8年に本丸も解体され、本丸跡には篠山神社を建設、二ノ丸以下の堀などは全て埋め立てられ、工場群となり今に至っている。

【概要】城の縄張りは、現在久留米の市街となっており、本丸を除いてはほとんど知ることが難しい



第210図 延宝年間の久留米城下（『延宝八年製図久留米市街図』（久留米市蔵））

状況となっている。

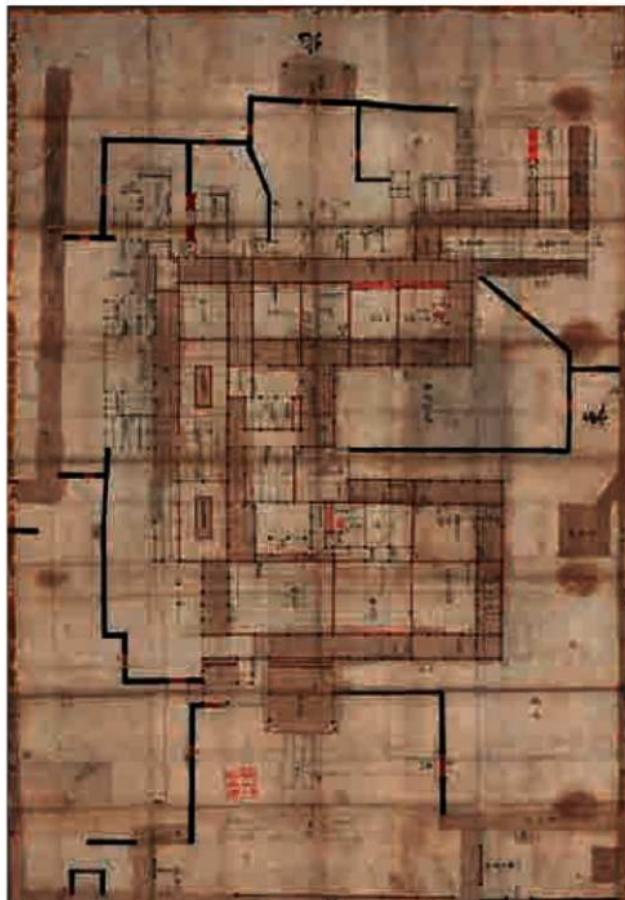
久留米城や城下を描いた絵図には、延宝 8 年（1680）の状況を描かれたとするものと、天保年間の様子を描いたものの 2 種類が存在し、それらなどを元に復元することができる。筑後川南岸に面した丘陵上に北から、本丸、二ノ丸、三ノ丸が並列し、その南側に外郭、そして城下町が展開している。本丸の北側には、馬出状の出丸が構築、本丸のすぐ東隣には、小早川秀包時代に造られたとされる「蜜柑丸」が置かれていた。本丸は南北八十六間半、東西五十三間、周囲には隅櫓を構築し、それらの間を多間櫓が繋いでいた。

隅櫓の内でも特に大きな異櫓は三層の大型櫓で、天守

の代わりをなしていた。内部には御殿を築造、二ノ丸、三ノ丸には大身の家臣屋敷、外郭には上級家臣の屋敷が建てられ、その外側に下級武士および町人の居住区が広がり、久留米城下を形成していた様子がわかる。

【史料】あり

【参考文献】1 ~ 9, 16, 65, 127



第 211 図 御城本丸絵図（篠山神社蔵）

【沿革】筑後川下流域、かつては筑後川が大きく蛇行していた川の左岸に面した城島の市街地に位置する。『軍談』には「城島館跡」として「本丸東西三十八間、南北三十八間、外輪二堀アリ、口ノ廣五十間、二ノ丸東西四十八間、南北三十二間、南方川アリ、口廣十間、東方二堀アリ、口廣十間」とあり、天正11年（1583）に西牟田家周が築城、同14年に薩摩島津方に攻められ、翌15年には立花氏家臣・薗野玄賀が守ったとする。関ヶ原合戦後の田中吉政柳川入部に際し、支城として家臣・宮川讚岐守が6,800石で居城したとする。また、同19年には宮川讚岐守を継いだ宮川大炊が当主・田中忠政に手討ちにされ、それに反発した一党が当城に立て籠もるという事件が勃発、この事件により忠政は大坂の陣に遅参、後の領地没収へつながる一因となった。

【概要】現状では、城跡は学校、水田、宅地化されてしまい、明確な遺構は水堀の一部が残るのみとなっている。江戸時代の絵図と地籍図から城郭構造を復元した木島孝之の案（文献127）に従い、構造を説明する。字「本丸」とされる一角は現在城島小学校となっているが、ここは正方形の区画を保っており、かつては主郭（曲輪①）が置かれた場所とされる。①の周囲には曲輪②が設けられ、その周囲には土塁と外堀が巡る。その東側には城島の町家空間が展開していた。なお、曲輪②の空間には「屋敷下」「城内」「鉄砲町」の小字が残り、土分の屋敷地であったとみられている。以上のように当城は、方形に堀が巡らされた主郭を中心として、その周りに曲輪を配し、東側には城下町家を形成したと見ることができる。これらのレイアウトは田中氏段階に



第212図 昭和23年当時の城島城跡周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)



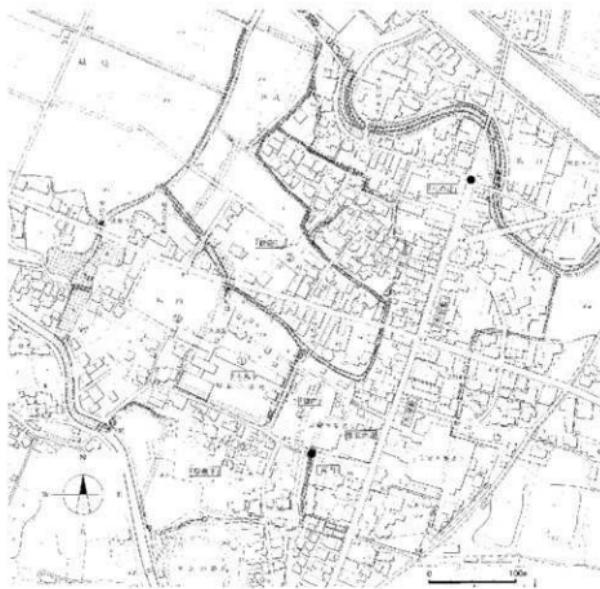
第213図 『城島城絵図』(写)(九州大学附属図書館付設記録資料館蔵「松垣文庫」のうち)

生み出されたものであろう。

なお、『新考三瀬郡誌』(文献 20)には、字本丸神社境内に末社小一郎神社があり、城島城の城将・城島小一郎を祀ったもので、毎年旧 11 月 16 日に祭典が行われていると記す。

【史料】あり

【参考文献】1 ~ 3.5 ~
9.20,41,127



第 214 図 城島城跡推定図（文献 127）

筑後 K 5	えのきづじょう 榎津城	郡名 三瀬郡	別称 なし	図幅名 羽犬塚(西) / 佐賀南部(東)
		種別 平城	所在 大川市榎津	

【沿革】筑後川下流の川港、榎津の町中、標高約 3m の城山に位置する。築城は明らかではないが、田中吉政時代には支城に取り立てられ、寄合組頭の榎津加賀右衛門が知行 3,260 石で入城した。明確ではないが、おそらく元和の一国一城令にて廃城となつたものとみられる。

【概要】榎津の町中、字長町の一角に「城山」と呼ばれ、現在公園と墓地になっている場所が城跡とされている。「城山」といいつつも全くの平地であり、平城であると推測されるものの、現状では城の痕跡を見ることは非常に難しい。しかしながら、明治 20 年代の字図には、城山公園の一角は東側を除く三方を水路で囲まれており、これが

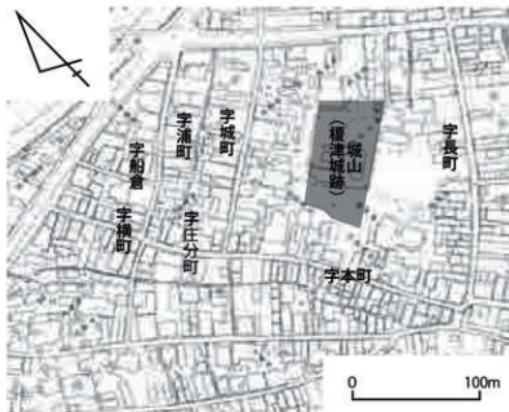


第 215 図 明治 20 年代初期の榎津城周辺字図（『筑後國三瀬郡榎津町之図』（部分）・大川市教育委員会蔵・柳川古文書館保管）

城の周囲に存在した水堀の痕跡と見ることもできる。これより、水堀に囲まれた南北約100m、東西約50mの規模の曲輪を有し、櫻津の町中に埋没するように、当城は立地していたものと想定される。

【史料】あり

【参考文献】5.8.9.28.127



第216図 櫻津城周辺地形図

(大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成)

筑後K6 福島城

ふくしまじょう	郡名 上妻郡	別称 なし	図幅名 八女(東/西)
K6	種別 平城	所在 八女市本町	

【沿革】矢部川の北岸、花宗川と山ノ井川に挟まれた標高約27mの平地、現在の福島市の市街地に位置する。『軍談』には「福島城跡」として「本丸東西三十八間、南北二十一間、二ノ丸東西三十五間、南北三十二間、南面也」として堀が三重になっていると記す。

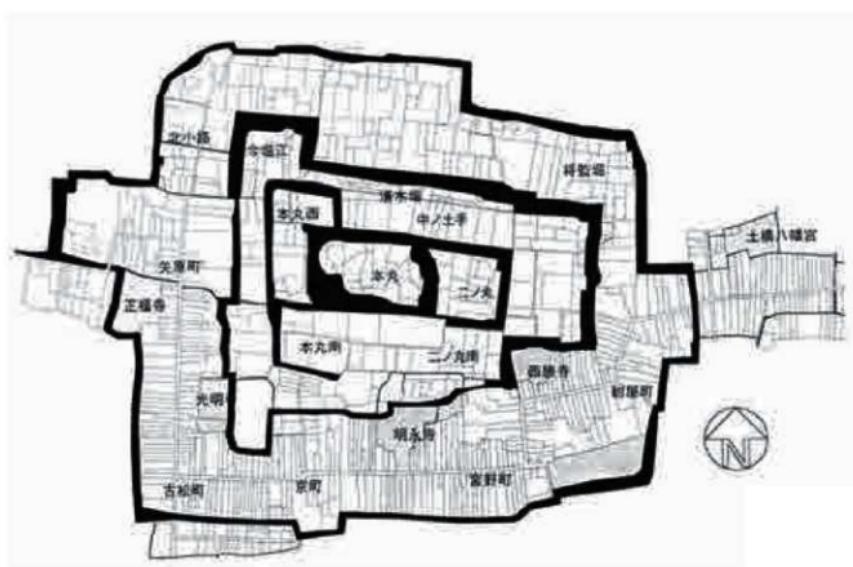
また、筑紫広門が最初に築城し、後に田中吉政が大改修し、次男久兵衛安政（正しくは三男康政）を3万石で置いたが、元和の一国一城令、田中家断絶により廢城となったことを記す。廢城後、福島は在郷町として現在に至っている。

【概要】福島城の往時の姿については、福島城を描いた絵図（第219図）や現在の地割などから類推されている。

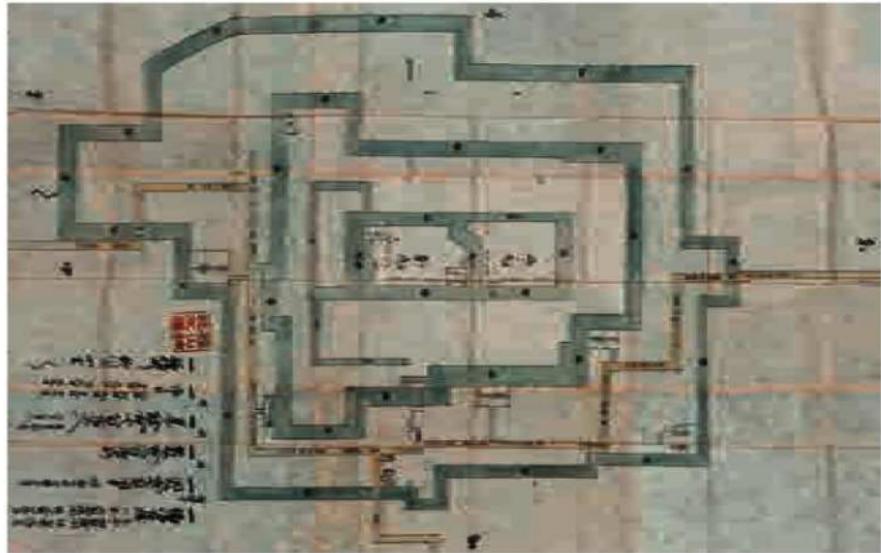
現在八女公園になっている場所が本丸、その東側に二ノ丸が位置し、それぞれ小字が残されている。絵図では本丸の北西隅と南東隅に櫓台（矢倉臺）が記されており、現在、北西側のものとみられる櫓台跡が高さ5mほどの高まりとして残されている。八女市教育委員会所蔵資料に福島城にて出土したとされる瓦瓦があり（かつては軒瓦もあったというが現在は所在不明）、この大櫓に葺かれた可能性が高く、大型瓦葺櫓建物があったことが想定される。絵図には本丸と二ノ丸との周囲には、水堀が記されており、さらにその周りを二重の水堀が巡り、堀の墨線は要所で横矢をかけら



第217図 福島城本丸跡の櫓台跡（上）・
福島城の水堀の名残（福島八幡宮・下）



第218図 福島城復元図（文献125）

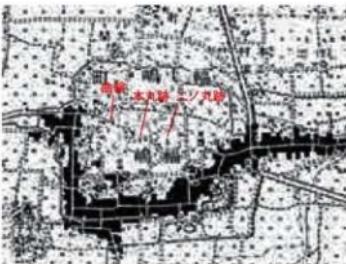


第219図 福島古城図（篠山神社蔵）

れるように張り出し部分や、屈曲が何箇所も設けられ、「惣構」の形態を呈している。これらの水堀は現在、福島八幡宮近くのものを除いてはほとんど埋められたり、狹められて水路となってしまっているが、明治 30 年代の地図には本丸、二ノ丸周辺の水堀は埋まりつつも痕跡をとどめていたことがわかる。また、明治期の町並の状態から、本丸周辺つまり二重目の濠の内側には土分、その外側に町家というよう住み分けがなされていた可能性も指摘されている（文献 127）。

以上のように、福島城は外周を含めると東西約 1 km、南北約 700m と田中氏の支城としては極めて広大で、支城の中でも藩主の子が入ったことでもわかるように藩内でもかなり重視された城であったことがわかる。また田中氏の本城であった柳川城の縄張りと比較しても、①方形の形状を持つ本丸・二ノ丸が並列する、②本丸、二ノ丸は水堀を伴う巨大な曲輪で重層的に囲郭、惣構が形成されている、③惣構を形成する曲輪の壁面には形骸化した横矢掛けがいくつも設けられている、④本丸隅部に天守台（天守曲輪）を張り出している、等の共通性が指摘されており（文献 127）、そこからも福島城の田中氏支城における重要性が窺い知れよう。

【史料】あり 【参考文献】1～3,5～9,13,34,125,127



第 220 図 明治期の福島城周辺地図（陸地測量部
作成 1/20,000 地形図「筑後福島」（明
治 33 年測量・福岡県立図書館提供）



第 221 図 昭和 23 年当時の福島城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

【沿革】瀬高町松田と山門の境にあたる標高9mの平地に位置する。『軍談』には「松延村城跡」として「方二町余」とあり、天正12年(1584)に樺島式部がこの城にて龍造寺方の攻撃を防ぎ、蒲池鑑廣を助けたことなどを記す。田中吉政の時代には、小早川家の元重臣、松野主馬を1万2千石の知行をもって入城させている。元和の一国一城令もしくは田中家断絶により廃城となったとみられる。

【概要】城跡一帯については、中心部分が若干の微高地になっている他は、水田化してしまい、詳細な縄張りはわからなくなってしまっており、地割を元にした復元がなされている(文献127)。字「本丸」「東二ノ丸」「西二ノ丸」「城内」「北三ノ丸」「南三ノ丸」「今屋舗」などがあり、その一帯に城があったものと推測される。それらの中心部分の字「本丸」には不整円形を呈した水路に囲まれた高台①があり、そこが主郭であったとみられる。周りの水路は内堀を反映したものであろうか。①の周囲には曲輪②が取り巻いており、全体として方形の形状を呈する。②の西側にも水路で囲まれた曲輪③があつたものと思われる。③の南側には字「南三ノ丸」が位置しているが、ここまで城域とするにはやや広い感があり、検討を要する。なお、②の北側の濠の名残をとどめると思われる水路は「しゅめんど川」といい、松野主馬の「主馬殿」が訛ったものであるという(文献127)。ただ、「山門郡誌」(文献14)には「主馬殿川」は城跡の南方にある小川であるとしており、現在の伝承と位置が異なっている可能性も考えられる。また、九州新幹線建設に伴う発掘調査などでは城内とみられる箇所から多くの瓦が出土



第222図 明治20年代初期頃の松延城周辺字図(『筑後国山門郡松延村繪図』と『筑後国山門郡山門村繪図』(共に部分・柳川みやま土木組合蔵)を合成して事務局作成)



第223図 昭和23年当時の松延城周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)

している（文献 53・95）。コピキ B 技法（鉄線切り）による軒丸瓦の他、様々な道具瓦も出土しており、発掘担当者は江戸時代中期以降の松延天満宮に伴うものではないかとしている。しかしながら、桐文と思われる鬼板瓦なども出土しており、出土箇所も天満宮から離れた松延城内からも出土しているため、城に関わる可能性もあり、今後検討する必要があるだろう。

以上のように、当城は方形の水堀により主郭の外側を大きく取り囲んだ、一種の懸構を呈する大規模な城館であつたことが推測される。

【史料】あり

【参考文献】1.2.6～8.9.14.22,

53.94.95.127



第 224 図 松延城推定図（文献 127・1973 年の地形図使用）

筑後 K 8 鷹尾城

郡名 山門郡	別称 高尾城	図幅 柳川(東)
種別 平城	所在 柳川市大和町鷹ノ尾	

【沿革】矢部川右岸の鷹尾神社の東の平地上に位置する。『軍談』では「鷹尾村城跡」として「田尻伯耆守鑑種居城也」とし、元々本拠としていた田尻城（飛塚城）は水が乏しかったため、永禄年間に当城を築城し移ったとすることなどを記す（天文 17 年（1548）に田尻親種が築城したとする説もある）。天正 10 年（1582）には田尻氏は島津方に与し、龍造寺方の攻撃を受けて籠城するも、翌 11 年に開城となり、田尻氏は当地を去る。同 15 年には立花宗虎（宗茂）柳川入部に伴い、

隣接する中島城と共に重臣・立花織部介が入城していく。その後、田中吉政の時代には、柳川城の支城として、宮川才兵衛が知行高六千石、組下の書上げ 16 名六千石をもって入城している。元和の一国一城令もしくは田中家廃絶に伴い、廃城となつたとみられる。

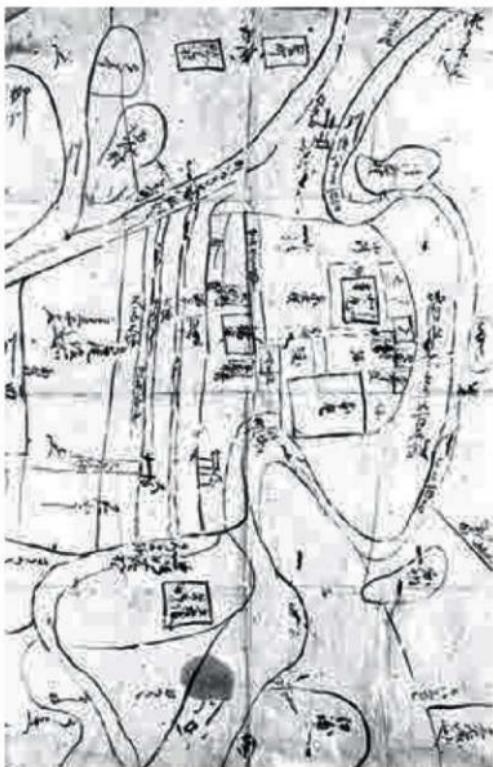
【概要】現在、鷹尾城の想定地周辺は、近代以降、大々的に改変されてしまい、現地での網張りの検



第 225 図 田尻親種墓碑（柳川市指定史跡・鷹尾城推定地付近に建つ）

討は非常に困難である。ただ、田尻氏ゆかりの親種寺に伝わる文書群にある『鷹尾城絵図』は非常に詳細に城の様子を描き出しており、そこからある程度の城の構造の復元が可能である。『鷹尾城絵図』で城の構造を見ると、中心部分は現在の鷹尾神社の東側、かつては川が大きく蛇行する湾曲部の内側に、「本丸」「つき山北ノ丸寺」と2つの方形区画が確認でき、端で囲まれた2つの方形状の曲輪が並列している。そして地続きとなる西側には、八幡宮（鷹尾神社）を挟んで大堀、大手大堀などの松原、けず（枳殻）、ついち（築地）などの防御遺構、さらには大手、大門などの門遺構が描かれている。以上のような鷹尾城の構造が絵図から判明するが、文献127では、田中時代の遺構を反映している一方で、方形居館が並列する構造などは中世城郭の縄張りをそのまま踏襲したものである可能性を指摘し、さらに、松原、大堀、築地など、後世に残りにくい遮断遺構まで詳細に描かれているのは多少復元的に描いた結果ではないかとしている。そのような問題点はあるものの、およその構造については問題ないであろうし、また城の位置も、字「築山」など、鷹尾神社の東側にある字の場所付近であることなどもわかる。

なお、『城郭』では鷹尾神社の西側にある方形クリークが巡る区画などを鷹尾城の本体の可能性があると指摘しているが、現状の地形からの類推であるとみられ、城地としてはやや根拠が乏しいのではないか



第226図 鷹尾城絵図

（『田尻家文書』のうち。親種寺蔵・柳川古文書館写真提供）



第227図 『鷹尾城絵図』（第226図）のうち鷹尾城主要部分

と思われる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5 ~ 9,14,22,42,127



第228図 明治20年代初期頃の鷹尾城周辺字図(『筑後國山 第229図 昭和23年当時の鷹尾城周辺航空写真(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)



筑後K9 中島城
なかしまじょう

郡名 山門郡 別称 なし
種別 平城 所在 柳川市大和町中島

図幅名 柳川(東)

【沿革】鷹尾城の南、矢部川右岸に面した平地に位置する。『立花統虎知行宛行状』(天正15年8月14日付 米多比鎮人家文書・柳川古文書館収蔵)には立花統虎が重臣立花織部介に、鷹尾城と併せて中島城の勤番をするように申し付けた(「中島勤番肝要」とあり、鷹尾城に付属する柳川城の支城の一つであったことがわかる。また、正保2年(1645)の『柳川藩領域図』(柳川古文書館収蔵)にも、中島村の南側に「古城ト申傳、今ハ島」と記されている。ただ江戸時代以来の地誌等には一切登場せず、『大和町史』資料編(文献42)編纂の過程において存在が確認された城である。

【概要】中島城の位置などがわかる資料としては、『鷹尾城絵図』(親種寺蔵)の中に、「才兵衛へとり遣し候城」と

方形の区画の中に記されていて、これが中島城の記載である。記載自体は田中吉政時代で、鷹尾城に入城した宮川才兵衛に遣わした城ということになっているが、おそらく立花時代の中島城を示していると思われる。この絵図では、方形区画のみが記載されているが、明治時代の字図には字「二重」の位置に矩形に屈曲する二重の水路が、かつての城の名残をとどめているのではないかとする



第230図 『鷹尾城絵図』(第226図)に描かれた中島城(「才兵衛へとり遣し候城」)

案もあり（文献42）、単なる方形区画ではなく、より複雑な縄張りであった可能性も考えられるが、現状では決め手を欠き、断定するのは難しい。

なお、字「二重」の南西側にある字「薩堀」（さつまほり）は、「鷹尾城絵図」にも描かれており、地元の伝承では鷹尾城を攻めた島津軍がこの堀によって撃退されたとされるものである。

【史料】あり

【参考文献】42,127



第231図 明治20年代初期頃の中島城周辺字図（『筑後国山門郡中島村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

筑後K 10 やながわじょう	柳川城	郡名 山門郡	別称 柳河城・梁河城	図幅名 柳川（西）
種別 平城	所在 柳川市本町			

【沿革】沖端川と塩塚川に挟まれた現在の柳川市街地に位置する。その創始についてはよくわからないが、戦国時代には蒲池城の蒲池氏の持ち城となり、天正9年（1581）には龍造寺方によって落とされている。同15年には筑前立花城主であった立花統虎（宗茂）が三潴・山門・下妻三郡の領主として入城する。しかし、関ヶ原合戦で立花家は所領を没収、代わって三河岡崎から田中吉政が32万5千石の石高で柳川に入る。田中時代に柳川城の大改修が行われ、ほぼ現在の姿となったものと考えられる。元和6年（1620）に田中家は無嗣断絶となり、旧城主の立花宗



第232図 描かれた柳川城天守（『柳河明証図会』のうち「其二五重殿守」・立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



第233図 現在の柳川城天守台（上）・矢穴痕跡の残る石垣石材（下）

茂が山門・三池の二郡および上妻・下妻・三瀬各郡の一部の併せて 10 万石の石高で再入城、以後明治維新まで立花家の居城となった。

【概要】現在、城跡は市街地化によって堀は埋め立てられ、本丸周辺の石垣も明治時代以降の干拓の際に石材なども持ち去られ、大きく変容しているものの、街路などはほぼ現在も踏襲され、また江戸時代の絵図も豊富にあって、城の構造をつぶさに知ることが可能である。

城の構造は、中心部分に本丸と二ノ丸が並列し、その周りを曲輪が重層的に囲いこむ。それらの曲輪の周りには、幅約 30m にも及ぶ水堀が造られていた。

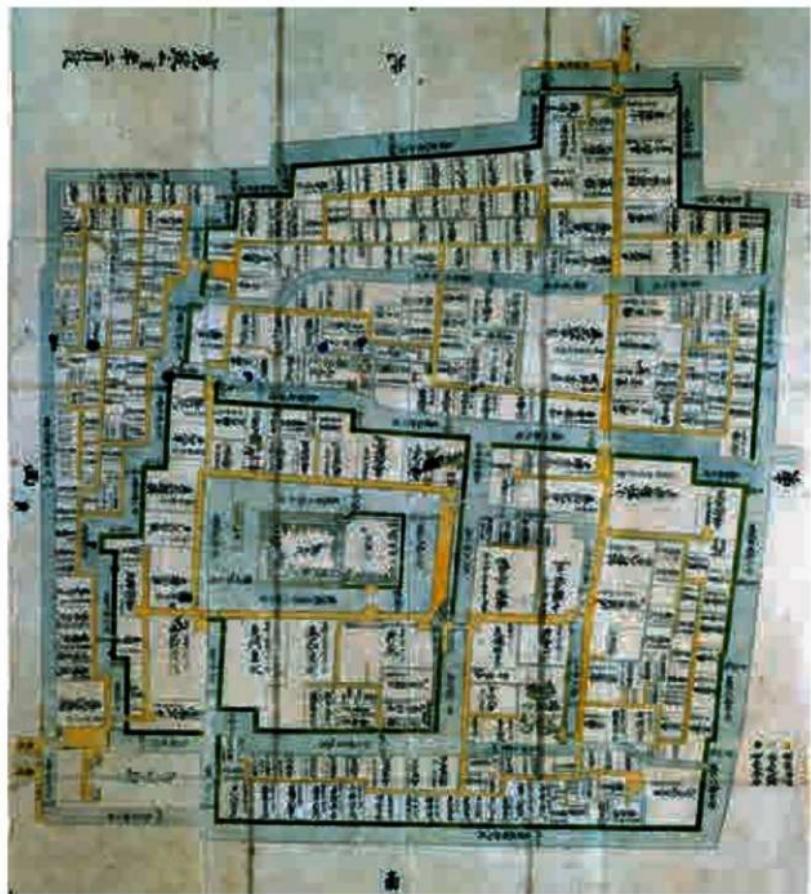
本丸は方形の曲輪で、周囲は約 8 m の高石垣を構築、天守曲輪の他に隅櫓とそれらをつなぐ多間櫓を墨線上に配していた。現在、本丸跡は柳城中学校の敷地となっており、五層の天守があったという高台や石垣が残されているが、高台も明治時代にかなり削られ、また石垣も



第234図 昭和23年当時の柳川城航空写真（国土地理院撮影）



第235図 「御城御絵図」(伝習館文庫) (福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供)



第236図 「御家中絵図」(旧柳河藩主立花家史料) (立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供)

昭和初期の耕地整備の際に築かれたものと思われる新しいものであり、城があったころの見る影は薄い。ただ、本丸周辺の石垣石材には矢穴を残したものがいくつかあり、城の石垣石材は幾ばくかは残されているようである。

本丸以外については、虎口部分を除いて石垣の使用はない。しかしながら、本丸、二ノ丸周りの曲輪群の堀線は、櫓などは見られないものの、堀線を屈曲させて横矢を効かせることができるよう折れや張り出しをいくつも創出しており、土塁で固められていた。特に本丸・二ノ丸の南側の曲輪はいわゆる「馬出」が巨大化して一般曲輪化したものと評価でき、織豊系の築城技術が十二分に生かされた造りとなっている。

なお現在、外郭部の土堀は「米多比土居」と呼ばれる一角を除いてはほぼ消滅してしまっている。以上のように柳川城は本丸・二ノ丸を中心にそれらを広大な曲輪群で取り巻き、それらを水堀によって囲い込み、さらに北東側には町家群を置く、いわゆる「惣構」の形態を呈していた。まさに田中吉政 32 万石の居城にふさわしい繩張りであったと言えるだろう。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5 ~ 9,14,22,44,127

筑後 K 11	えのうらじょう 江浦城	郡名 三池郡	別称 江村之城	図幅名 柳川(東)
		種別 平城	所在 みやま市高田町江浦	

【沿革】『軍談』には「江浦村城跡」として「永江氏代々ノ居城也、天正十二年、永江勘解由平方家、田尻ノ家士田尻了哲両士、鷹尾城ノ砦トシテ守之。同十五年高橋統増入部、当城ヲ以テ居城トス、永江氏統増ノ臣トナル、後故有テ柳川ニ奉仕ス、田中領地ノ時家士田中河内守之」とある。田中吉政時代の当城主・田中主水正是知行高 3,860 石、組下の書上げ 11 人分 3,300 石であった。慶長 15 年(1610)に主水正是久留米城へ転出、代わって『軍談』にあるとおり田中河内が 2 万石をもって入城している。元和の一国一城令によって廢城となつたとみられる。

【概要】矢部川左岸とその支流の飯江川とに挟まれた自然堤防上に位置し、南側は旧河道の蛇行部により侵食されている。城の中心部は、字「本丸」にあたる箇所で、現在の水路や圃場整備前の状況を見ると、

一辺東西約 160m、南北約 100m の方形区画で、周りを堀で囲まれている曲輪であったと見られる。さらにその中心部分はそこだけがかつては畠となっており(周囲は水田)、さらに区画がなされていた可能性が考えられる。字「本丸」の曲輪の外側には、曲輪と思われる平坦地があり、さらにそのまわりを方形に水路が巡ることから、水堀が巡っていたものと思われる。字「本丸」の南は字「二ノ丸」であり、現在は町家の短冊形地割が連続しているが、文献 127 では、その東側にあった古町集落から、江浦城の廢城後に町家が伸びてきたものと推測されている。また、外郭の北西隅には淀姫神社があるが、『江浦旧記』には、田中氏時代には城内にあった淀姫三所大明神社殿は没落廃退していたとあり、城内に位置していたことが分かる。

以上のように、当城は方形プランの主郭とその外側も方形プランの曲輪が取り囲み、外郭の堀は南へも伸びて古町の町家までをも包摂するいわゆる「惣構」を形成していたことが想定される。

【史料】あり 【参考文献】1,2,5 ~ 9,15,111,127



第 237 図 昭和 23 年当時の江浦城周辺航空写真
(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)

みいけじんや 筑後K 12 三池陣屋	郡名 三池郡 别称 今山陣屋・三池藩主居館・三池町館 図幅名 大牟田(東) 種別 陣屋 所在 大牟田市新町
-----------------------	--

【沿革】三池陣屋は『軍談』には「三池町館跡」として、天正 15 年（1587）、立花統虎（宗茂）の弟・高橋統増が、筑後国三池郡を賜った際に、居所とした場所である。その後、関ヶ原合戦後の改易を経て、元和 7 年（1621）に立花宗茂が柳川藩 10 万石に再封されたのと併せ、統増（立花種次）は、三池郡 15 ケ村・1 万石を再び領するところとなり、三池藩主として再び三池に返り咲いた。その後、三池藩は文化 3 年（1806）に幕府の内紛に巻き込まれ、陸奥国下手渡に移封、三池藩領は幕府領（のち柳川藩預かり）となり、『軍談』には館舎は破却されたとある。そしてその約半世紀後の嘉永 4 年（1851）に三池藩領の一部が三池立花家に返還、旧領復帰に伴い、陣屋が再興された。明治に入ると三池藩主・立花種恭は三池藩知事に任命されたが、明治 4 年（1871）の廢藩置県で三池県が設置、同年 11 月に三藩県へと合併され、事实上ここに陣屋の終焉を迎えることとなる。

【概要】三池陣屋は三池小学校周辺にあったとされ、周辺には字「御門」や「陣屋」などの地名が残されている。実際に小学校内には陣屋の建物の一部が移築されているものの、現地において陣屋の全容を知ることは難しい。知る手掛かりとしては、明治 6 年に描かれた『元三池御陣屋地図』（大牟田市立三池カルタ・歴史資料館蔵）がある。地図には、総坪数 5,370 坪、建坪 670 坪と記しており、堂面川に北面し、川から分かれた支流が西側から北側を取り囲む様子が描かれている。敷地内部は、表門があり、その内部には県庁（陣屋の時の表御殿）が描かれ、周囲には、庫や土卒の住居が記されており、西側には裏門、東側には塀の外側に「旧知事屋敷跡」と記されている。この絵図の段階ではすでに知事は東京へ移っており、屋敷は既に売却された後であるため、藩主屋敷（奥御殿）の様子を知ることができない。

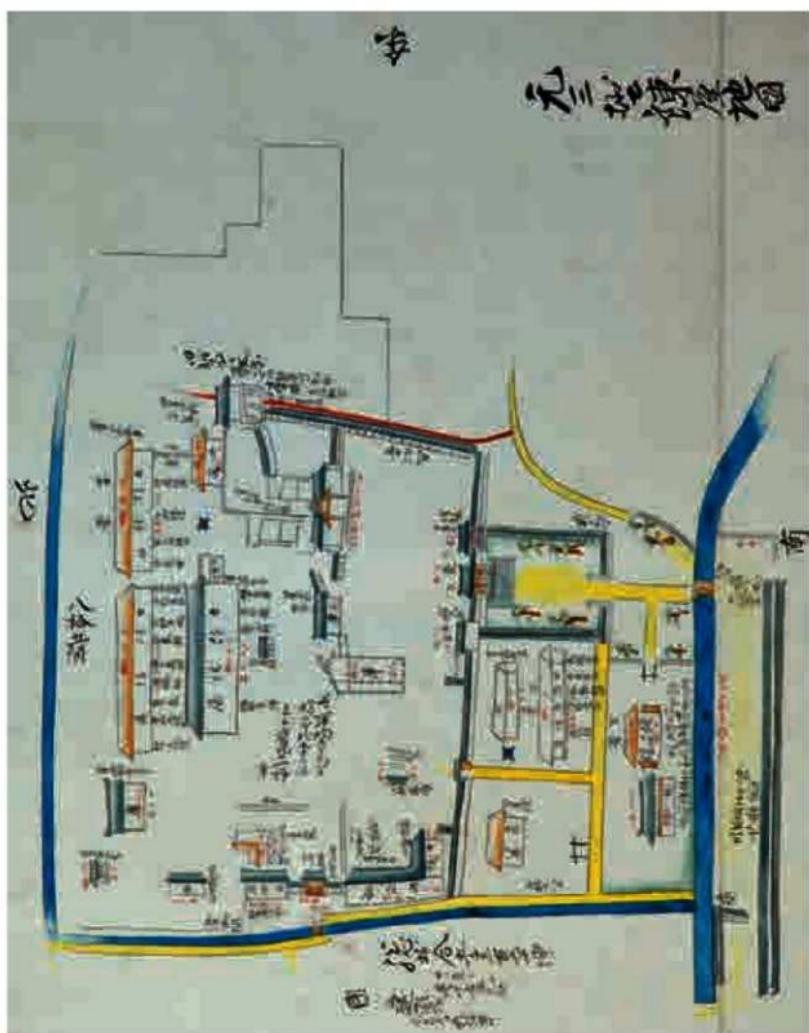
なお現在、表門の石段が残存するほか、県庁（表御殿）建物の一部は、『三池郡誌』（文献 15）によると、三池郡役所となった後、三池尋常小学校の玄関と裁縫室に転用され、さらには昭和 26 年（1951）に三池小学校の郷土資料館に再転用、同 47 年まで活用されたが、同 48 年に玄関屋根部分のみ移築され他は取り壊された。表門は大牟田市田町の寿光寺に移築され、山門として使用されて



第238図 三池陣屋石橋（上）・石段（中）・
建物（下・現三池郷土館）

いる。以上のように、三池陣屋はおよその建物の位置はわかるものの、御殿の内部の間取りや構造などは現状ではわからない状況である。

【史料】あり 【参考文献】1.4.5.7.8.15.19.22



第239図 元三池陣屋地図（大牟田市立三池カルタ・歴史民俗資料館蔵）

3 城館等伝承地

筑後D 11 みなきりやまじん
峯切山陣

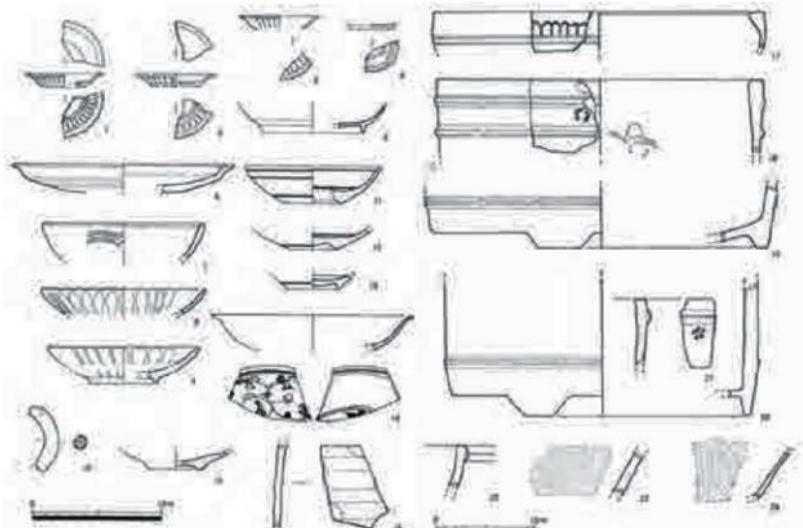
郡名 上妻郡
種別 陣か

図幅名 黒木(西)
所在 八女市黒木町木屋

【沿革】黒木の猫尾城から矢部川を挟んだ南の丘陵上、標高 297m に位置する。『稿本八女郡史』(文献 13)には、「峯切山陣址」として、「道雪黒木城攻めの時、陣取りし所なる由云ひ傳ふ」と『上妻郡名勝図絵』を引いて記す。

【概要】現在、峯切山がある一帯は、果樹園となっており、また頂上部は通信塔が建てられていて、現状がかなり損なわれており、明確な城館遺構を見ることはできない。ただ、昭和 28 ~ 29 年(1953 ~ 54)の開墾時に黒木高校の歴史部員により峯切山から遺物が採集されており、『黒木町史』(文献 36)に報告されている。それによると、輸入陶磁器(青磁・白磁・明染付碗・朝鮮産青磁)、瓦質土器が報告されている。16 世紀代に属する遺物であることから、当時この場所に猫尾城に関連した出城のような施設、あるいは立花道雪が陣取った痕跡とも考えられるが、詳細は今後の調査に委ねざるを得ない。

【参考文献】9,13,36



第 240 図 峰切山採集遺物(黒木高校蔵)実測図(文献 36)

4 城館関連遺跡

筑後 R 1 干潟中屋敷遺跡
ひかたなかやしきいせき

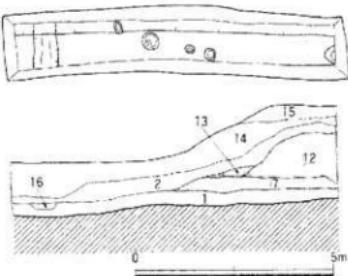
郡名 御原郡
種別 居館遺跡か

図幅名 二日市(東)
所在 小都市干潟

【位置】宝満川左岸の標高約 20 m の干潟の集落内に位置する。『城郭』にて「干潟館」とするのはこの遺跡を指しているものと思われる。

【概要】集落内に土壘状遺構が現存しており、平成 8 年（1996）に確認調査が行われ、土壘上面から陶磁器、土師器小皿等が出土し、14 世紀前半以降に位置づけられる。部分的な調査であり、また土壘の残存度合いもさほど良くもないため、全体的な平面プランは不明であるが、中世の居館遺跡の一部である可能性が指摘されている。周囲には上屋敷、下屋敷、町屋敷、堀ノ内などの字も残されている。

【参考文献】9.43



第 241 図 干潟中屋敷遺跡土壘実測図（文献 43）

筑後 R 2 みつさわてらしゅうじいせき
三沢寺小寺遺跡

郡名 御原郡
種別 居館遺跡

図幅名 鳥栖(西)
所在 小都市三沢

【位置】宝満川支流の高原川左岸の標高約 20m の台地上に位置する。

【概要】遺跡地は字が「寺小路」といい「善風寺」があったという伝承が残る。過去に 6 回の調査が行われ、中世の居館あるいは寺院と見られる遺構が検出されている。特に 3 地点では、溝で囲まれた方形区画の南西隅部（3SD-1）が見つかっており、周辺でも近世以降の区画溝が多く検出されている。他の調査地点でも中世期の区画溝は見つかっているものの、囲い込むようなものになるまではわかつてない。いずれにせよこれらの中世遺構は「善風寺」との関連が想定されるものであろう。

【参考文献】
55 ~ 58,60



第 242 図 三沢寺小路遺跡調査地位置図（文献 60）



第 243 図 三沢寺小路遺跡 3・5 地点平面図（文献 57）

筑後 R 3 大保横枕遺跡

郡名 御原郡
種別 居館遺跡

図幅名 鳥栖(東)
所在 小郡市大保

【位置】宝満川右岸に面した標高 15m の平地上に位置する。

【概要】大規模店舗建設に伴い、約 4 万 m² の発掘調査がなされ、弥生時代の二重環濠が検出されたが、それと重複するように溝で囲まれた南北約 60m、東西約 100m の方形区画が確認され、12世紀後半から13世紀前半を中心とする時期であることが判明している。

区画内部からは小溝による小区画や、土坑などが見つかっており、中世の拠点的な集落、あるいは屋敷地である可能性が考えられている。

【参考文献】59



第244図 大保横枕遺跡平面図（文献 59・黒塗りは中世期の遺構）

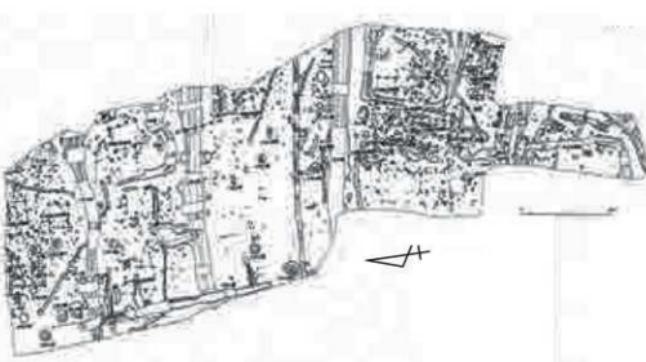
筑後 R 4 稲吉元矢次遺跡

郡名 御原郡
種別 居館遺跡

図幅名 鳥栖(東)
所在 小郡市稻吉

【位置】宝満川左岸に面した標高約 11m の平地に位置する。

【概要】圃場整備に伴い東西約 120m、南北約 60m の範囲の調査が行われ、9～16世紀の遺構・遺物が検出された。特に鎌倉期の掘立柱建物は 10 棟を超え、溝の多くもこの時期に属するものである。東西方向に延びる 3 本の大溝の性格は断定できないが、一辺約 20m の方形周溝が 3 区画確認されており、居館周りの区画溝・堀であるものとみられる。全容は杳として知れないが、この一帯に



第245図 稲吉元矢次遺跡遺構平面図（文献 54）

は鎌倉期に屋敷地群が展開していた可能性が考えられる。

【参考文献】54

筑後 R 5 西森田遺跡
にしもりたいせき

郡名 御原郡
種別 居館遺跡

図幅名 鳥栖(東)
所在 三井郡大刀洗町本郷

【位置】本郷町の北、標高約 17m の平地に位置する。

【概要】東西約 60m、南北約 30m の範囲の調査がなされ、東西約 30m、南北 20m 以上の溝に囲まれた方形区画が確認され、その内部からは 5 棟以上の掘立柱建物が検出されている。出土遺物から 12 世紀後半から 13 世紀を中心とする時期であるが、溝の最終埋没は 14 世紀以降に下るため、存続期間は南北朝期まで及ぶ可能性もある。また、方形区画外にも掘立柱建物 7 棟や井戸などが検出されている。当遺跡の南の本郷町には中世城館の三原城が位置することなどからも考え併せて、中世の武家居館ではないかと考えられている。

【参考文献】61



第 246 図 西森田遺跡遺構平面図（文献 61）

筑後 R 6 下見遺跡
したみいせき

郡名 御井郡
種別 居館遺跡

図幅名 久留米(西)
所在 久留米市東合川町 5 丁目

【位置】筑後川南岸、現在の久留米インターチェンジの北側に位置する。

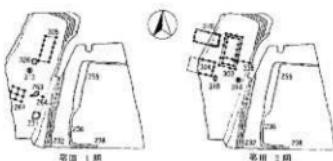
【概要】住宅建設等によりこれまで 9 次にわたる調査が行われ、第 5 ~ 9 次調査において、関連する遺構が検出されている。遺跡は大きくⅢ期に分かれ、Ⅰ期は古墳時代終末から奈良時代の遺構群で、

豎穴住居群と1棟の掘立柱建物からなる。Ⅱ期は奈良時代終末から平安時代前期で、豎穴住居から掘立柱建物にとて代わり、井戸、溝、土坑が検出され、墨書き土器、縁釉陶器なども出土する。Ⅲ期が鎌倉時代の遺構群で、方形に巡る溝に囲まれた2面の区画が確認され、西側の区画からは掘立柱建物、井戸が検出されている。特に四面廂の掘立柱建物を中心にして西側に向かってコの字形に掘立柱建物群が並ぶ様子が検出され、国府や官衙を彷彿とさせる建物配置であるが、時代から見て中世在地豪族の居館と推測される。

【参考文献】37,68



第247図 下見遺跡第5～9次調査遺構配置図（文献37）



第248図 下見遺跡Ⅲ期の遺構配置模式図
(文献37)

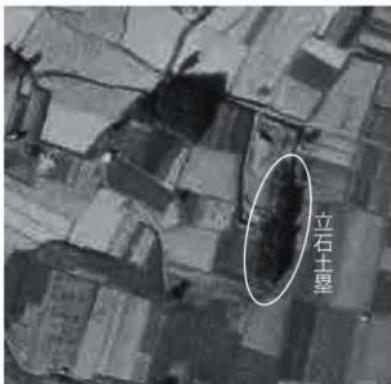
筑後R7 筑後国府跡

郡名 御井郡
種別 居館遺跡

図幅名 久留米(西)
所在 久留米市合川町

【位置】筑後川支流、高良川の右岸、標高約15m、筑後国府の庁域内に位置する。

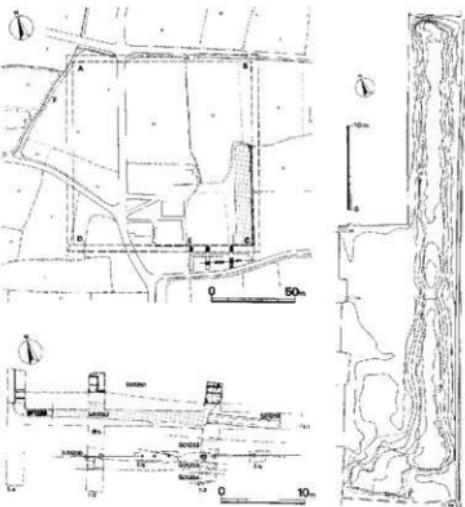
【概要】筑後国府は、国府成立以前の7世紀後半の前身官衙のほか、平安時代末期まで久留米市秋川地区近においてI～IV期の変遷を繰り返し、併せて国司館なども検出されている。ここで報告するのは、字立石の通称「長者屋敷」と呼ばれる一角で、現在もなお土壘状遺構（通称「立石土壘」）が南北方向に約60mにも渡って残存している箇所である。幾度か調査が行われ、30次調査においては土壘の南側のトレンチ調査をしたところ、幅約4mの東西方向の溝（SD1251）が検出され、方形区画の南東隅部に当たることが推測された。その結果、土壘と堀に囲まれた一辺約100mの方形区画が想定されている。時期については、溝SD1251が9世紀代に構築された築地を破壊して掘られ、溝内からは龍泉窯系青磁碗、土鍋などが出土し、最終埋没は鎌倉時代まで下る可能性を示している。ただ、その後の調査においては、方形区画の堀



第249図 昭和23年当時の「立石土壘」航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

が想定される箇所で遺構が見当たらないなどの事実も出てきており、実際にいわゆる方一町の方形区画になるか否かについては今後検討を要する。だが、現状においてはやはり中世期まで下る居館とみておいた方が良いと考えられる。

【参考文献】67,78



第250図 築後国府跡「方形居館」遺構配置図（左・文献67）・
「立石土塁」平面図（右・文献81）

筑後 R 8 東光寺遺跡

郡名 御井郡
種別 居館遺跡

図幅名 久留米（西）
所在 久留米市山川町

【位置】高良山の支峰・吉見岳城の北西尾根を下った標高約37mの尾根上に位置し、字「東光寺」の西側斜面部が高速道路建設に伴い発掘調査が行われた。

【概要】テラス状に造成された平坦面上からは、数多くの掘立柱建物や柵を構成するであろう柱穴群の他、IV区の東側には、堀状の遺構が確認されている。出土遺物の中心時期は12～13世紀で、最盛期とみられる。この近辺には、東光寺城の記載も見



第251図 東光寺遺跡IV区遺構平面図（文献66）

られるが、東光寺城は天正年間の山城として認識されているものであり、この調査区の成果とは合致しない。しかし当遺跡の谷を挟んだ北側の茶臼山遺跡や、近の大宮司邸跡、大祝家跡、宗崎遺跡などでも同時期の遺跡が確認されており、中世高良山を考える上で重要な遺跡である。

【参考文献】66

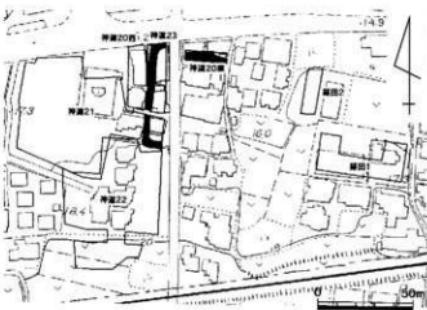
筑後R 9 神道遺跡

郡名 御井郡
種別 居館遺跡

図幅名 久留米(西)
所在 久留米市御井旗崎1丁目

【位置】筑後川南岸、標高約14mの平地に位置する。

【概要】道路建設に伴い、複数次に渡る発掘調査が行われ、20～23次調査区において、幅約3～5m、深さ1mを超える堀状の溝に囲まれた方形区画が検出された。その区画は、南北約50m、東西30m以上で、内部からは掘立柱建物を構成する柱穴群が検出されている。出土遺物は土師器、陶磁器など12～13世紀が大半であり、当該時期の居館跡と推測されている。



第252図 神道遺跡主要遺構配置図（文献83）

なお、当遺跡の南側の二木遺跡では、当遺跡と同一時期の遺構の他、16世紀代の堀状溝のコーナー部分なども検出されており、中世居館あるいは城館の可能性を持つものが見受けられるが、明確なデータにかけるため、本書では割愛している。

【参考文献】68,79,80,82,83,86

筑後R 10 日出原南遺跡

郡名 御井郡
種別 居館遺跡

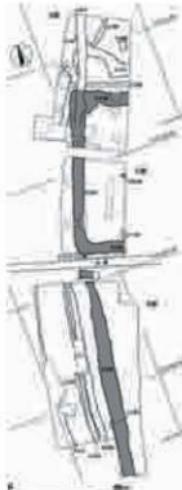
図幅名 久留米(西)
所在 久留米市御井町

【位置】前記の神道遺跡の南方約500mの標高約33m地点に位置する。

【概要】道路建設に伴い、複数次にわたる調査が行われており、4次調査B・C・D区において関連遺構が検出されている。溝SD20は16世紀代の出土遺物を主体とし、南北約40mに渡る直線溝であり、その北側には、SD65・70・100と三方を溝で囲い込む方形区画が確認できる。方形区画は南北約25mで内部からはピット群が検出されている。この方形区画の溝の最終埋没は17世紀以降であるが、若干中世後半の遺物が混じることや、SD20もまた最終埋没は近世に入るものの、出土遺物の主体は16世紀代になる事から、溝の掘削時期は16世紀代になるものと想定されている。近世期においては、薩摩街道の裏筋に当たることから、宿場町経営に関わる居住区とされているが、元々は中世の居館遺跡から継続しているものであろう。また、別調査区では、12世紀代にさかのぼる区画溝なども検出されており、その時期の居館もある可能性も考えられる。

【参考文献】84

第253図 日出原南遺跡4次
B～D区遺構配置図（文献84）



こがんまえいせき
筑後 R 11 古賀前遺跡

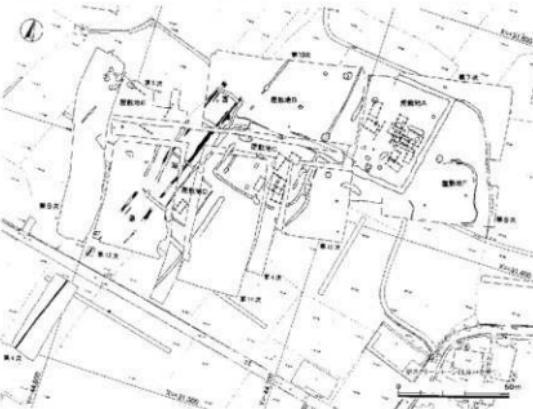
郡名 御井郡
種別 居館遺跡

図幅名 久留米(西)
所在 久留米市本山1丁目

【位置】筑後川支流の上津荒木川左岸の標高約16mに位置する。

【概要】区画整理事業に伴い、複数次にわたる調査が行われており、北東から南西方向に走る古代西海道の道路遺構が確認されており、その両側に道路と軸線を並行させるような方形区画をいくつも展開させるようなA～Fの5区画の居館群が検出されている。出土遺物は報告書によれば、13～15世紀代であり、この時期に居館群が築造されていたと推測される。中でもAは一辺約50m近くもある大型のもので、内部からは掘立柱建物群や井戸が検出されている。この場所については、字が「松本屋敷」であり、文献77には、出典はないしながらも地元の伝承で「松本城」があったということが記されている。字の「松本屋敷」を「松本城」と誤伝した可能性が十分考えられるものの、当該遺跡との関連がある可能性は捨てきれない。

【参考文献】69,71,73,76,77



れている。古墳時代の遺構と重複していることもあり、その構造は知れないが、掘立柱建物などがあつたものと考えられ、中世の居館跡であると想定される。近隣には国人領主・近藤氏の居館なども想定されており、近藤氏との関連がある可能性も考えられよう。

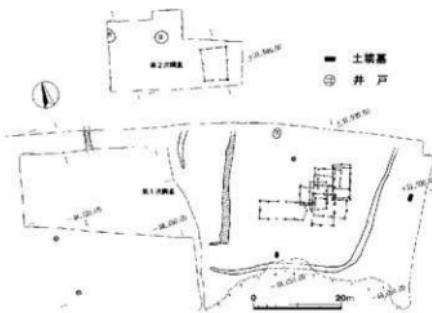
【参考文献】85

筑後R 13 城崎遺跡	じょうざきいせき 郡名 三瀬郡 種別 居館遺跡	図幅名 久留米西部(東) 所在 久留米市安武町安武本
-------------	-------------------------------	-------------------------------

【位置】筑後川西岸、標高7mの平地に位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査により2回の調査が行われ、幅1.5m、幅1m前後の溝に囲まれた方形区画が重複するように2区画(A・B)検出され、その内部、特に東側の屋敷地Aからは10棟を超える掘立柱建物群、井戸、土坑墓が検出されている。出土遺物から14~15世紀の年代が与えられている。近世期以降についても、北側の2次調査区において区画溝や井戸などが検出されており、近世まで屋敷群が継続して営まれていたことが想定される。

【参考文献】70,75



第256図 城崎遺跡中世主要遺構配置図（文献75）

【位置】広川下流右岸、標高約6mに位置する。

【概要】当遺跡は道路建設等に伴い、複数次にわたり調査が行われ、古代には三瀬郡の郡衙の比定地ともなっている。その調査の中で、第1・6次調査において幅約4m、深さ約2mの堀状の溝が検出されており、北東隅部が確認され、短くとも南北80m続く方形区画と想定されている。区画内部については未調査のため、施設等は不明であるが、居館を囲む堀とみてよいと思われる。堀の内部からは、12~13世紀の出土遺物が大量に出土しており、その時期に営まれたことが想定される。なお、方形区画の南西側約300m地点の荊津天満宮があり『軍談』にみる荊津館の推定地となつておらず、関連性が窺われる。

【参考文献】74



第257図 道藏遺跡主要遺構配置図（文献74）

筑後 R 15 北ノ屋敷遺跡

郡名 三瀬郡
種別 居館遺跡

図幅名 羽犬塚(西)
所在 久留米市城島町江上本

【位置】城島町江上本の標高約3mの平地に位置する。

【概要】宅地建設に伴う発掘調査が行われており、幅約4m、深さ約2mの堀状の溝が方形に巡る様子が確認された。溝の南側はクリークが東西に走っていて、その前後関係は不明であるが、残る三方は、東西約30m、南北約20mの方形区画を造り出している。その区画内部は、東西に走る細い溝(SD1)の北側に遺構が密集し、複数回建て替えられた掘立柱建物が11棟検出され、居館であると想定される。時期については、堀状溝から出土した遺物から、16世紀後半～17世紀前半頃と推定され、堀状溝の最終埋没は、17世紀前半～中頃と想定できる。また区画の南側にも掘立柱建物や便所遺構(近世)なども確認されている。当遺跡の北東約500m地点には西江上城(筑後40)があり、関連性が窺われる。

【参考文献】88



第258図 北ノ屋敷遺跡遺構配置図(文献88)

筑後 R 16 仁右衛門畠遺跡

郡名 生葉郡
種別 居館遺跡

図幅名 吉井(西)
所在 うきは市吉井町新治

【位置】筑後川支流の巨瀬川北岸の標高約30mの平地に位置する。

【概要】道路建設に伴い、東西約200m、南北約30mの範囲の発掘調査が行われている。調査区の最も東側において、12～13世紀の遺物が出土する区画溝が、掘立柱建物、井戸、土坑、墓などと共に多数検出されており、方形区画を形成していることを確認している。特に調査区南東隅で確認された溝(17号溝)は幅3m、深さ1.3mで逆台形状の断面を呈している。さらにこの溝は南側に伸びることが確認され(平成9年度吉井町教育委員会調査)、検出された屈曲部まで総延長100mに至ることがわかつており、北側から西側の区画が不明ではあるものの、方一町の方形居館が想定されている。また区画内部で検出された土坑墓からは完形の龍泉窯系青磁碗などが出土しており、居館に居住して



第259図 仁右衛門畠遺跡古代以降の主要遺構配置図(文献52)

いた人物に関するものと考えられる。

【参考文献】52

筑後 R 17 東館遺跡	郡名 上妻郡 種別 居館遺跡	図幅名 八女(東) 所在 八女市山内
--------------	-------------------	-----------------------

【位置】矢部川支流の星野川左岸の標高約70mの丘陵上に位置する。

【概要】工場建設に伴い、字「東館」のL字形に張り出した尾根上の発掘調査が行われ、調査区の南東側から、東西約18.5m以上の北面する石垣が検出された。石垣の中央には6段の石段が築かれており、居館部へは北側から入るようになっており、遺跡の西側の字「西館」の谷を登り、北側へ回り込んで入り込む構造であったと想定される。石垣（図中1号建物）は高さ約1mでその前面に石垣列に平行するように柱穴列が確認されていて、柵などが想定できようか。また石垣は部分的に2段になっているようである（図中2号建物）。また、石垣の内部、下層には礎石列と思われる石列が確認でき、礎石建物があった面を埋め立て、石垣を築いて遺構面を拡張しているようである。石垣の南側は東側に2本の堀（1・2号溝）、西側にも部分的に溝が巡っているようであって、一辺約30mの方形区画が想定できそうである。この区画の東側でも多くの柱穴群が確認されており、屋敷群が展開していた可能性が考えられる。

年代については、出土遺物の報告があまりなされておらず難しいが、調査区内の土坑からは明代あるいはベトナム産とも考えられる染付が出土しており、およそ15～16世紀といったところであろうか。

当遺跡の北背後の丘陵上には鷹尾城（筑後165）、さらにその奥には犬尾城（筑後164）があって、『軍談』の犬尾城跡の項にも、「（川崎氏の）常居ノ館ハ麓ニアリ」と記されており、



第260図 東館遺跡石垣・石段・柱穴列
(上)・石垣内部から検出された
礎石列(下)(八女市提供)



第261図 東館遺跡居館部遺構配置図(文献89)

まさにこの遺跡の居館を指している可能性が高いと言えよう。館とは言いつつも、南側は斜面になつておらず、下の集落からは20m近くも高低差があり、防御性を意識した立地であると言えよう。

【参考文献】1,89,129

筑後R 18 熊野屋敷遺跡
くまのやしきいせき

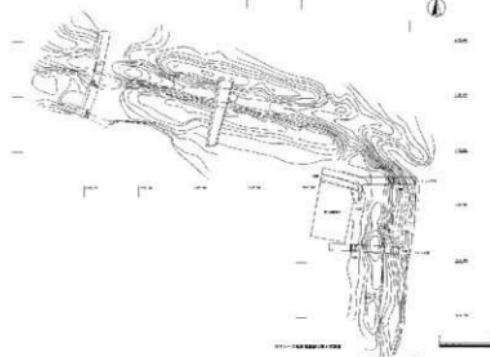
郡名 上妻郡
種別 土壘遺構

図幅名 羽犬塚(東)
所在 筑後市熊野

【位置】山ノ井川右岸、標高約10mの微高地、坂東寺境内に位置する。

【概要】12～13世紀頃に創建されたと考えられる坂東寺には、貞永元年（1232）銘の「坂東寺石造五重塔」（県指定文化財）があり、紀年銘を持つ石塔としては筑後最古のものである。寺の北側から東側にかけて、逆L字状の土壘遺構が残されており、東西約60m、南北約30mの規模を有し、北側の東西方向に走る土壘は二重になっている。トレンチ調査が行われており、土壘に沿って内側と外側に小溝が巡ることがわかつており、12～13世紀頃に寺域と墓地が整備された段階では周りに溝が巡っていただけのものが、16世紀頃に溝は埋没するが、土壘が整備され、それが近世以降も残っていたことが判明している。継続的に寺院があった場所に土壘が整備されたものであり、これが防御的な意味合いをなすものか否かは今後検討を要しようが、『軍談』や『上井覚兼日記』などには、天正11年（1583）に大友方（戸次・高橋勢）が坂東寺を焼き討ちしたことや、翌12年に大友方が坂東寺に着陣したことなどが記載されており、坂東寺が城塞化している可能性は十分考えられる。

【参考文献】93



第262図 熊野屋敷遺跡土壘状遺構実測図（文献93）

筑後R 19 長崎坊田遺跡
ながさきぼうたいせき

郡名 上妻郡
種別 居館遺跡

図幅名 羽犬塚(東)
所在 筑後市長崎

【位置】花宗川と山ノ井川に挟まれた標高約7mの平地上に位置する。

【概要】宅地開発に伴う発掘調査が行われ、調査区Bからは幅1.7～3.8m、深さ0.4～0.7mの溝に囲まれた東西約32m、南北約25mの方形区画が検出されている。区画の内部には柵や土坑に加え、南西隅部には、四方を溝で囲まれた1間×1間の掘立柱建物が検出されており、櫓建物の可能性も考えられる。方形区画は半分ほどしか調査がなさ



第263図 長崎坊田遺跡調査区B主要遺構配置図（文献92）

れていないため、主要建物については不明である。溝からは 16 世紀代の大量の土師器、火鉢、茶釜や、明代の染付、青磁碗、高麗青磁などが出土しており、その時期の居館跡と想定される。

【参考文献】92

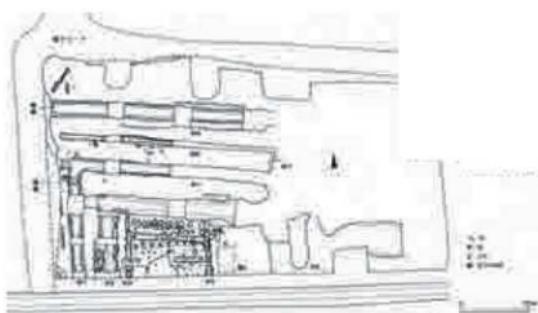
筑後 R 20	ひがんだいせき 彼岸田遺跡	郡名 下妻郡	図幅名 羽犬塚(東)
		種別 居館遺跡	所在 筑後市島田

【位置】花宗川左岸に面した標高約 4 m の平地に位置する。

【概要】矢部川浄化センター建設に伴う発掘調査により、中世に掘削、埋没した四重の堀状溝に囲まれた方形区画が検出された。現状のクリークの区画などから、一辺約 116m 以上の一町半の区画の内部を何重にも堀で囲われた様子が想定されている。

なお、区画内部からは掘立柱建物の他、近世墓なども検出されている。周囲の堀状溝からは、14 世紀後半～15 世紀代の遺物が出土しており、呪符木簡なども見つかっており、その時期に営まれた大鳥居氏関連の居館跡ではないかと推測されている。

【参考文献】130



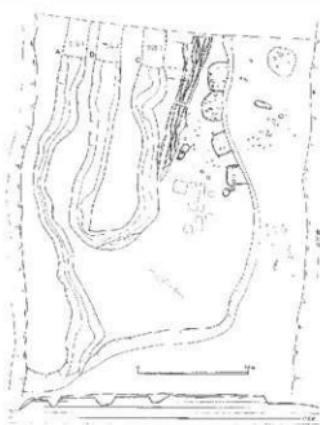
第 264 図 彼岸田遺跡主要遺構配置図（文献 130）

筑後 R 21	じんないせき 陣内遺跡	郡名 三池郡	図幅名 柳川(東)
		種別 溝状遺構	所在 みやま市高田町上楠田

【位置】矢部川支流の楠田川上流、川に面した標高約 19m の台地上に位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査にて、幅約 4 m、深さ約 1 m の空堀状遺構が 2 本確認された。1 本は川に沿って平行に伸びているが、もう一本は U 字形に屈曲して掘られている。報告書では 15 世紀後半から 16 世紀前半としているものの、根拠が明示されておらず不分明であるが、中世期の堀である点においては問題ないようであり、城館に関連する遺構としておきたい。ただ、この遺構によって何を守ろうとしていたのかまでははっきりしない。報告書では田尻氏に関連する遺構であるとしている。また、近辺には「城前」の小字が残っており、次に述べる城前遺跡との関連を窺わせる。

【参考文献】96



第 265 図 陣内遺跡遺構配置図（文献 96）

筑後R 22 城前遺跡

じょうぜらいせき

郡名 三池郡
種別 丘城か

図幅名 柳川(東)
所在 みやま市高田町上楠田

【位置】陣内遺跡の北側背後の標高47mの丘陵上に位置する。

【概要】遺跡の小字は「城前」であり、陣内遺跡の調査報告書（文献96）の周辺地図にも「城跡」として位置が示されていた。現地を踏査したところ、丘陵頂部は後世の削平を受けており、遺構の残存状況は不明ではあったものの、南側斜面には、約50mにわたって横堀状の掘り込みが見られ、城館遺構の可能性がある。陣内遺跡との関係についても詳細は不明ではあるものの、100～200m間隔と無関係とは思えないような位置関係にあり、城館として一連のものである可能性も考えられる。

【参考文献】96



第266図 陣内遺跡と城前遺跡遠景（左・手前の水田が陣内遺跡・奥の鉄塔が城前遺跡）・城前遺跡の横堀状遺構（右）



第267図 城前遺跡縄張り図（事務局作成）



第268図 城前遺跡と陣内遺跡の位置関係図（みやま市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成）

筑後R 23 上内高頭遺跡

かみうちたかがしらいせき

郡名 三池郡
種別 居館遺跡

図幅名 関町(西)
所在 大牟田市上内

【位置】白銀川右岸、およびその支流の岡川の左岸に面した標高約20～25mに位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査が昭和63年（1988）に行われており、調査された2地点のうち、

東側の第1地点では、古墳時代の住居群の他、調査区の南西隅において溝状遺構が検出されている。溝状遺構は、屈曲しており、南北22m以上、東西11m以上で、方形区画をなす北東隅と思われる屈曲部が検出された。溝幅は1.2~2.9m、深さは0.4~1.1mで、埋土からは糸切りの土師器、瓦器椀、白磁碗、滑石製石鍋など12世紀代を中心とする遺物が多く出土し、居館などの周りを取り囲む溝と推定されているが、区画の内部は一部しか調査しておらず、目立った遺構は検出されていない。ただ、調査区の東側には「城林」の小字なども残されており、遺跡との関連が想定される。

【参考文献】101

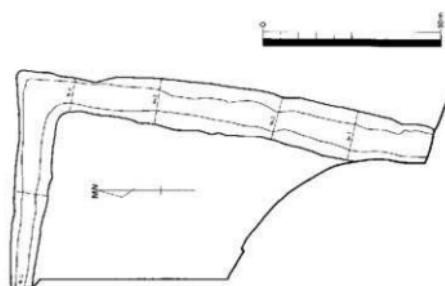
筑後R 24 白川遺跡

郡名 三池郡
種別 居館遺跡

図幅名 大牟田(東)
所在 大牟田市上白川町2丁目

【位置】長溝川右岸の標高約10mの低台地上に位置する。

【概要】白川遺跡では、道路建設等の開発に伴い、何度か調査が行われているが、その中でも平成3年(1991)に行われたB-1・2地区の調査では、溝が6本、切り合う形で検出され、中でも溝2は直角に屈曲していた。その溝で囲まれるであろう区画内部には、多数の柱穴と思われるピット群が検出され、ピット群や溝からは、土師器、瓦器、鉄滓、大量の羽口片、滑石製石鍋片、同安窯系・龍泉窯系青磁、白磁などが出土している。出土遺物の図面が掲載されていないため、詳細な時期はわからないが、12~13世紀頃になるのではなかろうか。当遺跡の周辺には、羽山台遺跡、横又遺跡、次に述べる上白川遺跡など、同時期の館の堀・溝となるような溝状遺構が多数検出されており、羽山台遺跡では竪穴状遺構などもあって注目されるものの、調査面積の狭小なことから、どのような区画をなすのかわからない事例が多く、今後の調査により明らかになると思われる。



第269図 上内高頭遺跡溝状遺構 (SD-01) 平面図 (文献 101)



第270図 白川遺跡 B-1・2 地区遺構平面図 (文献 102)

筑後 R 25 上白川遺跡
かみしらかわいせき

郡名 三池郡
種別 居館遺跡

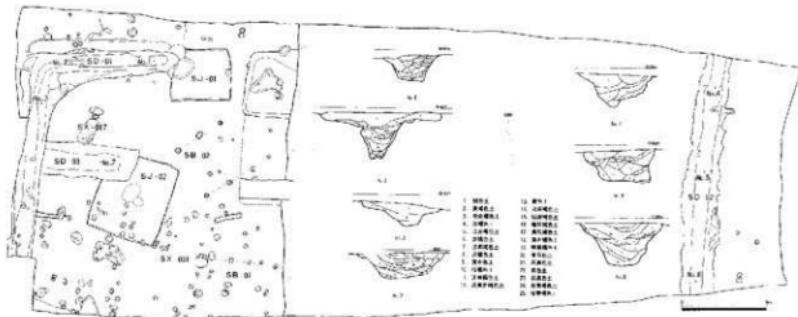
図幅名 大牟田（東）
所在 大牟田市上白川町2丁目

【位置】白川遺跡の南西約200m地点、標高約17mに位置する。

【概要】宅地開発に伴い昭和59年（1984）に発掘調査が行われ、東西約46m、南北約18mの調査区からは、溝が2本検出され、調査区東側の溝は、南北の直線溝であったが、西側の溝（SD-01）はL字状に屈曲するプランを呈した区画溝であり、その内部からは掘立柱建物などの多くの柱穴列が検出されている。溝の深さは1～2mに及び、溝と言うより堀的印象を受ける。出土遺物には底部ヘラ切りと糸切りの両者の土師器が混じっていることや、白磁、青磁などから11世紀後半～12世紀頃に年代が想定され、先に挙げた白川遺跡より若干古い様相を呈している。

当遺跡がある一帯は、先に述べたように当該期の中世遺跡が濃密に見つかっており、さらに東約500m地点には三池氏の居城と伝える大間城があり、発掘調査では13世紀頃の溝や柱穴群が検出されている。当遺跡も含めた大間城一帯には、中世前半期の居館群があった可能性を示しているのかもしれない。

【参考文献】99



第271図 上白川遺跡遺構平面図・断面図（文献99）

VII 城館関連文献史料一覧

・本章では、本書題告社の城館が登場する文獻史料を集成した一覧表を示す。

・掲載にあたっては、書簡別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」に類別し、編年記列した上で、各「一次史料」には技番号を付した。ここで「一次史料」には技番号を付した。

・掲載にあたっては、書簡別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」として記述する記述内容も時系列よりも後世の成立となる記録や備考である。

・本文ならば、原文書から翻訳をすべきだが、作業期間・紙面等の事情により、その多くを良質な刊本から、一部を原本・譜文等から収集し、内容については要旨、または当該城館に係る記述からの情報を示した。

・見表の作成にあたり、山本謙一朗氏・遠藤未央氏・野下俊樹氏の協力を得た。

<中世城館>

No.	名稱	技番	参考	年月	著者	前言	著者	題目	著者	年月	著者	前言	著者
2	山陽城		参考 水様11年11月		大友宗麟	前記著者抄第88／『久留米市史 第7巻』P363			大友宗麟	秋月氏との合戦において勝利し、翌日「山陽脚			
			(1) (年未詳)	10月19日	大友宗麟	前記著者抄第88／『久留米市史 第7巻』P365			在坂下	に在坂下	草野といもと村へと移る。		
4	大坂井城(坂井城)	P448	参考		氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417	氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417			坂井氏所領の中に「坂井之城」とみえる、英後國三原郡に所在する番村の居城。			山陽城跡奉行等」を勤めたことを實する。	
7	上高瀬城	P417	参考		氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417	氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417			坂井氏所領の中に「高瀬之城」とみえる、英後國三原郡に所在する六戸の居城。			坂井之城奉行等」を勤めたことを實する。	
8	三原城(本郷城)	P417	参考	(天正6年3月2日)	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P415	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P415	大友宗麟	『久留米市史 第7巻』P428	三原和泉入道山、	「三原郡本郷城」に居住。			
10	西御坂城(阿波坂城)	P439	参考	(天正6年3月2日)	關家譜560／『飯塚市史 上巻』P439	關家譜560／『飯塚市史 上巻』P439	「正ビ己卯10年ヨリ種利御領内城主領」の内、「三笠郡三原城主・板垣左京」とみえる。						
11	古賀城(八町鳴城)	P439	参考		天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P417	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P417	「正ビ己卯10年ヨリ種利御領内城主領」の内、「三笠郡三原城主・板垣左京」とみえる。						
15	鬼妙門出城	P439	参考	(別所氏)	氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417	氣葉氏所領地數算書16／『久留米市史 第7巻』P417	「正ビ己卯10年ヨリ種利御領内城主領」の内、「三笠郡三原城主・板垣左京」とみえる。						
18	百見堀城	P439	参考	永禄11年	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	「正ビ己卯10年ヨリ種利御領内城主領」の内、「三笠郡三原城主・板垣左京」とみえる。						
21	里光寺城(長崎山城)	P439	参考	(1) (年未詳)	大友宗麟	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	大友宗麟	志賀太郎(親) 輝繁	志賀太郎(親) 輝繁	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460
26	弓削城	P439	参考		大友宗麟	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	大友宗麟	志賀太郎(親) 輝繁	志賀太郎(親) 輝繁	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460
29	荒木城	P439	参考	(天正6年3月2日)	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	荒木氏	荒木村	荒木氏、荒木村	荒木氏、荒木村	荒木氏、荒木村	荒木氏、荒木村	
					大友宗麟	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	大友宗麟	志賀太郎(親) 輝繁	志賀太郎(親) 輝繁	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460
31	海津城	P439	参考	(天正6年3月2日)	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	大友宗麟	志賀太郎(親) 輝繁	志賀太郎(親) 輝繁	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460	天正6年筑後主附15／『久留米市史 第7巻』P460
					安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	
					安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	
					安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	安政元年海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402	

